文學博士 野村八良著

近古時代説話文學論

東京 株式會社 明治書院

序

野村八良博士は、官私大學の門を潜らずして、文學博士の學位を獲得された、篤學の國文學者である。余が始めて博士を知つたのは、第一回高等教員檢定試驗の折であつた。當時勝れて要領を得た答案を書いた人があつて、特に余の注意を惹いてゐた。この人が卽ち野村博士であつた。

爾來、同學の故を以て博士とは交誼を重ねるやうになり、續いて世に出された鎌倉時代文學新論、國文學研究史、國學全史等の大著は、悉く惠贈を受けて、大に益を得るところがあつた。博士は余の恩師芳賀矢一博士に私淑して、その學風を傳へてゐられると聞いてゐたが、博士には博士特有の學風があつて、必ずしも恩師博士をそのまゝに祖述してゐられるとはい ひ難い。本書の如きも、亦博士得意の書史學的研究に世を啓發するところの最も多いことが認められる。

近古時代の文學界は、完成された優秀作品に富むとはいひ難いが、說話文學の爲にはその淵叢ともいふべきものである。尤も以前から內外の說話は、單に說話としては傳へられたものは多くあつたが、これに時代的色彩を賦して文學化したことは、本時代に於ける著しい現象である。故に本時代の說話文學は、これを說話學的に見ても、これを文學的に見ても、又これを書史學的に取扱つても、研究上の興味と成果に、幾多我々學者の心を惹くべきものが存するのである。近古時代文學に精通してゐられる博士が、近古說話文學の總括的研究を完成して、こゝに世に公刊せられるのは、至極當然のことで、又實にその人を得たことといはねばならない。

本書の研究は、固より各方面に亙つてゐるが、博士が特に力を用ゐてゐられるのは、その基礎的方面にあるやうである。蓋しこの方面は、博士最得意の擅場であるのであらう。從つて先人の說を補ひ、その誤りを正し、新なる發見をなされたところも、この方面に最も多い。近古時代說話文學

は、實に本書によつて、その日本文學史中に有する地位を確立し得たといはねばなるまい。

本書は、學位請求論文として、博士の聲譽を世に益高からしめたばかりでなく、こゝにこの公刊によつて廣く學界を裨益することを期待される。博士の需めによつて、序言を揭げ得ることは、余の光榮とするところである。

昭和十年八月　　藤村作

自序

此の一冊に於て論述した對象と其の方法の如きは、書中に說明した通であるが、近古時代說話文學を主題としたものの、結果としては、前後一貫した日本說話文學史となつて居るのである。從來國文學界に此の種の研究が提供せられてゐないのであるから、予の小研究も聊か學界への一寄與となるであらうと考へたことは、おのづから之を發表する念を强めしめたのである。

此の書の原稿は、一先づ去る昭和五年八月十七日に出來上つた。其の當時、卷頭に凡例として書いて置いたのは、左の五項である。

一、本論文は近古時代說話文學研究を主體とする。併し論述の順序上、序論を設けて、其の豫備的問題を取扱つた。

一、希臘神話中の神々の稱呼は、Kroker や Seemann の獨文神話書に從つた。英文神話書の方は採らない。

一、引用文は原本の書式通り之を轉載した。故に假名遣の誤の如き、わざと其の儘にしてある。

一、主要參考書は、悉く之を書中に明記した。併し改めて卷末に一括してある。題して「主要參考書に就いて」と云ふ。

一、數年前出版した鎌倉時代文學新論は、是非併用して對照せられたい。右の第三項は特に讀者の留意を乞ふ。假名遣の區々たるもの、假名の濁點の無いもの等は、原文引抄上忠實な態度を取つたのである。

扨此の度之を出版するに當つては、學界の其の後の進步は、數年前起草の本稿に多少の手入を加へる必要を感ぜさせた。是に由つて、予は鎌倉文學新論の增補版の例に準じ、原稿を濫に添削せず、或項目に〔補〕と標して、心附く所を加註したのである。此の部分は大抵行頭を下げて活字を組んだ。

又讀者の繙閱の便を圖り、今新に索引を作製して、卷尾に添へた。人名、書名、件名の顯著なものを揭げたのである。人名は維新前の人のは概ね名だけを示し、維新後の人のは氏名を採つてある。

挿入した八葉の寫眞版も、此の際之を選んでこゝに加へた。其の原本の所持者を特に斷らないわけは、皆予の所藏であるからである。

予が本書を發表し得るに至つたのは、主として藤村文學博士の誘掖に由るのである。それで予は特に同博士に悃願して、高序を以て此の卷頭を飾り、永久記念とすることにした。同博士が予の微衷を酌んで、筆をお執り下さつた懇情は、洵に感謝の辭を知らない位、喜ばしく思ふのである。

昭和十年九月　　著　者

近古時代 說話文學論 目次

第二章　本論——近古時代說話文學研究……一二五

挿入寫眞版（八葉）

近古時代説話文學論

文學博士　野村八良著

第一章　序　論

一　國文學發生問題と説話文學

國文學の起原

國文學の起原は何であるかと云ふ事は、國文學の史的研究上劈頭第一に逢着する重要問題の一つである。古來此の事に觸れた學説は多少存してゐる。例へば本居宣長の如きは、其の石上私淑言(イソノカミサヽメゴト)に於て、和歌の起原が悠遠であると云ふ考の下に、文獻上から諾冉二尊の唱和の辭を「五言二句にとゝのひて、其詞のやうもたゞの詞にあらず。」と見る理由で、歌謠の萌芽と看做し、確に歌の始とすべきもの卽ち意識的に最初の和歌とせられるものは、素尊の八雲の神詠であると説いて居る。又橘守部は其の短歌撰格に於て、やはり諾冉二尊の唱和は、尋常の言葉のさまでは無く、實に歌の初と言つてよいとし、殊に其の二句である事を重視して、凡そ一句では、何の由とも分明でないのに、

諸家の學説

二句で以て事理の具るのを見ると、二句が歌の基であると論じてゐる。此の守部の說に大體贊意を表せられたのは、高野辰之氏で、其の日本歌謠史に、最も原始的のものたる諸冉二尊の唱和は、當初は五言一句だけであつたかも知れぬが、それでは餘に形が小さ過ぎて、首尾ある想が盛込み難からうと想はれるから、暫く守部の說に同じようと說いてある。而も同氏は悲喜哀樂を表現する叫聲が歌謠の起原であるといふ考をも、其處に述べて居られる。が、此の點は聊か注意を要する。感情の高潮の結果たる反射的叫聲、單なる感動詞の如きを文學の起原とするのは、餘に遡り過ぎるもので、言語の起原問題と混淆を來す虞があると思ふのである。併し要するに右の如きは、其の事たるリード(Lied)にのみ關してゐて、未だ國文學全般に亙つてゐない。卽ち一般に抒情詩(Lyrische Poesie)が先に發達するものか、或は寧ろ叙事詩(Epische Poesie)がそれに先立つものかといふ問題があつて、其が國文學に於ては、どのやうな狀態であるかといふ事が究明せられなければならぬのである。從來詩歌學上からは、一般に抒情詩が先づ起つて、叙事詩が之に次ぎ、而して戲曲が發展するといふやうに見られてゐたのであるが、モールトン(R. G. Moulton.)の The modern study of literature.(一九二一年第四版)に一新說が現れた。同氏は文學の形態學的研究上、文學形式の第一次的要素はバラッド　ダンス(Ballad dance)である。詩歌、音樂、舞踏といふ三藝術の胚種たるバラッド　ダンスが文學的原形質(Literary protoplasm)であるとするのである。一體此の Ballade は詩

歌學では敍事詩のカテゴリに屬し、Romanze と相似て居り、Ballade は北歐起原、Romanze は南歐起原のものである。此のモールトンの學說で見ると、敍事詩が抒情詩に先行してゐるものとするやうに受取れるのである。而して最近、此の學說に共鳴し、之を我が國文學の方面に擬し、バラッドの本質を考究し、バラッド的文學を我が文獻に探り、以てバラッドが個人的抒情詩ならぬ團體的唱和詩で、戲曲や演劇の源泉ともなつてゐるものと說く竹友藻風氏の詩の起原の如き著を見るに至つた。併しこゝに一考しなければならぬ事は、歌を作なふダンス即ち歌垣の如き、かなり古い起原を有するものの存在する一方に、モノログもダイアログも無い所の默劇(Pantomine)も、(神樂の如き)餘程古く行はれてゐたであらうから、我が國の事情としては、一概にバラッド ダンス起原說を權威あるものとは立て難いと思ふのである。

うたふ事とかたる事(歌と語り)

それで予の見解を以てすると、凡そ國文學の起原を爲すものは、「うたふ」事と「かたる」事とであると考へる。即ち名詞として、「歌(ウタ)」と「語り(カタリ)」とである。此の二大事實が、邈たる悠久の昔時に於て存立して、綿々として後世に及んだ國文學の根基を爲したと信ずるのである。「うた」は蓋し動詞の「拍(ウ)つ」の第一活用形「うた」であらう。而して動詞の「うたふ」は、其の「うた」に更に活用の有る「ふ」が添加したのであらう。其の言語構成は、恰も「呼ぶ」の「呼ば」から更に「呼ばふ」が生じたのと同樣である。抑〻歌は云ふまでも無く、リズミカルな語句で、之を口にする時、自然に拍子にかゝり、

動作として手を拍つ事が伴なふのである。概して此の歌謠は、自己の高まつた情緒を表現したもので、元來が主觀的であり、抒情的である。リードが抒情詩の代表的の物である事は東西共に同じである。次に動詞の「かたる」、其の第二活用形から名詞となつた「かたり」は、元來「かた」(象、型)といふ名詞に、活用の有る「る」が添加して出來たのであらう。さういふ現象は、「宿」から「宿る」、「雲」から「曇る」、「影」から「影る」が生じたのに於ても見る通である。谷川士淸は其の倭訓栞に、「かたる」を釋いて、「言語によりて其象あらはるゝをもていふ成るべし。」と言つてゐて、言語を以て或形象を摹し出す事と考へてゐる。一體此の「かた」(象、型)は、畢竟するに「こと」(言)と云ふ語の根源を爲すものとも予は考へるのである。それは koto といふ語を、母音發達の跡から遡ると、kata に戻らざるを得ないからである。そこで「かたり」は歌のやうに必ずしもリズミカルで無く、何かゼスチュアを交へつゝ語を以て或事件を表現するの謂であつて、本質的に客觀的であり、敍事的である事が多い。此の「語り」が資材として神話や傳說を捉へる時、其處に性質上敍事詩が發達して來るのである。國民敍事詩(Volks- oder Nationalepos)といふものが、敍事文學の一領域を占有する事は、亦東西共に變りが無い。扨然らば我が國文學に於て、此の「うた」たる文學と「語り」たる文學と、何れの發達が一層古いかと云ふ件になるが、此の問題は古文獻の表面上の事實だけで、かれこれ先後を論じる事は妥當を缺くと思ふ。前にも言ふやうに、感情の昂進した時、主觀的の歌が口に

せられる事は、原始民族の間には當然の事であると共に、又或客觀的な事柄を他に傳へようとして語り出す事も、行はれがちであると見なければなるまい。試に嬰兒が言語を得ようとする時期に當つて、歌にもあらず、詞でも無い連續的聲音を頻發することがある。此は何等かの事柄を語り出してゐるものと考へられるので、之を予の先妣の如きは、「うた」と言はずして、「かたり」とか「かたつて居る」とか稱してゐた。此の現象は、原始民族間に「かたり」の行はれる事の古いのを想察せしめる手がかりであるやうに思ふ。それ故に我が神代史を見ても分るやうに、殊に文化のデグリーのかなり高かつた大和民族が、夙に「歌」も「語り」も、之を有し、之を操(アヤツ)つてゐた事は、想察に難く無い。予は國文學の起原を、右のやうに二元的に考へるのである。「語り」が文學として戯曲の胚種たり、藝術として演劇の根源をなす事は勿論である。

物語

歌の發展過程は、此處に論外とする。「語り」の方は、上代に於て語部の存した事を以ても、史實や傳說が口づから傳へられて行(イ)つた消息が知られ、文字に載せられるやうになつても、竹取物語と云ふ名目が行はれた事を考へると、其の文學的系統が了解せられる。語る方から云ふと物語であるが、聽く方から云ふと打聞(ウチギキ)で、此の打聞と云ふ語もかなり古い。物語は竹取物語を始め、宇津保物

創作的のもの

語、源氏物語等創作的の物が一系列をなして發達したが、著作の動機は、やはり昔物語に擬する所から起つてゐるので、「今はむかし竹とりの翁といふものありけり。」とか、「むかし式部大輔左大辨

かけて清原の大君ありけり。」とか、又「いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、云々」といふ風に書出してある。創作的でありながら、昔物語のスタイルを追うてゐる。それで

國民的のもの──說話文學

物語は、本質的には國民的（Volkstümlich）であるといふ點が優勢であるから、Roman や Novelle 卽ち所謂小說の外に、傳說（Überlieferung）を書留めた物語も亦一系列をなして發展してゐるのである。予は今此の方面の文學書を說話文學と稱し、之を主題とする。說話は Narrative, Story 若しくは Erzählung といふやうな意味であるが、文學的內容から云ふと、敍事詩的性質たる Mythe, Sage, Legende, Märchen 等を包含するのである。それでどこまでも國民的文學でなくてはならぬ。神話や傳說を材料としてゐても、作者の頭腦で著しく創作化せられた作品は、予の所謂說話文學では無い。此く傳へられた、此く語られたといふ其の儘の傳承を、所謂打聞物語として比較的忠實に書留めたといふ種類の物を、主として說話文學と見て論題とするのである。

近古時代說話文學研究の理由

本論文は、右の意味に基づく說話文學の近古時代の物を提へて、文學的研究を施すのを主眼とする。近古時代を主題とする所以は、同時代は此の種の典籍が多種多樣であり、而も世の學者の多く顧みる所となつて居ないからである。併し前代迄に發展して來た跡を辿らないわけに行かないから、順序として、上代及び中古の說話文學一般を序論として概觀し、それから本論に進む次第である。

二　古史神話及び古傳説の一瞥　其の一

古史神話

我が國には、今日我々が意味するやうな神話文學といふものは、古代に於て存しなかつたと見るべきが至當かも知れぬ。併し上代人が神代史として傳へ來つた所のものは、意識的に純粹な神話とせられなかつたにしても、其の事柄が神話的である以上、神話學的吟味を施すに於て、敢て不都合は無いと考へるのである。それで此の方面のデータ（Data）は、云ふまでも無く主に古事記及び日本書紀である。此等の古史の神代の部は、特に神話的解釋の可能なものであるから、其の神話に對して、古史神話の稱を以て呼ぶのは、穩當の事と思はれるのである。

古事記

抑々古事記は太安萬侶が元明天皇の和銅四年九月十八日に詔を奉（ウケタマハ）り、翌年正月二十八日に撰進した三卷の上代史で、もと稗田阿禮の誦み習つた天武天皇勅語の舊辭を撰錄したものと云ふ事である。處が勅撰の史籍であるといふのに拘らず、續日本紀に何等明文が無いといふ事情で、後世疑を挿まれる所となつた。沼田順義は級長戸風（シナトノカゼ）を著して、僞書說を出した位であり、近年中澤見明氏も亦史學雜誌上に僞書說を公にせられた。かう云ふ僞書說の起る機緣には、無理の無い所もあるが、未だ全く勅撰たる事を否定しかねる點もある。即ちとにかく古い書物である事は、土佐國風土記の逸文に、「多ノ氏古事記曰。崇神天皇之世云々」と見えて居り、又萬葉集卷二の左註に古事記といふ書名が擧げられ、

日本書紀

假令此の左註が後人の加へたものとしても、其が既に元暦校本に載つてゐる位であるから、其等の證で了解せられよう。此の古事記の上卷が神代である。次に日本書紀は、元正天皇の養老四年五月に出來た三十卷の上代史で、舍人親王の奉勅撰である事は、續日本紀に明文がある。尤も弘仁私記序に據ると、夫の太安麻呂も參與してゐるらしい。此の書の卷一及び卷二が所謂神代ノ卷である。一體修史事業が其のこゝに至るまでには、淵源の遠いものがある。其の發展の過程は、予の別著國文學研究史に曲盡した通である。凡そ古傳説は、之を傳承した家々があつて、永い年所を閲する間には、家柄の如何によつて、異説をも生じるやうになつた。爲に之を統一するのは至難の事業であつたと想はれる。併し異説と雖も、其の然るべき理由が有らうから、之を妄に無視したり、否定したりする事は妥當で無い。日本書紀特に神代紀に、此等の Version が「一書曰」として保存せられた事は、今日學問上から考へて、頗る貴重な事で、我々は大に舍人親王を徳としなければならぬ。それから尚、記紀二典の外に、延喜式卷八所收の祝詞や大同二年二月十三日齋部廣成撰古語拾遺の如きが、古史神話考究上のリテラッールとして參考に供せられる價値のあるものである事も、勿論である。又古風土記も參考資料の一であるが、此は後に述べよう。

神話の意義

以下我が古史神話を一瞥しようとするに際し、豫め一般的に神話の意義並に其の解釋法等に就いて略述して置かう。一體希臘起原の Myths と云ふ語は、本來單に Words の意義を有したものであ

るが、遂に超自然的人物（Supernatural persons）等を包含する物語の意味となつたのである。ホックス(W. S. Fox.）は其の Greek and Roman mythology.（一九二八年版）の序論に於て、此の Myth の意義を（一）形式(Form)（二）時(Time)（三）主材(Subject-matter)（四）事實上の關係（Relation of fact）の四件に分析して考究してゐるが、頗る傾聽に値する。卽ち（一）神話の形式は普通に說話體(Narrative)であること、(二)神話の敍述は Past 若しくは Universal present(條件の繼續が Future に亙る場合もある。)とせられてゐること、（三）神話の題目は不確實な領域から拉し來られてゐる。少くとも神話原造の時代に於て證明の附かなかつたものから來てゐること、(四)神話の顯著な性質は想像の產物たる事實であること等が其の要領である。隨つて氏は神話の定義を左の如く下してゐる。

A myth is a statement, or a virtual statement as implied in a symbol, an attribute, or an epithet, accepted as true by its original maker and his hearers, and referring to the eternal nature and past acts of beings greater than man, and frequently to circumstances which are to us improbable or impossible.

此の見方はフェーヤバンクス(A. Fairbanks.)も既に同樣に其の The mythology of Greece and Rome.（一九〇八年版）に於てしてゐる。卽ち、

Myths are stories of the acts of superhuman beings, often improbable to us, but believed to be true

by those who related them.

と云ふので、此の方が却つて簡約である。之を要するに、神話は或神格を中心として語られた說話で、本來上代人の想像から生れたものである。其の事實が怪奇で、到底有りさうも無いと云ふのに拘らず、眞實であるとして信ぜられ來つたと云ふ點が、其の特質である。畢竟神話に反映せられた所のものは、上代民族の哲學であり、宗教である。思索や信仰や擧げて之を神話に託してゐるからである。而して此の原始哲學（Primitive philosophy）は、精靈說（Animism）と稱せられるものである。凡そ原始民族は動物のみならず、植物若しくは非情の物（Inanimate objects）に對して、生命や精神を賦與して考へるのである。此は全く彼等自身の思想、感情からアナロジイを以てした結果で、つまり萬有に對する兒童的解釋である。此の心作用が强大に神話の構成に働いてゐるのである。(J. G. Frazer. — The worship of nature. Vol. I. 一九二六年版序論參照)それで表現法としては、自ら擬人（Personification）や隱喩（Metaphor）を以てするのである。

アニミズム

神話の種類

神話の種類は、學者の考察上の見地や、又神話の民族的異同によつて、種々相違があるが、フェーヤバンクスの希臘神話に對する分類は左の六種である。

フェーヤバンクスの說

(1) 哲學的神話

(2) 天地開闢（神統）神話

(3)自然界の物象及び過程を寓言（Allegory）に託した神話
(4)自然現象の觀察から導かれた思想たる鬪爭(Conflict)並に鬪爭を通じての進行に關する神話
(5)特殊な神の神怪談
(6)政治的、社會的關係から成る神話

ギューールバアの説

又ギューールバア（H. A. Guerber.）の The myths of Greece and Rome.（一九二七年版）を見ると、神話を解剖して、天の神話、太陽と闇との神話、月の神話、地の神話、海の神話、雲の神話、火の神話、風の神話、下界の神話としてゐるが、此は主として自然神話を考察したもので、人文神話は埒外に置かれてゐる。更にホックスの所説を検すると、次の如くである。

ホックスの説

(A)外的要素に随つて、
(1)民族的若しくは國民的發展の種々な時代の神話
(2)人種系統の神話
(3)地方神話
(4)民間若しくは公の神話
(5)詩若しくは散文の神話
(B)内容に随つて、

(1)神の神話
(2)自然神話
(3)起原神話
(4)哲學的神話
(5)寓喩的神話
(6)來世の神話

此はかなり緻密な考方で、參考に供するに足るのである。かやうな諸家の用ゐた名目は、我が古史神話の考察にも、尠からず役立つ次第である。

神話の解釋法ホックスの分類

次に神話の解釋法は、古來種々行はれてゐる。今其の主なものをホックスの著に徵すると、大約左の七種である。

(1)自然的方法(Natural method)　此は有らゆる神話を自然現象に對する原始的說明として考察するもので、之に從ふと、神話は太陽神話、太陰神話、星辰神話であり、乃至光、風、雲、雨等に歸するのである。

(2)言語學的方法(Philological method)　此はマックス・ミューラア(Max Müller.)の主唱で、言語疾病(Disease of language)の結果として神話を說明するものである。即ち或タームの原義が失はれ

た後、其の誤解から由來した混亂として考察するものである。併し此の方法は不確定であり、誤謬があるとして、今は聲價が墜ちてゐる。

(3)合理化方法(Rationalizing ((euhemeristic)) method)　此の方法を組織的に適用した最初の人は、紀元前三世紀頃の希臘人ユーヘメロス(Euhemeros.)であつた。それでユーヘメリズムの名目がある。傳說中の諸神を史的實在の人として解する見方であるが、此の合理化には勿論無理が尠く無い。

(4)寓喩的方法(Allegorical method)　此の方法は古來永く行はれたが、餘に器械的で何等空想の餘地を許さぬことは慊らぬ。

(5)詩的方法(Poetical method)　此は神話は純粹に詩的想像の假作であるといふ信念を以てしたオーヴィッド(Ovid)一派の主張である。

(6)儀式的方法(Ritual method)　多くの神話は、過去に於て原義が失はれた所の儀式の說明としてクラシファイせられるものであるとする說で、此の階級には多くの原因論的說話(Aetiological tales)が屬する。

(7)人類學的若しくは比較的方法(Anthropological or comparative method)　此の方法は、人類は原始的發展の同一なレベルに於て、說話の同一種類を案出するものであると云ふ假設を根柢としてゐる。此はラング(A. Lang.)等の唱へる所で、其の主張はラングの Custom and myth.(一九〇四年

版）の The method of folklore. の所說の如きに徵せられる。併し此の學說は、其の基礎的假設の無斷の爲に、往々無效にせられるから、更に歷史的方法が加らなければならぬ。

ローズの分類

ローズ（H. J. Rose.）も亦 A handbook of Greek mythology.（一九二八年版）の序論たる神話學史に於て、詳細に方法論の發達を論述してゐる。其の擧げる所は、寓喩說（Allegorical theory）象徵說（Symbolic theory）合理說（Rationalism）ユーヘメリズム（Euhemerism）自然神話說（Theory of nature-myths）現代式（Modern methods）心理學的分析（Psychological analysis）等で、ホックスとは少からず考察を異にしてゐる。其の象徵說で、主としてクロイチェル（F. Creuzer.）の學說に就いて云爲してゐるのは、注意せられる。が、合理說とユーヘメリズムとを別々にしてゐる如きは、併合して置いてよいであらう。又自然神話說の中に、マックス　ミューラー等言語學派の學說を論評してゐる事も、看過せられぬ。而して其のモダーン　メソッドとして言ふ所は、第一に、說話の源泉（Source）を吟味すべきこと、第二に、能ふ可くんば、說話が雜種民の何れの部分に基づくかを決定したいこと、第三に、說話が如何なる階級（卽ち本來の神話か、傳說か、童話か、）に屬するかを吟味すること、第四に、說話の起原及び傳承を考究した時、更に其を初期若しくは未發達の形と認める所の諸說話と比較研究をすることの四件で、其の第二の事業の率先者としてミューラア（K. O. Müller.）を擧げ、第三の事業の功勞者としてグリム兄弟 Jakob. and wilhelm Grimm.）を擧げ、第四の事業

の代表者として獨のマンハルト(J. W. E. Mannhardt.)と英のラング(A. Lang.)とを擧げてゐる。其の說く所割切で、傾聽に値する。尙、心理學的分析を附說して、フロイド(Freud)やユング(Jung)の事にも及んでゐるのである。

〔補〕スペンス(L. Spence.)の An introduction to mythology.(一九二一年版)の第二章 The progress of mythic science. も亦絶好の神話學史である。

我が國で、さう云ふ神話學史的槪觀を發表してゐる新しい學者は、松村武雄氏である。其の神話學論考(昭和四年版)所收の神話學の新展開と題する一篇は、斯學諸派の消長に對する批判として、頗る新味に富む所の出色の論文である。

希臘神話を中軸として研究した歐米學者の神話分類法並に解釋法は、之を其の儘我が古史神話に擬しかねる。只宜しく之を參考すべくして、而も其の程度を誤らない事である。以下古史神話の瞥見に移らう。予は書紀神代卷を以て、我が神話的事實の略統一を得てゐるものとする見地から、之を主として、傍古事記其の他を參酌する手段を採らうと思ふ。

天地開闢神話

我が神話の劈頭は天地開闢說(Cosmogony)を以て展開してゐる。初、渾沌たるもの(Primeval chaos)が、後、天地の剖判(Separation of heaven and earth)を致したといふのである。書紀の記載は、三五曆記の「天地混沌如雞子。盤古生其中云々」(釋日本紀、增補事類統編等に據る。)や淮南子天

文訓の「淸陽者。薄靡而爲レ天。重濁者。凝滯而爲レ地。云々」の思想、文章の影響を受けてはゐるが、勿論大體文飾であつて、渾沌から分離への考方は、原始民族の信仰として有り勝ちであるから、我が上代人も之を持つてゐた所であらう。

神の化生

次に天地間に葦牙(アシカビ)の如き一物が生じたのから神の化生があつて、國常立尊(クニノトコタチノミコト)と號する。而して次々に國狹槌尊(クニノサツチノミコト)、豐斟渟尊(トヨクムヌノミコト)と、凡て、三神がまし〳〵たのである。之に就いては著しい異傳がある。卽ち三神を天御中主尊(アメノミナカヌシノミコト)、高皇產靈尊(タカミムスビノミコト)、神皇產靈尊(カミムスビノミコト)とする說の如きである。それから埿土煮尊(ウヒヂニノミコト)、沙土煮尊(スヒヂニノミコト)。大戶之道尊(オホトノヂノミコト)、大苫邊尊(オホトマベノミコト)。面足尊(オモタルノミコト)、惶根尊(カシコネノミコト)。伊弉(イザ)諾尊(ナギノミコト)、伊弉冉尊(イザナミノミコト)といふ風に二柱づつ凡て男女耦成の八神が生(ナ)り出ましたのである。之にも異傳がある。

諾冉二神の功業

諾冉二神の功業として傳へられるのは、國產みを首とする。卽ち天之瓊矛(アマノヌホコ)を以て滄溟を探られた結果、鋒(ホコサキ)の滴りが凝つて磤馭盧島(オノコロジマ)となつたといふのを手始に、更に二神遘合(ミトノマグハヒ)の結果として、大八洲(オホヤシマ)を生ませられたと云ふのである。此の神話に、上代人の生殖に關する思想の反映してゐるのは、掩ひ難い事實である。一說に、二神の此の擧は、天神が命じ託せられた所であると傳へてゐるが、此は流石に日本的の思想であると思ふ。それから其の功業は延いて海や川や山の神、木の祖句(ク)句廼馳(クノチ)、草の祖草野姬(カヤヌヒメ)を生まれる事に及んでゐるが、此はヘブリューや希臘の神話にも見るやうに、やはり開闢神話のカテゴリに屬するものである。

日神、月神、素尊

次いで二神は相議つて、主宰者を生まなければならぬと云ふので、先づ日神(ヒノカミ)(大日孁貴(オホヒルメノムチ)、又天照大神(アマテラスオホミカミ))を生ませられ、授けるに天上の事を以てせら

れ、次に月神（一書に月讀尊とある。）を生み、日に配すべきものとして、天に送られ、次に蛭兒（之を古來其の漢字の意義通りに解するのは、洵に當を得ない。鹿子木員信氏の近著 Der Geist Japans. に Sternschnuppengott（流星）とする新しい解釋がある。とにかく予はヒルコはヒルメの相對語と信ずる。）を生まれたが、此は船に乗せて棄てられ、次に素戔嗚尊を生まれたが、此は其の性無道なりとして、根の國に逐はれたのである。日神に天上の事を授けられるに際して、書紀本文に、「是時天地相去未レ遠。故以二天柱一擧二於天上一也。」とあるが、此はいかにも上代人の考らしい。かう云ふ思想は埃及神話に於ても見受けられる。（フレーザーの The worship of nature. vol. I. 參照）それから火神軻遇突智を生まれるに當つて、伊弉冉尊は焦かれて御隱れになる、其の時土神埴山姫や水神罔象女が生まれるのである。凡そかういふ萬有創造（Creation）の思想は原始民族の一般に抱きがちのもので、フレーザーの The worship of nature. の第五章 Worship of the sky in western Africa. の中にも適例が見えてゐる。因みに日月兩神の性別に就いて見ると、日神を女性とし、月神を男性とする事は、希臘神話の場合と正反對で、寧ろ北歐神話に於けると相似てゐる。

偖、右の日神、月神、素尊の三神誕生に就いては、頗る異說に富んでゐる。卽ち諾尊が白銅鏡を左手に執られた時、日神が化出せられ、其を右手に執られた時、月神が化出せられ、而して首を廻らして顧眄せられた時、素尊が化出せられたといふ一書の傳がある。又冉尊の神去られた後の敍述

が、書紀本文には省略してあるが、一書の傳承や古事記に據ると、其處に三神誕生の事が含まれてゐると共に、其の他數々の神話が存するのである。それは二尊が大八洲を產まれた後、朝霧を吹撥つて、級長戶邊命(級長津彥命とも云ふ。)卽ち風神を生み、又飢餓の際倉稻魂命を生み、又海神少童命や山神山祇や水門神速秋津日命等を生ませられてゐる。それから冉尊が火神の爲に神去ら

諾冉神話中の刀劍說話

れたのを、諾尊が慟哭せられ、十握劍で軻遇突智を三段若しくは五段に斬られたが、其が各〻神となられてゐる。加之劍に關して種々な神が化生せられてゐるのである。刀劍の威德を崇拜した上代思想の反映で、予は之を刀劍說話の一古傳と思ふのである。それから一書に、軻遇突智を斬られた血が、飛んで石や木や草に附いた。それが草木砂石の火を含む因緣であるといふ一節が見えてゐる。此はデーンハルト(O. Dähnhardt.)の所謂博物學的民間說話(Naturgeschichtliche Volksmärchen)と

軻遇突智說話の意義

目すべきものである。こゝに軻遇突智說話は何を意味するかを顧みなければならぬ。此の問題は古來少しも明白でない。カグツチのカグは天香山のカグと同一語であらうと思ふが、カグは尙カガで、動詞の「輝く」「耀ふ」と同一語原のものであらうといふのは、略古說でよいとして、ツチは古事記に迦具土とある土の字が必ずしも假借で無く、其の字の通の意味であらうかと考へる。扨上代人が畏怖し且崇敬した火は、自然的の火で、隨つて雷電か、若しくは火山の火で無くてはならぬ。冉尊の死屍に八雷神が居たといふ傳があるから、雷火に關係が有るやうであるけれども、猶カグツ

チの名義から推測すると、此は火山の爆破といふ自然現象が神話化せられたのではなからうかと考へられるのである。加之諸尊が火神を五段に斬られたといふ傳の方では、其の結果山祇が五柱生れてゐるのである。山の火の威力、熔岩の流出、此等がメタホアを以て神話となつたのは、敢て怪しむに足りないであらう。羅馬神話にバルカン（Vulcan）と云ふ火神がある。希臘神話のヘファイストス（Hephaistos）の崇拜が羅馬に齎されて一致した結果、鍛冶の神ともなつた。此は獨逸語 Vulkan では火山の義が有る。英語の Volcano（火山）も羅甸語の Vulcan に基づいたものである。予は此の事情の類推を以てしても、我が迦具土に火山の義が有らうとするのである。

諸尊の黄泉行き

偖それから諸尊は冉尊を追うて黄泉にお出になる。此は亡妻を慕ふといふ人情味の說話であるが、類似の事は希臘神話にも存する。卽ちオルホイス（Orpheus）が下界に行つて、亡妻オイリディーケ（Eurydike）を呼び返さうとするのに似てゐる。それから冉尊が我を視給ふなと禁止せられるにも拘らず、諸尊が櫛を秉炬として窺はれるといふ一條がある。此は禁制の破棄といふモーティーフで、神話傳說に多い筋で、其の結果は破綻を生じて兩者の乖離となる。卽ち冉尊は之を恨んで、

逃亡說話

泉津醜女をして諸尊を追はせられる。諸尊は逃げ歸りつゝ鬘や櫛を投げて防がれるのである。此は逃走說話の一形式として注意すべきもので、類話は世界に擴布してゐる。（高木敏雄氏遺著日本神話傳說の研究、「亞米利加に於ける亞細亞的傳說要素」參照）而して泉津平坂に於て千引の磐を隔てゝ

二尊仲違の語を交されるが、其の冉尊が日に千人を殺さうと言はれるのは、正に咒詛で、諸尊が却つて日に千五百人を產まうと言はれるのは、咒詛を逆轉する祝福であるが、そこに上代人の生死に關する觀念が現れてゐるのである。それから諸尊は、黃泉の穢を受けたからと云ふので、日向小戸

禊

橘之檍原で祓除をせられる。此の禊といふ事は、我が上代の風習中最も重大なもので、神道獨得の行事となつたのである。此の禊に際して幾多の神がお生れになる。即ち中つ瀨に濯がれた時、八十枉津日神以下三神、海底に沈み濯がれた時、底津少童命以下二神、潮の中に潜き濯がれた時、中津少童命以下二神、潮の上に浮き濯がれた時、表津少童命以下二神、凡て九柱がお生れになつたのである。而して更に左眼を洗はれた時、日神が生り、右眼を洗はれた時、月神が生り、鼻を洗はれた時、素尊が生らせられたと云ふのである。此は二神相議つて主宰者を生ませられたと云ふ書紀本文

三神分治

とは頗る異なる傳承である。それから日神は高天原、月神は滄海、素尊は天下を治められる事になつてゐる。此の三神分治の所傳もいろ〳〵異同があるが、其の領分を天、海、下界(根の國)の三界鼎立と考へる事は、上代人の思想として最も自然的らしい。それは希臘神話と比較して、ツオイス(Zeus)が天、ポザイドン(Poseidon)が海、ハーデス(Hades)が下界のそれ〴〵支配者であるのに

農業神話

思ひ當る。又書紀本文には、諸冉神話に附して、軻遇突智と埴山姫との間に生れた稚產靈を以て蠶桑穀物生成の本原とする農業神話がある。該神の頭上に、蠶と桑とが生り、臍に五穀が生つたと云

ふのである。併し一書の傳では、月夜見尊（ツキヨミノミコト）がお殺しになつた保食神（ウケモチノカミ）の屍體の各所に、牛馬や繭（マユ）や五穀が出來たとし、殊に天照大神は、天邑君（アマノムラキミ）をして其の稻種を天狹田（アメノサダ）及び長田に植ゑしめられたといふやうな事がある。何れにしても此の農業神話は頗る日本的である。而して此の保食神撃殺の事から、日神、月神の不和が生じたといふエピソードは、晝夜交代に關する說明說話と認むべきものである。

素尊の神性

次に素尊神話が展開せられる。素尊の神性は、雄健である。常に哭泣を事とし、青山を枯山になすと云ひ、其の天に昇るや、海は動き、山は鳴つたと云はれる。之を自然神話として解釋すると、暴風雨神と見なければならぬ。劈頭、日神との葛藤がある。卽ち素尊は根の國に去らうとするに先だつて、一往昇天せられる。日神は之を異志の有るものとして疑惧せられ、假に男裝し、武備を堅めて對せられる。併し素尊は何の他意も無いと云ふので、誓約（ウケヒ）をせられる。此の誓約の中に、若し女子を生んだら濁心が有りとし、男子であつたら清心が有るとせよと契られるのである。やがて日神

物々交換の御子產み

は素尊の十握劍（トツカノツルギ）を取つて、田心姬（タゴリヒメ）以下所謂宗像三女神を生まれ、素尊は日神の八坂瓊之五百箇御統（ヤサカニノイホツノミスマル）を取つて、正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊（マサカアカツカチハヤヒアマノオシホミミノミコト）以下五男神を生まれた。之にも劍を三種とする異傳や男神化生の次第の別說がある。とにかく素尊の意志は貫徹して、勝利の結果となつたのである。此の物々交換の御子產みに就いて、其の物根（モノダネ）よりすると、玉は日神の物であるからと云ふわけで、五男神を

日神の御子とせられ、劍は素尊の物であるからといふので、三女神を素尊に授けられたのである。此の神話には母系崇拜の上代慣習が反映せられてゐると思ふ。かやうに誓約の結果が素尊の勝に歸したにも拘らず、素尊の行は緩和せられなかつた。即ち日神の營ませられる農業や織紝に對して、少からぬ罪惡や暴行を敢てせられたといふ風に、兩者の葛藤が絶えない。此の一面は、自然神話的解釋を離れて、政治的關係の神話として觀ると、如何にも天孫民族と出雲民族との間のかなり甚だしい葛藤をレフレクトしてゐるものかと想はれるのである。此は延いて日神の岩戸籠りを誘致した。

岩戸神話

岩戸神話は、自然神話としては、ルボン（M. Revon.）が日蝕の神話的說明である（フレーザーのThe worship of nature. 所引）としたやうな說も存するけれども、先づは暴風雨の爲に太陽が一時其の威力を失つたといふ意味に解せられるであらう。支那の太古に於て、黃帝が蚩尤と涿鹿の野に戰ひ、遂に蚩尤を禽殺したといふ史記の記載の如きは、表面頗る人文的であるが、蚩尤が戰に當つて大霧を爲り、黃帝の軍士が昏迷したと云ふ傳承の如き方面から、自然神話的解釋を下すと、暴風雨神の太陽神に對する鬪爭であると云ふ故高木敏雄氏の著比較神話學に見るやうな說が可能となるが、岩戸神話もさう云ふやうな事であらう。併しそれよりも、日神の出御を禱る爲に講ぜられた方法から觀ると、重大な儀式の由來を語つた神話で、頗る日本的の色彩に富んでゐる事を閑却し得ないのである。即ち常世之長鳴鳥を聚めて鳴かしめたこと、中臣連遠祖天兒屋命と忌部首遠

重大な儀式――祭祀

祖太玉命とが奉仕したこと、根こじにした眞坂樹の上つ枝に玉を懸け、中つ枝に鏡を懸け、下つ枝に青和幣（麻）白和幣（木綿）を懸けて用ゐたこと、猿女君遠祖天鈿女命が俳優をし、又神憑をしたこと、凡そ此等は神道の祭祀の規範を示すものである。而して鈿女命の神憑の如きに至つては、北部亞細亞に擴布するシャーマン教的色彩を帶びたものと認めざるを得ぬ。（シャーマニズムの事は、O. Peschel.—Völkerkunde. 一八七四年版 Schamanismus の條、E. W. Hopkins.—The history of religion. 一九二八年版第四章參照。〔補〕C. A. Clark.—Religion of old Korea. 第六章 Shamanism にも委しい。）尙、一書に諸神の職掌を明細に傳へてゐるものがあるが、此は注目すべき資料である。とにかく此の神話は、姉崎正治氏が其の Japanese mythology.（The mythology of all races. vol. Ⅷ. 一九二八年版）に、

This is the cheerful climax of the whole cycle of the cosmological myth.

と言つて居られる通、開闢神話の最頂點である。それから日神出御の後、諸神は罪を素尊に歸し、贖罪せしめて（祓具を出させて）追放せられた。而して素尊は出雲國に降られたので、出雲をステージとして又別個の神話が展開せられるのである。

偖、素尊は出雲國簸の川上に降られ、此處で犧牲にならうとする奇稻田姬を救つて、八岐大蛇を斬殺され、而して淸と云ふ處に宮を建てて、姬と婚せられたのである。（後には根の國に行かれた。）

此の神話は Heldensage 式のもので、其の型は、

一、英雄神が他地方から來る。

二、偶〻少女の危難に出會ふ。

三、英雄神が少女の爲に怪物を殺戮する。

四、兩者、婚を結ぶ。

と云ふ次第であつて、之を希臘神話に比較すると、丁度英雄ペルソイス（Perseus）が、海の怪物の犧牲とならうとするケホイス（Kepheus）王の女アンドロメダ（Andromeda）を危難から釋放して、婚を結んだのと同樣である。凡そ此の種の說話は、其の擴布してゐる範圍が頗る廣大である事は、バーリング グールド（S. Baring-Gould.）の Curious myths of the middle ages.（一九〇六年版）のセーント、ジョージ（S. George.）の一章に仔細に研究せられてゐるのでも分る。我が大蛇神話に於ける八岐大蛇は何を意味するかと云ふに、先づヲロチの語義を糺明すると、予の考では、Woro はアイヌ語としなければならぬ。バチェラア（R. J. Batchelor.）の Ainu-English-Japanese dictionary.（一九〇五年版）に據つて、山岳若しくは河川の意の有る事を知る。ヲロチのチは、ミヅチ（虬）のチも同樣で、此は國語で父の如く、靈長の意がある。此のアイヌ語のヲロと國語のチとがコムパウンドになつてヲロチの語が出來てゐるが、つまりミヅチの類語に過ぎない。そこで八岐大蛇は、河伯が具

體化せられたものであるとする事は、神話學的解釋法に理解の有る人は、首肯するに躊躇しないであらう。丁度希臘神話の河の神アーケロース（Acheloos）が、角の附いた人間の頭を持つた牡牛として具體的に物語られてゐるやうなものである。此の大蛇を河伯とする見解は、アストン（W. G. Aston.）の Shinto（神道、一九〇五年版）の所說に曲盡せられてゐる。卽ち河流の觀念が蛇、大蛇、龍の動物として、水神を具體化することは、弘く行はれてゐる。デンニスの支那の傳說や、ロバートソン、スミスのセミ民族の宗教等に例がある。一體河流が波線狀の行路と、其の足が無くて神祕的進行をする事とは、大蛇を附會するのに頗る自然的で、水流は一面に於て灌漑の利は有るけれども、他面に於ては氾濫して人畜を害する。之を譬喩的に大蛇の慘害とするのは尤であるといふのである。隨つて「松柏生二於背上一。而蔓二延於八丘八谷之間一。」と傳へられてゐるのも、堤防や長流を暗示するものであると云ふのである。此等の事は旣に拙著國民童話（大正十一年版）にも述べて置いた。而して此の大蛇の慘害を具體化して、人身御供（Human offering）談を以てしてゐるが、是も世界的に類例の存することで、バーリング グールドのA book of folk-lore. を見ると、デボンシャイヤのダート河（River Dart）が每年心臟（畢竟人身御供）を要求するといふ例が擧げてある。書紀本文に、「往時吾兒有二八箇少女一。每年爲二八岐大蛇一所レ呑。」とある。而も每年といふ語の意義がなか〳〵輕くないのである。

寶劍出現

素尊の大蛇殺戮の結果は、寶劍の出現を致した。之を神劍とし、私有することは出來ないとして、天神に奉獻せられた。此は著しい國家思想の現れである。此の結果から云ふと、大蛇神話は寶劍出現に關する說明說話であるとも考へられる。因みに寶劍の御名を書紀本文には、草薙劍（クサナギノツルギ）とし、一書に、天叢雲劍（アマノムラクモノツルギ）が本名で、日本武尊の故事から草薙劍と改稱せられたと云ふ方を割註としてゐる。予は此の本文通りクサナギと云ふ名も古くから存したであらうと思ふのである。日本武尊の故事とするのは、民間語原說（Volksetymologie）で、草薙は當字で、クサナギに元來別の意味があつたのであらう。試に言ふと、クサは鎖（クサリ）、轄（クサビ）、草摺（クサズリ）（鎧の草摺も當字で、鎖綴りの義とする方が寧ろ當つて居るであらう。）のクサに關係があるらしく、又古語拾遺に鐵鐸（鐵製のすゞ）を「古語佐那伎」と註してゐるが、其のサナギもクサナギに交涉があるらしい。何か劍の原料が鐵であると云ふやうな意味から來た名稱であらう。

樹木起原說話

一書に據ると、此の素尊神話には、樹木起原說話が結び着いてゐる。即ち尊が韓（カラ）に居られた時、鬚髯を拔いて散らされると、杉となり、胸毛は檜、尻の毛は柀（マキ）、眉毛は櫲樟（クス）となつた。御子五十猛（イタケルノ）命（ミコト）等が其の木種（コダネ）を我が國内に分布せられたと云ふのである。

大國主神の神話

次に大國主神の神話に移る。此の神話は、最も著しく人文神話の面目を備へてゐる。抑々大國主神は書紀本文には、素尊の御子とあるが、他に六世の孫とする傳もある。一體此の神話は、書紀本

文には甚だしく省略せられ、一書も主として少彦名命との交渉を傳へてゐるに過ぎない。それで古事記の方の委しい傳承に就かなくてはならぬ。先づ大國主神は多くの別名を有せられる。即ち大穴牟遲神、葦原色許男神、八千矛神、宇都志國玉神である。此の神は、兄弟八十神坐しと見えて、御兄弟が極めて多かつた。此の兄弟間に於ける八上比賣に對する求婚の事から不和が起り、大國主神は非常な迫害を被られる。手間の山本に於ける燒石の危難は其の一である。此は蚶貝比賣と蛤貝比賣との助で蘇生せられる。それから大木の拆目に誘き入れ、拆目に支つた矢を外して拷殺されたのは其の二である。此は御祖命が救はれる。此の樣に辛うじて大國主神は命拾ひをせられ、尚も八十神の追撃があつたが、其から免れて、御祖命の命に隨つて素尊のまします根堅洲國にお出でになる。すると、尊の女須勢理毘賣が之を見て婚を結ぶ。父の尊は大國主神を呼び入れて、蛇の室に寢させるが、妻の須勢理毘賣が蛇比禮を授けて、迫害を免れさせる。次には蜈蚣と蜂との室に入れさせるが、是も亦同樣に救はれる。次には又鳴鏑を野に射込んで、其を採らせる。大國主神が野に這入ると、火を懸けて野を燒いたので、逃場も無かつたが、鼠が之を助けるのである。妻は夫の神の死なれたものと考へ、喪具を調へ來り、父の大神も其の死を信じられたが、鼠に助けられた神は、前の鏑矢を持つて奉られる。それで今度は八田間大室に呼び入れて、其の頭の虱を取らせられるが、頭には蜈蚣が多く居る。此の度も妻の計略で、蜈蚣を咋殺す體を裝うたので、父尊は意を安んじて寢

兄弟間の不和

根の國行き

素尊の女須勢理毘賣との結婚

苦難の數

武器を得て脫走

られる。其の間に大神の髮を椽に結び着け、五百引石を室の戸口に立てかけて置いて、大神の生太刀、生弓矢、天詔琴を取り、妻と共に脫走せられるのである。さうすると、父神は黃泉比良坂まで追つかけて來て、其等の武器で八十神を追撥ふやうにと諭し、又須世理毘賣を嫡妻とせよと許されるのである。此の八田間大室に關する髮を椽に結ぶと云ふ說話は、故高木敏雄氏が其の比較神話學に、動物說話的成分であるとし、南洋說話の兎が、獅子の知らないのに乘じて、其の尾を柱と屋根とに結び着けたのを例示して居られるのは、然るべき解釋で、其の意味から前の大木の拆目に誘き入れて挾ませると云ふエレメントの如きも、ライネッケ　フックス（Reineke Fuchs）の熊のブラウンが丁度かういふ憂目に會つたのを思ひ合せて、やはり動物說話的であると思ふ。偖、大國主神は、根の國から得た武器で、八十神を追撥ひ、勝利者として、國土を平定せられる。是に於て、此の神は英雄神たる面目を十分發揮せられるに至つたのである。古事記には、殊に此の神が多妻で、隨つて一族が繁榮した事を傳へてゐる。書紀一書に、「其子凡有二一百八十一神一」と見えてゐるのは、出雲族が强大な勢力を張つてゐたといふ史實を誇張して傳へたものと考へられる。如上の神話は、又形式上一個の幼者成功說話に屬する。此の事は更に後の彥火々出見尊の神話の條で述べよう。

少彥名命

醫藥神

　大國主神の國土經營の有力な協力者は、紀記共に少彥名命と傳へてゐる。書紀一書に、「夫大己貴命與二少彥名命一。戮レ力一レ心。經二營天下一。復爲二顯見蒼生及畜產一。則定二其療レ病之方一。又爲レ攘二鳥獸

昆蟲之災異。則定二其禁厭之法一。云々」とあるのは、最も重要な資料である。（此の少彥名命の形態的傳承は、侏儒神である事を想はせる。）政治的に大勢力ある人文神が、丁度希臘神話のアスクレピオス（Asklepios. lat. Asculapius）のやうに、一方に於て醫藥神であると云ふのは、注目すべきことで、

白兎說話

夫の古事記にのみ傳へてゐる因幡の白兎の說話が、大國主神の神話に挿入せられてエピソードとなつてゐるのも、畢竟するに該神の醫藥神たる一面に結合したのである。此の兎鰐噺は、之を切離して考へると、一個の禽獸童話（Tiermärchen）で、元來印度種の猿海月噺の一變形と認められる。此等の事は既に、拙著國民童話に考證した。

天孫降臨の前紀―出雲に於ける葛藤

次に天孫降臨の事に移る。以下は神話的色彩が漸次稀薄となる。降臨の前紀として、出雲に於ける葛藤が傳へられてゐる。此は政治的事實の反映として觀ると、重大な意義が存するのである。抑々天照大神の御子、正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊は高皇產靈尊の御女栲幡千々姬を娶つて、天津彥彥火瓊々杵尊をお產みになる。皇祖高皇產靈尊は特に皇孫を鍾愛せられ、之を以て葦原中國の主としよ

天穗日命

うとお考へになる。そこで衆議の結果先づ天穗日命を中國に遣して平定せさせられる。處が此の神

三熊之大人

は大己貴神に阿つて、高天原に復命をしない。それで此の神の子大背飯三熊之大人（此の神には別

天稚彥

名が多い。）を遣されるが、是亦其の父に順つて復命をしないのである。之を以て更に天國玉の子天稚彥を遣されるが、此の神は顯國玉（大己貴神）の女下照姬に婚して、其處に留り、遂に復命せられ

ぬのである。此の叙事はクライマックスを成してゐて、其の三重の繰返し(Dreifache Wiederholung)は、メールヘンに於て能く逢着する筋である事を思ひ合せる。高皇産靈尊は天稚彦の擧措を怪しみ、

無名雉

無名雉を遣して伺はせられる。さうすると、天稚彦は高皇産靈尊の賜つた弓矢を以て、其の雉を射殺されるが、其の矢、そのまゝ高皇産靈尊の座前に屆く。尊は其の矢を取つて投げ還されると、それが丁度天稚彦に的中して卽死せられるのである。

經津主神武甕槌神

此の椿事の後、尊は更に經津主神に武甕槌神を配

國讓の交涉

して、中國平定に差向けられる。二神は出雲に降り、大己貴神に對して、國讓の交涉を進められる。

事代主神

大己貴神は獨斷を避けて、其の御子に意見を徵せられるが、御子の事代主神は、我が父宜しく天神の勅を奉じて退かれるがよいと云つて、御自ら無條件で身を退かれるのである。それで父神の決心も附いて、恭順の實を擧げられ、國土平定に使用せられた武器をも二神に渡されるのである。けれどもかういふ際に多少の不穩分子の存することは、他の歷史事實でも類推せられるので、一說に星の神香々背男が容易に歸服しなかつたとあるのは、其の一斑である。古事記の方には建御名方神の一插話を傳へてゐる。此の國讓に就いて、一書に、高皇産靈尊の大己貴神に對する勅に、汝の知ら

顯露の事と神事

す顯露の事卽ち天下の政治は、皇孫が知らすであらう。汝は神事を知らすやうにとあつて、大己貴神が之を奉ぜられたとあるのは、逸すべからざる事柄で、現實の政權と神祇奉仕とを分割せられたものである。尙此の事實は、出雲國造神賀詞(眞淵はイヅモノクニツコガカムホギノコトバと訓ん

だが、宣長はイヅモノクニノミヤツコノカムヨゴトと訓んでゐる。)にも極めて婉曲に叙べられて居る。

天孫降臨 **木花開耶姫** 右の如き過程を經て、天孫はいよ〳〵日向の高千穗の峯に天降られた。さうして吾田長屋笠狹之碕にお出でになり、こゝに鹿葦津姫(又木花開耶姫とも云ふ。)を寵幸して、火闌降命や彦火々出見尊等を引續いて生ませられる。此の御子產みに就いては異傳が尠く無い。偖、此の彦火々出見尊を中心として海宮神話が展開せられるのである。(此の神話に就いても、既に拙著國民童話に說述した。)抑々兄の火闌降命は海の幸を有し、弟の彦火々出見尊は山の幸を有せられる。此は漁獵の分掌である。それを交換せられるのが說話の發端で、此の交換を書紀本文には兄弟合議としてゐるが、一書に兄命の提議としてゐるのが有る。此の方が說話の筋として尤らしい。然るに此の幸易が面白く行かなかつたので、幸返しとなつたが、尊は兄命の釣針を失はれた爲に、兄弟諍が生じたのである。尚尊は窮境に陷られたが、鹽土老翁(海路の主宰神と思はれる。)の計策で、海宮に遊幸せられたのである。海宮を海底に在るとしてゐるのは古意である。其の形容を、「雉堞整頓、臺宇玲瓏」と書紀に記してゐるのは、固より文飾で、古事記に鱗のやうに造つた宮とある方が、單純で古意を得てゐる。海神の女を豐玉姫と云ふ。井水を汲みに來て、偶々彦火々出見尊を見愛で、之を父母に告げる。海神、尊を歡待し、來意を問ふ。尊は對へるに、委曲を以てせられる。詮索せられた釣針

(頭注: 海宮神話、幸易、幸返し、鹽土老翁、海宮、豐玉姫)

海神の教示

は遂に得られたのである。尊は豐玉姫と婚して淹留三年、漸く歸心矢の如くなつて訣別となる。其の際海神は釣針に就いて咒詛の辭を誨へ、且潮滿瓊、潮涸瓊を奉つて、兄命を降伏せしめる次第を授けるのである。又姫は已に妊娠したから、産室を作つてお待ちになるやうにと語られる。彦火々出見尊は海宮から還り、海神の教示によつて、兄命を困厄せしめられる。此の狀は一書の方に詳述

兄命の降伏

せられてゐる。其の結果兄命は降伏して汝の俳優の民とならうと約せられ、尊は之を赦される。兄弟の紛爭が和解を以て局を結ぶのは、ヘブリューの神話に、雙生兒の兄弟エサウ（Esau）とヤコブ（Jacob）との說話があるが、さういふやうなものである。海宮神話は右を以て終るが、其の後の豐

玉依姫

玉姫はと云ふと、前約通り、尊の跡を追うて來て、御子を産まれる。此の時妹の玉依姫を伴なはれた。此の御産の時、豐玉姫は尊に産室を窺ひ給ふなと禁止せられたにも拘らず、尊は其を窺はれた。

海陸隔絶

此の禁制破棄は兩者間の破綻を釀して、海陸隔絶の因緣となつたと傳へてゐる。諸冉神話の一のモーティーフたる禁制破棄は、こゝにも存する次第である。豐玉姫の産ませられたのが、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊であつて、玉依姫が留つてお育てになつた。此の尊と玉依姫との間に神日本磐余彦尊

海宮神話の意義

卽ち神武天皇がお生れになつたのである。此くして神代卷は局を結んでゐる。立返つて海宮神話の意義を一考すると、彦火々出見尊は、前半に於ては勢力微弱であるが、後半に於ては全然勝利者である。卽ち太陽神話的觀點に立つて、尊の運命を太陽神とする說を以てするものは、一往尤である

と言はなければならぬ。又此の神話が他界遊行を語る點は、浦島傳說の源泉として有力なものであることを思はせる。而して此の神話は前に述べた大國主神の神話と同樣に、幼者成功說話と目すべきものである事は、最も注目しなくてはならぬ。兩神話の筋を比較すると左の如くである。

共通の筋	大國主神の神話	海宮神話
一、兄弟諍から弟尊が窮地に陷られる。	再度の危難	兄命に責められる
二、弟尊の救護者がある。	御祖命など	鹽土老翁
三、他界に行かれる。	根の國へ	海宮へ
四、他界の主宰神の女と婚せられる。	須勢理毘賣と	豐玉姫と
五、他界から將來した物を以て兄命を征服せられる。	生太刀、生弓矢を以て	滿珠干珠を以て

幼子（若しくは末子）の成功をモーティーフとする所以は、上代の相續制を反映してゐるものであらう。而も此の筋から成る說話は、かなり廣く分布してゐる。グリム童話集（Brüder Grimm: Kinder und Hausmärchen.）の第六十三番の三つの羽毛（Die drei Federn.）の如きは、其の顯著な一例であるが、尙バーリング グールドの A book of folk-lore. には數種の例話を示し、且古代希臘に於て、クロノス（Kronos）とツオイス（Zeus）とに關するヘシオッド（Hesiod）の物語に徵して、youngest son の運命の卓越なる思想を看取し得ると言ひ、（ツオイスはクロノスと

レア（Rhea）との間の末子である。）又末子相續の慣習がナポレオン法典（Code Napoleon）の優勢な日耳曼（バーデンに於ける如く）に存してゐると說いてゐる。此の見解は參考に資するに足るのである。

古史神話の概括

以上古史神話の通觀を終へたから、更に其の概括に轉じよう。

神統記

凡そ世界各民族の有する神話は、天地開闢說（Cosmogony）に起り、神統記（Theogony）に展開してゐる。ヘブリュー神話、希臘神話皆さうであつて、我が古史神話も亦同樣である。而も我が神話は神統記を主としてゐて、歷史たる色彩が濃厚である。故高木敏雄氏は古史神話の成分を、天然的分子、宗敎的分子、國家的分子、社會的分子或は人事的分子、說話的分子の五種とし、而も中には各分子が截然區分せられずして、互に抱合してゐる旨を述べられたのは、（遺著日本神話傳說の研究參照）洵に其の通りであるが、神話全體が神武天皇の建國創業の由來を物語つたものであると見る

國家的

時、著しく國家的意義の深長なのを思ふのである。卽ち皇祖を談じ、神寶を述べ、寶祚無窮を語り、天孫降臨を說き、若しくは農耕織紝を云ひ、氏族分掌を云つてゐる類、全く實際的であり、史的である。自然神話的よりも人文神話的の要素が濃密である。

實際的

我が神話がプラクティカルであるといふのは、我がナショナリティーから歸納せられてゐると思ふ。大和民族は空想の働が必ずしも縱橫無碍で無い。物事に對して深く又執拗にフィロゾフィーレ

ンしないのである。之を神話に見るに、怪奇な事象が多く無い。諸神の容貌の如きも、天日一箇命(アマノマヒトツノミコト)(古語拾遺所見)の如きを外にしては、概して殊更に何とも語られずして、極めて人間的に默認せられてゐる。又葛藤鬪爭の如き事件にしても、激烈深酷で無い。一體に希臘神話のやうに複雜で無くて、頗る單純である。此の事は姉崎正治氏も Japanese mythology. の中に、次の如く言つて居られる。

It is also true that Japanese myths and stories are not so well connected and systematized as they are with the Aryan peoples.

それで又神々の傳承にしても、例へば雜多な低級神 (Niedere Gottheiten) に就いて委しく語らぬ。僅に水神罔象女(ミツハノメ)位に過ぎないのである。

一體我が神話の組織は、上來說述したやうな形態に發展する迄には、少からぬ整理を經たであらう。此の點も我がナショナリティーの、包容力があり、統一性が有る所から、然るべきことに想到するのである。先づ最も大きな點は、出雲民族の神話が天孫民族の神話に抱合せられたものと考へる事である。素尊から大國主神へと一系列を成した出雲民族の神話は、素尊を日神の弟神とする事によつて結合せられてゐる。例へば日神と素尊との間の五男神は日神が兒として養はれたに拘らず、其の一柱たる天穗日命(アメノホヒノミコト)の如きは、出雲臣の祖であるといふのは、兩方の神話が統一せられながら、尙其の本性の痕跡を保つてゐるものと考へられるのである。唯(ヒトリ)此ばかりでは無い。いろ〳〵な

氏族、部民の傳へ持つてゐた神話は、隨所に攝取調和せられたのであらう。古史の文面では、相當高い地位に認められてゐるに拘らず、後世朝廷の神祇祭祀の上からは、殆ど無勢力、沒交渉といふやうな神々があるのは、本來天孫民族の有した神話以外のものであつたからでは無からうか。又軻遇突智說話の火の禍の事にしても、八岐大蛇說話の大蛇殺戮といふ事にしても、天孫民族若しくは出雲民族が、此の國土に轉徙した以前に、何處かで傳へ承けたか、或は眞に體驗した事件であつたかも知れぬが、其等が總て抱合同化せられてゐるのである。それから諸家所傳の神話に、同樣な筋でありながら、局部に差異のある事は、前にも述べたが、此等を出來得る限統一しようとした跡は、書紀の文面に明白である。

三　古史神話及び古傳說の一瞥　其の二

以上專ら古史神話に就いて論述したが、我が古史には、尙幾多の古傳說を包含してゐる。依つて其の著しいものを考察しなければならぬ。先づ吾人の注意の向けられるのは、神婚傳說である。

神婚傳說

其の一例は神武記に見えてゐる。それは三島湟咋の女勢夜陀多良比賣が、容姿が麗しかつたので、美和の大物主神が之に感で、丹塗矢と化つて近づかれる。

丹塗矢

比賣は其の矢を持つて來て、床に置くといふと、其の矢は忽ち麗しい男となり、比賣に婚して、やがて富登多々良伊須々岐比賣命又の名比賣多多良伊須氣余理比賣がお生れになつたと云ふのである。女子に近づかうとする神が、一旦矢の如き器物の形態を取るのは、神話傳說の通有性たる變形（Metamorphosis）の思想で、それが愈〻成婚に垂んとするや、人間的體貌に還元せられるのである。此の神と人との肉體的結合の可能は、上代人の思想としては當然であつたであらう。それは神人靈感の信仰は、又神人肉交の聯想を敢てしたであらうと想察せられるからである。

赤玉

又應神記所見の天之日矛に關する傳說中に存する一話は、一賤女が晝寢した時姙んで生んだ赤玉が、日矛の手に得られると、美しい孃子となつて、其の嫡妻とせられたとある。此は右の丹塗矢傳說程完全な筋を備へないが、やはり神婚傳說の片鱗を示すもので、丹塗矢が男神の變形たるに對して、赤玉は女神の變形たる關係にある。矢が男性的で、玉が女性的

フェティシズム

である事は自ら首肯せられる事で、そこに上代人の庶物崇拜（Fetishism）の思想が働いてゐると想はれるが、一面 Phallic worship の觀念が潜在してゐるとも受取られる。而して此の神婚傳說の最も特色の有るものは、崇神記の活玉依毘賣に關する所謂三輪式である。卽ち容姿端正な活玉依毘賣の許に、威儀無比なる神壯夫が、夜毎に通つて來る。やがて女は姙む。父母は其の男を知らうとして、女に誨へるには、赤土を床に散らし、卷子の紡麻を針に貫いて男の襴に刺せと。そこで其の通りにして、早旦に之を見ると、殘つた麻は三勾だけであつた。絲を辿つて尋ねて行くと、美和山の神社に至つた。通はれた神壯夫は大物主神であつたのである。（それ故に其の地を美和と謂ふと云ふ地名傳說をも伴なつてゐる。）此は前の丹塗矢と化られたのと同じ神であるが、此の傳說では、神が人間的に現れたのである。此の三輪式神婚傳說中の絲を針に通して男の衣に刺すといふモーティーフが、朝鮮の古傳說にも存するのは、比較說話學的興味を唆る所である。卽ち一然撰三國遺事卷二に、後百濟の甄萱に關する事として出てゐる。其の本文は左の如くである。

三輪式

古記云。昔一富人居二光州北村一。有二一女子一。姿容端正。謂レ父曰。每有二一紫衣男一。到レ寢交レ婚。父謂曰。汝以二長絲一貫レ針刺二其衣一。從レ之。至レ明尋二絲於北墻下一。針刺二於大蚯蚓之腰一。後因姙生二一男一。年十五。自稱二甄萱一。至二景福元年壬子一稱レ王。

箸墓

尙、崇神紀には箸墓の本緣を語つた別個の神婚傳說が載つてゐるが、神はやはり大物主神である。

其は倭迹々日百襲姫命の許に神が通はれたが、夜ばかり來て、晝は姿をお見せにならぬので、姫は神に、はつきり尊顏を視ないから暫くお留りになるやうに、さうして明日美麗な威儀を仰ぎたいと語られると、神は、其は尤な事である。それでは明旦汝の櫛笥に這入つて居らう。併し吾が姿を見て驚いてはならぬと制せられる。處が姫は不思議に思つて、夜の明けるのを待つて櫛笥を覗かれると、下紐位な麗しい小蛇がゐるので、大に驚かれる。神は耻ぢて人の形に化り、虛空を踐んで御諸山に登られた。姫は之を悔い、慌てて坐らうとして、箸で陰を撞いて、到頭薨ぜられた。其の墓を箸墓と呼んだといふのである。

蛇形の神

此の傳説では、神の變形が蛇とせられてゐる。廣い語では動物とせられてゐるのである。神が假に動物の形態を取つて、女子に近づくといふのは、故高木敏雄氏も既に其の比較神話學に例示せられたやうに、希臘神話のツォイス（Zeus）がオイローパ（Europa）に愛着するや、牡牛の形になつたといふ類があるが、由來龍蛇と婦女との關係の著しい事は、大蛇神話を始として、何人も想ひ當る所である。

禁制破棄

それから箸墓傳説は禁制破棄のモーティーフをも含んでゐる點は、諾冉神話や海宮神話に似てゐるが、此の方の、男神の禁制を女性が破棄した事は、右の兩神話と正反對である。而も禁制破棄が夫婦離間のモーメント（Moment）となつたといふのは、總て共通である。

求婚傳説

次に求婚傳説を一考しよう。前の神婚傳説は神人の結合を語つたもので、著しく超自然的要素を

包含してゐるが、こゝに求婚傳說と稱するものは、兩性が共に人性其の儘に浮出てゐるものである。所謂妻覓(ツママギ)の事は、既に大國主神の神話に見えてゐるが、該神話は、同神が人文神であるだけ、人間味が强く、爲にさういふ說話が結びついてゐるのである。此の妻覓に於て、競爭者の存する場合、

妻覓と妻爭

所謂妻爭が生じて來る。其の時、戀の勝利は優秀者若しくは勇者として成功する者の手に歸するといふやうな合理的な場合が多い。大國主神が八十神と共に八上比賣(ヤカミヒメ)を婚(ヨバ)はれた時、八上比賣は八十神を斥けて、大國主神に從はれたのである。同神は尙、沼河比賣(ヌナカハヒメ)にも求婚せられた。かういふ場合

嫉妬

に、嫡妻があると、男性が其の嫉妬を受けることも有り勝ちで、同神の嫡妻須勢理毘賣命に就いて、其の事が傳へられてゐる。又男性に對する女性の方に、姉妹のやうな競爭者が有る時には、美女の方が選ばれるといふ事も自然的で、此は邇々藝能命(ニニギノミコト)が、石長比賣(イハナガヒメ)と木花之佐久夜毘賣(コノハナノサクヤヒメ)との姉妹に對して、姉を斥けて妹を聘せられた(古事記に據る。書紀一書にも見えてゐる。)のに徵せられる。右

七媛女の一

のやうな神話の俤は、後の傳說に幾つも存することで、神武記の、七媛女(ナナヲトメ)の中から伊須氣余理比賣(イスケヨリヒメ)を選び覓(マ)かれた說話、應神記の、宮主矢河枝比賣(ミヤヌシヤカハエヒメ)を得られた說話の如きがそれである。而して此等の處女に初めて逢はれたのは、何れも途上偶然の事とする筋は、木花之佐久夜毘賣の場合と同樣である。尙一つ興味の有るのは、應神記所見の伊豆志袁登賣(イヅシヲトメ)に關する求婚傳說である。此は戀の競爭者の多かつた點に於て、八上比賣說話に類似してゐる。競爭者中の屈竟なものは、秋山之下氷壯夫(アキヤマノシタヒヲトコ)

春山之霞壯夫

と春山之霞壯夫(ハルヤマノカスミヲトコ)との兄弟で、恰も春と秋との象徴と想はれる。さうして此の戀に兄が賭(カケ)をしてゐる。而も弟は母の助力で伊豆志袁登賣を得るといふ結果になつてゐる。爲に兄が賭の賠償を拒んで母の咒詛を受け、甚だしい不幸を招くといふ筋も存して、其が相應に重いが、尙求婚傳說としては、美しい少男が戀の成功者となる。換言すれば、陽氣な春が、陰氣な秋よりも人氣を得てゐるといふ國民精神の反映でもある。

人身御供傳說

大蛇神話の一要素として、人身御供（Human offering）といふ事の存するのは、既に述べたが、此の事はかなり傳說界を支配してゐる。神武紀所見の海中暴風に際し、皇舟の漂蕩した時、稻飯命(イナヒノミコト)及び三毛入野命(ミケイリヌノミコト)が入水せられたのは、海神の爲に犧牲となられたので、景行記所見の弟橘比賣(オトタチバナヒメ)の入水にしても同樣である。此等の傳說は、水神を和(ナゴ)めるのに人身供犧を要するとした上代人の迷信を示すもので、其の入水たるや、他の强要で無く、入水者の自發的意志の結果と見られる。處が神託に基づいた供犧の强要の適切な例が仁德紀に見えてゐる。卽ち茨田(マムタ)の堤を築く時、二個所壞れて塞ぎ難かつたが、

强頸と人柱

武藏の人强頸(コハクビ)と河內の人茨田連衫子(コロモノコ)との二人で河伯を祭つたら成就するといふ神託があつたから、二人を探し出して供犧することになつた。强頸は泣き悲しんで水に入つた。そこで其の堤は出來上つた。處が衫子の方は、豫め水神の眞僞を卜なはうと、二個の匏(ヒサゴ)を水に投じて其の浮沈を試みたのである。それが沈まずして泛び流れたので、僞神と信じて、入水せずにしまつた。そ

れにも拘らず其の堤は出來上つたといふ說話である。此は後世稱する所の人柱の迷信の存在を物語るものである。さういふ殘忍な風習が果して事實として行はれたか否かは一問題であるが、史實としての眞否は神話傳說の研究上必ずしも重大では無い。さういふ心理が實際上代人の頭腦に働いてゐたことを是認すれば十分であらう。

史實とザアゲ

一體史實とザアゲとの限界は、頗るデリケートなもので、史實が傳說化もすれば、傳說が歷史の假面を被りもする。

日本武尊の歷史とヘルデンザアゲ

私に考へるに、夫の日本武尊の史實は、記紀の文面で見ると、誇張もせられ、神祕化もせられてゐる。此は或は上代人が太古口碑に傳承してゐた一個の――而も規模の比較的宏大な――ヘルデンザアゲを此の貴皇子に結合したといふ事があるのかも知れない。

怪物と酒

尊の御事蹟は種種な意味で、勇者傳說的である。其の熊襲の川上梟帥（カハカミノタケル）を殺戮せられたのは、英雄神の怪物退治の俤を傳へるもので、對手の酒に醉ひつぶれたのに乘じるといふモーティーフは、八岐大蛇神話と共通である。

智力の勝利

尊が童女の姿にディスガイズして梟帥に近づかれたのは、殺戮上の一方便で、此は智力の勝利を謳歌した上代思想の顯現である。古事記の方（書紀は時代と關係人物とを異にしてゐる。）に存する出雲建（イヅモタケル）征討の際、木刀と眞刀とをすり換へるといふ謀計を以てせられたのも、やはり智力の勝利を語つたのである。

火難

それから東征に際して野火の難に遭はれることも、大國主神の神話を聯想せざるを得ないのである。

英雄神と麗人

又英雄神には麗人の作なふ事が多い。さうして時には悲壯な劇的シーンも起る。

弟橘比賣は古事記の歌に據ると、火難の折も勞苦を共にせられたらしいが、遂に走水では壯烈な死を遂げられる。夫婦の交は永くなかつたのである。丁度海宮神話で、豊玉姫は海から來て、海に歸り、夫婦の交は離間に終つたやうなものである。又大國主神は Polygamist として傳へられてゐるが、尊には尙、尾張に於て宮簀媛（記には美夜受比賣）を有せられたといふやうに、英雄神的共通性がある。而して其の薨逝に當つて、白鳥に化して飛び去られたといふが如きは、頗る神祕的である。此は上代人が偉人の死に對して、超自然的觀念を以て解釋したと見るべきで、此の靈魂を鳥の形として想像するのは、元來原始人の間に廣く行はれた事で、スペンス（L. Spence.）の Myths and legends of ancient Egypt.（一九二五年版）に、例を擧げてゐる通であるが、それだけに歷史的と云ふよりも傳說的である。

死の神祕化

更に轉じて、動物に關する傳說に移つてみよう。先づ仁德紀に虬退治の說話がある。是亦ヘルデンザアゲの一形式である。多くの人を取殺す所の吉備の川嶋河の大虬を、勇悍强力な縣守が殺戮した說話である。こゝに興味の有るのは、縣守が三個の瓠を水に投じて、其の浮沈によつて虬の殺否を試みたことで、虬が鹿に化して瓠を引入れようとしたが沈まなかつたので、縣守は遂に殺意を決したのである。此は前に述べた衫子のトと同樣である。上代の民間卜占法の一をレフレクトしてゐるものである。それから犬に關するもので、崇峻紀所見の捕鳥部萬の犬の說話を逸してはならぬ。萬

縣守の虬退治

瓠を用ゐる民間卜定

忠犬傳說

の飼つてゐた白犬は、梟された萬の首を啣へて來て、自分も其の前に餓死した。此の忠犬談は上聞に達して嘉みせられ、萬の族をして葬らせられたと云ふ。忠犬傳説は、支那では晋の干寶の搜神記卷二十に二個の說話が見えてゐるが、一體世界的に弘布してゐるもので、バーリング　グールドのCurious myths of the middle ages. の The dog Gellert. と題した一章に類話が出てゐる。其は既に拙著國民童話にも述べて置いた所である。又推古紀に「陸奧國有レ狢。化レ人以歌之。」とあるのは、狢の變化談であるが、此は何か面白い民間傳說で、其の謠つた歌詞も當時判明してゐたであらうが、勅撰の史書たる爲に省略せられたらしいのは惜しい。併し此の種の說話の顯現は、時代が餘程降つて來た事を示してゐる。

狢の變化

次に植物に關するもので、巨木傳說と稱するものが存する。例へば仁德記に見える說話に曰く、兔寸河（古事記傳に、兔の字は誤寫であらう。兎の字であらうとは思はれるが、さういふ河の名も思ひ當らないからと云つて、旁訓を缺いでゐる。）の西の一高樹は、其の影が朝は淡路島に逮び、夕は河內の高安山を越えた。それで此の樹を伐つて船に作つた處が、大變船脚が速い。之を枯野と名づけた。此の船を以て朝夕淡路の淸水を汲み運んで、御料に供した。此の船が破壞した時、鹽を燒く料にしたが、其の燒け殘りで、琴を作つたら、其の音が七里に響いたと。此は何の木の事か分らないが、頗る麗しい民間說話である。本來巨木傳說であつて、同時に造船傳說や美泉傳說や樂器製

巨木傳說

造船傳說等を伴なふ

作傳說を隨伴してゐるが、殊に皇室御料の淸水に交涉してゐるのは、いかにも日本的である。又仁德紀所見の遠江の國司が上表したといふ大井河の流木は、大さ十圍、本が一で末が兩岐であつた。是も船に造らせられて、御料に供せられた。景行紀の長さ九百七十丈と傳へられる大歷木に就いて、「是樹者神木也。」との天皇の御詞を記載してゐる點から云ふと、巨木崇拜の上代思想が窺はれる。

名稱起原說明傳說

終に名稱の起原を說明した傳說に及ばう。ホックスの所謂 Myths of origins の一種である。其の一に人名の由來を語つたものがあり、其の二に地名の本緣を語つたものがある。

人名

人名傳說は、例へば神武記に、神沼河耳命の御名を稱へて建沼河耳命と謂つたのは、庶兄當藝志美々命を殺される時、神八井耳命は怯懦であつたのに、弟の神沼河耳命の方が勇健で、目的を遂げられたのに由ると見えてゐる。其の他景行紀所見の大碓皇子、小碓皇子の御名の碓に因んだこと、推古紀所見の廐戶豐聰耳皇子の御名の廐に關したこと等、出生の際の事件に基づいた命名のものもある。

地名

地名傳說も頗る多い。神武紀に孔舍衞坂の戰に、人が大樹に隱れて、難を免れたから、其の樹を恩、母の如しと云ひ、爲に其の地を母木邑と云つたとあるやうな類である。此の種の說話には、いろ〳〵面白いのがある。景行紀に、阿蘇は其の國郊原曠遠にして人宅を見ない。天皇が此の國に人が有るかと仰せになると、阿蘇都彥、阿蘇都媛の二神が現れて、吾二人が居る、あそ(何ぞの意)人が無からうかとお答へしたので、其の國を阿蘇と名づけたといふ說話がある。古い話であるだけに、古語の意味が、

風土記其の起

らないと、今日興味の薄いものもある次第である。尙此の地名傳說は古風土記に頻出してゐる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此の如く古傳說を考へるに當つては、亦風土記にも大に注意が拂はれなければならぬ。抑〻風土記は續日本紀卷六、元明天皇和銅六年の條に、

正月甲子。（著者曰、癸亥朔、二日である。又本居宣長が玉勝間卷十四に言つてゐるやうに、甲子の次に「詔」といふ文字が脫落してゐるやうである。）畿內七道諸國郡鄕名著二好字一。（著者曰、好字の次に、扶桑略記には「又令レ作二風土記一」の六字が存する。）其郡內所レ生。（著者曰、扶桑略記には「生」を「出」に作る。）銀銅彩色草木禽獸魚蟲等物。具錄二色目一。及土地沃塉。（著者曰、扶桑略記には「沃塉」の二字が無い。）山川原野名號所由。又古老相傳舊聞異事。載二于史籍一。（著者曰、扶桑略記には「史籍」の次に、「只宜」の二字があるが、國史大系の校訂者は或は「亦宜」としたらよからうと、案を下して居る。）言上。

とあるやうに、さう云ふ詔を下された結果、漸次諸國から撰進した地方地誌である。其の特にこゝに論ずべきは、詔に山川原野の名の由來や古老の相傳ふる舊聞異事を書留めて差出すやうにとある爲に、此の風土記に種々な地方傳說（Örtliche Sage）が包含せられるに至つた點で、此は文獻學上洵に尊い事と謂はなければならぬ。其の風土記は和銅六年以後、年所を閱するに隨つて、かなり多くの國々から上（タテマツ）つたらしいが、尙未進の國もあつたであらう。それで醍醐天皇の延長三年十二月十四日には、太政官符を以て、早速風土記を勘進するやうに諸國司に命ぜられたのである。（符の文は類聚符宣抄第六に載つてゐる。）而して其の初度の分、卽ち少くとも平安朝に降らない古風土記で、

今日に傳つてゐるのは、常陸、出雲、播磨、肥前、豊後の五國分で、予は之を現存五種古風土記と呼んでゐる。常陸風土記は河内、眞壁二郡の分が脱(ヌ)けて居り、又現に存する部分にも省略せられたままの所があつて、完璧では無いけれども、何分上代の物に相違無い。中山信名は和銅の撰進たるを主張してゐるが、西野宣明の考證は、更に委しい。其の說に、此の記が何時出來たかは詳で無いが、記中に白壁(シラカベノ)郡、藻島(メシマノ)驛家、板來(イタクノ)驛と書いてある、其は延暦中に白髪部の姓を改めて、眞髪部とせられたから、白壁郡を改めて、眞壁郡とせられたのも亦當時で、此の記が延暦以後に出來たとしたら、白壁とある筈が無い。又藻島及び板來驛を廢せられたのは、弘仁年間であるから、此の記が弘仁以後に成つたなら、二驛の名が有る筈が無い。それで和銅の詔命に應じて作られた物と認める。但、出雲の記との先後は分らないと云ふのである。出雲風土記は首尾一貫して、最も能く原形の保存せられてゐる物であり、卷尾に「天平五年二月三十日勘造(ヘル)。秋鹿郡人神宅臣金太理國造帶。意宇郡大領外正六位上勳業出雲臣廣島」とあつて、年紀や署名が分明である。加之各郡の部の末にそれぞれ責任者の名が列記してあるのである。中山信名は此の天平五年を以て和銅撰進の物を改定した年紀と考へてゐるが、識語に勘造とあるのを見ると、さうとも想はれないやうである。播磨風土記は卷首が缺文となつて居て、賀古郡の中途から現存するが、最初に赤石郡の部が有つたらうと云ふ事は、殆ど疑ふ可くも無い。此の記も亦上代の物と認めてよい事は、栗田寛の考證に詳である。

其の說の要點は、續紀に、「靈龜二年四月甲子。割二大鳥。和泉。日根三郡一。始置二和泉監一焉。」と見えて、其の時から河内の和泉郡を和泉監に隷(ツ)けた趣であるのに、此の記の揖保(イヒホノ)郡狹野(サヌ)村の條に、川内國泉郡とあるのは、靈龜二年以前の筆であらうし、又出雲風土記に、「鄕字者。依二靈龜元年式一。改レ里爲レ鄕。」と見えて居るのに、此の記には倭名鈔の鄕名をも、里として居て、鄕と記してゐないから、靈龜元年以前に注進したものに相違無いと云ふのである。靈龜元年といふと、和銅六年から三年目であつて、隨つて此の記は、今の所、最古の風土記の觀がある次第である。肥前風土記は卷尾が缺佚してゐるばかりで無く、中途にも闕文がある。豐後風土記も完本では無い。併し兩者共體裁や文面から觀て古風土記には違無いと想はれる。

古風土記逸文

尙、古風土記の逸文は權律師仙覺の萬葉集註釋（通稱仙覺抄）や卜部兼方の釋日本紀を始め、其の他諸種の書に、化石のやうに含有せられてゐる物がかなり多い。此等は文獻學的價値が多大である。栗田寛の纂訂古風土記逸文並に同考證は往々後世の末書から材料を採集してゐる點など、如何と考へられるふしもあるけれども、ともかく此の方面の勞作で、研究者を裨益するものである。

神話の斷片的レムナント

以下主として古風土記に記載せられてゐる古傳說の種類や性質を考察しようと思ふのである。第一に神話の斷片的レムナントの存する事を注意しなければならぬ。例へば大汝(オホナムチノ)命の子の火明(ホアカリノ)命が行が善くないので、父神は之を棄てようと思つて、因達(イタテノ)神山に到つて、火明命をして水を汲ましめ、

其の還つて來ない前に、船を出してお遁れになる。すると、火明命は水を汲んで還り、船の出て行くのを見て、瞋り怨んで、風波を起して其の船を追ふのである。爲に父神の船は進み得ずして、打破られたといふ說話が播磨風土記に存する。此の火明命は古史に徵證が無く、此の父子鬪爭神話は珍しい物である。又同風土記には、伊和大神の子、石龍比古命と妹石龍比賣命との二神が、川の水を北に流さう、南に流さうと相競はれたといふ兄妹競爭神話もあるが、是亦他書に見えない物である。又同書に、大汝命と小比古尼命とが相爭はれるやう、堲(埴)の荷を擔つて遠く行くのと、屎をしないで遠く行くのと、どちらが我慢がしきれるかと。そこで大汝命は屎をせずして行かうと云はれ、小比古尼命は堲の荷を持つて行かうと云はれて、數日爭はれたが、共に辛抱がしきれなかつたといふ說話がある。是亦他に見えない斷片的神話で、而も威嚴有る二神に對する冒瀆と思はれる位、頗る俗談化せられ、滑稽化せられてゐるのである。かう云ふやうな說話が地方的に傳承せられたといふ點に、風土記說話の特色が偲ばれるのである。

第二に種々な古傳說の存する事を注意しなければならぬ。山城風土記逸文の丹塗矢の說話は神婚傳說の一種で、賀茂建角身命の女玉依日賣が丹塗矢(實は火雷神)に感け孕んで、賀茂別雷命をお生みになつたといふのである。常陸風土記の努賀毗賣が小蛇を生んだ傳說も、神婚傳說に屬する物で、モーティーフに三輪式の所があるが、而も一異型である。肥前風土記の弟日姬子の傳說の方

は、績麻(ウミヲ)を𫝼(スヅ)に繫(カ)けて尋ねて行くといふ筋があつて、一層三輪式である。次に予の所謂神人偶會傳說たる羽衣傳說、浦島傳說の類に就いて見るに、近江風土記逸文の伊香小江(イカゴノヲエ)を舞臺として語り傳へられる羽衣傳說は、其の筋に於て、最も能く白鳥處女式の原型を保つてゐるもので、貴重な資料である。丹後風土記逸文の比治(ヒヂ)山の眞井(マナヰ)の天女天降の傳說の方は、羽衣傳說の一種には相違無いが、此の土に淹留した天女が、其の家主と婚して子を生むといふ如き重要なモーティーフを缺如してゐるのである。丹後風土記逸文の筒川嶼子(ツツカハノシマコ)卽ち水江浦嶼子(ミヅノエノウラノシマコ)の說話は、浦島傳說發展史料として、重要な物であるが、此は其の文面に、支那神仙傳說の融會してゐる點が、頗る顯著である。それから巨人傳說の傳へられてゐる事も逸せられぬ。常陸風土記の大櫛岡(オホクシヲカ)に就いて語られるものは、其の一で、巨人の巨大な足跡の事さへ附說せられてゐるのは面白い。播磨風土記にも同じ樣な傳說が託賀(タカ)郡の條に記されてゐる。此の大人(オホヒト)は原住民(Aborigines)を指したものと想はれる。其が大和民族の眼に異樣な體格の持主として映じた所から、誇張して傳へられたのであらう。沼を以て巨人の足跡とする播磨風土記の傳承の如きは、一種の說明的說話と目してよい。次に兄弟貧富傳說の一例が備後風土記逸文に在る。兄の蘇民將來は貧しく、弟の巨旦將來は大に富んでゐる。武塔(ノ)神が宿を借りようとするに、弟の方は惜しんで貸さない。兄の方は貸して粟飯等で饗應する。而して其の後、兄の一家が神から免疫(茅輪を帶びる)の法を以て酬いられたと云ふのである。驕奢傳說と稱すべきもの

（後世ならば長者傳說となる。）も亦存する。播磨風土記の伯耆の加具漏、因幡の邑由胡二人が驕奢を極め、清酒で手足を洗つたと云ふ如き、山城風土記逸文の伊侶具秦公が稻を積んで富み、餅を弓の的にしたと云ふ如きが其の例である。又刀劍傳說がある。播磨風土記に、苫編部犬猪が、丸部具也の屋敷址から得た劍は、柄は朽ちてゐたが、刄は錆びずして鏡のやうであつた。鍛冶を招いて其の刄を燒かせると、屈伸することが蛇のやうであつた云々とある。此は靈劍崇拜の一說話である。

次に纏つた方面で、山岳傳說を檢しよう。此には山岳天降傳說と山岳鬪爭傳說との型がある。大和風土記及び伊豫風土記の逸文の天上の一山が地に墮ちて、一片は大和の香山となり、一片は伊豫の天山となつたといふ傳說は、前者の例で、近江風土記逸文の夷服岳と淺井岳とが其の長を競うた處、淺井岳が一夜に高くなつたので、夷服岳が怒つて、淺井岳の頭を斬つたといふ傳說は、後者の例である。而して後者に島嶼起原說明說話を作なつてゐるのも面白い。卽ち斬られて湖水中に墮ちたのが竹生島となつたと云ふのである。それから動植物關係の傳說が數々有る。蛇が夜刀（ヤトは谷の義）の神として、其の祟の畏れられてゐる事が常陸風土記に見え、之を驅逐した勇者麻多智の名さへ傳へられてゐる。古史神話に現れる和爾も、出雲風土記には、語臣猪麻呂が、其の女子がワニに害せられたので、神明に祈願して報復した說話として傳へられてゐる。又鹿の話が所謂夢野の鹿として、攝津風土記逸文に存するが、此は頗る人間味を帶びたものである。次に植物の方では、常陸

風土記の童子女松原の說話は注目すべきものである。此は年少童子女の戀愛談を根基としてゐるが、郎子が化して奈美松となり、嬢子が化して古津松となつたと云ふ點に、變形（Metamorphosis）の思想が働き、說話の形式としては、植物發生の說明となつてゐるのである。巨木傳說と稱すべき物が、亦いろ〳〵ある。肥前風土記に語られる佐嘉郡の樟は、朝日の影には杵島郡蒲川山を蔽ひ、夕日の影には養父郡草横山を蔽うたとある。筑後風土記逸文の三毛郡の楝は高さ九百七十丈と語られてゐる。かういふやうに種々なタイプの傳說が介在してゐるのである。中には記紀の古傳說に交涉の存するものもあり、又其等の古傳說を理解する上に輔翼となるものもあるが、別個の趣を備へてゐるものも多いのである。

第三に特に地名傳說の夥しい事を注意しなければならぬ。地名傳說は具には地名起原說明傳說と稱するのが至當である。右の第一、第二に例示した諸說話にも、實は地名傳說となつてゐるのが尠く無い。此の地名傳說には、神若しくは人に結びついてゐる物が種々あつて、其の點で見ると、神話、史的傳說の一片影でもあるわけである。出雲風土記に母理鄕の由來を傳へるやう、大穴持命が越の國をお平らげになつて、長江山で宣ふには、我が造りまして知らす國は、皇御孫命平世に知らせと依さし、但八雲立出雲國は、我が靜ります國、靑垣山廻らしたまひて、玉置き給ひて守ると宣うた。それでモリと云ふとある。又播磨風土記に欟折山の由來を傳へるやう、品太天皇（應神）が此

の山で欟弓を以て走猪を射て、弓を折らせられた。それで其の名が有るといふのである。又動植物の關係から起つてゐるのも、かれこれ存する。例へば常陸風土記の白鳥郷の由來は、白鳥が飛び來て童女となつた所であるからで、角折濱は、大蛇の角が折れ落ちたのに基づいた名であるといふ。出雲風土記の佐世郷は須佐能袁命が佐世の木(鳥草樹)をかざしてお踊りになつた時、其の葉が墜ちたのに由ると云ふ。さういふやうにいろ〳〵有るが、畢竟するに風土記が地方の地誌たる性質上、此の種の說話を記載したのは當然で、此の點が國家を中心とした史書と異なる面白みの存する所以である。尙、此の地名傳說の一特色として注目すべきは、一事件の物語から數個の地名傳說が連鎖式になつてゐる物の存する事である。其の一例を左に引抄しよう。

下鴨里有二碓居谷。箕谷。酒屋谷一。此大汝命造レ碓稻舂之處者。號二碓居谷一。箕置之處者。號二箕谷一。造二酒屋一之處者。號二酒屋谷一。(播磨風土記)

扨凡そ此等の地名傳說を考へる上に於て、最も注意しなければならぬのは、其の來歷譚が悉く事實の眞を得たものではなからうと云ふ點である。初、何等かの事由を以てそれ〴〵の地名が發生したのではあらうが、永い間には其の眞義が分らなくなつたものもあるに違無い。而も何とか說明を與へなくてはならぬといふ人情からして、同音異義語(Homonym)を以て附會する。卽ち民間語原說(Volksetymologie)が起るのである。さういふ結果の傳說が必ずや多い事であらう。中には說話の次

第と地名とが、しつくり合致しないやうなものもあるのは、其處に起つた破綻に違無い。例へば出雲の意宇(オウ)は、水臣津野命(ミツオミツヌノ)が國引き終へて、オヱと宣うたのに因ると云ふが、オヱとオウとはぴつたり一致してゐない。同國の安來(ヤスキ)は、須佐乃烏命(スサノヲノ)が「吾が御心は安く平になりぬ」と宣うたのに由ると云ふが、安來の來(キ)の說明は附いて居らぬ。上文の「來ニ坐此處ニ(キマシテコヽニ)」の來(キ)を意味の內に籠めたと見るのは無理のやうである。併しながら事實の眞か否かは、傳說硏究上には重要性が乏しい。予輩は傳說其物を生んだ上代人の心理を興味の有る事とするのである。

* * * * *

萬葉集に於ける古傳說の詩化

右の如く記紀風土記に對して、國民傳說史的瞥見を加へて來ると、勢、萬葉集に就いても、此の方面の觀察を逸し得ないのである。但、該集に於ては、古傳說の如實の記載と云ふよりも、其の詩化と云ふ點を考慮に入れなければならぬ。卽ち一度歌人の頭腦を通つてゐるのであるから、其處に主觀が加り、爲に資材の客觀性が失はれてゐる物も有るのである。それで古傳說の原型の捕捉し難いものや、其の形式の委曲を了解し難いものもある。併し他の古典に沒交涉と想はれるやうな單獨な傳說を取扱つたものもあるから、其等は古傳說の貴重な遺珠と認めなければならぬ。

神婚傳說の一形式たる柘枝仙女

卷三に仙柘枝歌（萬葉集古義には、ヒジリノツミノエノウタと訓んでゐる。）といふのが三首出てゐる。此は柘枝（柘は桑の類）と稱する仙女に關する傳說を詠じたもので、其の第一首の左註に、「古

野人味稲(ウマシネ)與二柘枝仙媛一歌也。但見二柘枝傳一。無レ有二此歌一。」とあるから、仙女の關係者味稲の名を知り得、又此の說話を取纏めた柘枝傳といふ古書が昔存在した事も分る。而も一方に於て、懷風藻に此の事を詠み込んだ吉野の詩がかなり多く載つてゐるから、詩作上の好題目であつたと考へられる。同書には味稲を美稲と書いてゐるが、訓は同一と思はれる。此の說話の筋は、古義に鹿持雅澄が推測してゐる處では、

むかし吉野の美稲といひしは、吉野川に梁(ヤナ)を打て、鮎を取(リ)て、世のわたらひせし人なりけり。或時この人例の梁を打てありしに、柘の枝の流(レ)來て、その梁にかゝりしを、取歸て家に置たりしが、美麗(ウルハシ)き女になりて、遂に夫妻(メヨ)のかたらひをなし、老ず死ずて共住(アヒスミ)しが、遂に常世(ノ)國に飛去にしといふことのありしなりけり。

とある。いかにも其の通であらう。して見ると、川から流れて來た物が、男に取られて、女に化し、其の男と婚したといふ點で、神婚傳說の一形式を備へてゐるものである。其の流れて來た物が人に化するといふモーティーフは、山城風土記逸文の丹塗矢(此は男性に化した。)と同樣で、又契沖の河社に引いてゐる後漢書西南夷傳や田中大秀の竹取翁物語解に引いてゐる華陽國志に、川から流れて來た竹の中から男兒を得たといふ筋があるのも、畢竟するに部分的の小異同に過ぎないのである。

神人偶會傳說の一たる浦島傳說は、卷九に逸名氏の長歌として出てゐる。此は其の冒頭が、「春日(ハルノヒ)

之。霞時爾。墨吉之。岸爾出居而。釣船之。得乎良布見者。古之事曾所念。」（古義に據る）とあり、結尾が、「水江之。浦島子之。家地見。」とあつて、其の古跡に臨んでの追懷となつてゐる。中に語る所の筋は、前に一言した丹後風土記逸文の支那神仙說を交へてゐるのに比して、著しく古意を存してゐる事は、注目に値する。

求婚傳說

次に求婚傳說の取扱はれてゐるものを見るに、先づ卷一に、中大兄の三山の御歌がある。此は女山たる畝傍山に對して、男山たる香山と耳梨山との二山が妻爭をしたといふ古傳說（三山の性別は古義の所說に從ふ。）があつたので、其の爭の事は播磨風土記にも載つてゐる。さうして「虛蟬毛。嬬乎。相挌良思吉。」と謠つてあるので、上代に於て、人間界の妻爭の事實が多かつた證になるのは注意せられる。此の民間の妻爭傳說は、地方傳說としてかなり夥しいものであつたらしく、偶〻詩

美人と死

材となつたものが、此の集に依つて著聞してゐる。卷三に、勝鹿眞間娘子を謠つた山部赤人の長詠があり、卷九にも同樣の歌（「高橋連蟲麻呂之歌集中出」と稱せられる。）がある。此の眞間の手兒名は美人で、多くの男子から云ひ寄られたが、自ら身をはかなんで入水したといふ古傳說に據つたものである。此の趣は、卷九の菟原處女の事（やはり「高橋連蟲麻呂之歌集中出」とある長歌）にしても、又卷十六の櫻兒並に縵兒の事にしても同樣で、何れも二人若しくは三人の男子に懸想せられた女子が、思ひ餘つて死んだといふラブ　ストーリーである。だから求婚者の成功を以てめでたく納

る大國主神對八上比賣の如きとは、其の形式に於て、餘程の相違を來してゐるのである。卷九所見の上總末珠名娘子は、一般の求婚傳說とは頗る型の違つたもので、貞操觀念の無い遊女式の美人として傳へられてゐる。それで美女傳說としては、自ら一の品種を成すものである。

外來傳說の混入

萬葉集の歌、特に奈良時代の物になると、もはや時代が時代だけに、外來思想移入の痕跡は漸く著しくなつてゐる。老莊思想も、佛教思想も容易に認められる。隨つて外來傳說の混入といふ點も寧ろ當然で、何の奇も無いのである。

七夕傳說

卷八を見ると、七夕の歌が多い。山上憶良のは十二首も出てゐる。其が卷十には一層多くて、九十八首も列載せられてゐる。天漢といふ文字さへも用ゐられてゐる。此の七夕の事は既に懷風藻にも詩材となつてゐる。元來星辰說話で而も人情味の籠つたものであるから、時好に投じたのは、然るべき事である。それから卷十六の竹取翁の長歌を見ると「古部之。賢人藻。後之世之。堅監將爲迹。老人矣。送爲車。持還來。」(古義に據る)といふ句があるが、

棄老傳說

此は孝子傳の原穀の故事を引いたもので、棄老傳說が早くも移入せられたのは、傳說研究上重視しなければならぬ。

四　中古時代說話文學概觀

次に轉じて中古時代說話文學の概觀に移らうと思ふ。此の時代の文學には、日本靈異記、今昔物語等純粹の說話集が存するので、此は此の方面の研究上、最も意義の有る事である。今序を逐うて論述しよう。

(1) 日本靈異記

先づ斷つて置かなければならぬのは、日本靈異記は漢文で書かれてゐるから、純國文學では無い。併し假名文發達以前の物としては、此う云ふ形式に依るしか方法は無かつたのである。且又最古の說話集たる地位を保つて、後の說話文學の源泉となつたと云ふ點からも重要な物であるから、國文學を少し廣義に見、之を此處に据ゑて、論述を進めるといふ事である。

日本靈異記は具には日本國現報善惡靈異記と稱し、上中下三卷から成つてゐる。此の本の今流布して居るのは、群書類從雜部卷四四七、雜部二所收の物で、此は狩谷棭齋が上卷は高野山金剛三昧院本、中下卷は尾張眞福寺本に據つて、文化十三年に校訂した本である。棭齋は其の際校勘記をも作つて、日本靈異記攷證と題した。處が該本下卷の首が十行程缺佚してゐるのを、故木村正辭氏が嘉禎二年

日本靈異記棭齋校訂本

書寫の前田侯爵家本に據つて見出され、其の顛末が櫟齋雜攷に載せられたので、世間多くそれに從つた。然るに近年、此の前田家本で補ひ得る部分は、原作で無くして、後人の補筆であらうと云ふ異說が出た。其は武田祐吉氏の上代國文學の研究に見える所で、此の補文は序文の後に在る訓釋の文字を含んでゐない。卽ち缺文の個所に屬すべきものが五語あるのに拘らず、其の中の四語が見えないと云ふので、此は有力な說と認めなければならぬ。

〔補〕右の前田侯爵家本は、昭和六年十一月、育德財團で複製出版せられて、學界を裨益するに至つた。又同九年三月には、法隆寺本(靈異記上卷)が印行せられた。此は天下の珍籍である。大屋德城氏の解說に、此の本の優秀な所以四條を左の如く述べてある。

一、斯本は現存古鈔中最古鈔なること。

二、斯本は他本に比し、內容比較的正しきこと。

三、斯本は他本に比し、訓釋詳密にして、且其の語數多きこと。

四、斯本は總じて三十五緣を存し、他本の三十一緣なるに比し、完全なること。

予は目下該本を研究中であるから、近く其の結果を公にする機があらう。

景戒

卷首に諸樂右京藥師寺沙門景戒錄とあつて、著者は明確である。景戒の傳記は師蠻の本朝高僧傳卷六に出ては居るが、單に靈異記の序を引いた位なもので、詳細に亙つて居らぬ。今、靈異記に見

える所から知り得るのは、延暦十四年に傳燈位を得て居る事である。其の他では、元興寺や殊に藥師寺に關係した說話が尠からず採錄してあるので、彼の身分が推察せられるが、之を地方的に見ると、紀伊國に關する事件もかれこれ有る。殊に卷下の三十八話の第二の如きは、紀伊が彼の緣故深い地である事を想察せしめる。又此の記中に、行基に關する事が多く、而も「於二日本國一。是化身聖也。隱身之聖矣。」と讃歎してゐるのは、彼の心事を推すに足るのである。

撰述の因緣

彼が此の記を撰述した因緣は、自序に盡されてゐる。卽ち世人の善惡の應報は影の形に隨ふが如くで、洵に怖るべく、愼むべきものがある。それで冥報記や般若驗記のやうな他國の所傳のみを怖れて、却つて我が國の奇事を信ぜずに居られようかと云ふので、側に聞く所を註記した。願はくは之を見て諸惡莫作、諸善奉行せんことをと云ふ次第で、衆人に道念を勸めるのを目的としたのである。其の豫て冥報記や般若驗記を披閱して感得したのが、著作の動機となつてゐる事は、文獻學上注目すべき事である。棭齋の攷證に、冥報記二卷は唐の唐臨の撰であると、舊唐書經籍志、新唐書藝文志並に法苑珠林を引いて居り、般若驗記は釋潮音が、三寶感應錄に般若心經明驗贊記を引いてゐるのが其であらうと云つた說を擧げてゐる。此の冥報記は現に高山寺本の如きが存してゐて、全面目に接し得るのである。該本は實は三卷で、明治二十五年に其の上卷の摹刻が故川田剛氏に依つて上梓せられ、次いで明治四十三年に其の上中下三卷のコロタイプ複製が內藤虎次郎氏の跋を附し

て、版行せられてゐる。同氏が藤原佐世の日本國現在書目に十卷とあるのは恐らくは、後來の增補で、此の三卷本が節鈔で無くして原本であらうとの考證をせられたのは、傾聽に値する。又般若驗記は般若心經明驗贊記であらうとの潮音の言は如何であらう。予は或は石山寺に金剛般若集驗記といふ上中二卷の殘缺本が存する（假名遣及假名字體沿革史料參照）が、此こそ其の書の趣からして、恰も其に當るやうに思つて居る。

著作年代

此の書の著作年代は、梭齋は其の校本の跋に弘仁年間とし、故木村正辭氏も亦同樣の說であることが櫟齋雜攷に徵せられる。此は卷下の第三十九話に、弘仁年號云々の語があるので、さういふ見當が附くが、近頃此の問題が少し委しく調べられるやうになつた。といふのは、橋川正氏の靈異記の研究（雜誌藝文所載）で、本書卷下に、越前國加賀郡といふ語が見える點から、其の著作が弘仁十四年以後に降らないといふ考證である。更に板橋倫行氏の校譯日本靈異記序の說では、卷下第三十九話に、「今平安宮䟽十四年介丁治天下賀美能天皇是也。」とある介丁は年といふ一字の誤と想はれるから、「今平安宮に䟽十四年、天下治し賀美能（嵯峨）天皇これなり」で、本書最終の條の書かれた時は、嵯峨天皇治世の第十四年即ち弘仁十三年の意と考へられる。それで弘仁十三年が著作完了期と認められると云ふのである。此の問題は、先づさういふ邊に落着するものとしてよからう。

體裁

本書は和臭の有る漢文で書いてある。各卷に序が附いてゐる。又大體各段末に訓釋の部が附いて

ゐる。此の訓釋は佛典の卷末毎に存する音釋の模倣である。此の部は國語史料として價値が有るが、景戒の自註とは考へられぬ。假名遣の誤や訓の附け方の不整頓な點から、かなり後の世の人の所業と認められる。

内容　次に內容を吟味するに、卷上は合示善惡表緣卅四五條とあつて、說話の實數は三十一、卷中は合示善惡表緣卅二條とあつて、實數もまさしく共の如く、卷下は合示善惡表緣卅九條とあつて、是も亦實數は一致してゐる。そこで卷上だけ、善本が傳つてゐないと想はれる。其の終に二三個條の脫落が有るのか。第三十一話の末に、逸文があらうとの疑は、棭齋も旣に攷證に記して居るが、字句が尻切の形であることは、予輩が一目見ても分るし、又其處に訓釋の無いのも怪しい。一體總數の三十四五條といふ書方が曖昧であるが、最も氣の附く點は、第四話の聖德太子の說話に、人蕩法師の弟子圓勢師の說話が、別個の物であるのに拘らず、一緒になつてゐる事で、かういふ所からも、說話の總數に狂が生じたのであらう。

說話の實質　偖、以下說話の種類や性質を考察しよう。所收の說話はかなり多いが、殊更に類別は設けてない。先づ雷を捉へた話、狐を妻として子を生ませた話、强力の子（道場法師）の話、聖德太子と乞丐人との話といふやうな、著者の所謂日本の奇事を手始に、佛像奇瑞談の如き次第に佛敎的傅彩の顯著な說話に及んでゐるが、就中因果說話が最も多きを占めてゐるのである。其の因果談は畢竟するに、

因果說話

善業の報として、善果を得た話と、惡業の報として、惡果を得た話との二つの大な流に歸する。即ち善果を得た方の說話は、靈驗や功德に關する事で、三寶を敬つて驗を得、佛菩薩（主に觀世音で、中には妙見もある。觀音は殊に十一面とある。此は注目すべき事である。）を信仰して利益を得たといふ類や、經典（方廣、心經、法華、孔雀王咒など）を尊重し、修持し、書寫して功德を得た事や、持戒淨行、又は稱名の功德や、放生（其の動物は龜や蟹の如きもの）の功德を語つたものである。次に惡報を得た方の說話は、殺生、偸盜（兼ねて寺物濫用の如き）愛欲、無慈悲（邪慳）の因果談が主で、又不孝の惡報のもある。誹謗の如き口業に關するものも存する。此の惡報には、人が牛に生れ變つたといふやうな輪廻轉生（Metempsychosis）の思想のものがあり、且又生きながら地獄の苦患を受けたといふやうな筋のもある。それから墮獄の苦惱を見て來たといふ地獄巡りの說話もあつて、特に焦熱地獄を畏怖する思想は、頗る顯著である。尙又、鳥の邪淫を見て、世を厭ひ出家したといふ發心談もあるが、此は因果說話とは別種である。役優婆塞の仙となつて、天に飛んだ話の如きも、奇事として入れられたのであるが、此は說話文學上特殊な價値がある。

モーティーフとタイプ

前述の因果說話には、殊に說話のモーティーフを同じうした類似なタイプの物が幾通もあるばかりで無く、單に場所と人とが違つてゐるだけで、叙事の進行の全然同一である所の蟹の放生談の如きもある。

教訓的

本書撰述の動機は勸化に在る事は、上に述べたが、說話の終結毎に教訓的の語を下してゐるので、其の點が鮮明である。例へば、

畜生猶不ㇾ忘ㇾ恩返報。何況人而忘ㇾ恩乎。

因果之理是不ㇾ信哉。

現報甚近。應ㇾ信二因果一。雖二見之畜生一。而我過去父母。六道四生我所ㇾ生處。故不ㇾ可ㇾ無二慈悲一也。

の類であつて、而も精進女問經、涅槃經、大集經などの佛典を始め、顏氏家訓の如きも、明に引證してゐるのである。さう云ふ次第で、無批判に說話を列擧したので無く、既にさういふ傾向を帶びて居るが、此は後の說話文學にも影響してゐる。それで多くの說話の書き振りは、善果も惡報も、其の廻つて來るのが頗る迅速で、而も其のデグリーが深刻であるといふ風で、所謂因果覿面の物語となつてゐる。

說話の源泉

次に考へなければならぬのは、說話の源泉（Quelle）の問題である。固より著者が實際に見聞した事件を書留めたものも多からうが、一面には一の方法として、資料（Document）を利用して、取捨した物もあるに違無い。卷上の第五話には、「案二本記一曰云々」とある如きで、それが分る。小子部の栖輕が雷神を捉へた話の如きは、日本書紀卷十四に記載せられた事實であるが、本書のは一層俗談化してゐる。聖德太子と乞丐との說話は、上宮聖德太子傳補闕記の如きに見えるが、本書も何

等か古い記載に資料を仰いだのであらう。

價値　要するに、此の記は前にも述べた通、我が最古の說話集たる點で、文獻學的價値に富んでゐる。旣に佛敎思想が民間に瀰漫してゐた當時の世態を知るには、之を措いて他に好資料は無い位である。又後々の說話文學を喚起した源流となつた點からも、大に尊重せられなければならぬのである。

* * * * * *

法華驗記 著者 卷數　予はこゝに靈異記から直接系統を引いてゐる法華驗記の事を附說しよう。此の書は天台霞標初編卷四、諸祖撰述目錄に鎭源の著として三卷と揭げてある通で、書名は具には、大日本法華經驗記、若しくは本朝法華驗記と題せられる。鎭源の詳傳は諸書に探り難いが、首楞嚴院沙門とあるから、横川の慧心院僧都源信の末流であらうと思ふ。卷數を三としてゐるのは、靈異記の亞流と考へられる。類聚名物考書籍部第八に、元政の艸山集を引き、按を加へて、「法華驗記に二通の異本有り。一は比叡山南谷の藥恒が撰むものなり。一は是も比叡山の智源法師が作れる所なり。」と、同名にして異書の存する事を言つてゐる。其の智源とあるのは、鎭源の事であらう。鎭源の該書は、今續群書類從傳部に就いて接せられるが、別に享保二年の單行版本もある。

著作年代　此の書は和臭を帶びた（「小兒從レ馬丸落」のやうな）漢文で編せられてゐる。自序の末に長久三年とあるから、著作年代は極めて明白である。

說話の數量と價値　其の靈異記の影響を受けてゐる事は、第九十六話の輕二咲持經者一沙彌の如き、「出二靈異記一

矣。」と明記してあるのに徵せられる。而して說話の豐富な事、總て百二十九を算するから、寧ろ靈異記に超えてゐる。主とする所は法華經の靈驗談であるが、人物も事件も眞に多種多樣で、大に見るべきものがある。例へば第四十八話の光勝沙門、法蓮法師の如きは、說話の筋に、宗論や驗競(ゲンクラベ)があり、白米を包含した瓠の事などがあつて、頗るローマンティックで興味が索(ツ)きないのである。又第百二十九話の紀伊國牟婁郡惡女の如きは、道成寺傳說のプロートタイプで、最も注目すべきものである。此の書が今昔物語の究竟の資料となつた事は、更に後に述べよう。

日本感靈錄

それから靈異記や法華驗記に伍する書で、日本感靈錄といふ物がある。續群書類從（卷七一七、釋家部二）に收められてゐるが、僅數葉の零卷である。併し表紙に上下兩卷、凡靈異事五十八箇條也と書いてあると云ふから、大體の事は分る。又久安三年に寫したと云ふ識語が存するから、平安朝の物であることも見當が附く。今存する部分を見るに、盜用三寶物現獲惡報緣とか、祈願四王像被盜乘騎自然獲得緣とか、竊盜錢幡得狂死緣とか、祈願觀音像蒙靈祚緣とか云ふ風に、善惡の業報談を列載した物（漢文）で、靈異記の系統を引いてゐることが顯著である。

本朝神仙傳

尙、大江匡房（長久二年生――天永二年歿）の本朝神仙傳一卷（續群書類從傳部所收）も併せ考へなければならぬ。併し今見る所の物が單に拔萃本に過ぎない事は、頗る遺憾である。卽ち役行者事、泰澄事、都藍尼事、敎待和尙事、日藏事等僅々八條である。けれども是も亦上、靈異記を承けて、

下、今昔物語の如きに交渉のある物で、看過せられないわけである。役優婆塞の條に、「事見二都良香吉野山記一」の如き、資料の附記のある事なども、頗る興味を唆るものである。

(2) 大和物語

伊勢物語を取扱はぬ所以

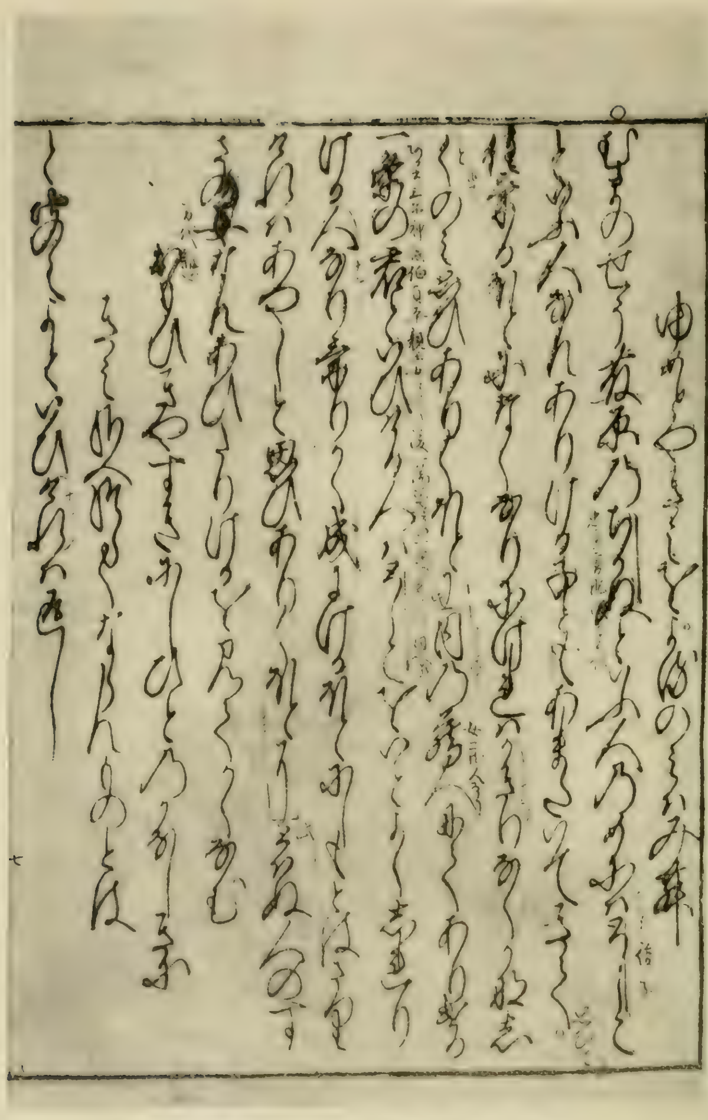
轉じて大和物語を考察しようと思ふが、こゝに伊勢物語を說話文學として取扱はない所以を辯明して置かう。該物語は固より裏面は業平の事であり、且又種々な關係人物の名が明示せられてゐるにしても、表面は「昔男ありけり云々」と、どこまでも作り物語氣分で筆が執られてゐるのであるから、業平を傳說的人物として取扱つた所謂打聞物語でも無く、說話文學とも目し難い點が有ると思ふ。けれども後世の說話文學が、全く業平の事として伊勢物語から材料を仰いだもの（今昔物語巻二十四に見る如き）の存することは、文學の系統上何の不思議も無いことで、純粹の創作でも、後に說話化せられることは有り得るのである。

大和物語巻數諸本

大和物語は古來上下二巻として傳へられてゐる。（本朝書籍目錄假名の部に既にさう見えてゐる。）此の書の傳本の系統に就いては、季吟の抄や首書本に、本の差異が多く、六條家の本、二條家の本等があると記してゐる。今流布する所の物は定家本で、季吟の抄や首書本は皆それである。即ち定家が寛喜三年八月十四（八イ）日（明月記に十八日とあるから、其の方が正當と考へられる。）に書寫終功し

流布本はプロートタイプから距離がある

たものがあつて、其を一字も違へずに寫取つたといふ本を採用してゐるのである。此は歌數が二百八十餘首有る。處が清輔の袋草紙には和歌二百七十首と見えてゐるから、本の差異の存する事は、其の點でも首肯せられる。刊本には古活字本、慶安元年版素本、承應二年版抄、明暦三年版首書、享和三年版上田秋成校本、其の他群書類從本の如きがあるが、語句の異同に就いては、古活字本が最も目立つてゐる。(予は逸名氏が慶安版本に活字本の異同を註記した一本を所持して居る。) 又章段に就いては、流布本の間には格別の差異(卽ち前後したものや、一方に有つて、一方に無いと云ふ如き)は認められないが、季吟の抄の卷末に、「またあるほんによのつねのほかなりしことくはゝれり云々」として、四段程の本文を附載してゐるのは注目せられる。(予の藏する前記慶安版書入本には、之を「花山院の御つくり物がたりとある本にあり。」としてゐる。而も右は尻切れとなつてゐるが、秋成本所引村井本に據ると、數行が補足せられて、完くなるものである。) 扨予はこゝに一の私見を有する。其は現に接する所の流布本は、プロートタイプからは距離の有る物で、夙に汚損等の爲に脫簡を生じてゐるものと考へられる事である。例へば季吟の抄本の六の二〇ォの「それに水くむをんなどもあるがいふやう」と止つてゐる段の如き、本文の幾分が缺けたものである事は爭はれない。抄に、「此段のとまり例の筆法にや。一でう禪閤御說に、諸本かくのごとし。これは水くむをんなはじめよりのことをかたるをかきつけたるべしと云々。又ある本に云、それに水くむ女どもあ



大和物語（書入本）

なるがいふやう、そのゆくゑもとをらぬとたゞひとくちいひて、すゑをいひさしつと有。」とあるが、其の「例の筆法にや」といふ省筆法とする見解は當らない。或本に云ふ所の如くならばとにかく、其の儘では脱簡に相違無い。

作者

著作年代

次に作者及び著作年代の件である。清輔は袋草紙に、作者不審と記してゐる。夙に眞說の傳らない事が分る。處が在原滋春（業平の次男で、俗に在次君と稱せられる。）の作る所と云はれ、又花山院御撰とも稱へられるのである。前說は一の舊傳で、本朝皇胤紹運錄の如きに註せられて居つて、大日本史も其を踏襲して居り、後說は兼良が歌林良材集で言ひ及んでゐる所である。伊勢物語に業平自記說が有る所から、此の物語の作者として、業平の子の滋春を以て擬したものとすると、洵に確據の無い事と謂はなければならぬ。此の物語の中には（抄の四の一八ウ）滋春の死去の事が語られてゐるから、彼の筆作でないと認めてよい。又控へ目に、何か滋春の文が混じてゐるのではなからうかとした所が、其も確に突止められるわけも無いのである。花山天皇御作說にした所で、やはり確實なものでは無い。季吟が其處に折衷說を立てて、「はじめ在次君のあらましゝるしを（お）きつらんに、又彼みかどの製作にて、其後々の事どもをも補ひおはしましけるとやみ侍らん。」としたのは、氣休めの言に過ぎない。作者の件はさうとしても、著作年代は略分ると思ふ。既に袋草紙に、「先朱雀院御時、天曆始事歟。先帝延喜御宇也。大キオホイモウ（マ）チキミト號ハ貞信公也。有ニ兼盛并檜

垣嫗等歌」也。」と記してあるので、後世多く之を典據とする。併し眞淵の如きは、其の直解に於て之を評し、「こは條々異にて、古なる後なるまじれり。」とし、「たゞ平兼盛ぬしは、專ら天暦の御時にみえたる人にて、花山の御時の頃まで有つらんこと、誰のいへるも同じ。」と言ひ、更に語調、歌體に對する直觀からして、「且ことばのさま、古言の殘れるも、誤れるも、又これかける人のみづからよみつらんと見ゆる歌の有に、其歌ども、圓融、花山、一條のはじめつかたの御時までのてぶりとこそみゆれ。」と斷じてゐる。一種妥貼の見解としてよからう。花山天皇御宇前後を以て、此の書の著作時代に擬することは、强ち無理は無いであらう。一體書中に存する確な年代の事は、藤原忠文がみちのくの將軍となつて下向するといふ一條(抄の二の三五ウ)の如きで、此は朱雀天皇の天慶三年の事であるから、天慶三年以後の文章の存するのは明白である。だから袋草紙の說も否定は出來ない。私見を以てすると、此の書は一人一時の筆では無い。種々な文を集めもし、書きもし、又別人が後に追補もして、次第に今見るやうな形になつて行つたのであらうと考へる。上卷は概して單純な歌物語であるのに、下卷に移ると長文の說話が多くなつてゐるといふ點から推しても、一人一時の筆とは認められないのである。而して怖らくは拾遺和歌集の撰ばれる迄には、此の書は大體纒まつてゐたらしい。尙後にも述べる。

一人一時の筆ではない

進んで內容を通檢しよう。山崎美成の海錄なる大和物語考（一、四頁）に、「この物語の大むねは打聞に

內容

して、作り物語にはあらず。」と言つてゐるのは、洵に要を得てゐる。實に伊勢物語の系統を引いた歌物語である。題號の大和と云ふのも、畢竟するに、伊勢に對したタイトルで、必ずしも清輔の云ふ如き和語の意や、眞淵の云ふ如き帝京の義とも限るまいと思ふ。伊勢物語の方は概ね所謂昔男のみやびを以て一貫してゐるのに反して、此の方は大體に於て個々別々の說話である。（中には同一人に關する物が隣合つてゐるのも見受ける。）而して其の說話たるや男女間の情事が多く、懸想もあれば嫉妬もあり、前妻と後妻とに關するものもある。朝忠の事、陽成院の二の皇子（元平親王）の事、平仲（平定文）の事、俊子と千兼との事等、人物こそ違へ、似寄つた人情談である。情事の外には、所謂哀傷の事もあり、述懷の事もある。而も說話文學として出色の物は、後半部の方に存する。蘆刈（抄四卷）采女、姨捨（抄五卷）の如きがそれである。

他書との交涉

此く內容を通檢するにつけて、思ひ合せられるのは、他書との交涉である。古今集に讀人知らずとせられてゐる歌が、此の書には人名が露顯せられてゐる事實を見る。例へば「それをだにおもふこととてわがやどをみきとないひそ人のきかくに」は、此の書には桂のみこ（宇多天皇の皇女孚子內親王）として載せられてゐる。かういふのは、撰集の時代から降つた爲に、此の書には最早包み隱さなくなつたからであらう。伊勢物語との交涉では、「風ふけばおきつしらなみたつたやま夜半にやきみがひとりこゆらん」の歌の物語の敷衍があり、在中將と二條の后宮との間柄の事がある。（以

上抄五卷）此等は此の物語としては、無くもがなの條々で、追補者のさかしらとしか思はれぬ。又後撰集との關係は頗る顯著である。例へば「かずならぬ身におくよひのしら玉はひかりみえさすものにぞありける」の歌の事は、後撰集雜歌二に出て居つて、此の書も、筋は同じであるが、集には武藏の詠とし、此には若狹の御の作としてあるといふ違が有る。又「つゝめどもかくれぬものはなつむしの身よりあまれるおもひなりけり」の歌の事も、後撰集夏部に出て居つて、詞書の次第も、此の書と同じ筋であるが、此の書の文言の方が、ずつと物語めいて來てゐて面白い。後撰集が此の書の材料に供せられてゐる事は認めてよからう。併し拾遺集に至つては、此の書よりも後の撰であらう。此の書の「みちのくのあだちのはらのくろつかにおにこもれりときくはまことか」や、「わすらるゝ身をば思はずちかひてし人のいのちのをしくもあるかな」や、「きみなくてあしかりけりと思ふにもいとゞなにはのうらぞすみうき」の如きは、此の物語の文章を見た上でなくては、集の方に取り得ない形跡がある。若し夫れ大鏡や今昔物語の如きに至つては、此の書よりも晩出の物であることは明で、說話資料を此に仰いでゐる物の存する事を見受けるのである。

價値

　此の書は伊勢物語、源氏物語と共に、歌人必讀の物として、古來稱美せられてはゐるが、結構、文品兩つながら伊勢、源氏よりも劣る爲か、兩者程多く讀まれ、多く研究せられてはゐないのである。併し文學史的に考察すると、相當に價値が存する。前にも述べたやうに、前半部には歌集の戀

部や雜部を繙くと同樣な、丁度歌に短い詞書が附いてゐる位な短章が多きを占めるが、稍長文の物になると、季縄少將の死の條(抄の三の一三ウ以下)や平仲の事の女が尼となる條(抄の三の一七以下)の如きも存して、單なる歌談で無く、一種の文學味が會得せられるのであるから、物語として捨てられないのである。況や往々情趣の掬すべき美文、卽ち、船車水陸の別離を叙した情景の如き(抄の四の一二オ)に逢着する點があるからである。而して予が爰に論題とした說話文學上から見ると、古歌の傳說化といふ點に於て、殊に興味を覺えるのである。例へば「わがこゝろなぐさめかねつさらしなやをばすてやまにてる月をみて」は、古今集雜歌上では單に題知らず、讀人知らずとしてあるが、此の書では姨捨傳說中に攝取せられてゐるのである。又說話のデベロプメントの上から見ても、彼の處女塚傳說が萬葉集卷九に於て見る趣よりも發展して、此の書では旅人が夢の告を得るといふエレメントの附加があるのである。さういふ次第であるから、後の謠曲にも、古今、伊勢、源氏と同じやうに、此の書が材料を提供してゐる點を逸してはならぬ。是說話文學の論究上、此の書の價値の相應に存するといふ所以である。

(3) 三寶繪詞

三寶繪詞

三寶繪詞は上中下三卷から成つてゐる。此の書は大日本佛教全書の傳記叢書(大正十一年刊)に收

古寫本　められて流布してゐるが、其の古寫本は東寺寶泉院本であつて、其の影寫は東京帝國大學史料編纂所に作製せられてゐる。原本の下卷の奥に、

文永十年八月八日彼岸中日未刻書寫了

戸部二千石三善某花押

と識語がある。三卷の內、上一卷だけは、殊に宣命書きの書式が鮮で、頗る古色を帶びて居る。然るに中と下との二卷は、小字を普通の文のやうに書き交ぜたのが多く、一體に上卷の如き原形が崩れて、後の筆らしく見える。總じて片假名が用ゐてあつて、其の字體はキ、テ、マなどヽ、ヂ、ア の如き古體である。大體一面八行若しくは九行に書いてあつて、墨附は上四十七枚、中六十二枚、下七十五枚である。今日では、他に善本の出ない限、此の鎌倉末葉書寫の原本が貴重な次第である。佛教全書本は、宣命書きに據らず、又片假名を悉く平假名に改易したのみならず、誤讀に基づく誤寫が多いのは、何とも遺憾に堪へぬ。

〔補〕昭和七年十一月、此の書の單行本が出版せられた。其に就いて、予は同八年四月三十日の時事新報に、三寶繪詞と題して、感想を載せた。其の全文を左に示して置かう。

此の頃久しぶりに本郷の森江書店を訪うたところ、店主英二氏は、昨年末出版せられたと云ふ和裝の一書を取出して、惠贈せられた。それは高瀬承嚴氏が令閨追福のため校刊せられた源爲憲撰の三寶繪詞である。三寶繪詞と云ふと、余としては

洵に執着措かざる古典籍の一つで、嘗て大日本佛教全書の傳記叢書に收められて、大正十一年八月公刊せられた時、稀有の古寫本が活字版となつたのを一入嬉しく思つたもので、而もその唯一の刊本が魯魚の誤の尠からぬ爲に、遺憾の念を抑へ難く、度々帝國大學の史料編纂所に足を運んで、其の儲藏の影寫本を閲覽して研究した次第であつた。

抑ゝ三寶繪詞の內容及び價値は如何であるかと云ふと、此は是迄余の見た本即ち京都の東寺所藏の物即ち前記の影寫本に據ると、佛、法、僧の三卷から成つた原本には、文中所々に繪が挿まれてゐる趣であるが、繪の方は今に傳つてゐない。卷首に永觀二年中冬の年紀の明かな自序があり、上卷は佛寶で、主として六波羅蜜の印度說話を列ね、中卷は法寶で、聖德太子以下本朝十八人の事歷を列敍し、又下卷は僧寶で、正月から十二月までの月次の齋會の次第を敍べてある。それで此の繪詞は上、日本靈異記を承け、下、今昔物語に資料を供給した佛教文學として、（佛教的說話文學として）多大の價値ある文獻であつて、佛教家は姑く措くも、國文學の此の方面に携る人の、決して寸時も閑却してはならない物である。

殊に此の高瀨氏校本の文獻學的價値の存する點は、前記東寺所藏本を本文として立て、之に對校するに、前田侯爵家所藏本と名古屋市關戸家所藏本とを以てせられた事で、底本で不備若しくは不明な個所が、此の校合によつて眞に能く究明せられたものは一二に止らないのである。前田侯爵家本は寬喜二年四月書寫の奧書のある本で、所謂眞名（漢字）本である。又關戸家本は、保安元年六月書寫の奧書のある平假名本で、惜しいことには上卷を缺いでゐる。併し兩書共に、東寺本の片假名本たるに比して、異彩の有るものである。此の二部の異本を以て校合のしてある事は、此の新刊の一大特色で、其の面目は、遂に佛教全書本を凌駕してゐるのである。之を以て余輩は、高瀨氏の功勞並に實際の校訂者安西覺承氏の苦心に深く同情し、且又出版者森江氏の篤志に對して謝意を表するのである。

けれども、此の新刊に就いて、少し慾を言ふならば、底本たる東寺本は、片假名、宣命書きの物であるのに拘らず、一般

讀者の便を圖つて、平假名本として印刷せられたと云ふ點である、古書をレプリントするには、成るべく原本通りの樣式を保つ方が好く、それでこそ學術的價値が多大であると思ふ。此の事は跋文に斷つてはあるが、返す〳〵惜しいと考へる。次に又考異が各卷末に一括してあるが、是も亦閲讀上の便利から云ふと、其の個所々々の上欄又は下欄に註記してある方が好いやうに考へる。これは外國書などのノートの組方に徵しても素より兩樣有りはするが、余の習慣としては、章末などに一括してあるのよりも、其の場其の場に在る方を、常に便と見てゐるのである。右に述べた二點は、たゞ自分の思ひつきを無遠慮に擧げたまでで、此の新刊の價値を左右するものではなからう。くれ〳〵も有益な古書の新しく單行本となつたことを衷心から喜ぶと共に、世の好學の士に一言紹介して置く次第である。

著者及び著作年代

著者は源爲憲と明記してある。爲憲は光孝天皇の皇子で、源姓を賜つた是恒の曾孫に當り、而して筑前守忠幹の子である。其の傳は大日本史（文學五、卷二一七）に列してあるから、能く分る。夫の源順の門下で、文章生出身であるが、地方政治に功績があつた。長和三年には美濃、加賀が闕國となつたので、上書して任官を請うた。其の文は本朝文粹卷六に載つてゐる。それで之を思ふと、扶桑拾葉集系圖に寬弘八年卒としてあり、後の學者で、其に從つてゐる人も尠く無いが、其は信用せられないのである。爲憲の著書には、本朝詞林が有るが、今は逸して傳らぬ。尙其の作る所、圓融院御授戒記一卷（群書類從釋家部所收）空也上人誄一卷（續群書類從傳部所收）世俗諺文（同雜部所收）口遊一卷（同上）があり、又天祿歌合序並跋（扶桑拾葉集卷三所載）がある。歌は拾遺集に採られ、詩文は本朝文粹等に收められてゐる。和漢の學殖が豐で、且佛典にも該通してゐた事は、想察せられるのであ

る。僧、彼が此の書を撰述した本旨は、濁世を厭つて、成佛を希求することを勸めるに在る。其の總序に述べてゐる所は、最も彼の志向を知るに足るのである。而して彼が旨を奉つて獻じた方は、冷泉天皇の第二皇女である事も總序中に見えるが、此は大鏡太政大臣伊尹の條の女二ノ宮（尊子）を火の宮と申した事を記した所に、「この宮に御覽ぜさせむとて、三寶繪は作れるなり。」とあるのが思ひ合せられる。それから總序の終に、「于時永觀二タ年セ中ノ冬ナリ」と明記してあるから、撰述年代は極めて明白である。又此の書が世に行はれてゐた事は、顯昭の袖中抄卷三、勝間田の池の條に、藥師寺云々と引いてあるのでも分る。

文章　文章は大體國文で、處々に漢文の格を混じてゐる。さうして文詞は極めて趣致に富んで、

頂ハ高コト天蓋乃如ク面ハ圓ナルコト滿月ニ同シ頭ノ上ヘノ螺髻ハ青ク糸ヲ卷トカ疑ヒ眉ノ間ノ毫相ハ白ク玉ヲ瑩ケルニ似タリ眉ハ細ク月ヲ並ヘ歯ハ白キ雪ヲ含ミ眼ハ青ク蓮ニ喩ヘ脣ハ赤ク菓ミニ等シ紫磨金ノ膚ヘハ耀天塵リ先シ千幅輪ノ趺ツハ歩ムニ土ヲ離レ給リ

と云ふやうに、駢儷の句を行り、形式美を備へてゐる。

結構　其の仕組は、初に總序がある。さうして各卷にも小序があるが、此は恰も日本靈異記に似てゐる。又中下の終には贊の詞が添へてある。

内容　上卷は佛寶、中卷は法寶、下卷は僧寶で、其の事を總序に次の如く言つてゐる。

昔シ龍樹菩ノ禪陁迦王ヲオシヘタル偈ニ云クモシ繪ニカケルヲ見テモ人ノイハムヲ聞テモ或ハ經ト書ミトニ隨テ自ラ悟リ念ヘト云ヘリ此レニヨリテアマタ乃貴キ事ヲ繪ニカ、セ又經ト文トノ文ヲ加ヘ副ヘテ令奉ム其名ヲ三寶ト云事ハツタヘイハム物ニ三歸ノ緣ヲ令結ムトナリ其數ヲ三弖ニ分テル事ハ三時ノヒマニアテタルナリ初ノ卷ハ昔ノ仏ノ行ヒ給ヘル事ヲ明ス種々ノ經ヨリ出タリ中ノ卷ハ中來法ノコ、ニヒロマル事ヲ出ス家々ノ文ヨリ撰ヘリ後ノ卷ハ今ノ僧ヲ以テ勤ル事ヲ正月ヨリ十二月ニ至ルマテノ所々ノ態ヲ尋タリ其ノ初ニ各ノ趣ヲ宣ヘ其奥ニ又德ヲ讃タリ惣テ佛法僧ヲ顯ハセ初モ善ク中カモ善ク後モ善シ在トシ在ラム所ノ所ニハ當ニ三寶伊坐シテ可守給シ

本生說話　卽ち上卷は、昔の佛の行ひ給へる事、換言すれば本生說話（闍多迦 Jātaka）を擧げたのである。其は左の十三件である。（初の六件は六度の事である。）

前身	現身	本書に示した出典
（一）檀波羅蜜を行つた尸毗王	釋迦	六度集經、智度論等
（二）持戒波羅蜜を行つた須陀摩王	同前	智度論
（三）忍辱波羅蜜を行つた忍辱仙人	同前	大論（大智度論の略稱である）
（四）精進波羅蜜を行つた大施太子	同前	六度集經、報恩經等
（五）禪定波羅蜜を行つた正闍梨仙人	同前	智度論

（六）　般若波羅蜜を行つた拘賓大臣　同前　大論
（七）　流水　同前　最勝王經
（八）　國王　彌勒　報恩經
（九）　鹿王　釋迦　六度集經
（一〇）雪山童子　同前　涅槃經
（一一）薩埵王子　同前　最勝王經
（一二）須檀那太子　同前　太子須檀那經、六度集經
（一三）施無（「或本云此名善心云々」と割註がある。）　佛　（卷尾一葉缺けたのか、出典を明示した部分が無い。佛典說話全集第六卷に、孝子睒と題して、佛說睒子經に據つた說話が出てゐる。筋は同樣であるが、此は別の經に基づいたものらしい。法苑珠林卷六二には、やはり睒子經を引いて揭げてあるが、併せて雜寶藏經から偈の部分を引いてゐるから、同經にも存する說話である。）

〔補〕　卷尾の缺けたらしいと云ふ推測は、前田

本に徵して的中した。其に據ると、菩薩睒(セン)經並に六度集經に見える旨が明記せられてゐる。

我が佛敎傳說

此等皆、昔の何は今の何であるといふ形式の印度說話である。

處が、中卷は、中頃法のこゝに弘る事と云ふ聖德太子、役行者、行基菩薩以下、播磨國漁翁、山城國造ニ經函一人、大和國女人、美作國採レ鐵山人といふやうな十八人の僧俗の日本佛敎傳說を列擧してゐる。此等の出典は殆ど全く日本靈異記であると明示してある。靈異記が漸く厭離穢土、欣求淨土の資として活用せられ、又かういふ國文として消化せられて來た經過は、文學史的に意義が深い。尤も中で該書外に亙つてゐるのは、聖德太子の事に、日本紀、平氏撰聖德太子上宮記を示し、役行者の事に、續日本紀、居士小卿仲廣撰日本國名僧傳を示してゐる類である。而して最後の條の大安寺榮好の事だけは、靈異記で無く、石淵(イハブチ)寺緣起を擧げてゐる。又此の中卷の末に、「或本云」として、「妙達和尙ノ入定シテヨミカヘリタル記云」と標して、(かういふ文の存する別本が、當時傳つてゐたらしい。)妙達の地獄巡りの話が附載してある。其の中には經典書寫の功德談が多いが、墮獄の惡報談も交つてゐる。最も注目すべきは、平將門が傳說化してゐることである。將門は惡人であつたが、先世に功德を作つた報で、天王となつたと云ひ、天台座主尊意は將門を調伏したから、此の罪で日

毎に百度闘争すると云ひ、天台別院座主ソウネムは先生に將門の親であるが、觀音を念じたり、堂塔を建立したりした功德で、都率の內院に生れたと云ふ本生談もある。此の繪詞の出來た永觀二年は、將門の滅亡した天慶三年から、四十五年目に當つてゐるが、當時さういふ事が信ぜられてゐたのである。

法會の來歷

次に下卷は、偏に佛と法とを尊んで、僧と尼とを輕んずるなと云ふ趣意で、僧侶の尊い所以を顯彰するのを主とし、月次行はれる各種の法會の來歷を叙述したのである。其の事は左の件々である。

月次	法會	文中の經典名
正月	修正月	四分律、僧祇律
	御齋會	最勝王經
	比叡懺法	普賢經、摩訶止觀
	溫室	溫室洗浴衆僧經、阿含經、十誦律
	布薩	梵網經
二月	修二月	（經名を明示してゐない。）
	西院阿難悔過	（出典として三代實錄を示してゐる。）
	山階寺涅槃會	涅槃經

	石塔	造塔延命功德經、法華經
三月	志賀傳法會	（出典として志賀緣起を示してゐる。）
	藥師寺最勝會	（出典として格（キャク）を擧げてゐる。）
	高雄法花會	隨喜品、法師品
	法花寺花嚴會	花嚴經、優鉢羅花比丘本性（生）經（出典として續日本紀を示してゐる。）
	比叡坂本勸學會	法華經
	藥師寺萬燈會	阿闍世王受決經、譬喩經
四月	比叡舍利會	（經名が擧げて無い。）
	大安寺大般若會	大般若經（出典として緣起を示してゐる。）
	灌佛	灌佛像經、浴像經
	比叡受戒	梵網經、心地觀經、提謂經（尙、嘉祥、寬平の官符が引いてある。）
五月	長谷菩薩戒	梵網經（出典として「天平五年ニシル戈ル觀音ノ緣起幷ニ雜記等」と示してゐる。）
	施米	阿含經、寶積經
六月	東大寺千花會	賢愚經、花嚴經、法華經（出典として續日本紀、東大寺の記文等を

示してゐる。)

七　月　文殊會　文殊般若經、優婆塞戒經、福報經
　　　　盂蘭瓫　盂蘭經、心地觀經、付法藏經
八　月　比叡不斷念佛　阿彌陀經
　　　　八幡放生會　梵網經、六度集經、雜寶藏經
九　月　比叡灌頂　(出典として格を擧げてゐる。)
十　月　山階寺維摩會　維摩經(出典として緣起並に雜記等を示してゐる。)
十一月　熊野八講會　賢愚經、優婆塞戒經
　　　　比叡霜月會　(出典として唐高僧傳並に靈應傳を示してゐる。)
十二月　佛名　佛名經、阿含經

此等の中には、勿論エピソードとして幾多の佛教傳説を包含してゐる。例へば藥師寺萬燈會の條に、貧女の一燈の説話があり、八幡放生會の條に、放生してやつた龜が、報恩として洪水を豫言した説話があるといふ風であつて、其が亦説話學的に貴重なのである。

佛書との交渉

本書は之を佛教傳説書として見る時、上、靈異記を承け、下、今昔物語の如きを起した中間の物として、洵に意義が深長である。殊に今昔物語の研究上、其の説話の源泉を探る爲には、之を逸し

てはならないのである。それから前に註したやうに、寺院の古い緣起類が書中に參酌してある點は、注目に値する。石淵寺緣起は、諸寺緣起集に存する法花八講緣起事（但、前半）を指してゐるらしい。又山階寺緣起卽ち興福寺緣起（昌泰三年作）には、維摩會の事が記してあるから、なるほどと首肯せられる。（天平五年の長谷寺緣起の事は、次章の長谷寺靈驗記の條に述べる。）

價値　三歸依の信念に基づいて撰述せられた此の繪詞は、佛敎が漸次國民上下の思想を支配し、且種々な法會が公然頻々として各所に營まれるに至つた平安時代の反映として出來たと見てよい。故に平安朝の世態人情を察する上には、好個の資材とせらるればかりでなく、前にも述べたやうに、文詞が純文學的價値を保有し、實質が說話集と目せられるのであるから、洵に有力な中古の一文獻である。

(4)　地藏菩薩靈驗記

地藏菩薩靈驗記　地藏菩薩靈驗記は續群書類從（卷七一八、釋家部三）（大正十三年八月刊）に收められてゐる。今見る所は三卷の

卷數　內、上と中とを存し、下を佚してゐる。然るに岡本保孝の如きは、其の完本を披閱したらしく、其の今昔物語出典攷（況齋叢書第九册）には、之を用ゐてゐる證跡がある。著者は「三井寺上座實睿編

著者　集」と誌してあるから明瞭であるが、實睿其の人の事歷は、園城寺傳記や本朝高僧傳等に何等錄せ

られてゐないのは、夙に所傳を失したのであらう。併し此の書上巻の第一話は、實睿自身の事に關するから、彼の生存年代は察知せられるのである。それは、

後一條院ノ御宇長元六年ノ比、金堂ノ中ニ於テ、破壞シタル古キ地藏ヲ見奉リ、阿彌陀ノ像ヲ造立シ奉リ、次ニ明讃上人ヲ以テ彼ノ古地藏ヲ請取タテマツリ、御手幷蓮華座等實睿修理彩色シテ、別院正法寺ニ安置シ奉リ訖ヌ。（下略）

著作年代

とある一節で、後一條天皇の長元年間の人であることを確に示してゐる。而して著作年紀は不分明ではあるが、大體から云ふと、後一條から後朱雀、後冷泉の朝に亙つた間の何れの年かに記されたものであらう。笠置の窟の藏滿房が地藏菩薩を念じ、年九十三で死んだ事を述べた中巻の第十三話に、「今ノ藏滿ガ事卽是ナリ。」と云ふ文句もあつて、撰述の當時は、此の藏滿の死を距る近い事であつたらうと思ふ。併し藏滿の歿した年代は明徴を缺くから、無論精密なことは判明しないのである。

後人の追補がある

それから一つ怪訝に堪へない事がある。と云ふのは、中巻の第十四話の如きで、此は他の條と違つて頗る長文であるが、中に「是コソ曾我兄弟ノ魂靈、父ノ爲ニ罪ヲ造リ云々」の存することで、かういふ事の含まれてゐるのは、著作年代を著しく下降せしめるのである。併し予は此の條の如き不純な文は、後人の追補であらうと想ふ。此の條などは勿論今昔物語には存しないのである。

書式文章

此の書、今見る所の書式は、片假名を用ゐ、且漢文の格（「下レ馬テ」「神通ノ功用不レ可ニ勝計ニ」の

類）を交へたものであるが、どうも今本は誤寫や脫字が多くて、善本とは許し難い。それで此の書の曖昧な個所が、後の今昔物語を見較べて、逆に了解せられると云ふ點がある。併し其の文章に至つては、さすがに多少の光彩が認められ、必ずしも文品の劣つたものではない。例へば、

件ノ童子……身ノ邊明カニシテ、月ノ薄雲ノ中ヲ出ルガゴトク恍惚タル光明アリテ……

とか、又は

鎭西肥前國背振山ハ、昔往性空上人ノ勤行ノ地ナリ。良ニ深山絕域ノ界、古仙同居ノ場ナリ。因レ之長日持經ノ行人モ不絕、六根通聲ノ仙侶モ久住シ玉ヘルトナン。

とか云ふやうな、形式美を備へた所が乏しく無いのである。

編制內容

此の書には、靈異記や三寶繪詞のやうな總序は存しない。跋の有無は下卷が接せられぬ以上、何とも分らぬ。上卷の條數は九、中卷のは十六であるが、下卷のも恐らくは十乃至二十であらう。して見ると、總體大規模な說話集では無い。併し著者實睿の身の上話から始めて、種々な說話に及び、而も地藏菩薩信仰談を以て一貫してゐるのは、法華驗記が法華經靈驗談を以て終始してゐるのと同樣であり、且法華驗記が今昔物語に攝取せられてゐるやうに、此の書も亦今昔物語に對して親子の間柄を保持してゐる。

地藏の利益

抑ゝ地藏菩薩の事は、夙に地藏菩薩本願經の如きが傳つて、其の十益、二十八益は、漸次民間の信を繫いだのである。さうして其の結果、かういふ文學の顯現となつたのであ

因果說話

る。此の書に見える靈驗の如何を檢するに、其の因緣と果報とは種々である。生身の地藏菩薩を拜さうといふ願を起して、之を果したものもあり(上卷第三話)、造像の功德を以て蘇生したものもあり(同第四話)、さういふ蘇生談に地獄巡りの事の結合せられてゐるのもいろ〳〵ある(同第八話、中卷第一話、同第三話等)。又法華經一萬部讀誦の功を遂げて、地藏の冥感に預つたものもある(中卷第六話)。一體に夢想の事が多く語られてゐるのは注目せられる。而して其の事件が著名な浮居者に結び着いて傳へられてゐるものがある。其の人は祇陀林寺の仁康房(上卷第七話)三善清行の第八子たる淨藏(中卷第二話)山王院の蓮藏房明達律師(同第四話)の如きである。是も注意すべきことである。且又其の事件が有名な寺院に關聯したものが彼是有る。六波羅蜜寺の地藏の本緣を述べたもの(上卷第二話)因幡の國隆寺の地藏の奇瑞を語つたもの(同第四話)などである。而も各條の說話は、

教義の附說

單に客觀的敍述を以てしたに止らず、多くは教義を附記してゐる。此は著者の志向を窺ふに足ることで、大に注目せられる。例へば、

凡ソ地藏薩埵、願力自在ニシテ、應機利物、廣大菩提ノ覺路ヲ啓キ、隱顯不測ニシテ、無礙神通妙用ヲ顯ス。悲智倂テ行レテ妨障ナシ。コレヲ自在ノ願トス。

と云つて、其の五種を說明してゐるが如き、「每日晨朝入諸定」の一句を、十輪經を引いて釋明してゐるが如きである。而して富士山の事を記して、著しく本地垂迹說に及んでゐることは、併せて閑

却せられないと思ふ。

價値　之を要するに、此の一部は、今本は前に述べたやうに不純の點もあつて、全部に信を置き難いが、大體は實睿が體驗と見聞とを如實に記したもので、上卷第七話の終に、「始終ノ御事コソ聞マホシケレ。予未ㇾ能ㇾ聞。唯託胎ノ一毛ヲ記シ侍ル。後代ノ人待ニ續篇ニ而已。」といふやうな口ぶりが、其の消息を傳へてゐる。併し往々參考書名を示してゐる所もある。三河入道（寂昭のこと）が夢想を蒙つて傳記した惟高の往生の事の如きである。倂、既に一言したやうに、此の書は今昔物語（特に卷十七）の資料となつたもので、其の點が最も價値を重からしめるのである。

(5) 打聞集

打聞集　打聞集は久しく埋沒して、學界未知の書であつたが、嘗て山口光圓氏が滋賀縣の古刹で探索せられた物で、昭和二年古典保存會の複製が出來た爲に、其の面目は容易に知られるやうになつた。本朝書籍目錄の雜抄の所に、（江談と古事談との間）「打聞一卷」と出てゐるのは、若しや此の本の事ではなからうかと私に考へる。今見る所は零本一卷に止つてゐるが、表紙に下帖とあるから、元、上帖

著者未詳　もあつたらう。著者は未だ詳でない。併し書寫者らしい人は想像せられる。其は表紙に桑門榮源とあるが、此の榮源が持主であるのは勿論、同時に寫手でもあつたらう。此の僧を原著者とは看做し

撰述年代の問題

難い。紙面の正誤や抹消の狀は、轉寫の迹を偲ばせるのである。又著者が未詳でもあり、文中に徵證も無いから、撰述年代も確に分らないのである。併し概略見當が附かないでもない。それは此の本は種々な反古を裏返して書いてあつて、所謂紙背文書の年紀から幾分推測し得る。それは長治、嘉承等の年號のがかれこれ有る中に、天永二年といふのが一番新しい。それで此の本を寫したのは、天永二年後餘り年代の降らない頃に違無いと共に、ざつと云ふと、原撰本は既に天永二年頃迄には出來てゐたのではなからうかと想ふ。(尤も非常に古い反古を料紙として、極めて新しい書を寫す事も無いでは無いが、其は不自然で、寧ろ稀有であらう。大抵身邊の廢紙を用ゐがちである。)而して表紙の外題と署名との間に、「或云……長承三年云々」の註記があるが、此は榮源が執筆の際に、他本から其のまゝ取つたのかも知れないけれども、大體其の年代に寫したと云ふ一證にもならう。長承三年は天永二年から二十四年目に當つてゐる。長承三年なら、勿論原本は既に出來てゐたのである。又殊に本書の漢字及び片假名の體を見、且ヲノレ(己)とか、スヘ(据)とかいふやうな假名の遣方を見ると、略平安末期の撰述若しくは書寫であることが受取れるのである。

體裁

原本の模樣は古典保存會の解說書に讓る。書式に至つては、宣命書きを用ゐて居る事が、恰も東寺本三寶繪詞や古本今昔物語のやうで、又漢文の格をも交へてゐる。例へば「遣テ使ヲ召シム」のやうである。「于今」とか「依之」とかいふ類もある。さうして語法上から觀ると、音便の語が尠く無い。

守の旁訓に「マボラウ」とあり、「ハヤウ若シヲリカウヤウノ事云ヒキ」といふ風である。

内容

次に内容に移るに、表紙の裏に目録があつて、「達磨和尚事」以下廿七條が擧げてある。本文部は目次と前後した所が少し有る。此の廿七條は大體聞書の體で、龜の放生談の如きは、或僧が物語したといふ風に書止めてある。併し必ずしもさうとは限らず、「唐僧入穴事」の終には、玄奘三藏の天竺に渡る時の記に此の由を記してゐると書いてあるのを見ると、大唐西域記を出典とした。又道丈(場)法師の說話は日本靈異記を採つたに相違無い。棄老國の說話も出典に仰ぐ所があつたであらう。それから他書との交渉は、橋本進吉氏の調(古典保存會本解說參照)に、本書の廿七條中、今昔物語に錄してあるのが二十條、宇治拾遺物語に出てゐるのが七條存するとある。本書と今昔物語との先後は妄斷を愼まなければならぬが、宇治拾遺物語の方は、或は本書を利用したであらう。

價値

要するに、現存の部分だけでは、量は多くないが、三寶繪詞や今昔物語に伍する佛教說話集として、文獻學的價値が乏しく無いのである。

(6) 今昔物語

今昔物語題號

今昔物語は「今は昔云々」との冒頭語を以てした物語集であるから、然名づけられる。元來今昔物語集と云ふ。今昔物語は寧ろ俗稱である。又古い書式を以て傳へられてゐる本は、今昔物語集に、

舊本若しくは古本と云ふ冠稱を附けて、學者間に呼ばれてゐる。それから宇治拾遺物語と稱する別名が有る。(本朝書籍目錄假名の部に、「宇治拾遺物語廿卷源隆國作」とある。)けれども今存する同名の書は、鎌倉時代となつてからの物で、此の今昔物語とは違ふ。併し交渉は有る。尚其の事は次章で述べる。又宇治大納言物語とも稱へられたが、此も現存のは全三卷の別物であるし、又續群書類從雜部所收の世繼物語も、其の宇治大納言物語と同性質の物である。其の事も亦次章で述べる。無住法師の雜談集卷九に、「宇治ノ物語」とあるのは、略稱で、正しく此の今昔物語の事である。

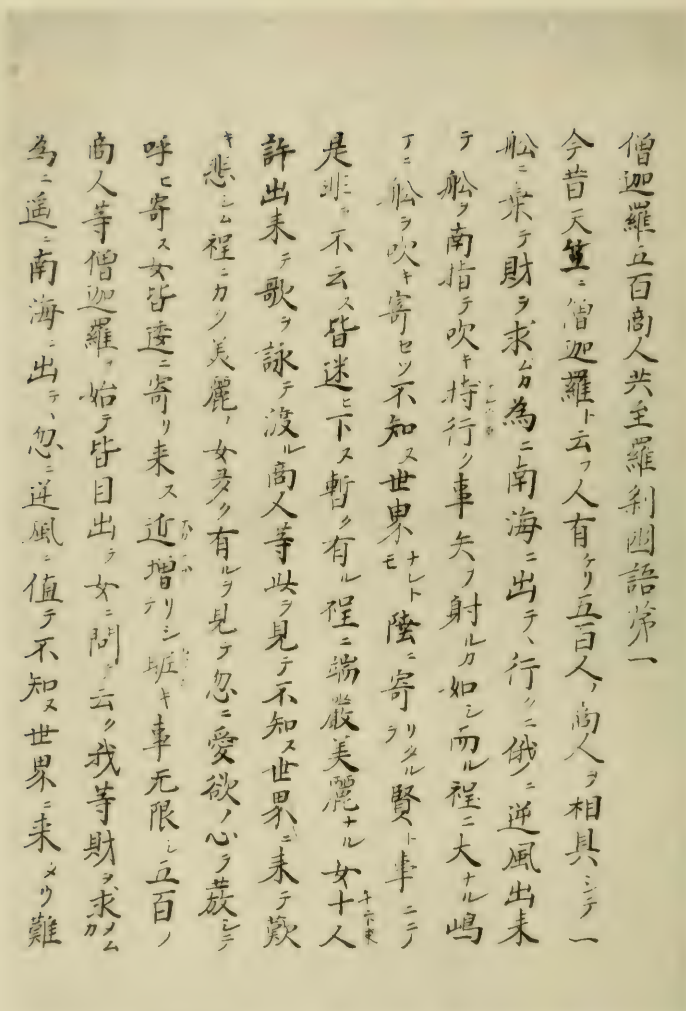
卷數

今昔物語の今本は卅一卷である。但、完本で無く、卷八、十八、廿一の三卷が今日尚缺本である。其の缺本の部分が眞に散逸したものとすると、返すぐ惜しいが、新に見出されぬ限は止むを得ぬ。

諸本

古く此の物語を刊行したのは、井澤長秀である。彼は古寫本を改正纂補し、本朝部三十卷(此は全部を六十卷とした物に據つたのである。)を享保五年及び同十七年に出版したのである。併し此は古本の面目を傳へたものではない。古本を採用したのは、丹鶴叢書本(弘化四年版)で、其の第五十一冊乃至第八十冊に、本朝部卷十一乃至卷卅一(但、卷十七、十八、十九、二十、廿一缺)を收めたのである。因みに今行はれてゐる國書刊行會本は、明治四十五年(大正元年)の出版で、原叢書本を增修したものである。原本とは距離が生じたが、古訓表や異體字表や人名索引が添へられて、便利

とはなつてゐる。明治後の出版で信憑すべき物には、國史大系本、史籍集覽本、故芳賀矢一氏纂訂本等がある。國史大系(第十六卷所收)本は明治三十四年十月出版で、天竺及び震旦部は、押小路家本を原とし、間柳原家本に據つて增訂を加へ、本朝部は主として丹鶴叢書本に基づいてゐる。卷次は一、二、三、四、五、(以上天竺部)六、七、九、十、(以上震旦部)十一、十二、十三、十四、十五、十六、廿二、廿三、廿四、廿五、廿六、廿七、廿八、廿九、卅、卅一、(以上本朝部)である。それで卷八と卷十七乃至廿一との六卷が缺けてゐる。次に史籍集覽(改定版に據る。)本は、其の第九冊に卷廿二以下卷卅一に至る十卷を收めた外に、其の第廿三冊に卷十七、十九、二十の三卷を採入れた。(明治三十四年十二月發行)此の三卷が活版に附せられたのは、最も注意すべき事である。此の部分は佐藤博士所藏本及び帝國大學所藏或祕本を以て校正が加へられてゐる。是に由つて、丹鶴叢書本や國史大系本の缺卷が補はれた次第で、其の點は永く記念してよい。次に芳賀氏纂訂本は、攷證今昔物語集と題し、天竺震旦部(大正二年出版)本朝部上(同三年出版)同部下(同十年出版)の三冊から成つてゐる。其の本文は、東京帝國大學所藏古寫本(田中賴庸舊藏)を底本とし、內閣文庫本等を參考したものであるが、史籍集覽本の如きを用ゐて、從來の缺卷を補塡してある外に、異本今昔物語(京都鈴鹿氏藏)を以て、第二卷及び第十七卷の佚文を補ひ、今昔物語卷二十別本(東京帝國大學藏)を以て、二話を補ひ、又津輕家卷子本を以て、卷十九の一話を足してあるのは、最も見る


僧迦羅五百商人共至羅刹國語第一
今昔天竺ニ僧迦羅ト云フ人有ケリ五百人ノ商人ヲ相具シテ一
船ニ乗テ財ヲ求ムガ為ニ南海ニ出テヽ行クニ俄ニ逆風出来
テ船ヲ南指テ吹キ持行ク事矢ヲ射ルガ如シ而ル程ニ大ナル嶋
ニ船ヲ吹キ寄セツ不知ヌ世界ナレドモ陸ニ寄リタルヲ賢キ事ニシテ
是非ヲ不云ズ皆迷ヒ下ヌ暫ク有ル程ニ端厳美麗ナル女十人
許出来テ歌ヲ詠テ渡ル商人等此ヲ見テ不知ヌ世界ニ来テ歎
キ悲シム程ニカク美麗ノ女共多ク有ルヲ見テ忽ニ愛欲ノ心ヲ発シテ
呼ビ寄ス女皆近ク寄リ来ヌ近増リシテ娘キ事无限シ五百ノ
商人等僧迦羅ヲ始テ皆目出テ女ニ問テ云ク我等財ヲ求メムガ
為ニ遥ニ南海ニ出テヽ忽ニ逆風ニ値テ不知ヌ世界ニ来メリ難

今昔物語集（寫本）

べき點である。其の附錄として、難訓字解と索引とがある。

古寫本

舊本今昔物語集として、群書一覽に登錄する所は、總目錄一卷、本書廿八卷、合計廿九卷で、卷一乃至卷五が天竺部、卷六乃至卷九が震旦部、卷十乃至卷廿八が本朝部としてある。併し此は缺卷の所に卷次を繰上げたもので、信用の出來ない點の有る本である。今學者間に著聞してゐる古寫本は、

内閣文庫所藏本
東京高等師範學校所藏本
帝國圖書館所藏本

などである。(東京帝國大學所藏本は大正十二年烏有に歸したから、こゝには載せぬ。)尙予の藏する古寫一本は、卷一乃至卷十六の十四冊(卷八、十三の二冊缺)で、爾餘の分は怖らく散逸したらしいが、片假名宣命書きの大本で、昌平御庫本、狩谷望之藏本、鈴木寬藏本で校合してある。昌平黌本、棭齋本は所藏者に就いて說明するまでも無いが、寬本の所藏者は、麴町に居住した一貫と號する儒士で、其の事歷は事實文編卷五十四に出てゐる。此の一部は一種の善本と曰し得る。但書寫校合をした人並に最初の所有者は、書中に手がゝりはあるが、尙確實な所をつきとめかねるのである。

著者

今昔物語は、古來作者を源隆國と傳へられる。本朝書籍目錄に、宇治拾遺物語と題して、源隆國

作としてゐるのは、今の今昔物語を指したのであらう。隆國の傳は大日本史卷百四十七に出てゐる。彼は權大納言俊賢の第二子で、長元中參議に任ぜられ、尋いで權中納言となり、正二位に叙せられた。後冷泉の朝、關白賴通の女が皇后に立たれた時に、皇后宮大夫の重職を拜した。賴通との間柄の深かつたことが想察せられる。治曆三年には權大納言となつたが、承曆元年六月十九日病の故に出家し、間も無く七月九日に七十四歲で薨じたのである。（公卿補任參照。故芳賀氏が承曆四年歿として居られるのは、從ひ難い。）彼が機智に富んでゐたと云ふ逸事が、古事談に見えてゐる。併し宇治の別莊に避暑して居乍ら、往來の人を招き、障を隔てて其の談說を聞書し、以て此の書を成したといふのは、史實としては明確で無く、故佐藤誠實氏は、藤原忠文が宇治の別業に請暇避暑した（此の事は江談抄第二に見える。）話と混じたのであらうと說を出して居られる。此の大部な卷册が到底避暑旁〻の執筆位な物で無いのは、常識上明白である。それはともかく、坂井衡平氏の如きは、隆國著作說を信憑するに足りないとする意見を立てて居られる。

尙、隆國に安養抄十卷の著のあつたといふ事は、彼の佛教的素養の如何を考へる資となる次第であるし、又例へば大雲寺緣起を見ると、圓生樹院（本尊阿彌陀）や尊光院（丈六阿彌陀）は隆國の建立であると傳へられてゐる位だから、彼の信仰的生活も推測せられる。此は從來文學史家の口にしない事實であるから、特筆して置く。

隆國著作説が動搖を來してゐる今日では、此の問題は新史料を得ない限、積極的な究明は洵に困難である。又かゝる浩瀚な書が一人一時の作か、後人の増修は無いかといふやうな問題もあるが、大體の見當としては、佛學の素養があつて、博く漢籍國典にも通じて居り、而も世故に長けた學究的な人の所爲である事は推察せられる。而して著作の動機を見ても、單に諸説話を蒐集するといふだけでなく、やはり世道人心の爲を念頭に置いて居るので、夫の靈異記の景戒が、諸惡莫作、諸善奉行の道念を勸めた趣旨が、こゝにも繼承せられてゐる。例へば卷二十の最末話たる能登守依ニ直心一息レ國得レ財語の結語の、

……此レヲ得タル他ニ非ズ國ノ内ノ佛神ヲ懃ニ崇メ國ヲモ吉ク治メテ民ヲモ富バシ我レヲモ富テ亦此(カク)思ヒ不レ懸ヌ財ヲモ得タル也ト喜ブ事无レ限シ亦心ノ直キガ至セル所也其ノ後ハ彌ヨ國ノ政ヲ直ク行ヒテ佛ヲ貴ビ神ヲ崇メ人ニ情ヲ當リ民ヲ哀レムテゾ有ケル然レバ國司ハ國ノ内ノ佛神ニ吉ク仕リ道理ヲ可レ政キ也トナム語リ傳ヘタルトヤ

の如きを讀んで見ても、此の傾向は容易に了解せられるのである。

組織及び内容

本書は前述の如く、天竺(印度)震旦(支那)及び本朝の三大部を以て成つてゐる。而して天竺部は卷一から卷五迄であり、震旦部は卷六から卷十迄であり、(内卷八缺)本朝部は卷十一から卷三十一迄である。(内卷十八、廿一缺)天竺震旦兩部が五卷づゝ一纏めになつてゐる割合から見ると、本朝部は卷冊が頗る多い。併し其も佛教、國史、世俗といふやうに略(ほゞ)類別がしてあつて、編制に心の用

ゐられてゐる事は分るが、卅一卷を以て確に完結したものか。或は其の次の卷々がもつと有つたのか。其の邊の事は遽に斷ぜられぬ。今、纂訂本に據つて各卷の概要を示さうと思ふが、先づ念の爲に、說話數や缺文の有無等を一括して揭げよう。

卷次	說話數	備考
一	三八	第廿話、第廿四話は本文缺。
二	二五	國史大系本の如きは、此の卷が卷三となり、次の卷三が卷二となつてゐる。又今は異本に據つて、此の卷の第二十五話の逸文以下、第四十一話迄が補はれる事となつた。隨つて總數四十一となる。
三	三五	
四	四一	
五	三二	
六	四八	
七	四八	第卅三話乃至第四十話は、目次も本文も缺。
八（缺本）		
九	四六	

一〇　四〇

一一　三八　第十七話、第十九話、第卅三話、第卅四話、第卅七話は本文缺。

一二　四〇

一三　四四

一四　四五

一五　五四　條數の多い卷の一つである。

一六　四〇　第四十話、本文缺。

一七　五〇　元第四十三話以下は本文が缺けてゐた。今は異本で略之を補ひ得るに至つたのである。

一八（缺本）　國書刊行會本に曰く、「丹鶴本、黑川本、田中本、大系本並ニ缺冊、與清本卷十八、平維衡同致賴合戰蒙レ咎語第十三以下十四章ヲ收メ、丹鶴本ハ第廿三ニ此ノ十四章ヲ收メタリ。而テ黑川本、與清本共ニ卷廿三ヲ缺ク。」と。與清本の卷十八は卷次から推して不自然と想はれる。案ずるに、本來此の卷は、前後の關係上やはり佛法の說話であらう。併し其の種目は容易に忖度せられぬ。

一九　四四　第十五話、第卅四話は本文缺。

二〇	四六	第八話、第十四話は本文缺。別本で他の二話を補足すると、總敎四十八となる。
二一（缺本）		佛敎傳說は上の十卷で纏つてゐるらしいから、此の卷からは、恐らくは國史部か何かであらうと想ふ。
二二	八	此の卷の說話數の少いことは、注意を要する。初から此だけで獨立した一卷とも考へられぬ。次の卷廿三に本朝附大織冠と標した本があつて、而も大織冠の條は卷廿二に在るのを思ふと、廿二、廿三の兩卷は元來同一の卷であらうといふ考は無理も無い。故佐藤誠實氏は右の兩卷を併せて卷廿二とし、卷廿八を繰上げて卷廿三とする說である。
二三	一四	今見る所は卷首が約半分缺けてゐる形であつて、平維衡同致賴合戰蒙レ咎語第十三から第廿六話迄存する。
二四	五七	是も條數の多い卷である。第十二話、第十七話は本文缺。
二五	一四	第八話、第十四話は本文缺。
二六	二四	第六話は本文缺。
二七	四五	
二八	四四	

二九　　四〇　　第十六話は本文缺。
三〇　　一四
三一　　三七

右に示した說話數の總計は一千五十一（異本、別本では更に十八を加へ得る。）である。次いで各卷の概要に移らう。

卷一、釋迦の事歷を述べた說話を根幹としてゐる。卽ち降胎、出胎、納妃、出家、苦行、成道、說法の順を逐うて列載してゐるが、提婆達多奉レ諍レ佛語の如きに、宣傳中のコンフリクトが見えるに拘らず、世人の歸依を得た狀況が、仙道王詣ニ佛所ニ出家語や須達長者造ニ祇薗精舍ニ語や貧女佛供ニ養糸ニ語の如きに著しく、佛德が漸次無量無邊なるを致した事に及んでゐる。

卷二、佛の父淨飯王の死、佛の母摩耶夫人の昇天の說話から始め、多くは佛の乞食修行中の出來事で、諸の比丘や長者に關する說話である。

卷三、淨名居士、文殊菩薩の事を始めとし、佛弟子たる目連、舍利弗に關する說話があるが、禽獸說話も幾分交り、又因果應報の說話もかれこれ入つてゐる。而して終に佛入涅槃の說話が數條有る。

卷四、總目錄に佛後とある。佛入涅槃後の事が多い。大小乘經結集の事から、阿育王の事、優婆

崛多(羅漢)の事、龍樹菩薩の事、無着世親二菩薩の事等があるが、中に三寶歸依の利益談、觀音や藥師の靈驗談の如きが這入つてゐる。

卷五、總目錄に佛前とある。雜多な民間說話の集めてある部分で、頗る意義が有る。禽獸の報恩談の如きも交つてゐる。一角仙人の說話とか棄老國の話とか皆此の卷に在る。師子哀ニ猿子一割レ肉與レ鷲語の如きは、佛傳中に入つた本生說話であつて、其の發生は固より古いに違無い。天竺狐借ニ虎威一被レ責發ニ菩提心一語や龜爲レ猿被レ謀語などは、禽獸童話（Tiermärchen）として最も能く我が國に弘つてゐるものである。

卷六、總目錄に佛法とある。震旦秦始皇時天竺僧渡語、震旦後漢明帝時佛法渡語、震旦梁武帝時達磨渡語を始め、玄奘三藏の渡天の事、善無畏三藏の胎藏界曼陀羅を渡した事、金剛智三藏の金剛界曼陀羅を渡した事等種々高僧の事蹟に及び、而して造像、寫經の功德談の如きを交へてゐる事が多い。それで支那に於ける佛敎渡來史と見てよい。

卷七、是も亦前卷に引續いて佛法である。唐玄宗初供ニ養大般若經一語を始めとして、寫經、讀經の功德談が多く、金剛般若經を聽聞した鴿が、人に生れ變つた輪廻轉生の物語もあり、仁王般若經の威力で旱天に雨の降つた話もある。經典では右の外に、法華經に關するものが頗る多く、第十四話以下約二十條に及んでゐるのは、注目せられる。漢土に於ける佛法流布の狀勢は、此の一卷でも

察知せられる。

巻九、總目錄に孝養とある通、巻首の方には主として孝子傳を列載して居て、流石に支那說話として獨得のカラアを帶びてゐる。即ち震旦郭巨孝㆓老母㆒得㆓黄金釜㆒語、震旦孟宗孝㆓老母㆒得㆓冬笋㆒語、會稽州楊威入レ山遁㆓虎難㆒語、震旦韓伯瑜負㆓母杖㆒泣悲語等である。それから巻末の方過半は因果說話で、殺生の惡報談があり、地獄巡りの話がある。此の邊は冥報記から採つたのであるから、我が日本靈異記を讀む場合と同じ感じがする。

巻十、總目錄に國史とある位で、全く史話であるが、併しやはり史實を主眼としたので無くて、傳說を採集するに努めたのである。初に秦始皇の事を載せ、次いで漢高祖の事に及び、次第に張騫の事、王昭君の事、上陽人の事、楊貴妃の事といふやうに、文學上のフェボリット サブゼクトに移り、又轉じて孔子や莊子の逸話に移り、更に仙術談、武勇談から、種々な世俗談を列ねてゐる。中に長安女代レ夫達レ枕爲レ敵被レ殺語や聖人犯レ后蒙㆓國王咎㆒成㆓天狗㆒語や嫗毎レ日見㆓卒堵婆付㆒レ血語や於㆓海中㆒二龍戰獵師射㆓殺一龍㆒得レ玉語のやうな注目すべき說話に富んでゐる。

巻十一、總目錄に佛法とある。聖德太子於㆓此朝㆒弘㆓佛法㆒語を始めとして、行基菩薩の事、役優婆塞の事等から、婆羅門僧正の天竺から來朝した事、鑑眞和尚の震旦から渡來して戒律を傳へた事に移り、更に弘法大師、傳敎大師等の事蹟に及び、それから東大寺、山階寺、元興寺、大安寺、藥師

寺、西大寺、法華寺、天王寺以下高野山、比叡山等の著名な大寺院の建立の事を、必ずしも年代順に從はずして列叙してある。それで此の卷は我が國に於ける佛法傳播史とも見得るもので、恰も卷六が支那に於ける佛教渡來史の觀を呈して居るのに似てゐる。

卷十二、此の卷も佛法とある。初に造塔の說話が二個條あり、次に山階寺の維摩會以下、藥師寺の最勝會、東大寺の華嚴會等著名な法會の來歷を語つたものが八個條程あり、更に次ぐに造像の話、佛助を得た話、經典の奇瑞談、諸上人の逸事等を以てしてゐる。中にも關寺駈牛化㆓迦葉佛㆒語や多武峯增賀聖人語や書寫山性空聖人語など、注目すべき說話が乏しくない。

卷十三、此の卷も佛法。初に苦行談があるが、主に持經者や讀經者の說話で、法華經の功德に關するものが多きを占めてゐる。法華讀誦の爲に蛇難を免れたとか、盲僧の兩眼が開いたとか、又源尊といふ僧は冥途に行つたが、法華を讀誦して蘇生したとか、又法華を誦してゐた或女人は、一旦絕命した間に淨土を見、さうして甦つたとか云ふ類である。概して卷七と似寄つてゐる。

卷十四、是も亦佛法。前卷に引續いて殆ど持經、寫經の功德談を以て終始してゐる。經典の方から見ると、法華に關するものが過半であるが、心經、金剛般若、仁王、方廣の如きもあり、又特に陀羅尼には、尊勝、千手がある。經文の功力（クリキ）として、前生を知ると云ふモーティーフのものが十條以上もある。謗法の爲に惡報を得た話もある。立山地獄の話の存する事も注目に値するし、地獄巡

りの話もかれこれ有る。紀伊國道成寺僧寫ニ法花ー救レ蛇語の如きは、此の巻に存する。それで此の巻などは殊に佛教思想の民間に浸潤した模樣を知る好資料たるものである。

巻十五、是亦佛法。而も悉皆往生談の列載である。往生人は有德の僧があり、尼があり、善男があり、善女があつて、道俗に亙つて居る。又往生の因緣も、經文讀誦とか、佛供養とか、樣々であるし、往生した所も、極樂や兜率天やいろ／＼である。元興寺の智光、賴光二人の事から、比叡山の千觀内供、賀古の沙彌敎信、義孝少將の事等が、皆此の中に存するのである。

巻十六、是亦佛法。悉皆觀世音菩薩の靈驗談である。觀音の靈場から云ふと、成相寺、清水寺、石山寺、長谷寺等で、就中清水や長谷に關するものは、數條有る。又觀音の種類から云ふと、單に觀音とのみ有るのが多いが、〔正、聖〕觀音、千手、十一面などと特記せられてゐるものがある。觀音の利益(リヤク)もいろ／＼で、命を助けられたもの、富を得たもの、蛇難を免れたもの、賊難を遁れたもの、若しくは瘂者が口が利(キ)けるやうになつた話、盲人が眼が開いた話といふ風であるが、此は一面に於て法華經普門品第二十五の弘通した世相を反映してゐる。中に仕ニ觀音ー人行ニ龍宮ー得レ富語の如き、龍宮說話として閑却せられないものがあり、備中國賀陽良藤爲ニ狐夫ー得ニ觀音助ー語の如き、狐の變化(ヘンゲ)說話として注目すべきものがある。

巻十七、是もやはり佛法に關する。概して地藏菩薩の靈驗談が多きを占めてゐるが、巻末の方に

は、虛空藏菩薩、普賢菩薩、毘沙門天の事もあり、闕文の所には、標題に依つて、吉祥天女の事のあるのも分る。地藏菩薩變ニ小僧形ニ受レ箭語、東大寺藏滿依ニ地藏助ニ得レ活語、說經僧祥蓮依ニ地藏助ニ免レ苦語といふやうな說話が相次いでゐるのである。

卷十九、是亦佛法。初から第十八話の邊迄は、主に發心談であるが、其以下は因果說話其の他の雜談である。發心談では、良岑宗貞、大江定基、慶滋保胤、源滿仲、大齋院などの出家の因緣を叙述したのが相列なつてゐる。因果說話では、以ニ佛物餅ニ造レ酒見レ蛇語、龜報ニ山陰中納言恩ニ語の如きがある。後者は殊に著名な說話で、禽獸の報恩談であり、又繼母傳說でもある。

卷二十、此の卷も亦佛法。初の十條餘は天狗說話で、野猪、野干の話が之に次いでゐるが、更に冥途に行つて還つた話が數條有り、それから因果說話に移つて、惡業に因つて惡報を得た話が頗る多く、終には善因で善果を得たものも併せ載せてゐる。天狗說話では染殿后爲ニ天狗ニ被ニ嬈亂ニ語が著名である。又尼天狗といふのがあるのは頗る珍奇である。惡業の惡報談では、僧にして牛となつたものや蛇となつたものがある。惡業も固より種々で、嫉妬、慳貪等佛敎の禁戒する所の事柄である。善因善果談では、能登守依ニ直心ニ息レ國得レ財語の如きがある。

卷廿二、此の卷は藤原氏に關する事柄で、大織冠始賜ニ藤原姓ニ語から淡海公、房前大臣、內麿大臣、冬嗣右大臣以下時平大臣の事迄に及んでゐる。

卷廿三、多くは强力者（女もある。）の說話で、相撲人に關するものが數條存する。相撲人私市宗平投二上鰐一語の如きである。

卷廿四、總目錄には世俗と標してある。此の卷は藝能傳說を以て充ちてゐる。音樂談、醫術談、陰陽談、詩談、歌談等いろ〳〵で、殊に歌談は第卅一話以下を占めて、全體の半に近い。而して世相から見て、陰陽道盛行の模樣が能く分る。又それ〴〵藝能を勵んだ所から、術競（クラベ）の行はれた狀勢も察せられる。卷中著名な說話は、百濟川成飛驒工挑語、源博雅朝臣行二會坂盲許一語等である。

卷廿五、是亦世俗とある。將門や純友の事から始つてゐるが、源氏の祖先に關する武勇傳說のグループが主となつてゐるのが、注目に値する。春宮大進源賴光朝臣射レ狐語、藤原保昌朝臣値二盜人袴垂一語、源賴信朝臣男賴義射二殺馬盜人一語、源賴義朝臣罸二安陪貞任一語などが此の中に在る。

卷廿六、總目錄に宿報とある。併し宿命思想も表面佛教的色彩が淡泊となつてゐる。卷中主要な說話は、美作國神依二獵師謀一止二生贄一語、加賀國諍二蛇蜈一島行人助レ蛇住レ島語、參河國始二犬頭糸一語などで、說話學的意義の豐富なのを見る。

卷廿七、總目錄に靈鬼と標してある。鬼類、變化（ヘンゲ）を怖れた俗間の迷信の察知せられる一卷で、川原院に融左大臣の靈が住んでゐる話や、近江の安義橋の鬼女の話は有名なものである。鬼には種々な形相のものがある。卽ち板となつて現れたのがあるし、油瓶の形となつて踊り步いたのもある。

るが、婦女に化けたのが普通である。

卷廿八、此は卷廿四、廿五と同樣に世俗とあるが、種々な滑稽談が列載せられてゐる。賴光の郎等共が紫野に車に乘つて行つた處、搖られて醉つたといふ話を始め、池尾の禪珍と云ふ鼻の長い僧の話などがある。いろ〳〵な失策が笑ひぐさとなつてゐるのが多い。

卷廿九、總目錄に惡行とある。大部分盜人の說話である。羅城門登ニ上層一見ニ死人一盜人語のやうな鬼氣人に迫るものがあり、袴垂於ニ關山一虛死殺レ人語の如き奸猾な巨盜談もある。終の數條は禽獸傳說(Tiersage)で、虎、狗と蛇、鷲と蛇、鷹、猿、蜂、蜂と蜘蛛といふやうな話が相次いでゐる。

卷三十、總目錄に雜事とある。人情傳說が多きを占める。平定文と本院侍從との事、蘆刈男の話など、男女の間柄に關するものがかれこれ有るが、信濃國姨母弃山語や人妻化成レ弓後成レ鳥飛失語のやうな趣の變つた說話も交つてゐる。

卷卅一、前卷に引續いて雜事とある。橋供養の事とか、還俗談とか、夢見の話とかいろ〳〵であるが、胡國に行つたり、度羅島に到つたり、酒泉鄉に行つたりした話や漂流譚のあるのは、殊に注目すべく、其の他竹取翁の話、大和箸墓本緣、近江の巨木傳說(木は柞である。)等も交つてゐる。

出典　右の如く、本書は規模が廣大で、說話の種類は多樣であり、且其の數も頗る多い次第であるが、大

中は其の源泉（Quelle）を資料（Dokument）に仰いで居る。勿論本朝部の或種の物は、所謂街談巷語に基づいたと想はれるけれども、概して原典の翻譯若しは書直しの部分が、多きを占めるのである。それで夙に此の問題に心附いたのが岡本保孝であり、之を大成しようと企てられたのが故芳賀矢一氏である。今此等の研究に徴しても察せられるやうに、先づ天竺部の五卷は、各種の佛典から採つてゐる。其も一々の原典から直接得て來たのもあるに相違無いが、類聚的佛書から間接に得たのも亦多いであらう。類聚的佛書とは、梁沙門僧旻、寶唱等奉勅撰の經律異相五十卷や唐西明寺沙門道世撰の諸經要集二十卷並に法苑珠林百二十卷の如きである。例へば卷五の一角仙人の說話は大智度論卷十七に出てゐるから、原典に就いたとすれば、該書が資料であるが、又法苑珠林卷八十八欲蓋篇に大智度論を引抄してゐるから、間接に採つたとすれば、法苑珠林が資料であるわけである。それで原典から觀ると、佛陀傳の如きは、因果經や佛本行經に交渉を有し、其の他の諸說話も雜譬喩經、撰集百緣經、賢愚經、雜寶藏經其の他に關係してゐるのであるが、之を研究上の便宜を以て逆に言ふと、前述の法苑珠林のやうな間接資料を利用して、此の天竺部の出典を探究する時には、大抵は用を辨じ得るといふ次第である。次に震旦部の四卷（內一卷缺）も大體出典に徴せられるもので、初の二卷は特に佛敎に關してゐて、神僧傳、三寶感應要略錄、冥報記などが原典である。中には法苑珠林所載のものもある。卷九の孝子傳說は、孝子傳や或は搜神記、世說のやうな說話集か

ら得たであらうが、是亦法苑珠林所載のものもある。末の方の因果說話に至つては、冥報記が原典であらうが、やはり法苑珠林に基づいたものもあるやうである。地獄巡りの說話も同書に見える。而して卷十の初の史談は、史記、漢書の類が原典であるのは勿論で、次の文學的說話に至つては、白氏文集から出た物がかなり有り、孔子や莊子の事は、莊子、說苑の類が出典であり、終の方の諸說話の如きは、列女傳、韓非子、淮南子等いろ〳〵な資料を用ゐてゐる。中には往々今以て出典のはつきりしないのもある。それから卷十一以下本朝部では、卷十一乃至二十(內卷十八缺)が佛敎傳說であつて、其の出典は日本靈異記を最第一とする。同書は殆ど大部分本書に採込まれてゐる。又三寶繪詞の諸大寺の法會に關する諸條の如きは、本書卷十二の初の方と著しく交涉を保つてゐる。卷十三、十四、十六には法華驗記を出典としたものが多く、卷十五の往生談は、日本往生極樂記に基づいたものが種々有り、卷十七には地藏菩薩靈驗記を材料としたものが多い。其の他古寺の古緣起類で、本書のクヱルレとなつてゐるものもある。特に卷廿二以下の國史、世俗等の部に至つては、芳賀氏の攷證にも見える如く、確に典據の認められるのもあるが、別に其の際立つて著しくないのもある。出典の不明なのは、不明なのが却つて當然で、口碑若しくは坊間の雜談から得來つたのが尠く無いといふ事情に因るわけである。例へば、卷十二第十八話は、「古老ノ傳ヘヲ以テ語リ傳ヘタルトヤ。」とあり、卷廿七第廿六話は、「此レハ河內禪師ガ語リシ也。」とあり、同卷第卅六話は、「然テ男ノ

京ニ上テ語ケル間繼テ此ク語リ傳ヘタトヤ。」とある類である。たゞ此の出典研究で注意すべきは、典籍相互の親子關係の問題である。果して今昔物語以前の書か、それとも以後の書か、著作年代の不確實な物は、容易に出典とは看做されないのであるから、此の方面の研究は特に慎重に行はれなくてはならぬのである。

説話學的考察

次に本書は之を説話學的に觀ると、印度説話、支那説話並に日本説話の一大結集で、先づ佛陀傳を以て始つてゐる事は、順序として至當であるが、そこに自ら興味が有る。佛の一生は、史實と云ふよりも、幾多傳説的要素の添加せられてゐる點に、却つて説話學的の見所が存するのである。例へば其の降胎の事情が、摩耶夫人の夢見に因る神秘的な事、又其の出胎にしても、夫人の右脇から生れ、大光明を放ち、天人が手をかけて七歩を行ぜさせると、足を擧げる所、蓮花が生じたといふやうな奇瑞、凡そかう云ふ希有の事を語るのは、印度説話の最も得意とする所で、之を十二部經の一として未曾有經と云つてゐるのである。さう云ふ神話的叙述は、更に輪廻轉生の思想と結合して、摩訶不可思議な因縁談を構成してゐる。それが闍多迦（Jataka）即ち本生經である。一體古代の印度人は、無比の話好きで、種々な民間説話を持つて居つたが、此の本生説話の一類は、其の最も顯著なものである。本書卷五の師子哀ニ猿子ヲ割キ肉ヲ與ヘ鷲ニ語は、民間説話が佛傳中に取込まれたプロセスの明に知られるものである。同卷の一角仙人の説話も、一角仙人は佛自身で、婬女は耶輸陀羅であ

るといふ本生談となつてゐるが、一角仙人の說話自體は古傳說であらう。前生は何々で、それが現身の何々だと云ふ因果談は、善因が善果を生み、惡因が惡報を來すといふ倫理的觀念を作なふから、之を說法の用に供するのは當然で、利益談や靈驗談や報恩談が多いのである。報恩談は禽獸に關するものがある。禽獸說話も譬喩に富み、寓話に長じた話好きの古代印度人獨得の物とも云へる位で、本書卷三、卷五にいろ〳〵見えてゐる。彼のパンチヤタントラ（Pantschatantra）卽ち五卷書や、其の略鈔と云ふべきヒトパデッシヤ（Hitopadesa）卽ち嘉訓として、歐羅巴に弘通し、エーソップを生むに至つたものが、一方には佛典の漢譯によつて東遷し、遂に此の今昔物語に這入つたのである。印度說話の支那へ、更に日本への東漸は、說話の比較硏究上頗る興味が有る。

震旦部及び本朝部の佛敎傳說は、大體に於て印度說話とタイプを同じうしてゐる。幾多の高僧傳も往生傳も、畢竟するに、佛陀傳をオリジンとして、模倣、潤色の迹の著しいものであり、種々な靈驗談、功德談乃至惡報談も所詮はティピカルの物である。

支那說話の史話や孝子傳は、彼土の特有のカラアが存するが、夙に漢學の行はれた我が國には、能く傳播し、浸潤した。況や白樂天の作による文學的說話の如きは、最も能く消化せられて、平安朝の文學を培養する資となつた。

本朝部の世俗談は、民間說話の寶藏の如く、實に特殊の興趣を蓄へてゐる。卷廿四の藝能傳說、

卷廿五のヘルデンザァゲ、卷廿七に見える迷信關係のもの、卷廿八の滑稽に富んだ說話、卷三十の人情傳說等、我が國民にして之を生み、我が國情として始めて意義が有るといふ種類の說話が多い。個々の說話に十分研究の價値の有る物が尠からぬのである。我が歷史と時代と人情とが醉母となつて、釀し成された日本說話には、亦自ら世界說話に比照して、際立つた點の存することは、閑却せられないのである。

文章

本書の文章は、佛語や漢語を交へた國文體で、各條「今ハ昔云々」と起して、「何々トナム語リ傳ヘタルトヤ。」と結んだ敍事文で、文種は Narrative であり、Story である。舊本は之を行るに、宣命書きの書式を以てしてゐること、丹鶴叢書本や纂訂本の如きで、此がテッキストのプロートタイプ若しくは其に近いものと思はれる。國史大系本風の書式は、假名の細字を大きく、書き下しにしたので、原文の書式の一轉したものに相違無い。扨前にも述べたやうに、今昔物語の著者は、佛典や漢籍の原文を國文化するに努めたものが多量であるが、其の程度は如何であるかと云ふ事は、一考しなければならぬ。此の問題は兩々對照吟味の結果、大體自由譯であると答へ得る。其は逐字譯で無く、筋を傳へ、意を採つて、トランスリテレートしたもの と見る事が出來る。卷四の天竺人兄弟持レ金通レ山語は、大智度論卷二十二に出て居る(法苑珠林は卷九十四、十惡篇慳貪部に引く。)が、其の

今昔天竺ニ兄弟二人ノ人有リ共シテ道ヲ行ク間各千兩ノ金ヲ持タリ山々ヲ通テ行ク間兄ノ思ハク我レ弟ヲ

殺シテ千兩ノ金ヲ奪取テ我ガ千兩ノ金ニ加ヘテ二千兩ノ金ヲ持タムト思フ弟ノ亦思ハク我レ兄ヲ殺シテ千兩ノ金ヲ奪取テ我ガ千兩ノ金ニ加ヘテ二千兩ヲ持バヤト思フ……

の如きは、原典では、

譬如下有ニ兄弟二人一。各擔ニ十斤金一。行ニ道中上。更無ニ餘伴一。兄作ニ是念一。我何以不ニ殺レ弟取レ金。此曠路中。人無ニ知者一。弟復生念。欲ニ殺レ兄取レ金。……

といふ風で、そこに幾らかの距離がある。其の他種々の例に徴しても、大抵同樣である。次に文體一般に就いて略述するに、文章は概して光彩の目立つものが少く、何となく素樸な所がある。之を源氏物語や榮華物語に比すると、形式美の有無が殊に著しい。其は此の文と雖も、其の修辭上、繰返（Repetition）や詠嘆（Exclamation）の如きエムファティックな詞遣なども少からず交つてはゐるが、人を動かす程の力は乏しい。强ひて艷を消したと云ふでも無い。と云つて、全く乾燥になつてゐるでも無い。平安末期に生じた一のスタイルである。榮華物語のやうな文體と、平家物語のやうな文品との中間のトランジションに立つてゐる觀がある。併し敍事文として、事件の層々進轉するムーブメントの工合は、此の文章で何等間然する所は無いと認める。又之を語法上から觀ると、短いセンテンスを多く疊み重ねてゐるのが目に着く。

今昔百濟ノ川成ト云フ繪師有ケリ」世ニ並无キ者ニテ有ケル」瀧殿ノ石モ此ノ川成ガ立タル也ケリ」同キ御

堂ノ壁ノ繪モ此ノ川成ガ書タル也』

といふ風で、かういふ書きぶりが、伊勢物語式であるので、ナイーフな感を起させるのである。それから文中の對話(ダイアログ)の所は、語彙が殊に當時の俗談に近いものと想はれる。卷廿八の諸話を一讀すると、それが能く分る。尙、係結の語法で、「ぞ」の係のもあるが、「なむ」の係のが頻々と用ゐられてゐるのは、此の書の一特徵である。

價値

之を要するに、本書は勿論創作的純文學では無いから、作品としての評價は高く無い。併しながら前にも縷述するやうに、一大說話集たる點に、國文學史上獨得の地步を占有するのである。靈異記や三寶繪詞や大和物語を先驅とした說話文學界が、こゝに本書を得て、幅も擴り、深さも增して、豐富になつたといふ事を、いつ迄も記念しなければならぬ。さうして此が機緣となつて、鎌倉時代に宇治拾遺物語、古今著聞集等大小幾多の說話集を起したのである。我が國の空前にして又殆ど絕後とも謂ふ可き今昔物語こそは、之を世界の屈指の說話文學と比肩せしめても、必ずしも遜色のあるものでない事を誇とするのである。

(7) 其の他の諸書

以上の六書は、規模の大小の差こそあれ、大體純粹の說話文學書であるが、尙說話文學たる部分を

含み、且後の說話文學書に對して源泉たる地位を占める諸書を一括して考究すると、次のやうである。

江談抄
撰者及び撰述年代

江談抄六卷（本朝書籍目錄には、六卷と擧げ、別に又三卷とも示してゐる。）は、雜抄とか抄物とか稱すべき性質の書で、群書類從雜部（卷第四八六）に入れてある。右の書籍目錄に、江匡房としてあるが、大江匡房は話手ではあるが、同時に編者とは考へられぬ。此の問題に心附いたのは、黑川春村で、其の碩鼠漫筆卷十一に、今鏡の第十打聞（敷島の打聞）の「藏人實兼ときこえし人の、匡房の中納言の物語にかける文にも云々」を證として、實兼の聞書であらうと云ふ有力な說を出した。春村は此の實兼を中納言惎長の嫡男と考へたが、それは季綱の子、通憲（信西）の父といふ方がよからう。併し撰述年代に就いて、中右記の嘉承二年三月卅日の條を引證して、長治、嘉承の交の作とした春村の說は、傾聽してよいと思ふ。

體裁

此の抄は大抵何々の事といふ題を設け、「被ㇾ命云」とか「被ㇾ談云」とかの冐頭を置いて筆錄し、又「予問曰」「答云」と問答式でも書取つてゐる。中には題だけあつて、本註の缺けた所もある。文章は記錄體の漢文に、往々假名文を交へてゐる。

內容

六卷の第一は公事、攝關家事、佛神事で、第二と第三とは雜事である。第四は標題が缺文であるが、第五が詩事とある、それと同樣らしく、第六は長句事である。雜事の卷の如き、整然たる類別は無いが、似寄つた事柄は並べてある。此の第二、第三の雜事は勿論、第五の詩事の如きも、著し

く傳說的で、此の點が特に近古の說話文學に資材を提供したと云ふ關係を持つのである。鬼を信じたり、生靈を怖れたり、又百鬼夜行に會つたとか、星まはりがどうであるとかいふ迷信、隨つて佛神を憑む、尊勝陀羅尼を尊むといふやうな空氣は、書中に充ち滿ちてゐる。

無名抄

無名抄二卷は源俊頼の著した和歌髓腦書である。國書刊行會編續々群書類從歌文部に編入せられた物や歌學文庫本の如きが世に行はれてゐる。題號も實は區々であつて、或は山木髓腦、或は俊秘抄、或は俊頼口傳集などとも稱せられてゐる。此の書の實質は、歌體の解說、歌病の論、作歌の要諦等を主としたものであるが、十分組織的にはなつて居ない。其等の事は既に拙著國文學研究史に詳述した。

古歌の俗傳

扨茲に問題とするのは、此の書が說話文學に交渉を有する點である。此の書に古歌を擧げて居るものを見ると、著しく俗傳を信じてゐる傾向がある。此は當時の思想界が、さう云ふ方面を迎へてゐた證ともなるのである。例へば飢人實は文殊師利菩薩の歌であるとか、住吉や三輪や貴船の明神の御詠であるとか云つて、種々な歌を書き列ねてゐるのは、和歌の德が、佛神を動かして納受せられると考へたばかりでなく、「凡歌神佛も御門后より始たてまつりて、あやしの山がつにいたるまで、その心あるものは、みなよまざるなし。」と、神佛を歌詠み仲間に入れてしまつたといふ所に、時代の風潮が見えるのである。

歌物語

貫之と蟻通の明神との事や蟬丸の逢坂の侘住居の事や、皆歌物語としての興味から、書中に並べられてゐるので、歌學書とは云ふものゝ、著しく說話文學の要素を含

古歌の故事

んでゐるのである。而も野守鏡以下古歌の故事を解釋した百餘項は、歌物語として色彩の濃厚な部分で、說話研究上忽諸に附すべからざるものである。卽ち今昔物語の如きを考察する上には、比較の用に供せられなければならないのである。今此の書の述べ方を單に形式上から見ても、「昔人子を二人もちたりけり云々」とか、「むかし男ありけり云々」とかいふ風に、昔物語として語つてあることは、注目を要するのである。其の多數の解說中、說話文學や謠曲の如きと交渉の存するのは、野守鏡の外に、鬼のしこ草、錦木、山鳥の鏡、葛城の神(岩橋の事)、浦島、姨捨山等が著しい物である。殊

他書の傳承との異同

に興味の有るのは、往々他書の傳承と異同を認める物の存する事である。例へば姨捨山の說話は、大和物語のと小異がある。大和物語では、或男が姨を親としてゐたが、男の妻が姑と不和である。さうして男は妻に勸められて、月明に乘じて姨を山の上に捨てた。併し男は姨の恩愛が忘れられずして、「わが心慰めかねつ云々」と詠じたといふのであるが、此の無名抄の方は、敍述も單純で、筋も違ひ、姨を捨てたのは姪で、歌は捨てられた姨が山上で詠んだものとなつてゐるのである。(今昔物語の方は、大和物語から其の儘筋を引いてゐる。)

範兼の和歌童蒙抄

尙、藤原範兼の和歌童蒙抄十卷も大體俊頼の無名抄と同一系統の書で、初の九卷は分類的語釋で、終の一卷は髓腦書の體を備へてゐる。語釋中に、支那や印度の傳說に言及してゐるといふ特色がある。亦以て說話文學考究の一資料とすることが出來る。

袋草紙

袋草紙四卷並に同遺編一卷（共に續群書類從和歌部所收）は、藤原清輔の著す所で、歌學上の書であるが、亦好個の文學史料である。其の概要は既に拙著國文學研究史に於て論じたが、今大略を述べると、卷一は和歌の作法儀禮に關する事を收め、卷二は主として歌集、物語類の書史的事項を列ねてゐる。而して同卷の末から卷三、卷四に亙つて雜談に及んでゐる。此の雜談部が幾多の說話を提供して居て、後の說話文學の源泉となつてゐるから、こゝに此の書を顧みる次第である。

雜談

其の內容

雜談は勅撰集（後拾遺）に對する誹謗の事から始り、歌合に於ける歌人の榮辱談等に入つてゐる。例へば卅講歌合の時、相撲が「五月雨はみつのみ牧のまこも草刈ほすひまもあらじとぞ思」と讀んだが、其の講じ出される時、殿中鼓動して郭外に及んだといふ話や、天德歌合の時、兼盛は衣冠を正し陣に參つて終日伺候してゐたが、「しのぶれど色に出にけり我戀は」といふ己が歌が勝になつたと聞いて、拜舞して退出し、自餘の勝負に執着しなかつたといふ話が出て居る。又長能が花山院に於て三月盡を詠じた「心うき年にも有哉はつか餘こゝのかといふに春の暮ぬる」が講ぜられた時、公任が「春は卅日やはある」と難じたので、長能は其を苦にして病みつき、遂に死去したといふ話や、良暹が郭公汝(ナ)がなくといふことを長鳴と思ひ僻めて、俊綱の許(モト)で五月五日郭公を詠じた歌に、「宿近くしばしながなけ郭公けふのあやめのねにも較(タイ)べよ」としたので、懷圓が「ほとゝ鳴はじめてざすとながむるにや」と嘲哢したといふ話も出てゐる。書中の逸話の種となつてゐる歌人は、公

任、經信等から好忠、俊賴等に至り、又清輔自身にも及んで居り、女房では伊勢大輔、小式部內侍等、浮屠者流では、能因法師、惠心僧都といふやうに、かなり廣い範圍に亙つてゐる。公任の三船の名譽談の如き、旣にこゝに見えるし、能因に關する物の數條存するが如きも注目に値する。

資料

淸輔が此等歌人關係の說話を書留めたに就いては、所謂打聞物語もあつたに違無いが、種々の資料を用ゐて居る事が已に緖表に明白である。萬葉集、後撰集の如きから、貫之家集、忠見家集、檜垣嫗家集の如きに至り、中には朗詠集江註とか山科抄とか云ふやうな現存しない物が見えてゐるのである。而して江記卽ち江談抄を引用してゐる事が尠く無いのは、人をして此の草紙が該抄から感得して出來たのではないかと想はせる。其の注意すべきは、江談抄の滋藤の「漁舟火影寒燒レ浪云々」の條には、「古人語云」とあるのに、此の書には「時棟語云」と、名が現してあるやうな相違點で、此の如きは傳承の進展過程の研究上、興味有る問題である。

傳說歌

尙卷四の末に、希代歌として、神明(大神宮、宇佐、稻荷、春日、住吉、北野等)佛(佛、淸水觀音等)權化(聖德太子、達磨等)の歌を列載し、佛神感應の歌、亡者の歌等にも及んでゐるのは、傳說歌の研究資料を提供してゐるもので、此の邊は俊賴の無名抄から系統を引いてゐると目せられる。

大鏡卷册內容

次に大鏡は本朝書籍目錄假名の部に六卷と見えてゐる。併し古來八册として行はれてゐる。此の書は文德天皇から後一條天皇迄の天皇本紀と藤原冬嗣から同道長迄の朝臣列傳とから成る假名の歷

史で、包含する年代は嘉祥三年乃至萬壽二年の百七十六年間である。其の叙述の仕組に對する文學的論評の如きは、今は之を略して置くが、其の著作年代及び著者の事は數言を費して置かなければならぬ。一體が老翁の物語を筆錄したやうに出來てゐて、それが萬壽二年の事となつてゐる。然らば果して同年の著作かと云ふに、其の點に異論の挿まれる餘地が存する。なる程一見すると、例へば時平傳の中に、「今の三井寺の別當心譽僧都」の如きがあつて、心譽は萬壽二年から四年目の長元元年には權僧正となつた事が、園城寺長吏次第に見えるから、ずつと後の著作ならば僧都とは書かなかつたかも知れぬし、又伊尹傳の中に、「今の侍從大納言行成卿」といふ語もあつて、此も萬壽三年二月七日には兼按察使となり、同四年十二月四日には薨じた事が公卿補任に載せてあるから、萬壽二年の事として、其の樣に記されてゐるのは尤である。併し道長傳の中に、中宮彰子の事を「世の中の人の申すやう、大宮入道せしめ給ひて、太上天皇の御位にならせ給ひて、女院となむ申すべき云々」とあるが、此は女院小傳に見える通、萬壽三年五月十九日尼となり、上東門院と稱せられた、其の後の文章で無くてはならぬから、萬壽二年後の著作とも見える次第である。そこで故藤岡作太郎氏の平安朝文學史に紹介してある故萩野由之氏の說のやうに、萬壽二年の筆錄といふのは表面上の假裝であるといふ意見も立つのである。關根正直氏も亦其の大鏡新註に於て、三件の證を提げ、故萩野氏と同じやうに、白河天皇の御世以後に至つて出來たものと斷定して誤るまいと、ずつ

と著作年代を引下げて居られる。が、玆に一問題となるのは、原著者は何の見る所が有つて、萬壽二年で仕切つて、同四年道長の薨去迄に及ばなかつたかと云ふ一件である。是に關しては、故藤岡氏の辨がある。其は萬壽二年は道長の薨去の前々年で、漸く衰運に向つたのであるから、其の榮華を寫すとしたら、同年は恰當の獲麟の機であるといふのである。けれども此は一の推測に過ぎぬ。

私見　私に惟ふに、此の書の原形は果して如何なる物であつたかといふ事に遡つて見なければ、著作年代論も輕々しく立てられまい。今見る所の大鏡は、大體に於て古本(彰考館本、烏丸光廣書寫本の類)と流布本(古活字本以下の版本)との二つの流を爲してゐるが、古本が簡で、流布本は後人の加筆が多いとした所で、簡素な古本と雖も、尙最初の原本（Urtext)との距離の絕無を誰が保し得ようぞ。それで予は、大體に於ては萬壽二年頃の原作であつたらうが、著者の補筆並に後人の加筆の結果、次第に今見るやうな狀態になつたのであらうと考へる。例へば初の方に、太政大臣の事を大織冠から始めて申したいが、言(コト)多くなる、帝の御事も文德の御時から申したから、文德の御祖父(オホヂ)冬嗣の大臣から申さうと斷つて居るに拘らず、道長傳の中には鎌足以下の事歷が叙べてあるといふやうな矛盾がある。此ういふ現象は後人の加筆の結果と思はれる。それから卷尾の方(流布本卷八)の所謂昔物語の部分も原作では無からうと疑ふ。其の所以は旣に述べられた事の敷衍や補說が尠く無いからである。例へば賀茂の臨時の祭に於ける敏行の東遊の歌の事は、宇多天皇紀に出てゐるし、又八幡

の臨時の祭に於ける貫之の歌の事も、全く重複である。(尤も此の二件は古本の帝紀には無い。併し眞實原本に存しなかつたか、或は誰かゞ主として昔物語の方を殘し、帝紀の方を抹消するに至つたか、其の邊は容易に斷定出來まい。)

著者

次に著者の問題である。先づ普通に行はれてゐるのは、藤原爲業說である。此は尊卑分脈や本朝書籍目錄に、爲業を以て世繼作者と註してゐるので、大日本史卷二百二十五の爲業傳に、世繼卽ち大鏡と看做して、大鏡作者と定めた次第である。世繼四十卷卽ち榮華物語である以上、此の說は動搖を來すのである。そこで之に關する新說は如何と云ふに、井上通泰氏の皇太后宮大夫源道方說が出てゐる。(大鏡新註所引〔補〕井上氏の文は南天莊襍筆に在る。)此は流布本で云ふと、卷七の末に、「こゝにありとてさしいでまほしかりしか。」とある語句から感得せられ、皇太后妍子緣邊の人といふ所から來た推定說である。又關根正直氏は此の新說から更に思ひ附かれて、大鏡新註に其の道方の子の桂大納言經信說を出して居られる。

私見

此の兩新說は未だ確定的のものとは認め難いが、爲業說よりは多くのプロバビリティーを有つてゐると思はれる。なる程作者が藤原氏で無く、源氏であらうと云ふ事は、頗る有意義な見解で、殊に昔物語中の「藤氏の御事をのみ申し侍るに、源氏の御事もめづらしう申し侍らん云々」とある語氣から推量しても、宇多源氏中の誰かの筆に成つた點が存するであらうと想はれぬでもない。但し全文がさうであるとするのも早計に失しよう。要するに著者を斷定するのは、今日尙至難である。

說話文學的要素

予が茲に此の書に論及するのは、說話文學上の見地からである。此の書は前にも述べた通、天皇本紀と朝臣列傳とを主とした歷史を老翁の物語として書留めた體で、敍述の對象は史實に基づいたものである。併しながら紀傳中に說話的要素を含有する事が尠く無い。時平傳中の菅公の事蹟の如き、著しく傳說的色彩を帶びてゐる。又實賴傳中の佐理が三島の額を書いた事や賴忠傳中の公任の三船の名譽談の如き、予の所謂藝能傳說である。師輔が百鬼夜行に遭つた說話の如きも亦一種の傳說である。若し夫れ末卷の昔物語に至つては、各種の說話集で、歌物語の多い點では、大和物語式の物と目せられる。賀茂、八幡の神事に關するもの、延喜、天曆の帝の御仁德を偲んだ條々の如き畏き說話は申すに及ばず、和歌の高名に關する貫之女の鶯宿梅の事、遊女白女(シロメ)の事、躬恒の即興の事等亦藝能傳說で、白の事などは大和物語共通の談柄である。之を以て近古の說話文學を考究する上には、系統上此の大鏡も閑却せられないのである。

今鏡著者

今鏡は今本十卷で、本朝書籍目錄假名の部に十卷と出てゐるのに合ふ。著者は同目錄に何とも註してないが、增鏡の發端には「なにがしのおとゞの書き給へると聞き侍りし今鏡云々」と、朧げに言つてある。此の某大臣と云ふのに就いて、黑川春村の碩鼠漫筆に、水鏡の作者中山忠親其の人であらうと說を出してゐるが、確證を缺いでゐる。關根正直氏は、忠親の著とすると、書中自讃の言の存するが如き不似合の點が有るとして、今鏡新註に之を否定して居られる。又和田英松、故佐藤

球內氏の增鏡詳解には、日本紀私抄に長門守爲綱作と見えるといふ一說が紹介してある。(爲綱は爲隆の誤で、彌世繼の著者隆信の父であらうとのこと)是亦確據を認めないのである。唯屋代弘賢が其の校合した增鏡の序の旁註に、源內大臣通親としてゐる說が、徵證不明ではあるけれども、當つてゐるらしい。此の事は關根正直氏が贊せられた所で、即ち此の書の第七村上源氏、新枕の條に、「內のおとゞの御子も少將とてふたりおはすなり。」とある內大臣は雅通で、少將二人は通親と通資であつて、此の通親が少將であつたのは、仁安二年から嘉應二年の末迄であるから、撰著の時代にも能く合つてゐるといふ考證である。通親とすると、嚴島御幸の道の記や高倉天皇升遐の記(二書共扶桑拾葉集並に群書類從所收)の作者で、文才に長けてゐた事でもあるから、さもあらうと思ひ合せられる。次に著作年代である。其は此の書の發端に、「ことしは嘉應二年庚寅云々」の語があつて、文面ばかりで無く、事實該年の擱筆と見えるのであるから、著作年代は大體然(シカ)認めて誤は無からう。併し起草の年紀は幾分遡るかも知れぬ。此の點に着眼したのは黑川春村であつて、嘉應元年春頃から書き始めたものであらうといふ考證をしてゐる。關根正直氏も其の今鏡新註に、一說を出された。其は宗能の事を「やそとせにや餘り給ひぬらん。」と第六藤波の下、唐人の遊に敍べてゐるが、宗能は嘉應二年二月廿一日に薨じたから、其以前の撰著であらうと云ふのであつて、尤至極の言である。

內容　倦、此の書は所謂假名の歷史で、大鏡が萬壽二年を獲麟とした後を承け繼いで撰んだ物である。而して其の年代は高倉天皇の嘉應二年迄百四十六年に亙つて居り、其の事實は皇室、藤原氏、村上源氏の三方面から叙述せられて居る。併し今茲に主なる觀點を說話文學的要素の吟味に置くを以て、一般的文學論評の筆を省く事とする。

說話文學的要素　此の書を通觀するに、說話文學的要素を含有する事は、大鏡に酷似して居るのである。例へば第七村上源氏、新枕の條の時忠と義光との筮に關する說話の如き、第八みこたち、花のあるじの條の「ふきぞわづらふ賤のさゝやを」(公親)「月はもれ時雨はとまれとおもふには」(實重)といふ連歌の事の如き、同卷ふししばの條の歌詠みの女房の事の如き、皆後の說話文學に影響してゐる談柄である。加之第九昔語り、第十打聞の兩卷は純然たる說話文學の形態を備へて、後の說話文學を起す基を成してゐるのである。昔語りの中の保胤や定基等の發心談、大外記定俊の本生說話の如きは宗教的の物で、注目に値する。又打聞は歌人談で、大和物語式の部であるが、其の賴實の歌道執心談、實方中將の貶謫に關する傳說、紫式部の墮獄の傳說等は特に顯著な物である。

第二章　本論――近古時代說話文學研究

一　序　言

方法論

前章に論述したやうに、中古時代までに發展した說話文學は、實に此の如きものがある。其が遺產として近古時代に貽し傳へられたが、近古時代の說話文學界は、其を相續するばかりでなく、更に增殖の途に就いた。其の進展の模樣を考察するのが、本章の使命である。就いては左の如きメソッドを取る。

此の研究の基礎となるのは、說話文學界の財產調である。卽ち各種作品の書史的研究である。是に由つて該範疇の諸書の成立及び實質を檢討する。

次に一往發展の因由を考へて見る。卽ち發展するに至つた素地は何か、又著作家の動機は如何、此等の問題は、外的(エキスターナル)研究として必要と思ふ。

それから說話の種々相に及ぶ。卽ちどんな話題が好まれたのか、又時と所と姿とのそれ〴〵のシユタンドプンクトから見た結果、話題の新古、方處の關係、(日本、支那、印度三國の振合　姿の如何(佛教談か世俗談か)といふやうな事に觸れる。さうして更に進んで主要說話の色合(カラア)を吟味する。こ

こに說話學的研究に到達するのである。又其の說話が著作家の頭腦を通して書き表された風體(スタイル)は、全く客觀的か、或は多少の主觀が交つてゐるのかといふやうな問題に及ぶ。此は勢、延いて表現の技巧に及ばざるを得ない。こゝに文學批評に到達する。

最後に一考するのは、說話に反映してゐる民衆の思想及び生活で、卽ち時代に卽した見方である。此は當代說話文學の綜合的研究ともなり、旁〻コンクリュージョンともなると思惟する。

二　書　史

三類廿一種

近古時代説話文學は、其の編制上之を三類に分ち得る。卽ち

甲類　非組織的のもの

乙類　組織的のもの

丙類　單一な事柄のみのもの

である。甲類は何等の類別も施さずに説話が排列してあるもので、宇治拾遺物語、發心集、閑居友、今物語、世繼物語、寶物集、撰集抄、唐物語、沙石集、雜談集、眞言傳、三國傳記の十二種がある。乙類は十四の部立をした蒙求和歌、內容を以て篇目を立てた古事談並に續古事談、十訓を立てゝ説話を集めた十訓抄、內容の篇目の緻密な古今著聞集、天竺、唐土、和朝と篇別をした私聚百因緣集、篇目を明にした東齋隨筆の七種がある。丙類は長谷觀音の靈驗談のみを集めた長谷寺靈驗記、刀劔説話のみを集めた劔卷の二種で、此は事柄が餘に單一であるから、特に一類とした。而して各類中の排列は大體著作の年代順を以てしたのである。

書史的研究の事項

以下右の三類廿一種に就いて、著者、著作年代、題號、卷數、異本等の問題は勿論、其の説話の品種及び特色、他書との交渉、それから書式、語彙、文體に至るまで、逐一之を吟味し論究するに

努める。此の個別的研究は、更に第三節以下の綜合的研究と相待つべき計畫である。

甲類　非組織的のもの

(1) 宇治拾遺物語

劈頭一考しなければならぬのは、此の書の題名である。宇治拾遺といふのは如何なる意味であるか。前にも述べたやうに、今昔物語の別名を宇治大納言物語とも宇治拾遺物語とも稱したと云ふのは、拾遺の意味を、闕漏を補錄するといふ普通の義にしては、こゝに當て篏るやうにも思はれぬ。それならば宇治大納言物語拾遺としなければなるまい。宇治大納言物語拾遺では、今昔物語の意味にならぬ。こゝに思ひ當るのは、流布本宇治拾遺物語に、誰の作か分らない序文が附いてゐるが、其は元來信用の出來ぬものであるのに拘らず、餘程古い傳に據つたらしい所もあつて、隆國が今昔を筆抄した次第を述べた後、「その正本はつたはりて、侍從俊貞といひし人のもとにぞありける。」と云つた一節がある。若しかういふ事情で、宇治大納言物語を或は宇治拾遺物語卽ち宇治侍從物語の意に使つたのかも知れぬ。拾遺は唐の世に官名とせられ、我が國では侍從の唐名としたのである。(定家の家集の拾遺愚草も、やはり其の意である。)さうして此の宇治拾遺物語も、今昔の亞流であ

るから、其の以前から行はれた名を踏襲して、世人に呼ばれ、爲に甚だ紛らはしくなつたのであらう。

諸本

此の書は萬治二年版が流布してゐる。國史大系本等多くは其の系統に屬するものである。而して特色を有する古活字本の存することは逸せられぬ。其に就いては、故佐藤誠實氏の言に、

活字本は上下二卷に分れ、上下何れも本末あり、本末に一二ありて、凡て八册なり。總ての段數も次第も同じけれども、段ごとの數を擧げず。普通本の十三の卷の末なる優婆崛多の弟子の事、十四の卷の初なる海雲比丘の弟子の童の事は、活字本には共に下末一にあり。海雲比丘の弟子の童の末には優婆崛多の弟子の事を擧げて結べれば、此處は活字本の方宜しげなり。文字の異同なども、活字本の方大かた宜し。（史學雜誌第十二編第二號所載宇治拾遺物語考）

とあるので、概要を會得せられる。古寫本では、內閣文庫本（大判五册物）の如きが注目せられる。此には、流布刊本に見るやうな序文は附いてゐないのである。

著作年代

此の書の著者は、何等の傳も無い。併し著作年代に就いては、推考し得るのである。先づ故佐藤氏の說「前記論文」を窺ふに、卷十第三話に、堀川院が明暹に賜つた笛が、「傳りていま八幡別當幸清がもとにありとか。」と記された所に「件笛幸清進上當今。建保三年也。」とある。建保を當今と稱したのは、順德天皇の御事であるから、本文の述作は其の御代の事であると。さうして又卷八第五話に、東大寺の鯖の杖

の木の燒けた事を記して、「三十四年がさきまでは、葉は青くてさかへたり。その後なを枯木にてたてりしが、此たび平家の炎上にやけをはりぬ。」とある。之を佐藤氏は、「今昔には、其鯖荷ひたりける杖、今に御堂の東の方の庭に在り、其長增ることなく、亦榮えずして、常に枯れたる相にてありとあるに由りて考ふるに、今の宇治拾遺は、舊と其木の榮えずして、枯木のやうにて立てりと云ふ意味に書けりしが、寫し誤りなどせしならん。三四十年などおほらかに書かずして、三十四年ときはやかに云へるも、炎上の時を指すやうに思はるゝなり。」と解し、平家の炎上治承四年（百錬抄治承四年十二月廿八日の條に其の事が見えてゐる。）から三十四年後は、建保四年であるから、以て之を建保四年の著作と見做してよいと云ふのである。それに就いて私に考へるに、又右の推定を裏切るものが無いでも無い。卷十二第廿三話に、水無瀨殿の妖怪（實は鼯鼠（ムサヽビ））の事が見えてゐるが、其の冒頭に、「後鳥羽院御時」とあるのは怪しむべきである。其は後鳥羽といふ御謚號は、初、顯德と申上げたのを、仁治三年七月に其の樣に定められたのであるから、之を最初からの本文とすると、述作の年紀が餘程降るわけである。佐藤氏は、「是は舊と本院とありしを後に改めたるならん。」と辨じて居られる。さう辯護するよりも、一體此の書は、同時に一人の手に成らずして、漸次後人の增補を經たものと考へては如何であらう。と云ふのは、各卷條數の不釣合、各條長短の不揃等は、其の結果ではなからうか。故に建保四年著作說は、未だ確定的のものと許し難いであらう。けれども

編制　鎌倉時代初期の作品たる事は殆ど疑は無い。

此の書は十五卷とせられ、說話百九十六を包含してゐる。組織の整頓した今昔物語に比すると、卷別も各條の排列も、何等の規準は無い。本朝の事が主で、漢土や天竺の事が交へてある。（往々似寄つた說話の隣合つてゐるのもある。）說話は概して世俗と佛教とのカテゴリを出ないのである。

出典　此の書の出典關係の考究に移つて見るに、先づ今昔物語との交渉の甚大な事は、周知の事實である。此の書の今昔からの文章の採り工合を見ると、例へば次の如く、頗る能く似てゐる。

今昔物語　卷廿第十二話

今昔美濃ノ國ニ伊吹ノ山ト云フ山有リ其ノ山ニ久ク行フ聖人有ケリ心ニ智リ无クシテ法文ヲ不レ學ズ只彌陀ノ念佛ヲ唱フルヨリ外ノ事不レ知ズ名ヲバ三修禪師トゾ云ヒケル他念无ク念佛ヲ唱ヘテ多ノ年ヲ經ニケリ而ルニ間夜深ク念佛ヲ唱ヘテ佛ノ御前ニ居タルニ空ニ音有テ聖人ニ告テ云ク汝懃ニ我レヲ憑メリ念佛ノ員多ク積リニタレバ明日ノ未時ニ我レ來テ汝ヲ可レ迎シ努々念佛怠ル事无カレト云フ……

宇治拾遺物語　卷十三第九話

むかし美濃國伊吹山に久く行ひける聖ありけり。阿彌陀佛よりほかの事しらず、他事なく念佛申てぞ年へにける。夜ふかく佛の御前に念佛申てゐたるに、空に聲ありてつげていはく、なんぢねんごろにわれをたのめり。今は念佛のかずおほくつもりたれば、あすの未のときに、かならず〳〵きたりて迎べし、ゆめ〳〵念佛おこたるべからずといふ。……

概して原文に頼（タヨ）りつゝ而も略し勝ちで、文體に柔みが加つてゐるのである。尙他の一例を見るに、此の書卷十一第三話、晴明を心見る僧の事付晴明殺ㇾ蛙事の如きも、今昔物語と共通であるが、今昔の「今昔天文博士安倍晴明ト云フ陰陽師有ケリ古ニモ不ニ恥ヂ一止事无リケル者也。」から、「然レバ終ニ晴明此ノ道ニ付テ公私ニ被ㇾ仕テ絲止事无カリケリ云々」迄の、其の師忠行に關する冒頭の一節を省略して、「むかし晴明が土御門の家に老しらみたる老僧きたりぬ。云々」と書き出してゐる。此の書きぶりの突如たる事は、いかにも今昔に據り乍ら、其を節略したと云ふ痕跡を遺留するものと認めざるを得ないのである。それで之を逆に今昔が宇治拾遺を採つたとは、決して考へられないわけである。尙進んで、今昔と共通の話題の存する程度如何を、故芳賀氏の攷證今昔物語集を參考資料として取調べて見ると、次の如き次第である。

宇治拾遺物語	今昔物語
卷一、道命阿闍梨於ニ和泉式部之許一讀經五條道祖神聽聞事	卷十二第卅六話
同、利仁將軍署預（イモ）粥事	卷廿六第七話
卷二、用經あらまきの事	卷廿八第三十話
同、原（厚の誤）行死人を家よりいだす事	卷二十第四十四話
同、鼻長僧事	卷廿八第二十話

同、季通欲レ逢レ殃事　　巻廿三第十六話
同、袴垂合ニ保昌ニ事　　巻廿五第七話
同、明衡欲レ逢レ殃事　　巻廿六第四話
同、唐卒都婆に血付事　　巻十第卅六話
同、なりむら強力のはかせにあふ事　　巻廿三第廿一話
同、柿木に佛現ずる事　　巻二十第三話
巻三、虎のわにとりたる事　　巻廿九第卅一話
同、多田新發意郎等事　　巻十七第廿四話
同、因幡國別當地藏作差事　　巻十七第廿五話
同、平貞文本院侍從等事　　巻三十第一話
巻四、佐渡國に有金の事　　巻廿六第十五話
同、藥師寺別當事　　巻十五第四話
同、妹背島事　　巻廿六第十話
同、東北院菩提講聖事　　巻十五第廿二話
同、三河入道遁世々間事　　巻十九第二話

卷六、留志長者事	卷三第廿二話
同、清水寺に二千度參詣者打ニ入双六ニ事	卷十六第廿七話
同、觀音經化レ蛇人をたすけ給事	卷十六第六話
同、しなのゝ國つくまの湯に觀音沐浴事	卷十九第十一話
同、帽子叟與ニ孔子ニ問答の事	卷十第十話
同、僧伽多行ニ羅刹國ニ事	卷五第一話
卷七、五色鹿の事(但、今昔は九色鹿)	卷五第十八話
同、播磨守爲家侍佐多事	卷廿四第五十六話
同、三條中納言水飯事	卷廿八第廿三話
同、長谷寺參籠男利生にあづかる事	卷十六第廿八話
同、小野宮大饗事付西宮殿富小路大臣等大饗事	卷廿四第三話
卷八、信濃國聖事	卷十一第卅六話
同、敏行朝臣事	卷十四第廿九話
同、東大寺花嚴會の事	卷十二第七話
同、獵師佛を射事	卷二十第十三話

同、千手院僧正仙人にあふ事　巻十一第三話

巻九、瀧口道則習レ術事　巻二十第十話

同、越前敦賀女觀音助給事　巻十六第七話

同、歌よみて被レ免レ罪事　巻廿四第五十五話

同、大安寺別當女に嫁する男夢見事　巻十九第二十話

巻十、はりまの守さだゆふが事　巻廿七第廿六話

同、吾嬬人止ニ生贄一事　巻廿六第七話

同、豐前王（トヨサキノオホキミ）事　巻卅一第廿五話

同、藏人頓死事　巻卅一第廿九話

同、小槻當平事　巻廿四第十八話

巻十一、あをつねの事　巻廿八第廿一話

同、晴明を心見る僧の事付晴明殺レ蛙事　巻廿四第十六話

同、河内守頼信平忠恒をせむる事　巻廿五第九話

同、清水寺御帳給る女の事　巻十六第三十話

同、則光盗人をきる事　巻廿三第十五話

同、出家功德事	卷十九第十二話
卷十二、達磨見二天竺僧行一事	卷四第九話
同、提婆菩薩參二龍樹ぼさつの許一事	卷四第廿五話
同、內記上人破二法師陰陽師紙冠一事	卷十九第三話
同、持經者叡實效驗事	卷十二第卅五話
同、增賀上人參二三條宮一振舞事	卷十九第十八話
同、穀斷聖不實露顯事	卷廿八第廿四話
同、高忠侍哥讀事	卷十九第十三話
同、河原院に融公靈住事	卷廿七第二話
卷十三、上緖主得レ金事	卷廿六第十三話
同、元輔落馬の事	卷廿八第六話
同、俊宣迷神にあふ事	卷廿七第四十二話
同、龜を買てはなす事	卷九第十三話
同、大井光遠妹强力事	卷廿三第廿四話
同、或唐人女のひつじにむまれたるをしらずしてころす事	卷九第十八話

同、出雲寺別當の鯰になりたるをしりながらころして食事	卷二十第卅四話
同、念佛僧魔往生事	卷二十第十二話
同、慈覺大師入ニ纐纈城ニ給事	卷十一第十一話
同、渡天僧入レ穴事	卷五第卅一話
同、寂照上人飛レ鉢事	卷十九第二話
同、清瀧川の聖の事	卷二十第卅九話
同、優婆崛多弟子の事	卷四第六話
卷十四、寛朝僧正勇力事	卷廿三第二十話
同、經頼くちなはにあふ事（但、今昔は恒世）	卷廿三第廿二話
同、新羅國后金榻事	卷十六第十九話
同、珠のあたひ无量の事	卷廿六第十六話
同、大將愼の事	卷二十第四十三話
同、高階俊平が弟入道算術事	卷廿四第廿二話
卷十五、よりときが胡人見たる事	卷卅一第十一話
同、伊良縁野世恒毗沙門御下文の事（但、今昔は吉祥天女）	卷十七第四十七話

同、相應和尚上二都卒天一事付染殿后奉レ祈事（但、直接の關係が無い）　巻二十第七話

同、秦始皇自二天竺一來僧禁獄事　巻六第一話

同、後の千金の事　巻十第十一話

同、盜跖與二孔子一問答の事　巻十第十五話

右の統計を示すと、

巻一、二條	巻二、九條	巻三、四條
巻四、五條	巻五、——	巻六、六條
巻七、五條	巻八、五條	巻九、四條
巻十、五條	巻十一、六條	巻十二、八條
巻十三、十三條	巻十四、六條	巻十五、六條

で、總數八十四話である。（今昔の缺卷の部分が、他日世に知られると、其の數は殖えるかも分らぬ。）それから今昔物語と沒交涉の說話の數を各卷に就いて示すと、

巻一、十六條	巻二、五條	巻三、十六條
巻四、十二條	巻五、十三條	巻六、三條
巻七、二條	巻八、二條	巻九、四條

卷十、五條　　　卷十一、六條　　　卷十二、十六條
卷十三、一條　　卷十四、五條　　卷十五、六條

である。さうして全く無關係の卷は、卷五だけである。それで此の書の特色有る說話は右の各條（總數百十二話）であることを注意しなければならぬ。此の百十二は全體の百九十六に對してパーセンテージが五七餘に當るから、此の書が單なる今昔の書き直しで無い事が認められる。それにしても、何故に、八十餘條と云ふ多數の說話を、既に纏つた一部の書となつてゐるものから此處に移入したのであらうか。此の點は無造作に究明し難い。或は筆者が今昔の文章をもつと民衆的に和らげようといふ動機から、興味の有る說話を書き直すうちに、つい〳〵此く多數に上つたのかも知れないのである。

それから著者自身が出典名を明示してゐるのでは、卷五第四話範久阿闍梨の條に、「往生傳に入るとか。」と記したのがある。此は大江匡房の續本朝往生傳を指したのである。卷六第一話廣貴の條に、「日本法花驗記に見えたるとなむ。」と附記したのもある。此は鎭源の著を意味するのである。出典を明示しないのでも、所依の原本の推測せられるのが尠く無い。卷八第三話信濃國聖の事は、有名な志貴山緣起を採つたものであるが、緣起三卷中、上卷は佚したのに拘らず、却つてこゝに化石化してゐるのは、文獻學上肝要なことである。又卷一第四話伴大納言善男夢見の事は、必ずや江談抄

から得たのであらう。

街談巷語

併しながら著者が當時の街談巷語を材料としたと想はれるものも、亦決して少々では無い。卷四第五話石橋下蛇の事は、「此ちかくの事なるべし。女ありけり云々」と書き出して、其の末を「さてこの女よにものよくなりて、この比はなにとはしらず大殿の下家司のいみじく德有がつまになりて、よろづ事かなひてぞありける。たづねばかくれあらじかしとぞ。」と結んであるのでも分る。

附會杜撰

此の書の說話には、首肯し難いものもある。例へば卷十五第一話、清見原天皇與二大友皇子一合戰の事の條は、附會の說が交つてゐる。又卷十二第十六話、八歲童子孔子問答の事は、洵に杜撰である。けれども少數の不純な物を除くと、其の他は相當に價値が有るから、其を多としなければならぬ。

說話の品種

佛敎關係

此の書の說話の品種は、概括すると、既に述べたやうに、世俗と佛敎とである。其の佛敎に關するものには、卷五第一話、四宮河原地藏の事、卷六第一話、廣貴依二妻訴一炎魔王宮へめさるゝ事のやうな佛菩薩の奇瑞靈驗談、卷二第二話、靜觀僧正祈雨法驗事のやうな高僧の法驗談、卷十第十話、海賊發心出家の事のやうな發心談、卷十五第九話、仁戒上人往生の事のやうな往生談がある。佛敎信仰と懸離れた僧家の逸事を叙べたものも有る。卷四第十五話、永超僧都魚食事、卷十二第八話、聖寶僧正渡二一條大路一事の類である。それが卷十一第九話、空入水したる僧の事の如きになると、威嚴も法驗も無い沙門の身の上が、笑止千萬であり、卷四第八話、進命婦淸水詣の事の僧に至つて

は、女人の爲に胸のほむらの消すに由無かつた出家で、俗情の人と選ぶ所は無い。又卷五第九話の一乘寺僧正が兒小院を愛したのは、後世起つた兒物語の俑を作つたと見てよからう。

世俗談

世俗談の方を見ると、歌人、畫家の藝能傳說もあり、禽獸報恩談もあり、又は盜人の說話の如きもある。愚痴者に關するもので、卷五第七話のかな暦あつらへたる事の如き、寧ろ滑稽である。

滑稽味

此の滑稽味は今昔物語にも認められるが、此の書には、僧俗に亙つて頗る多い。併し卷一第十五話、大童子鮭ぬすみたる事の落の如きは、駄洒落の嫌がある。尚、一言するに、此の書の說話のプロットには頗る妙味の有るものがある。卷九第八話、博打聟入の事の如きである。又瘤取とか雀の報恩とか云ふやうな寧ろメールヘンと見るべき說話が含まれてゐる事は、最も注目に値するが、此等は更めて後の論題としよう。

教訓的傾向

唯見逭し難いのは、一般に教訓的（談義的）傾向が（日本靈異記以來の事乍ら）漸次目立つて來た事である。卽ち說話の末に「念佛讀經、四威儀をやぶることなかれと、惠心の御房もいましめ給にこそ。」「ものうらやみはせまじきことなりとか。」と云ふ風に、佛教的に若しくは道德的に教誡を添へてゐる。此はやはり時勢の反映である。

文體用語

最後に文體、用語に就いて略述するに、文章は寧ろ古體に傾いて、漢文調では無い。隨つて漢語の混入は左程で無い。古體と云つても、全くの擬古文では無く、先づは純粹の國文脈であつて、而も用語は著しく時代化してゐるのである。此の事も旣に佐藤氏が、今昔から採つた條を原文と比較

して論ぜられた通である。而して文章の趣致から考へると、流石に最早貴族文學から遠退いてしまつてゐる。全く民衆を相手取つた表現法である。一例を左に示して置かう。

これもいまはむかし、越後國より鮭を馬におほせて、廿駄ばかり栗田口より京へをひ入けり。それに栗田口の鍛冶が居たるほどに、いたゞきはげたる大童子の、まみしぐれて物むつかしうをもらかにもみえぬが、この鮭の馬の中に走入にけり。道はせばくて、馬なにかとひしめきけるあひだ、この大童子走そひて、鮭を二つひきぬきて、ふところへ引入てんげり。さてさりげなくて走さきだちけるを、此鮭にぐしたる男見てけり。走先立て童のたてくびをとりて引とゞめていふやう、わせんじやうはいかでこの鮭をぬすむぞといひければ、大童子、さることなし、なにをせうこにてかうはの給ぞ。わぬしがとりてこのわらはにおほするなりといふ。かくひしめくほどに、のぼりくだるもの市をなしてゆきもやらで見あひたり。……(卷一第十五話)

(2) 發心集

發心集は鴨長明の作と稱せられ、古版本には題簽に長明發心集とさへしてゐる。發心とは勿論發菩提心の義である。此の發心の語を題名としたものに、既に村上天皇の皇女選子內親王の發心和歌集(群書類從和歌部所收)があり、解脫上人の愚迷發心集があり、又爲盛發心集と云ふ物もある。(以

題號

上二書續群書類從釋家部所收）

卷數諸本

此の書、本朝書籍目錄に三卷と示してゐる。此は古本がさうであつたのかも知れぬ。今見る所の物は八卷である。古版には片假名本と平假名本との兩種がある。片假名本は慶安四年の刊行で、假名や漢字の體が、いかにも古本の面影を傳へてゐる。平假名本は寛文十年の刊行で、繪入であり、他本を以て對校した所が少々有る。改定史籍集覽本は平假名本で、大日本佛教全書本は片假名本である。因みに、岡本保孝の況齋叢書第十九冊に、鴨長明發心集攷がある。幾分參考になる。

兩版本の編制

片假名、平假名兩版本は、卷冊の區分に差異がある。卽ち左表のやうである。

卷次	片假名本	平假名本
第一	玄敏僧都遁世逐電ノ事以下十二條	片假名本第一同樣
第二	安居院聖ノ行ニ京中ニ時隱居僧ニ値ニ事以下十三條	同上第三江州增叟事迄
第三	江州增叟（マシテノオキナ）事以下十二條	同上第四三昧座主弟子得ニ法華經驗ニ事迄
第四	三昧座主弟子得ニ法華經驗ニ事以下十條	同上第五母妬ㇾ女手指成ㇾ蛇事迄
第五	唐房法橋發心事以下十五條	同上第六后宮半者（ハシタモノ）悲ニ一條寺僧正入滅ニ事迄
第六	證空替ニ師命ニ事以下十三條	同上第七惠心僧都謁ニ空也上人ニ事迄
第七	惠心僧都謁ニ空也上人ニ事以下十三條	同上第七齋所權介成清子住ニ高野ニ事迄
第八	時料上人隱德事以下十四條	同上第八同樣

かやうな違は、元古寫本に兩樣存したからであらう。併し條數、内容、文章に於ては、兩者は全く一致してゐるから、實は此の書には、異本といふ程の物は存しないのである。

著作の因緣　此の書の著作の因緣は、序文に詳述せられてゐる。卽ち名利の謬に沈み、五欲の羈に引かれて、奈落の底に入る事の怖るべきを言ひ、我が心の愚な事を顧み、生死を離れて、疾く淨土に生れなくてはならぬ由を述べ、進んで、

此ニヨリ短キ心ヲ顧テ、殊更ニ深キ法ヲ求メズ。ハカナク見ル事聞ク事ヲ註シアツメツヽ、シノビニ座ノ右ニヲケル事アリ。卽賢キヲ見テハ、及難クトモ、コヒ子ガフ緣トシ、愚ナルヲ見テハ、自ラ改ムル媒トセムトナリ。今此ヲ云ニ、天竺震旦ノ傳聞ハ遠ケレバカヽズ。佛菩薩ノ因緣ハ分ブンニタヘザレバ、是ヲ殘セリ。唯我國ノ人ノ耳近キヲ先トシテ、承ル言ノ葉ヲノミ註ス。(下略)

と、見聞に隨ひ、本邦人の發心談を書き集めた由を言明してゐる。それから尙、跋に、「抑コトノ次ゴトニ書ツヾケ侍ルホドニ、ヲノヅカラ神明ノ御事多クナリニケリ。」といひ、「中ニモ我國ノアリサマ、神明ノタスケナラズバ、イカニカ人民モヤスク、國土モオダヤカナラム。」と言つてはあるが、

内容　神明の事は、撰集抄や沙石集に見る所よりも頗る尠い。其の内容を檢するに、主として遁世者、往生人の事蹟を列ねてゐる。伴蒿蹊が其の閑田次筆に、「一隅に滯らず廣く擧られしは、殊にたとむべし。」と之を評してゐる。其の說話を敍するや、著者自身の感想を附記したものの存するのは、第一

の增賀上人の遁世往生談の後に、「人ニマジハル習ヒ、高ニ隨ヒ、下レルヲ哀ムニ付テモ、身ハ他人ノ物トナリ、心ハ恩愛ノ爲ニツカハル。是此世ノ苦ノミニ非ズ。出離ノ大ナルサワリナリ。境界ヲ離レンヨリ外ニハ、イカニシテカ亂ヤスキ心ヲシヅメム。」とあるのに徴せられる。以て志尚を見るに足る。而して全卷を一貫した思想は、厭離穢土、欣求淨土を至要としてゐる。其は第二の橘大夫の條の末に、「常ニ無常ヲ思テ、往生ヲ心ニカケム事、要ガ中ノ要也。」とあるのでも分る。

此の書の出典關係を吟味するに、各種往生傳（具（ツブサ）に後節で述べる。）の影響を受けてゐることが、最も顯著である。卽ち第一の增賀上人の事、第三の伊豫入道（源賴義）の事などは、匡房の續本朝往生傳に據つたものである。兩書相互の交涉は、左の一例でも分るであらう。

續本朝往生傳

比丘尼緣妙者。賀茂保憲之孫。其母稱ニ賀茂女一。長ニ和歌一。緣妙未ニ出家一前。稱ニ之監君一。二條關白之侍女。當初之好色也。後起ニ道心一。落飾入道。步ニ行都鄙一常稱ニ常住佛性之四字一。勸ニ人佛事一唱導爲レ本。八十餘而臨終之時。瑞相自至。往生不レ疑者也。

發心集

中比賀茂女ト云歌ヨミ有ケリ。事ニ觸テ名高人アリケリ。賀茂保憲ガ孫、二條關白家ノ女房ナリ。後ニハ尼ニナリテ、名ヲバ妙トゾ云ケル。深キ道心者ナリケレバ、殊ニ動ズル事ナシ。只世ノツ子ニハ常住佛性ト云四字ヲ立居起臥ノコトクサニシケルガ、ツヰニ終リ思ノ如クニテ往生ヲ遂タル由傳ニ見ヘタリ。（第七）

又第七の安房守源親元の事の如きは、爲康の後拾遺往生傳に基づいて取捨してゐるのは、明白である。尙、第五の勤操憐ニ榮好ー事は、三寶繪詞中卷第十八話に據つて書いたものと想はれる。資料の上から、注目すべきものである。

後の他書との交渉

次に同時代の後の他書との交涉を一言すると、閑居友と同一說話が存するが、其は閑居友の方が後である事は更に述べよう。撰集抄とも共通事項がある。郁芳門院侍良住ニ武藏野ー事の如きである。けれども文體を比較すると、撰集抄の方が却つて後であるやうに推察せられる。又此の書第六に、蓮如が讃岐院御所に參る事が見え、保元物語異本にも存してゐるが、是亦該異本の方が後であるやうに考へられる。

巷說

併し中には文獻を借りない單なる巷說に基づいたものもある。例へば「神樂岡ノ清水谷ト云處ニ、佛種房ト云テ貴キ聖人有キ。對面シタル事ハ無リシカドモ、近キ世ノ人也シカバ、終ニ往生人トテ人ノ貴ミアヒタリシヲバ傳ヘキヽ侍リキ。云々」(第一)の類である。

後人の增修

一體、本朝書籍目錄に三卷としてゐるのは、熟考を要する。其は現存の發心集は、後人が手を加へたのであらうと想はれるからである。と云ふのは、發心談を基調とした此の書の性質を以てすると、第六卷の如きは、最も雜駁である。數寄の事、和歌の事に關する部分は、洵に不似合であるし、其の卷末の佛說は、くだ〳〵しい。初の方の卷とは、風體の相違が著しい。而して第二卷の或上人

不レ値ニ客人ニ事の終の坐禪三昧經云以下は、後人の裏書若しくは加筆の混入であらう。其の卷末の二章即ち舍衛國老翁と善導和尚とも、これだけが外土の說話で、他と釣合が取れてゐないのも怪しい。やはり後人の追加であらう。それで予は原本の發心集は、現存本よりも餘程內容の少かつたものであらうと信ずる次第である。

文體語彙

此の書の文章は、中古の遺風を帶び、平明であつて、文飾が少い。故事古歌の引用の如きも至つて少いのである。語法は大體中古の法格が守られてゐるが、語彙には、「ムクツケナク」「マメヤカシク」の如き、「イシクスルモノカナト見シゾ」の「イシク」の如き、新しい形容詞（以上の例は其の副詞形）の存するのが注意せられ、又「我等シキノ人」の接尾語「シキ」の如き珍しいものも用ゐられてゐる。

著作年代

偖、翻つて此の書の著作年代は如何、又果して長明の作かといふ問題を吟味して置かうと思ふ。次にも述べるやうに、閑居友に此の書の事を言つてゐる位だから、該書を承久四年の作として、信ずると、發心集は其の以前に成立してゐるわけである。こゝに一つ考へて見たいのは、此の書第四に、淨藏貴所飛レ鉢事と題する說話があり、又一方古事談第三に同趣の談柄が載つてゐる事である。それで發心集、古事談、何れが先で、何れが後であるかと云ふに、兩方共拾遺往生傳の記事には無關係であり、又双方それぞれ別の淨藏傳をクェルレとしたとも想はれず、文面上からは、どうして

も古事談が發心集のを踏襲したものとしか受取れないのである。而して古事談の著作年代は別項に論じたやうに、建保三年以前であるから、發心集の出來たのは、承久よりも少し遡ることとなる。さうすると、閑居友に引用してゐるのも當然であらう。予は鎌倉時代文學新論に、發心集第二に、「承久ノ比前瀧口助重ト云物アリケリ。」の語の有るのを見ると、なるほど承久年間の作らしくもある。併し能く考へると、承久年間の著作に、今云々と言はずして、承久の比と少し遠い世のことのやうに記すのは、似つかはしくない感があつて、疑はしい旨を述べた。今此の助重の事を能く調べて見ると、既に後拾遺往生傳に出てゐる所で、時代は原文に「當二永久之年暦一」とあるから、承久は永久の誤記である。それで此の事は問題外としなければならなくなつた。其以外で證となることを擧げると、正嘉元年に出來た私聚百因縁集は、此の書に據つた物である事が推定せられるし、又弘安六年に脱稿した沙石集は、此の書を二個所引用してゐるし、(沙石集卷四、妻臨終之障（サハリニ）成ル事の條及び卷七、依二愛執一成レ蛇事の條に、發心集の書名まではつきり出てゐる。）嘉元三年稿了の雜談集卷三の「武藏野ノ中ニ法華經ヲヨミテ、草ノ庵ニ煙モ不レ立テケルモ、上東門院ノ一郎ノ判官ト云ヘリ。」は、撰集抄にもあるが、語句の系統からすると、發心集に據つてゐる。右の次第で、發心集は正嘉元年以前、(控へ目に云つて弘安六年以前)に存在してゐることが認められる。然らば著者はどうかと云ふに、閑居友には發心集の事を言つて、「長明は人の耳をもよろこばしめ、またけちえんにもせんとて

こそ、傳のうちの人をものせけんを云々」と、いかにも發心集の作者を長明と肯定してゐる口ぶりである。處が作善蹊の閑田耕筆には、僞作說を唱へて、「眞作にあらずといへども、時代格別後の物にはあらじ。」としてゐる。論據は明確を缺くが、かういふ考も起り易い。それで著者の問題は斷定を愼まなければならぬ。

(3) 閑居友

作者慈鎭說

此の書は、本朝書籍目錄假名の部に、二卷と見えて、作者の沙汰は、何とも無いが、慈鎭著作說が一般に信ぜられてゐるのは、諦忍の大光普照集(大日本佛教全書所收)に、慈鎭僧正の閑居友云々とあるのでも分る。處が安藤爲章の年山紀聞には、契沖の消息文を掲げて、松尾證月房慶政上人の

慶政說

著であるやうに示してゐるのである。此の證月房慶政の事は、古い物では沙石集卷九下に、「松尾ノ證月房ノ上人ハ、三井ノ流ヲ受テ、三密ノ行タケク、道心アル人ト聞ヘ云々」と、遁世の事を叙べてゐるのが見當る。後の物では、扶桑隱逸傳(天台霞標三編卷三にも)に出てゐる。契沖が注意した所の入宋の際、宋隆との贈答と云ふのは、續古今集離別部に出て居り、又明惠上人と得意と見えると云ふのは、新千載集釋教部、續古今集哀傷部に證歌が存するのである。一體慶政の事蹟は甚だ詳細を缺いで居たが、橋本進吉氏が慶政上人傳考をものして、大日本佛教全書の遊方傳第三に編入せ

られてから、明白となつた事が多い。同氏の直談に、初、慶政の生誕年紀が不分明であつたが、東寺觀智院藏金剛頂經觀自在王如來修行法の奥書に、「建曆二年十月廿七日云々」として、「慶政（春秋廿五）」とあるから、文治四年の生である事が分るやうになつたとある。契沖は、披見するに入宋の事があるからと、そこに眼を着けて、慶政說を出したのであるが、其は此の書卷上の、あつまのひしりてつから山おくりする事の條に、「もろこしにまかりて侍しにも、さらになにもなくて、けさと鉢とばかりもちたる人せう〳〵見え侍き云々」とあるのを指したに違無い。處が山岡明阿の類聚名物考の說では、逸名の隱者の作として、慈鎭とも慶政ともしてゐないといふ、變つた考もある。作者未詳說は一番無難ではある。併し推測としては、契沖の說は尤らしい。ともかく此の書に、筆者の境遇の窺はれる語句がある。卽ち卷上（版本九ウ）に、「此あやしの山の中に身をかくしても、八とせの秋ををくりきぬ。天竺震旦のふみをこゝにておゝくひらけり。」とある。此の山中籠居を慶政の事とすると、橋本氏の考の如く、承久、貞應の比に當らう。慶政は建保年間宋に在り、歸朝して、西峯（松尾の事であらう。）方丈草庵で、續本朝往生傳や拾遺往生傳等を書寫した證も存する。若し此の書を草したとすると、恰も其の頃であらう。此の書の「承久四とせの春、やよひの中のころ、西山のみねの方丈の草のいほりにてしるしおはりぬる。」と云ふ跋は、必ずしも後人の虛構で無いかも知れぬ。

著作年代　永久四年著作の眞僞はとにかく、長明發心集よりは後の撰であると認められる。其は卷上（三ウ）に、「さても發心集には、傳記の中にある人〳〵あまた見え侍めれど、このふみには傳にのれる人をばいるゝことなし。」とあり、又善珠僧正の事を記して、「この僧都の事發心集にもみえ侍めれど、このとは侍ざめれば、よきついでに因緣もほしく侍て、かき侍ぬるなるべし。」とあるのを證とし得ると思ふ。

刊本　此の書は、上下二卷の古版本（刊年不明）がある。又續群書類從卷九五四雜部一〇四、（昭和二年五月刊）に收められてゐるのもある。此の本が未だ寫本で傳へられて居る時分に、刊本と對校して見たが、大差は無かつた。此の書の外題と目錄とに就いて、類聚名物考に、「おそらくは名もなき書捨の物なるを、

外題と目錄　外題と目錄とは後人の手に出しなるべし。」と推測してあるが、此は略當つてゐると思ふ。閑居友といふ語は、撰集抄（慶安版）第五の第五話及び第九の末段に用例がある。

說話　說話數は上廿一、下十一、計卅二を算する。主とする所は、遁世者の發心談である。即ち清海上人、播磨國の僧、津の國の尼、室の君等の事である。又往生談では、覺弁法師、東山の女の童の事がある。而して靈驗談では、卷下の第五話に、はつせの觀音に月まいりする女の事と題する長谷觀音の利生の事がある。此は奇瑞と宿緣とを敍べて、佛德を讚嘆したものであるが、端無く思ひ當るのは、長谷寺靈驗記卷下の第廿七話、大聖爲レ利ニ一男二女一敎令レ盜ニ薄衣一事である。それで雙方を

比較するに、文意が相類してゐて、而も此の書が靈驗記を粉本としたものと認められる。と云ふのは、靈驗記は一體に事實を明記する方針を採つて、「鳥羽院御宇贈左大臣長實卿ト申ケル人ノ内ニ貧キ靑女房」と云ひ、「此男ハ美濃國本巣ノ郡ニ源賴政ト云テ、其國ニハ廣ク人ニ仰レテ乏シカラヌ者」と云つてゐるが、閑居友はさういふ事をいかにも朧げに書いて、單に「中比東の京にたよりなきわかき女」とし、「おとこはみのゝ國の人にあふがれたるもの」としてゐるので、此の筆意から察すると、どうしても閑居友から靈驗記の方が出來たといふ反對の關係は有り得ないのである。それから卷上第一話、眞如親王の御事は、入唐五家傳の如きを併せ考ふべき物で、他の說話集にも殆ど見えてゐない事柄である。又卷下第八話、建禮門院御いほりにしのびの御幸の事は、平家物語の資料研究上極めて重要なものである。

佛說　此の書には、佛說を叙述してゐる所がある。四種三昧、不淨觀の如きである。又甚だしく談義めいた所もある。卷上第十三話、高野の聖の山雀(ヤマガラ)によりて心をおこす事に、食物を粗末にしてはならぬ事を說いてゐる類である。

引用書　又此の書に引用書を明記してゐる事は、頗る目につくのである。其の本朝の物では、日本靈異記、往生傳、拾遺往生傳、遊心集（此の書名は撰集抄にも見える。）の類、佛典では、止觀、涅槃經、法華經、梵網經、次第禪門、法註記の類である。其の爲に、主題の說話に、佛教的故事の附加せられたことが顯著である。

撰集抄との交渉

此の書と同性質の物として、撰集抄が直に念頭に浮ぶ。宜なるかな、唖の眞似せる上人、播磨國の僧、駿河宇津の山の僧、室の君顯基に忘らるゝ事等は、撰集抄にも話題となつてゐる。併し撰集抄の方が閑居友から採つたらしいのである。

語彙文體

此の書の語彙は、平安末期から鎌倉時代にかけてのもので、形容詞や副詞に其の特徴が認められる。文體は國語を主とし、「かしこく侍り」「あはれに侍り」「見侍り」など「侍り」と云ふ動詞（敬語助動詞としても）を多く使つて、だら〳〵と粘りけのある調子で、洵に撰集抄と酷似してゐる。其の事は撰集抄の項でも述べる。

(4) 今物語

諸本

今物語一卷は、信實朝臣抄として、本朝書籍目錄假名の部に出てゐる。群書類從卷四八三、雜部三八、に收められたものは、村井敬義本を底本とし、屋代弘賢、横田茂語本を以て校合したのである。又國文註釋全書に、山本信哉氏所藏書入本（守信云とある書入が多い。）が收めてあるが、大に參考となる。

著者

信實は隆信の子で、父子共に似繪に巧で、且共に和歌をも能くした。信實の和歌の方面の事蹟は、信實朝臣家集が存すること、寛元二年に成つた新撰六帖題和歌の作者の一人であることを擧げ得るが、夫木和歌抄を檢すると、建保五年右大臣家歌合、貞永元年歌合、建長三年影供歌合等の作者で

あることも分る。抑〻彼は閑院左大臣冬嗣の子長良から出た一門で、爲隆（寂超）を祖父とし、父の伯父（爲隆の兄）に爲業があり、又己が子に三人の女流歌人を有してゐる。（尊卑分脈參照）さうして父隆信の母は、俊成に再醮して定家を生んだといふ關係もある。

著作年代

此の書が信實の手になつたことを、故藤岡作太郎氏は疑はれたが、從來の傳說を覆す程の確證は無い。それで信實の物と認めて置く外はなからう。そこで著作年代はと云ふと、第十一話に、橘長政の歌が三首、新勅撰集を撰ばれた折（貞永元年）に入れられた事が見え、又第十二話に、「吉水前大僧正と聞えしは、今は慈鎭和尙と申にや。」とある慈圓の諡號の慈鎭は、嘉禎三年に定つたことが天台座主記で知られるし、尙又第卅一話に、延應元年（西紀一二三九）正月十九日の或人の夢の事が見えてゐる以上、延應元年以後の撰述で、其以上には遡り得ぬ。

編制

此の書は五十三個條の瑣聞逸事を集めてゐる。各條概して短小で、宇治拾遺物語の如き長文のは無い。表面上何等組織的には編せられてゐないが、實際の排列を見ると、略類を以て、似寄つた說話が並べられてゐるやうに思はれる。先づ女房に關する情話を以てし、（薩摩守忠度、德大寺實定等に關すること、）次ぐに和歌、連歌の話を以てし、（橘長政、源賴政、西行法師、瞻西上人、待賢門院加賀等に關すること、）更に次ぐに神佛の詠歌、靈驗の話を以てし、最後に二三の滑稽談を以てしてゐる。前後を通じて和歌の趣味が最も能く溢れてゐるのである。而して話題の人物から云ふと、平

安末期から鎌倉時代にかけての僧俗が多い事も顯著である。是に於て、今物語と題した意味が解せられるであらう。世繼物語とは內容が全く變つて居る事は、特に注意を要する。

著名な說話

此の書の中の著名な說話は、物かはの藏人の事、伏柴の加賀の事、紫式部墮獄の事、西行の鴫立澤の歌が千載集に入らなかつた事で、文學談として人口に膾炙し、後世の文學にも影響する所があつた。滑稽談には、說經師や念佛者の不行儀な話があるが、此は後の沙石集や徒然草の前驅となつたやうな感じがするのである。

出典

此の書に和歌の趣味が漲つてゐるのは、袋草紙を出典とした說話が尠からぬといふ現象からも會得せられる。例へば第廿六話の小式部內侍が大二條殿(敎通)に思はれた比云々の一條は、袋草紙卷四に、

中關白爲二少將一時、語二赤染之兄弟女一。而忘給之後。彼女奉レ戀二關白一。日暮卷二上南面簾一テナカメ居。然間直衣人寄香甚入來。彼殿也。女有二悅心一會合。其後夜々來。但曉夕無二車馬音一。以二長緒一着レ針着二直衣袖一。朝此緒留二南庭樹上一。其後無レ來。是魅之所爲歟。

と、三輪式傳說のレムナントめいた物があるのに據つたらしく、原文の赤染の姉妹を小式部內侍としたのは、作者の考違であらう。又第四十一話の隨身秦兼方に關する一件は、やはり袋草紙卷二、

後拾遺集を小鯵集と號する條に、

兼方參ニ彼卿亭一。花コソノ歌ヲ入ニ撰集一申請。禮部云。コソト云字不快也云々。兼方起座。於ニ侍中一云。此殿ハヤムコトナキ人ト思奉ニ、物不ニ覺給一人ニコソ。四條大納言ノ第一ノ秀歌ニ、花コソヤトノアルシナリケレトイフ歌ハ不ニ知給一ヤトテ退出云々。仍付ニ此名一。住吉神主國基歌多入之由故云々。

とあるのに據つたと想はれる。それから第卅九話の周防内侍の事の如きは、鴨長明の無名抄にもあつて、甚だ能く似てゐるから、其を採つたのであらう。

後の書との關係

尙、紛らはしい事であるから、念の爲に書添へたいのは、後の書との關係である。此の書の說話が、同時代の物たる十訓抄に出てゐるのは、第二話、第四話、第五話、第十話、第四十話であるし、古今著聞集に出てゐるのは、第二話、第廿二話であるし、又平家物語に出てゐるのは、第十話である。故藤岡氏は此の書と十訓抄との關係を論じて、此の方が十訓抄から採つたと推定せられたが、予は之を信じないのである。此の今物語は十訓抄の出來た建長四年を待たずして、夙に出來したものと思惟する。又十訓抄や著聞集を參考したとすると、此の樣な小册子では濟まず、もつとスケールが大きくなつたに違無い。平家物語の方（物かはの藏人の事）も、やはり此の書よりは後であらう。

尙第廿七話に、小大進が八幡の別當光淸に相具して、子などの出來た事を叙べ、

近き所に芋のつるのはひかゝりて、ぬかごなどのなりたりけるを見て、光清

はふ程にいもがぬかごはなりにけり

といひたりければ、程なく小大進

今はもりもやとるべかるらん

とつけたりける、面白かりけり。

とある。此は平家物語巻六、祇園女御の事の條の

いもが子ははふほどにこそなりにけれ　忠盛

たゞもりとりてやしなひにせよ　白河院

といふ連歌の粉本となつたものであらうと考へる。

最後に用語、文體に就いて略述して置かう。文章は一見した所では、擬古の傾があるが、宇治拾遺物語の類で、語彙の如き、最早平安朝文學とは逕庭を生じてゐる。例へば、「法師の誡にあやしげなるが、かしらはおつかみにおひて」の小摑(ヲツカミ)は、宇治拾遺物語に、「かしらはをつかみなる法師」とあり、古事談に、「頭ヲツカミトイフホドニオヒタル法師」とあつて、同時代の物に旁證があるが、其等より古い作品には見當らぬ。「かまちをはりてけり」とある捌(へん)も中古語とは思はれぬ。それから漢語の混入は、寧ろ少い方である。又修辭上では文中に古歌や故事を織り交ぜて、多少の風情の認

められるものがある。其の例は鎌倉時代文學新論に擧げて置いた。

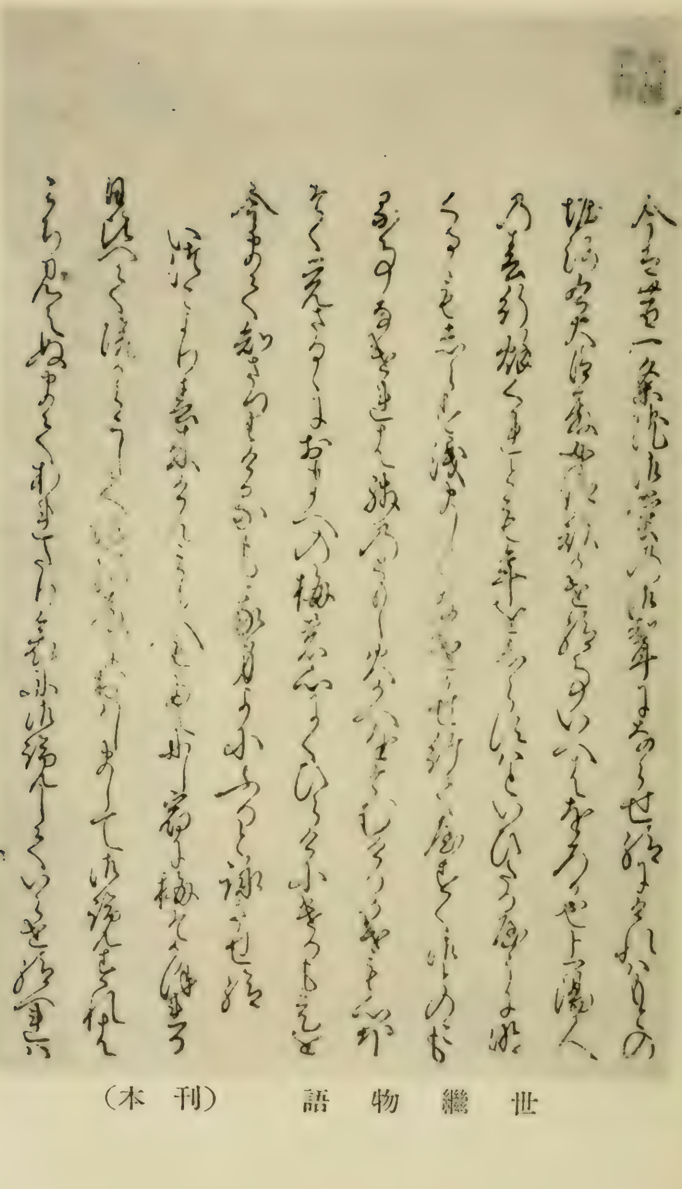
(5)　世　繼　物　語

題號諸本

世繼物語一卷、續群書類從卷九五一、雜部一〇一（昭和二年五月刊）に收められてゐる。其の底本は東京帝國大學史料編纂所藏本である。一體此の書は、其の名が區々で、小世繼だの宇治大納言物語だのと稱せられてゐる。群書一覽卷三に、宇治大納言物語（三卷）、を解題して、「これは本名小世繼といふもの也。又一卷の刊本に、世繼物語と題せる本あり。此書と同文也。」とある。宇治大納言物語は三宅嘯山の校した天明六年版が行はれてゐる。

著作年代

此の書の著者は不明である。今昔物語が宇治大納言物語と稱せられたから、其に擬して、之をも亦宇治大納言物語と稱したのは、全く後人のさかしらであらう。隨つて源隆國に何等の關係も無い事は、今更辨明を要しない。小世繼だの世繼物語だのと云ふのも、世繼が歷史の意味である以上、此の書に適當の題名でも無い。併し此は或は卷頭の堀河女御の事が榮華物語に基づいて居り、榮華物語が世繼物語とも稱せられる所からして、さう云ふ名を與へたのかも知れない。想ふに無外題の一抄物の傳つたのに對し、後人が此くいろ〳〵に命名したのであらう。著作年代も推定に困難ではあるが、書中に「いひいでんずる事もおぼえぬに、」のやうな音便や、「さはれ夜あくるともかくてあら



世繼物語（刊本）

む、(「夜あくとも。。。。」と無い點)のやうな語法の存する事は、近古時代の作であるといふ一證ともなら
う。尚、後にも述べよう。

性質

此の書の性質は故藤岡作太郎氏の平安朝文學史に、「卷中の記事明かに伊勢、大和、枕草紙、紫式
部日記、今昔、宇治拾遺、十訓抄等より抄出せるもの云々」とあるやうに、種々な物語、日記の類に
材料を仰いで、主として中古時代の説話五十餘件を必ずしも時代の順に拘らず集めたもので、行る

體裁

に擬古の文體を以てしたのである。而して各條「今は昔云々」と書き出してゐる點は、今昔物語並に
宇治拾遺物語に似てゐるが、文段の長短、叙述の單複に於ては、兩物語に比較も出來ない位、此は
概して短くもあり、且單純である。(卷首や卷末に長文の段が少々あるに過ぎぬ。)

説話の出典關係

今、説話を出典關係から吟味して、數例を示すと、左のやうである。

出典	此の書の説話
伊勢物語	在中將と二條后との事
大和物語	橘のよしとしが和泉國ひねで詠歌した事、桂のみこのうなゐの螢の歌の事、季縄少將の事
和泉式部日記	和泉式部と帥の宮との事(「心うく覺ゆと日記にかきたり。」とあるやうに、原著者が此の日記を用ゐた事は明白である。)
枕草子	兵衞の藏人の風流の事、清少納言落梅の秀句の事、菩提院で結緣八講の事

後拾遺集　和泉式部が貴船で詠歌した事（第二十神祇に出てゐる）
袋草紙　伊勢大輔、奈良の八重櫻の歌の事
榮華物語　堀河女御の事（木綿四手及び朝露の兩帖から採る。）關寺牛佛の事、御堂の葬送の時の歌の事
今昔物語　藤原高藤の事（山科雨宿りの一件で、巻廿二から採る。）

右の次第であるから、藤岡氏の言は精密を缺く感がある。卽ち榮華物語と交渉の有るが如きは、見遁し難い事ではないか。それから無名草子との關係に就いても一考を要すると思ふ。此の書に、紫式部の事に就いて、

今は昔、紫式部、上東門院に歌よみゆふの物にて侍しに、齋院よりさりぬへき物語やさふらふと尋申させ給ければ、御雙紙とも取出させ給て、何れをか參らすへきとさたせさせ給程に、紫式部、みなめなれてさふらふに、あたらしく作て參らせさせ給へと申ければ、さらはつくれとおほせられければ、けんしは作て參らせたりける。いよ〳〵心はせすくれてめてたき物にて侍る。

とあるが、之を無名草子に對比しよう。曰く、

くりごとのやうには侍れど、つきもせずうらやましくめでたく侍るは、大齋院選子より上東門院つれ〴〵なぐさみぬべき物語やさぶらふと、たづねまゐらせ給へりけるに、むらさき式部をめして、何をかまゐらすべきと仰せられければ、めづらしきものはなにか侍るべき、新しくつくりてまゐ

らせ給へかしと申しければ、つくれと仰せられけるを、うけたまはりて、源氏をつくりたりける
をこそいみじくめでたく侍れといふ人侍れば、……

とある。其の文面の酷似してゐる事、並に書きぶりを見ると、世繼が無名草子から得たに違無いと考へられる。無名草子の著作年代に就いては、既に國文學研究史（一一三頁）に論述して置いた通、黒川春村が應永頃の物であらうと云つたやうな、それ程後世の作では無い。其の書中に、定家を少將としてゐる事や、千載集迄擧げて、新古今集に及んでゐない事等は、鎌倉時代初頭の作であることを想はせるのである。尙又、宇治拾遺物語との交渉如何は、此の書の著作年代の問題にも觸れて來る。

小野篁の一條は、之を宇治拾遺に比較するに、左の如く文面が殆ど一致してゐる。

宇治拾遺物語（卷三、小野篁廣才事）

いまはむかし、小野篁といふ人おはしけり。嵯峨の御門の御ときに、内裏にふだをたてたりけるに、無惡善とかきたりけり。御門篁によめとおほせられたりければ、よみはよみさぶらひなん。されどおそれにて候へば、え申

世繼物語

いまは昔、さかの御門の御時に、内裏に札をたてたりけるに、無せんあく（あくせん歟）とかきたりけるを、御門たかむらによめと仰られけれは、よみにはよみさふらひなむ。されとおそりさふらふうへは、え申さふらはしと申けれと、唯

さぶらはじと奏しければ、たゞ申せとたびたびおほせられければ、さがなくてよからんと申て候ぞ。されば君をのろひまいらせて候なりと申ければ、をのれはなちてはたれか書んとおほせられければ、さればこそ申さぶらはじとは申て候つれと申に、御門さてなにもかきたらん物はよみてんやとおほせられければ、なにゝてもよみさぶらひなんと申ければ、片かなのねもじを十二かゝせ給て、よめとおほせられければ、ねこのこの子ねこ、しゝの子のこじゝとよみたりければ、御門ほゝゑませたまひて、事なくてやみにけり。

申せとたひ〳〵仰られけれは、さかなくてはよけんとよみたるに、是はをのれはなちては、たれかかゝんとて、とかにおこなはるへきに成にけり。たかむらされはこそと申。其時に御門、なにもかきたらん物はよみてんやとおほせられけれは、よみさふらひなんと申けれは、かたかんなのねもしを、十二かきて、よめと仰られけれは、ねこのこのこねこ、しゝのこのこしゝとよみてまいらせたりけれは、御門ほうゑませ給て、ことにもあたらてやみにけりとそ。

兩々對比して見るに、是亦世繼の方が宇治拾遺を原文として取捨抄錄したやうに想はれる。と云ふのは、宇治拾遺の方が、ともかく用語が行屆き、文體が整つてゐる。然るに世繼の方は、いかにも據る所があり、其を節錄したといふ風が露れてゐるからである。既に然りとすると、此の書は宇治

拾遺よりも晩出の物だと云ふ事になるのである。併しながら、藤岡氏が十訓抄から抄出したものが有るやうに言はれたのは、如何かと思ふ。和泉式部が貴船で詠歌した事は、後拾遺集が出典で、文面が、一致してゐる。十訓抄にも同様の事は出てゐるが、文面が違ふのである。

後拾遺集

男に忘られて侍りける頃貴ぶねにまゐりてみたらし川に螢のとび侍りけるを見て詠める

和泉式部

物思へば澤の螢も我身よりあくがれ出づる（にける イ）玉かとぞみる

御かへし

奥山にたぎりて落つる瀧つ瀬の玉ちるばかり物な思ひそ

此の歌はきぶねの明神の御返しなり。男の聲にて和泉式部が耳に聞えけるとなむいひつたへたる。

世繼物語

やすまさにわすられて侍ける比、貴布禰に參て、御手洗河に螢の飛けるをみて、

物思へば澤の螢も我身よりあくかれいつる玉かとそみる

奥山にたきりて落る瀧つせの玉ちるはかり物なおもひそ

此歌貴布禰明神の御返し也。男の聲にてみゝに聞えけるとかや。

十訓抄

和泉式部が男のかれ〴〵なりける比、貴船に詣たりけるに、ほたるの飛を見て、

物おもへば澤の螢もわが身よりあくがれ出る玉かとぞみる

とながめければ、社の内よりしのびたる御聲にてかくきこえけり。

おく山にたぎりて落る瀧つせの玉散ばかり物なおもひそ

そのしるしありけるとぞ。

又義懷(ヨシチカ)が、飯室の坊の前の櫻について、「みし人の忘のみゆく山里にこゝろながくもきたる春かな」と詠んだ事は、固より十訓抄第六にも出てゐるが、古今著聞集哀傷第廿一にも載つてゐるのであつて、而も世繼物語の文面は、十訓抄からも、著聞集からも得て來たやうに見えないのである。旁々以て十訓抄との親子關係は認め難いのである。序に一言したいのは、此の書が原本から抄錄した物の中、往々其の記し方の不備なのがある事である。例へば兵衛の藏人の「わたつみのおきにこがるる物見ればあまの釣してかへるなりけり」の歌の事を枕草子から採りながら、其の說明たる「蛙(カヘル)のとび入りて焦るゝなりけり。」といふ句を漏してゐる。それでは話の面白みが不明になる次第である。

傳承の特異

此の書の說話には、傳承の特異なものが有る。其は博雅の三位の事の如きである。博雅が琵琶の手を傳へたのは、逢阪の關の盲者蟬丸に就いての事とする傳說は、今昔物語も、和歌童蒙抄も、無名草子も、又源平盛衰記も皆さうであるのに拘らず、此の書だけは、「木幡とかやに、目つぶれたる法師の、世にあやしけなるに、ひわは習給ひけり。」とあつて、頗る珍しい。さうして博雅が秘曲を聽かうと、蟬丸の許に夜な〳〵通つたのを、上の諸書に多くは「三年」としてゐるが、此の書には「百夜」としてゐるのも面白い。此の百夜といふ事は、上の諸書中、無名草子だけに在る。此の一條は出典が不明であるが、或は一口碑を書留めたのかも知れぬ。

價値

從來、文學史家は今昔物語の大作や能く流布してゐる宇治拾遺の方に心を留めて、此の一篇を蔑

視した。假令文學作品としては藝術的價値は乏しいにしても、以上論述したやうに、説話文學としては大に注目しなければならぬ物で、永く其の解剖批評の忘られたことは、學界の一缺陷であつた。

(6) 寶物集

寶物集の事は、本朝書籍目錄假名の部に、「寶物集六卷平判官康頼入道抄」と見えてゐる。此の康頼の血統に就いては、參考源平盛衰記には、「系圖諸本無レ所レ見」とあるが、平家物語、源平盛衰記に、其の閲歷の傳へられて居る所では、鹿の谷の會合、事露顯の後、成經、俊寛と共に、遠島に流され、途に周防の室積で出家し、島に渡つてからは、熊野權現を勸請し、歸洛を祈つて靈夢を蒙り、又卒都婆流しをして、いかにも孝心の篤かつたことなどである。又康頼の嫡子康基と云ふ者が、清水觀音に參詣して、信解品を讀誦し、父子再會を祈つた事もある。康頼は赦免を蒙り、歸洛の後、此の書を著したと云ふので、其の事が平家物語卷第三、少將都がへりの事の末段に、

康頼

康頼入道は、東山双林寺に我山庄の有ければ、それにおちついて、まづかくぞつゞけゝる。

ふる鄕の軒の板まに苔むして思ひし程はもらぬ月かな

やがてそこに籠居して、うかりしむかしをおもひやり、ほうぶつ集といふ物がたりをかきけるとぞ聞えし。

とあり、源平盛衰記卷第十、康頼入道着二雙林寺一事の條の末段にも、

其後雙林寺ノ庵室ニ閉籠、ナカラン跡ノ形見トテ、涙ノ隙々ニ寶物集ヲ作テ、世ニコソ披露シタリケレ。

とある。卽ち己が宿世を追懷し、死後の記念にもと、道心を披瀝したものゝやうである。尙、康頼の事蹟は東鑑にも徵せられ、後の物乍ら尾州志、大御堂寺の條下、平判官康頼之墓といふ記事もあつて參考となる。

概要

此の書の概要を續群書類從本（後に說明する。）で示すと、治承元年の秋、島を出、同二年の春再び京に歸り、東山に籠つて居たところが、昔花のもと、月の前で見なれた人が、康頼の生きて歸つた歡びに訪れて來た。康頼は此の人に對ひ、己が不在中の都の出來事を問ふに、客の詞に、世の中が靜で無く、あの嵯峨の釋迦が天竺へ歸られる瑞相があるといふ話で、洛中の人、道もさりあへず集つたとある。康頼は、それはあさましい事だと云つて、乃ち彼の寺に參る。二月廿日の事である。御堂に通夜するに、（以上序）或人が、人の身には何が第一の寶であらうと言ひ出したのを切つ掛けに、雜談が始り、或者は隱れ簑こそといひ、或者は打出の小槌こそといひ、黃金よ如意寶珠よ、親の爲には子よといひ、否、壽命こそと云つて、結局佛法が最第一の寶だと落着し、（以上主要部の誘導たる前提）さて其の理を女人に尋ねるのに對して、或沙門が三寶、六道、十二門を說き示すと、（以上

主要部）夜も明けはなれ、人々も散じて、其の沙門も人に紛れて失せたと云ふのである。寺院に於ける會衆の談話に事寄せて、一篇の趣向を立てたのは、大鏡が濫觴である。此の書はそれと同樣の筆意に成るもので、後の三國傳記は又此の跡に倣つたやうな物である。

康頼歸京の年紀

こゝに吟味すべきは、此の書に康頼の歸京を治承二年の春としてゐるのは、平家物語に治承三年三月十六日とあるのに合はない。此の件は故藤岡作太郎氏も注意せられたのである。又嵯峨の釋迦の事を考へて見るに、百錬抄、治承二年二月十五日の條に、「女房若狹局嵯峨堂供養。上皇密々御幸。」とあるのは、此の事件に關するものであらう。清涼寺緣起を繙くに、其は又治承元年とあつて、寶物集のよりも尙一年前である。どうも三樣の年紀が一致しない。緣起の文を左に拔いて置かう。

八十代高倉院御宇、治承元年丁酉の春の比、諸人に夢想の告あり。しめして云、我まさに西天にかへるへしとなり。しかるあひた、上下萬民くひすをつれて、群集雲霞のことくにして、御名殘をおしみ奉る事、涅槃會上の如し。南北の名僧、東西の淨侶、微妙の伽陀を唱へ、種々の法施を獻て、仰願は、この國にひさしくとゝまりて、衆生を利益し給へしと、信心をいたし、祈誓のまことを抽てけれはにや、後に又告ありて、萬人餘に歎きとゝめ申間、とゝまり給ふへしとなり。もしその時かへり給ひたらは、今時の衆生いかてか尊體を拜見し奉らんと、ことに隨喜の心を生すへきなり。

諸本

此の書には異本が有る。今其の卷數を標準として云ふと、左の如くである。

一卷本……寫本（卷子）
二卷本……寫本
三卷本
　甲……刊本（活字版）
　乙……寫本
　丙……刊本
　丁……刊本（繪入）
七卷本……刊本

一卷本

以下此等に就いて說明しよう。先づ一卷本と云ふのは、宮內省圖書寮に藏せられる古寫卷子二軸（不分卷）のことで、撰者自筆と云ふ傳である。此は古寫經十二門論疏の裏に記され、漢字の書體は、料を斩・菩薩を芽、菩提を莽のやうに古く、片假名の字體も、ホを𠆢、メを乂、ユを𠂉の如く古く、一體に古色を帶びて居り、又假名遣に一定の規準が無いのも、近古の寫本の常例に外れない。但、首尾の缺けてゐるのは惜しい。該本の本文は大正二年三月、大日本佛教全書に收められた。又昭和二年五月に出版せられた續群書類從にも之を入れてゐるが、此の本は最初塙撿挍の意中に無かつたこと勿論である。

二卷本

二卷本は上下兩卷に分つた物で、予が嘗て松井簡治氏藏本を披閲したのから明白になつた。此の本には表紙裏に、双圓房章海、卷末にも止觀院西溪双圓房章海と署名があるが、もとの所藏者であらう。又書寫者は掃部卿諶泰で、奥書に、「寛永六年菊月十一日書之了云々」とある。此は恐らく古寫本の影寫であらう。大冊で合一本となつて居り、目錄の如きは無い。漢字を交へることの極めて少い平假名本で、紙數上卷四十二、下卷四十九である。

三卷本甲

三卷本の甲は、寛永比の活字版を云ふ。神宮文庫に一本を藏する。此は奥書も何も無い。目錄も附いてゐない。片假名本で、紙數上卷四十七、中卷卅七、下卷四十八を算する。

同乙

同乙は從前續群書類從本（雜部百二所收）とせられた寫本で、予は大正八、九年の交、東京帝國大學附屬圖書館本を閲し、流布の七卷本と對校して居る。（昭和二年五月出版の續類從本は、やはり三卷本を編入してゐる。其は史料編纂所本を底本に用ゐたのである。此の史料本も殆ど附屬圖書館本と變りは無い。）此には目錄は無い。片假名本である。漢字には煙を煙。譬を辟、臭を臭とした如きが散見し、不レ可レ破、不レ及ニ申ニ一のやうな返り字も混じてゐる。

同丙

同丙は奥に「正保五年戊子二月吉日」とある版本で、今は坊間にも漸く影を潜めた。予は二本を集めてゐる。目錄は無い。平假名本で、漢字に旁訓がある。紙數上卷三十、中卷廿六、下卷卅二を算する。

同丁

それから同丁は、題簽に「繪入寶物集」とある物で、卷末には單に菊月吉日とあつて、刊年と板元とは、板木を削つたらしくて分らない。丙と同樣平假名

本で、師宣風の挿繪がある。萬治寛文頃の物であらう。版式を正保版と較べると、彼は一面十一行であるに、此は十五行である。引歌が彼は二行書きであるのに、此は一行書きである。又彼は假名に濁點を施さないのに、此は施してある。紙數は上巻廿一、中巻二十、下巻廿三である。內容は丙に據つたらしい。

〔補〕此の三巻本丙には、正保版よりも古い物と、又新しい物との存在する事が分つた。其の顚末は、書物春秋の昭和七年五月號に、「寶物集三巻本の古版に就いて」と題し、且其の昭和八年一月號に、「古版物餘談」と題して、發表して置いた。卽ち正保五年版の前に、

寛永二十年九月吉辰　竹本佐左衛門開板

と刊記のあるのが存し、其の後に、

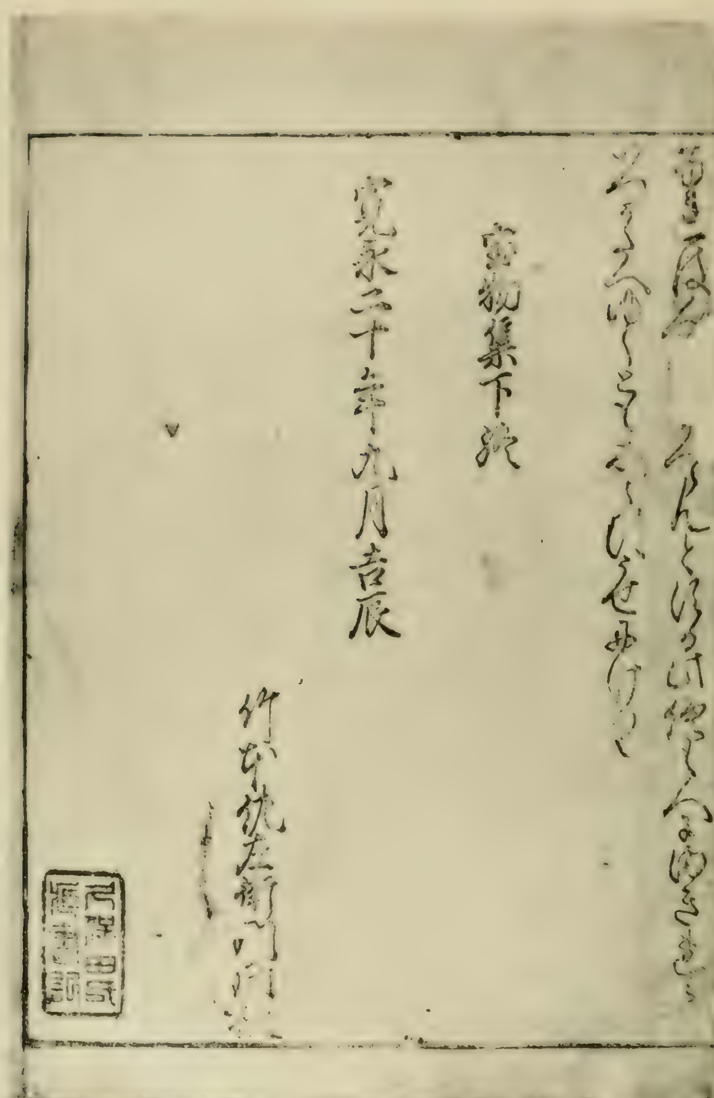
寛文元年辛丑八月吉日　高橋清兵衛板

と刊記のあるのが存するのである。それから三巻本丁も、單に「菊月吉日」とあるだけで無く、確に、

寛文七年丁未菊月吉日

と刻してある物を得るに至つたから、倂せて追記して置く。

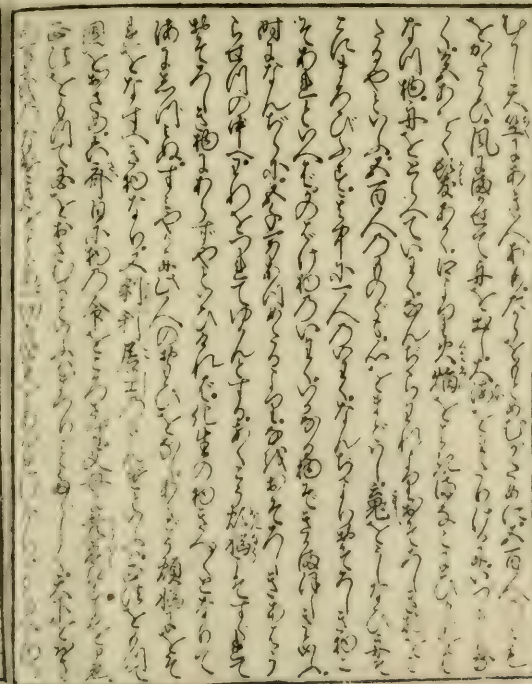
七巻本は元祿六年の刊行で、古寫本に據つたと云ふが、原本の素性は分らぬ。今最も流布してゐ


寶物集下終
寛永二十年九月吉辰

寶物集（寛永廿年刊本）



（寛文七年繪入刊本）



寶　物　集

る物である。沙門明春の序があり、元政上人の康頼傳が附載してある。詳細な目錄が存する事は注意すべきである。片假名本である。是亦大日本佛教全書に入つてゐる。近年京都に貴重圖書影本刊行會が起り、追うて京都市本能寺所藏寶物集古寫本版行の企畫がある。予は其の原本の模樣を知りたかつたので、初、山鹿誠之助氏に懇囑して聽く所に據ると、流布本の第二卷の中途から第三卷の一部に亙つた零本で、奥書は無いが、鎌倉末葉乃至室町初期の書寫であらうかとの事であつた。更に昭和五年十月京都帝國大學附屬圖書館を訪うた際、幸に原本の影寫を見るを得た。即ち「第一に愛別離苦と申は」から、「能々信をいたしてつとめおこなひたまふへし」迄の墨附廿七枚の平假名本である。併し鎌倉室町の交などといふ古寫本の俤は無いと想はれた。七卷本研究の確證に供し難い。そこで序(ツイデ)に卷子本の缺けた部分を考へるに、其の初は隱蓑、隱笠の事から存するから、三卷本內の約二枚を失つたのに當り、又終は邪婬戒の事迄存するから、三卷本內の約廿八枚を損したのに當る。勿論分量の多寡が一卷本と三卷本とでは違ふ次第であるから、此は唯概算に止るのである。

諸本廣略の程度

　此の諸本の廣略の程度を逐一吟味することは、書史的研究上肝要であるから、既に鎌倉時代文學新論に、七卷本の明細目錄を掲げ、異本との間の內容事項の有無を示したのである。故に詳細はそれに委ね、こゝには其の一部分を例として擧げて見よう。

七　巻本

	一巻本	二巻本	三巻本乙	三巻本丙
巻第一の一部分				
○子ヲ寶ト云沙汰ノ事	有	有	有	有
釋迦尊容養ノ事	無	有	有	有
親馬ニ成(ナサ)レタルヲ子ノ助シ事	無	無	有	無
孟宗伯瑜丁蘭郭巨白年王祥等ノ事	有（白年王祥無）	有	有	有
燈臺鬼ノ事	有	有	有	有
漢明帝母ノ忌日二度並行基菩薩母ノ報恩ノ事	無	無	有	無
怪(アヤシ)ノ女賓源律師ヘ布施並秦良郭阿用子ガ事	無	有	有	有（怪女無）
佛餓鬼ノ樂ヲ告給並目蓮尊者並淨藏淨眼ノ事	有（餓鬼樂無）	有（淨藏淨眼無）	有	有（淨藏淨眼無）
班彪羅睺羅武王月光王優闐大王等ノ事	無	無	有	無
巻第四の一部分				
○不妄語戒沙汰ノ事	缺	有	有	有
須陀摩王虚言ノ罪ヲ恐ルヽ事	缺	無	有	無
虚言ノ罪ニ依テ諸根不具ナル事	缺	無	有	無

佛龍女ニ袈裟ヲ與へ給フ事	缺	無	無	無
季札劔ヲ墓ニ懸シ事	缺	無	有	無
源氏物語供養ノ事	缺	有	有	有
妄語扁言ノ辨論ノ事	缺	無	有	有

諸本内容の精疎は、右を以て大體分るであらう。尙、諸本の系統及び性質を論じよう。

一卷本の性質

先づ一卷本は、康賴自筆と傳へられるだけあつて、とにかく最も古い物である。寶を計へ上げる條に、打出の小槌の次に、他本のやうに、金や玉の事は無くして、直に子寶を擧げてゐるのに徵しても、他本より古い面影があると認めなくてはならぬ。其の他の事項も概して疎である。他本が後に漸次廣益したことは、疑を容れないと信ずる。

出典

此の書に明示した内典は、般若經、金剛經、涅槃經、普曜經、摩耶經、法華經、維摩經、往生要集、日藏上人傳、華嚴經、出生菩心經、寶積經、十(注)重毗婆沙論等で、法華經の如きが最も多く引かれてゐる。又外典には、孝子傳、蒙求の如き、又長恨歌の如きがある。

說話

其の實質が佛說を經とし、各種の說話を緯としたものである事は言ふ迄も無い。中に將門の金光明經書寫の事を「將門之合戰狀ニミエタリ。」としてゐるが、此は正しく將門記の結尾に一致する。良岑宗貞の事は、大和物語に據つたであらうし、大江定基(寂照)の事は、續本朝往生傳から採つたであらう。此の本に引用した和歌には、流布のものと語句の異同のあるのが存する。

用語文章

此は注意すべきことである。要するに康頼自筆などと云ふ事は信用し難く、李夫人を吏夫人、法花經を法花敎などとした誤寫もあるから、後人の撰述であらう。其の用語には「東方朔ト申仙人ソラ云々」と、助詞「すら」を「そら」としたもの（榮華物語や今昔物語に用例が有る。）があるなど、注目せられる。文章は素樸であるが、多少の趣致を有する。

二卷本の性質

二卷本は、一卷本の次、三卷本の前に位すべき古本と認められる。例へば此の本の六道の中、地獄の事を說いた末段に、三卷本乙、同丙、七卷本等に見るやうな若狹守邦忠の事の一段の無いのは、最も注意すべきことで、此の本が三卷本よりも古いと思はれる證である。此の書の結尾は、三卷本乙、丙並に七卷本とは甚だしい相違で、三卷本丙の結尾は、「此僧も人にまぎれていつかたへゆくともしらすうせにけり。」とあるのに、此は「……夜のあくるとひとしく行かたしらす成にけり。」で終

特色有る結尾

らずに、更に「後にこれをおもふに、ひとへに嵯峨の釋迦かりに一人の僧に現し給ひて、しめし給ひけりとしりぬ。されは……」といふ原本で卅一行の文句が添加せられてゐる。實に一特色と謂はなければならぬ。それから此の書の法華經修行の事の條に、

あたこのしやうしんあさりは、あかつき法花經を誦ゐたりけれは、とそつ天人道場にたちそひけるか、かたはらの坊の人のめに見え給ひければ、皆ふしきにそ思ける。これはことにちかき事にあらすや。

とあるのは、此の本の出來た時代を明にする鍵と考へる。試に思案するに、此の「しやうじんあさり」は、成尋阿闍梨であらうか。成尋の事は元亨釋書卷十六に出てゐるが、右の文の趣は、大雲寺緣起の左の一節に能く合ふ。

毎日十二時。一千日之間。法華三昧。塔ノ艮角住シテ。晝夜睡眠ヲ止。然處青衣天童降而誦經聽聞ス。是蓮華坊恒久阿闍梨常ニ見。

處が成尋は寛弘八年の生であるから、康頼の時代などからは餘程古い。それを「ことにちかき事」と云つてゐるのは、時代觀念が疑はれる。此の本を古めかしくする爲に、故意にそんな書きぶりをしたのであらうか。此は未決の案として述べて置く。それはとにかく愛別離苦の條に、和歌を列擧して、

きかいかしまに侍りける比、風のたよりに、いまたいきたるよし母のかたへ申つかはすとて、少將、やすより

さつまかたおきの小島に我ありとおやにはつけよ八重の潮風

などと書いてゐるのは、康頼の自著としては不似合である。

三卷本丙の性質

三卷本丙は、内容の精疎の度が二卷本に似てゐて、寧ろ三卷本乙よりも古いらしい。此の書の地獄の事の條に、「ちかくはよみがへりの若狹守郡(邦)忠」といふ語がある。是も著作年代探索の手がゝり

ではあるが、邦忠の事は一寸分りにくい。

三卷本乙の性質

三卷本乙は、內容が二卷本並に三卷本丙よりも著しく增加してゐる。それは卷頭の嵯峨詣の途すがらの事の詳述せられてゐるのでも分るが、其の他不邪婬戒、不妄語戒等の條も內容が多い。又かういふ注目すべき事がある。其は日蓮の千日尼御返事（阿佛房日得が入寂し、千日尼が其の子守綱をして遺骨を身延に携へしめた。乃ち日蓮が阿佛房を弔し、孝子のあるのを喜んだ書面である。弘安三年七月二日附。）に、子は敵(カタキ)でもあり、又財(タカラ)でもある由を說いた一節がある。これがすつかり此の三卷本乙に挿入せられてゐるのである。其の馬になつた親を、子が助ける話の如きは、二卷本には未だ顯れてゐない。此の書の筆者が、日蓮の文までも取込んだといふのは、洵に面白い。それから孝子を列擧した條に、「班固ガ史記ヲ書サスヲ、班彪是ヲ書繼ス。」といふやうな杜撰な記事があり、不飮酒の條に、素尊の大蛇殺戮の事を述べたのに、事實の誤謬、語釋の淺薄が認められ、而も其の語氣が室町時代式であるといふのは、旁〻後人の手に成つたものと言はなければならぬ。尙、最も重大なのは、嵯峨の釋迦像を東大寺の奝然上人が將來した由來を語つてゐる事で、此は一卷本、二卷本、三卷本丙、共に存しない所であつて、卽ち淸涼寺緣起に詳說したのを採つたと想はれるのである。而して同緣起には、「此說尤祕密也。容易これを知しむへからす。然とも末代のために記處也。太子傳ならびに寶物集には夢想の事はかりあかす也。」とある。此の寶物集は古本を指したので

ある。之を以て三巻本乙は、同縁起の作られた永正十二年(西紀一五一五)よりは後の増補本であると言へよう。因みに本朝書籍目録に六巻と註してゐるのは、此の種三巻本の各巻を、本、末に分けたのが存した爲であらう。

七巻本の性質

最も増益せられた七巻本は、大體に於て三巻本乙を踏襲したもので、其の増補の部分は、二巻本若しくは三巻本丙から得來つたのである。圖を以てすると、次のやうである。

三巻本乙 ――――――→ 七巻本
二巻本 } ――↑
三巻本丙 }

例へば、巻一に老苦の讃歌として、「オシ照ヤ」「何方ニ」「替行」「イットテモ」の四首を擧げてゐるが、三巻本乙には、「オシ照ヤ」の一首が存するだけである。さうして二巻本と三巻本丙とには、「何方ニ」以下の三首だけ存する。七巻本が雙方を併合したのは明白である。又七巻本巻二に、雪山童子が半偈に身を投げる故事を詳記した所を見るに、三巻本乙には、四句の偈を擧げた後に、「是故ニ雪山童子ハ半偈ノタメニ身投ケ云々」と云つただけであるのに、二巻本や三巻本丙には、もつと文句が有る。七巻本は其を利用して増補してゐるのである。尚又七巻本巻二、生死に着をなす事勿れ云々の續に、弘法大師云々とあるのは、三巻本乙には無い。是も亦二巻本や三巻本丙に存する所

で、其をその儘取込んだことは、疑を容れぬ。此の本は一體に委し過ぎ、冗語蛇足が多いのである。

組織

之を要するに、諸本の異同は、概ね內容の廣略如何であつて、組織上の差異は無い。初に概要を示したやうに、或沙門が三寶、六道、十二門を說き示したと云ふ、

六道の事と往生要集

其の六道の事は、慧心院源信僧都の往生要集に據つた事は明白である。一卷本に、八大地獄を列擧して、「惠眞（心）僧都ハ、一代聖教ヲ撰ミ給ヘル往生要集ニタニモ、コマカニハ侍ラヌメリ。」と言つてゐるのは、要集を參考して居る證で、又二卷本に、「六通の事は、惠心僧都の一代しやうけうをひらいてえらひ給ひつるわうじやうようしうと申物にこまかにしるされたり、いまた見たまはずや云々。」の言もある。

十二門の事と孝養集

それから十二門の事は、一卷本に、

一ニハ道心ヲヲコシ出家ヲシ、二ニハ佛ニナラムトイフ願ヲオコシ、三ニハ戒ヲタモチ、四ニハモロ〳〵ノ行業ヲツミ、五ニハ三寶ニ歸依シ、六ニハ諸ノ施ヲ行シ、七ニハ觀念ヲイタシ、八ニハ業障ヲ懺悔シ、九ニハ善知識ニアヒ、十ニハ臨終ノ惡念ヲトメ、十一ニハ法華經ヲオコナヒ、十二ニハ彌陀ヲ稱念スルナリ。

とある。二卷本も十二の事柄は大體同樣で、順序が變つてゐる所がある。三卷本乙及び七卷本は、二卷本に近似してゐる。表に示すと、次のやうである。

一巻本	二巻本	三巻本乙	七巻本
一	一	一	一
二	五	五	五
三	三	三	三
四	四	四	四
五	二	二	二
六	七	七	七
七	八	八	八
八	六	六	六
九	九	九	一〇
一〇	一〇	一〇	九
一一	一一	一一	一一
一二	一二	一二	一二

此の十二門の事の類似を他に求めると、孝養集が思ひ浮べられる。同書は三巻から成り、上巻は善惡を明し、中巻は實の道を顯し、下巻は臨終正念、往生極樂の意を明したのである。上巻は十二項

で、主として六道の事、中卷は十五項で修道の要領、下卷は十項で臨終のあるべきやうである。此の中卷の十五項は、

第一、可レ厭ニ三界一事
第二、可レ發ニ信心一事
第三、可レ欣ニ極樂一事
第四、可レ唱ニ念佛一事
第五、可レ起ニ菩提心一事
第六、可レ持ニ佛制戒一事
第七、可レ有ニ修行一事（布施の事がある。）
第八、罪可ニ滅失一事（懺悔の事がある。）
第九、心可レ靜事（觀念の事がある。）
第十、可レ觀ニ彌陀白毫一事
第十一、可レ定ニ往生業一事
第十二、可レ讀ニ法華經一事
第十三、可レ叶ニ佛御心一事

第十四、可レ持二佛言一事

第十五、可レ恐二憍慢一事

で、寶物集の十二門と共通の事が多い。寶物集が之を學んだのではないかと思はれる。一體孝養集は覺鑁上人（嘉保二年生――康治二年歿）の撰述と稱せられる。（尤も上人は眞言宗の見地から、淨土教を考究し、大日、阿彌陀一致の說があるとは云へ、此は純然たる淨土教の書だから、上人の作としては疑はしいと云ふ論がある。假に後人假託の書としても、そんなに後の物では無からう。文體は鎌倉時代式である。）往生要集に負ふ所が最も多く、慈母の爲に註すといふのは、源信の勸二進往生極樂一偈（天台霞標所載）に倣つたらしい。そこで試に臆測すると、平家物語などに寶物集の事の書かれた頃には、康賴眞作のうかりし昔を思ひやつた追懷談めいた物は、空しく名ばかり留めて、散逸したのではなからうか。さうして康賴が老母に孝養を盡したといふトラディションに基づいて、後の淨居者流が、孝養集の如きから感得し、やがてかういふ組織を立てたのではあるまいか。既に一卷本に見える燈臺鬼の事、速離早離の說話等は、平家物語や源平盛衰記のを粉本としたのであらう。

現存寶物集に對する推究

說話の品評

異本が多い爲に、書史的研究に多く力を用ゐた。以下七卷本に就いて、說話其の物の吟味をしよう。元來此の書の期する所は、欣求淨土の佛教思想宣傳に在るので、佛教文學として注目すべき物であ

るが、中に織交ぜられた說話が夥しいから、之を說話文學と目し得る。其の點は教訓を主とした十訓抄が、一面說話文學であるのと同樣である。

佛教傳說印度のもの

說話は何と云つても、佛教傳說が多い。其の印度種の物には、例へば卷一の耆婆利女が他の懇請を肯ぜずに、第一番に佛を供養する話がある。佛典說話全集に長阿含遊行經に據つて出してあるものに當る。卷三の善財童子發菩提心の事は、大方廣佛華嚴經の意を摘んだのであらう。又卷四に金色の獅子の話があるが、報恩經に見える由を註してゐる。此は佛典說話全集には、賢愚經を出典としてゐる。卷五には鬼子母の說話がある。是も佛典說話全集には、毘奈耶破僧事を出典としてゐるものである。其の他著名な話は頗る多く攝取せられてゐる。

我が國のもの

我が國の佛教傳說では、卷三にいろいろな發心談や遁世談があり、觀音や地藏の靈驗談もある。六波羅山詣りの地藏の說話の如き、地藏の驗記にあると明示してゐるのは注目せられる。(地藏菩薩靈驗記の缺本たる下卷に在つたのかも知れぬ。)卷五には種々な因緣談を收めてゐるが、中に海士子(アマノコノ)物語を引いてゐるのは面白い。卷六に在る无空律師が死後蛇となつた話は、法華驗記がクエル　レで、今昔物語にも出てゐるものである。卷七にも遁世談があり、名僧の驗德談もある。讃岐の源大夫の事は、發心集卷三から得たのであらう。尙、日本種のもので、直接佛教に關しない說話も有る。

支那說話

又支那說話では、既に今昔物說に入つた孟宗や伯瑜の孝子傳說が卷一にある。季札が劍を徐の君

の墓に懸けた話の如きも卷四に存する。卷五には、玄宗皇帝の事や屈原の事など史談がいろ〳〵ある。又國より佛教說話も交つてゐる。

以上は單に一斑を舉げたに過ぎないが、日本靈異記、法華驗記以降漸次發展した佛教的說話文學が、かやうに集成せられて、此の種の文學の高潮に達しようとしたのは、洵に目ざましい。此の七卷本の規模は、量に於て三國傳記に劣るが、三國の說話に亙つてゐる事は、今昔物語及び三國傳記と同類である。

(7) 撰集抄

題號

撰集抄は西行の著と傳へられ、古來名高い物である。抑〻撰集の語は、後漢書班固傳に、「令班固撰集其事。」とあるやうに、用例が古い。佛典にも例へば、法華經法師功德品第十九に、「復有諸菩薩。讀誦於教法。若爲他人說。撰集解其義。如是諸音聲。悉皆得聞之。」の如きがある。而して書名としては、特に佛書に、撰集百緣經、撰集三藏及雜藏傳の類がある。

撰集抄最古所見

此の書の事の最も古く見えてゐるのは、一遍上人語錄である。其は同書卷上、消息法語の中の「興願僧都念佛の安心を尋ね申されけるに書てしめしたまふ返事」に、「むかし空也上人へある人念佛はいかゞ申へきやと問ければ、捨てゝこそとばかりにてなにとも仰られずと、西行法師の選集抄に載

られたり。是誠に金言なり。」とある文である。併し此の事は訝しいのである。既に俊鳳妙瑞の同書諺解に之を疑つて、此は發心集にはあるが、撰集抄に無いと云つたのは、尤至極であつて、西行法師云々は後人加筆の誤謬か、さもないと、一遍の見た撰集抄は予輩の知らない別本だと云ふことになる。

先づ此の書の序文を揭げると、

生死の長き眠いまだ醒(サメ)やらで、夢にのみほだされつゝ、水の面の月を實(マコト)とおもひ、鏡の内のかげをげにとふかく思入て、あけくれは只妄念の心のみうちつゞきて、生死の船をよそへずして、居所のひつじの步は、我身の外にもてはなれ、鳥部、舟岡のけぶりをよそにみて、過にし方四十餘年の霜をいたゞき、行末しらずけふしもやあるらむ。しかれば、同夢のうちの遊にも、新舊の賢跡(カシコキアト)を撰求(エラビモトメ)ける事の、言の葉を書集め、撰集抄と名付て、座の右に置て、一筋に知識に賴まんとなり。卷は九品の淨土に思宛(オモヒツ)ゝ、十に一をもらし、事は八十隨好に思よそへて、百に廿を殘せり。抑凡夫の習、明眼しゐ(ひ)て、眞月を見ず。心老(オイ)て、斷妄の利劍おこらざる物なり。されば偏に冥助をあふぎ奉らんが爲に、卷毎に神明の御事をしるし載(ノセ)奉り侍り。(慶安版)

である。卽ち撰述の趣意が古德新賢の事蹟を集めて、善知識と賴むに在ること、九品淨土に準じて、九卷とし、八十隨形好(大明三藏法數に、華嚴經隨疏演義鈔を出典としてゐる。)に擬して、八十條

としたこと、加ふるに神明の事を以てしたこと等が表白せられてゐるのである。

此の書には、刊本、寫本共に數種有るから、其等の特色を辨明して置かなければならぬ。古版本には嵯峨本、慶安三年版本、繪入再刻本がある。嵯峨本の事は後に述べる。繪入本は格別の事も無い。流布本の代表は、先づ慶安版である。用字法を見ても、(六借(ムツカシ)、本鳥(モトドリ)の類)古寫本に據つたことは明である。併し必ずしも善本では無い。それから寫本には續群書類從本、内閣文庫本、橋本進吉氏藏本の如きがある。こゝに續類從本と云ふのは、東京帝國大學附屬圖書館本で、大正八、九年頃閲覽した物を指すのである。(此は大正十二年の大震火災で烏有に歸した。今の續類從本は昭和二年五月の出版で、濱口惠璋氏藏本を底本としてゐる。濱口本は天正十七年の寫本に據つて、慶長九年に再寫したものである。別に特徴の無い流布の九卷本である。)此の本は、何の奥書も無い。上、中本、中末、下本、下末の三卷五冊であるが、上は第一、第二、第三、中本は第四、第五、中末は第六、下本は第七、下末は第八、第九を收めてゐるから、畢竟するに九卷本である。誤寫も少く無かつた。之を慶安版本に對照して著しい相違と云ふのは、慶安版の一條を二三個條に分けたものの存すること、少しく順序の異同の有ること、卷の分括の違等である。それから各條の題目は元來無かつたのであらうから、後人の筆によつて、兩書間に逕庭を來したのであらう。別に内容上の差異は無いのである。内閣文庫本は寬文八年書寫の三冊物で、續類從本と同一系統であることは、篇目並

に本文が一致するので分る。唯此は上中下三卷に分つた跡が無く、九卷に分けて、三卷宛を一冊としたのである。次に橋本氏所藏本は注目すべき古寫善本である。(寫手と書寫年紀とは明徵を缺く。)此は九卷本で、其の九冊中、第一、第二が缺本となつてゐるのは惜しいが、他の七冊は揃つてゐる。卷首に目錄があつて、卷中には題目が無く、各條は朱で合點がしてある。假名は平假名を以てし、漢字は返り字の書式を混用してゐる。此の本が價値を有するのは、原本の書寫年代の分ることに由る。卽ち第九の奧書に、

本云正和四年乙卯八月十五日令書寫畢
又云長祿三年九月日書畢

とあつて、此の如き九卷本が最早鎌倉末葉には存在したといふ確證になるのである。此の本の卷の區分は、前に記した續類從本に近似してゐる。併し各條の排列を見るに、第六の惠心、佐野渡聖、惠遠の順序は、却つて慶安版本に同じであり、第八の直幹事の位置もそれと同樣である。それから題目は後人の筆であらうが、其の言句は續類從本よりも慶安版本の方に近い。而も兩者と全く違ふのもある。例へば第六の七、佐野渡聖事(此は續類從本の禪僧往生事、慶安版本の禪門僧山居往生事に當る。)第七の二、經信卿花見(此は續類從本の西山聖人事、慶安版本の西山禪定僧之事に當る。)第七の十三、北國修行時見人助(此は續類從本の斗藪僧助男事、慶安版本の敵有男山伏笈中入助事

に當る。」のやうである。而して第六、西山上人事に西住死去事を籠めたのは、續類從本、慶安版本共に二條に分けてゐる所である。又題目の不整頓な個所も有る。此の本と雖も、尚、誤寫、脫字を免れない。併し流布本校勘に資する有力な古書であることは、大に認めなければならぬ。其の實例は、既に鎌倉時代文學新論に詳記して置いた。此の本は內容上、格別特色は無い。

後人加筆說

此の如く叙べ來ると、進んで嵯峨本の吟味に移らなければならぬ。抑〻撰集抄の流布本に、後人の加筆が有るとの說は、古くから存する。卽ち耳底記（烏丸光廣が細川幽齋との問答書）卷之三に、「せんじう抄は西行のかゝれたるに書そへたるものなるべし。」とあり、卯花園漫錄（石上宣續著、新燕石十種第三所收）卷二に、「西行が撰集抄もとは三卷なり、九卷あるは後人の増補せるものなりと、鈴木忠信の說なり。」とある。其の三卷本と云ふのは、嵯峨本卽ち角倉家の刊行した物で、群書

嵯峨本

一覽に、「光悅本三卷」とあるものである。予は嘗て故和田維四郞氏に乞うて之を披閱し、家藏の慶安本に異同を註してゐる。此の嵯峨本は平假名活字版で、三卷に仕立てゝあるが、內容はやはり九卷で、條數は正しく八十を算する。（慶安版では百三條）各條に題目は無く、目錄は一括して卷頭に揭げられてゐる。此の本の卷の分け方は、寧ろ續類從本に似てゐる。此の本の本文は、流布本の謬を匡す證となるものがあるが、中には流布本の方が優つてゐるのもある。其の流布本との異同の著しい例は、是亦鎌倉時代文學新論に載せて置いた。而して此の本は今の所、撰集抄の略本を代表

する。慶安版本の類が廣本(又、增修本)と認められるのである。なるほど嵯峨本の目錄は、付(ツケタリ)の分を加へて八十條である。(流布本では五十七條分)果して此が最初の原本通りであらうか。遽に首肯は出來ぬ。けれども初稿本に近いものであらう。之を流布本に對比すると、流布本が後の增修を經てゐる事實は、殆ど疑も無く會得せられるのである。例へば慶安版第一の十二に、「(前略)さぎらあらん人の、なじかは心もすまで侍るべき。」の次に、歌枕名所を點綴し、一見華やかな詞句を續けて云ふやう、

　こしの白山雪積りて、老曾の森のはゝきゞ、風になびきやすく、佐野の野原の、ほやのすゝきそよめきて、同心(オナジ)の末葉の露は、風に亂てしどろなる有樣、木曾の懸橋、佐野の舟橋など見侍りしに、心もとゞまるべき程なり。逢坂の關のせき守とめかねし、秋こし山のうす紅葉、み過しがたく、濱千鳥の跡ふみつくるなるみがた、富士の山邊は時しらぬ、かのこまだらの雪のこり、浮島が原淸見が關、大磯小いその浦々は、過がたく侍るぞや。

と。而して再び元に立還つて、「此僧正は六十に傾き給ぬれば云々さてもいかなる所に云々」と續けて結んでゐる。右の道行文めいた一節は、實は贅語で、本文に何の關係も無いばかりか、信濃の事である帚木、保屋の薄を、一は老蘇の森、一は佐野に繫(カ)けた如き、とかく古歌に暗い嫌があつて、後人の追補と想はれるが、嵯峨本には全く右の詞句は無く、「心もすまで侍るべき。」から、「さてもい

かなる所に云々」と續いてゐるのである。又慶安版第二の二に「いみじく身にしみて貴くぞ侍る。」の次に「げに閑に案ずれば云々」から「本覺の月すむならば、立波吹風皆妙なる御法にて侍るなるべし。」まで卅三行あつて、「さて迎西上人は」と續いてゐるのに、嵯峨本は「貴くぞ侍る。」から、直に「さて迎西上人は」とある。かういふやうに後人の加筆が彼是有る。此の狀態を以て考へると、之を逆に、嵯峨本の如きが、拔萃本であるとは言ひ得ないのである。

著者及び著作年代の問題

尙、此の書の說話の概觀を叙するに先だつて、今少し著者及び著作年代の問題に筆を執らなければならぬ。偖、卷末に「于時壽永二年むつきの下の弓はりに、讃州善通寺の方丈のいほにしてしるし侍りぬ。」とある。西行法師の年紀を、大日本史の考證に據つて見るに、台記及び百錬抄に從つて、其の遁世を保延六年、廿三歲とし、俊成家集に從つて、其の易簀を建久元年とし、推して七十三歲と算してゐる。さうすると脫稿の壽永二年は、六十六歲の勘定になる。處が、序に「過にし方四十餘年の霜を戴き、」とあるのに矛盾を來す。此の事は旣に故藤岡作太郎氏も疑を挿まれた所である。

後人假託の書か西行の自記で無い論

それでどうも此の作は、西行の名に託して、後人がものしたのであらうと云ふ結論に到達する。さう推定するのにも心當りがある。試に第二の第三話、見佛上人の末段に「人もなぎさの濱風に、僅にあさの衣の袖をふかせてすみ給けんは、心なき身にも哀に覺るぞかし。」とある語氣に徵せんか、西行の自記と云ふよりも、後人が彼の鴫立澤の名歌の詞を用ゐてあやなしたと云ふ方が眞に近いで

はないか。尙又第四の第十五話に、西行が俊惠を東大寺の麓に訪ひ、「いかなる歌かよみたる」と問はれ、「山里に浮世いとはん友もがな」の歌、「津の國の難波の春は夢なれや」の歌の事を吹聽したのに對し、俊惠の稱讃の詞を受けた旨を記し、「か樣の事書のぶるは、憚も多く、恐もしげゝれども云々」と、頗る辨解してゐるが、かう云ふ事も西行の自記としては、有るまじき事と想はれる。第九の第十三話に、長谷寺で妻の尼に遇ふ由を書いてゐるのも、自記としては受取り難いのである。又次の數件も予の主張を强調する料とならう。卽ち第五の第四話に、「時雨にわかに降とをり、あらしはげしくて、月の光も雲まなくなりぬ。しかあれとも晴行雲のすゑの里人は、月猶まつらん物と見え侍り。」の句が有る。此は疑も無く、新古今集、宮內卿の雨後月と題する「月を猶まつらむものか村雨のはれゆく雲の末の里人」を採つてあやなしたものである。抑〻新古今集は西行の死後十六年に當る元久二年に出來たもので、撰集抄の壽永二年といふのから廿二年たつてゐる。或は勅撰集の發表までもなく、此の歌が早く弘まつたと云ふ論があるかも知れぬが、西行が宮內卿の歌を借りて、自己の文章中に交へるといふことは、洵に有りさうも無く、後人の所業に違無い。まして第五の第八話に、武藏野の樣を記して、「四方の草のみしげりて、人もすまず。草々色々にさきみだれて、さながらもゝの錦をひろげたらん心ちのし侍りて、むさし野は行ども秋のはてぞなきいかなる風かすゑにふくらんと、はる〴〵思やり侍り。」とあるのも、亦新古今集、左衞門督通光の「むさし野や行

けども秋のはてぞなきいかなる風の末に吹くらむ」を引き、尙又、第八の第一話に、「なみのよるひるかづきして、月やどれとはぬれねども、心ありけるたもとかな。」とあるのも、新古今集、宮内卿の「心あるをじまのあまの袂かな月宿れとはぬれぬものから」を引いたと考へられるのである。

歌物語の杜撰

尙論ずべき事がある。槪して此の書の歌物語は杜撰である。此の事も故藤岡氏の西行論に指摘してある。例へば、第四の第十三話に、西行が「しづがふせやをふきぞわづらふ」とうちすさみ、江口の尼が「月はもれ雨はたまれとおもふには」と附けた事がある。此は今鏡第八みこだち（花のあるじ）には、次の如く見えてゐる。

三條の內のおとゞ（公親）のまだ四位少將などの程にや、

ふきぞわづらふ賤のさゝやを、

とし給ひたりけるに、中務少輔實重といふもの、常にかやうのことにめしいださるゝ者にて、

月はもれ時雨はとまれとおもふには、

とつけたりければ、いとよくつけたりなどかんじあひ給ひける。

今鏡は嘉應二年の著であるから、撰集抄の方は右に基づいて作つたものと見なければならぬ。（因みに謠曲の雨月の趣向は、更に撰集抄から出發したのである。）又第八の第八話に、源經信が月夜砧の音を聽いて、四條大納言（公任）の歌「唐衣うつ聲きけば月きよみまだねぬ人をそらに知るかな」を

詠ずる事を記してゐる。けれども此の歌は和漢朗詠集、新勅撰集に出て、實は貫之の歌である。恐らくは朗詠集から採るに當つて、其の撰者たる四條大納言の歌と誤つたのであらう。又第九の第十四話に、「花をのみ惜なれたるみよし野の木のまにおつる有明の月」を權少僧都覺英の作としてゐる。處が實は覺英の死保元二年から四十四年後に相當する建仁元年八月十五日夜の歌合（群書類從和歌部所收）に、深山曉月の題で藤原有家の詠んだもので、第四句が「梢に」とある。（續後拾遺集にも出てゐる。嵯峨本は流石に「木すゑに」としてゐる。）一體第七の第七話以下の藝能傳說十數條中には、洵に從ひ難い事が少く無い。例へば大江朝綱の「前途程遠」といふ於₂鴻臚館₁餞₂北客₁序の句を、信濃に下り、惡夢を感じ、都に人を返す時の詩であるなどゝ記してゐる。本朝文粹に出、和漢朗詠集にも存するものを、此の樣に書いたのは沙汰の限と云はなければならぬ。又第八の歌話中に、柿本（カキノモト）の語が二個所見えてゐる。連歌の方で、柿本、栗本といふ事は、西行在世中に果して行はれたであらうか、筑波問答に、「後鳥羽院建保の比より云々（中略）よき連歌をば、柿本のしゆと名付られ、わろきをば、栗のもとの衆とて、別座につきてぞし侍りし。」とあるのに據ると、西行以後の事と思はれるのである。それから此の書は參考書を座右に置いて著作したもので、さういふ事は一所不住の修業者の所業とは思はれぬ。例へば大江匡房の續本朝往生傳を引いた所もあり、遊心集（此の書名は閑居友にも見える。）も所々に引いてある。共の他の書にも渉つてゐる。

予の推定

右に縷述した所は、畢竟するに、壽永二年著作の事も、西行が行脚中の撰述といふ事も信用せられぬと云ふに歸する。だから推定としては、隱逸無名氏の作としなければならぬ。而して著作年代はと云ふと、撰集抄は、承久四年作と傳へられる所の閑居友の啞の眞似せる上人（撰集抄の方は靜圓供奉）播磨國の僧、駿河宇津の山僧、室の君顯基に忘らるゝ事などをグルンドとして、敷衍もし、文飾も加へてゐると信ぜられるから、承久四年以後の物と推測しなければならぬ。

嵯峨本にも疑點がある

以上主として流布本に就いて論述したが、嵯峨本と雖も、疑點が有る。卽ち此の本にも序文があり、卷末に跋めいた「抑今生むなしくはせ過なば云々」「于時壽永二年云々」の存する事も、流布本同樣である。而して俊惠との歌物語、長谷寺に於ける妻の尼との邂逅も流布本同樣、覺英の歌として、有家のを載せた事も同樣。して見ると、西行作の說は信ぜられぬ。そこで詮ずる所、撰集抄といふ物は假託の書としか考へられぬが、或は控へ目に云ふと、幾分西行の遺文があつて、何人かが增補したかも知れぬ。此の意味からすると、鳥羽院の第八の宮青蓮院眞譽法眼の御事を記した條に、「若宮にて山へのぼらせ給へりしには、御供仕りしぞかし。」と結んでゐる如きは、何かさういふ遺文かも分らぬ。併し是亦虛構であらうと論ずる人があつたら、辯護も出來まい。

説話

以下翻つて、流布本撰集抄の實質論に移らう。此の書の含む說話は、大部分、發心談、遁世談、往生談である。例へば第一の第二話、依ニ祇園御託ニ有男發心事は、親の處分（家督の意）を押領せら

れた男が祇園に參籠して託宣を受け、無常轉變を感じて、發心遁世する。押領した人も悔悟して、其の男の庵に同棲し、共に念佛の功を積んで、同時に往生したといふ話である。又第二の第一話、播州山居僧頌書往生事は、播磨の或山の谷合の庵に、黒衣を纏うた僧が死んで居たが、大きな木に「死生共に死生に非ず。無來無去にして本來寂靜也。」と書いてあつたといふ話である。其の他、第一の第四話、國行三位遁世事、同第五話、宇津山僧發心因緣事、同第十一話、播州平野僧發心事、第二の第六話、觀釋聖人往生事、第三の第一話、正直房往生事、第四の第三話、永眼大僧都遁世事、第五の第二話、西住上人事等頗る多いのである。因みに此の西住上人は西行と交際した人で、其の贈答が山家集に出てゐる。それから序文の終に、卷毎に神明の事を載せたと斷つてある通、第四の第十四話に、嚴島、宇佐の事があり、同第十五話に、春日の事があり、第七の第四話に鹿島の事がある。其等には、本地垂迹、和光同塵の思想が含まれてゐる。又第七、第八あたりの詩文和歌に關する說話は、此の書の性質上最も不純な部分であつて、前にも言ふやうに、杜撰な事柄もあるが、かういふ藝能傳說を云爲しなければ氣が濟まないといふ所に、時代思想も窺ひ知られるのである。さうして前にも述べたやうに、此の書はかれこれ資料を參考してゐるので、第四の第十七話の眞如親王事は、閑居友に據つたらしく、(此の條は嵯峨本には無い。)第六の第四話の淨藏貴所事は、爲康の拾遺往生傳を參酌してゐるらしいことは疑はれないと思ふ。

叙述の態度

右の說話を叙述した態度を見ると、三種の表現法が認められる。其の一は、筆者が旅行中に遭遇した事を材料としたやうに記したものの少く無いことである。第一の第五話、第六話、第十話、第十四話、第二の第三話、第七話、第三の第二話、第四の第一話、第七の第一話等何れも皆さういふ筆意である。其の二は、道心者の因緣談を叙した後に、筆者の感想卽ち讃嘆の語を附加した事で、多くの條々殆ど皆さうである。此は無常迅速を悟らしめ、九品往生を遂げさせようといふ趣意で、つまり談義風である。其の三は、類話を引いてエピソードとしたものが有る事である。此等の文例は、旣に鎌倉時代文學新論に揭げて置いた。

語彙文章

最後に語彙、文章に就いて略述しよう。語彙の上から云ふと、「いまそかり」「侍り」の如き敬語を濫用してゐる。一見中古式の文體のやうで、實は「おろ〳〵」「さうなり」「いざさせ給へ」の類、「彼講師と云はよな」の「よな」の如き、語詞の上には、最早時代の下降してゐる狀が爭はれない。「あやしき姿容にそびき」の「そびき」（四段活用）にしても、さうである。文章は駢儷を事とし、朗詠などの成語のクォーテーションに努め、又往々七五のリズミカルの所さへ有り、飾り過ぎ、凝り過ぎて、却つて厭味を生じたものもある。其の得失は總て鎌倉時代文學新論に詳述した。要するに粘りけに富む閑居友のスタイルと同一轍で、たゞ規模はそれよりも大きくなつてゐる。

(8) 唐物語

刊本

唐物語二卷は、續群書類從物語部に收められてゐる。又、淸水濱臣の校本が行はれてゐて、餘程參考となる。抑〻此の物語の事は、古書に徵證が乏しく、濱臣の說のやうに、伊勢物語知顯抄に見えるだけである。此の書の作者は、何とも分つて居ない。西行上人筆の書を寫し傳へたとも云ふから、西行以前の書のやうであるが、そんなに古い物とは信ぜられぬ。濱臣の說く所は、室町中葉の物と思はれる漢故事和歌集に、各條先づ此の物語の歌を引き、永久四年百首、蒙求和歌、夫木抄等の歌を列擧してゐるから、蒙求和歌以前の書であらうし、文體歌調が西行や定家以後のものとは見えないと云ふのであるが、これとて推測に過ぎぬ。又此の物語は一名蒙求和歌だと云ふことの誤は、

著作年代

最早辨ずる迄も無い。それから續類從本の識語に、文永元年仲秋云々とあるから、著作年代は漠然とはしてゐるが、文永元年以前であるのは認めてよからう。併し其の年紀の下の藤在判とあるのを、孝範卿と旁書したのは、後人の妄で、孝範では年齡上首肯出來ない。其の事は鎌倉時代文學新論に述べた。

說話と其の出典

此の書は支那說話中、廿七條の史談、文學談を收めたもので、單なる直譯で無く、餘程我に同化せしめてゐる。其の出典は濱臣の校本に調べてゐる。商山の四皓は、史記の留侯世家から、朱買臣

は漢書から、王子猷は晉書から採つたといふ風である。又列仙傳から採つたのに、蕭史があり、高士傳から採つたのに、許由がある。白氏文集の琵琶行、長恨歌、陵園妾、上陽人から出たものの存するのは、却つて文學の說話化で、さういふ傾は既に今昔物語に見えるが、注目すべきものである。夙に我が文學上の好題目となつた王昭君の如きもある。娥皇女英の如く、續古事談所見の物と共通の話題の存するのも面白い。廿七條中、張文成の事と雪々(犬の名)の事とは、濱臣の考へ得なかつた所であるが、前者は遊仙窟渡來と共に行はれた傳說かも知れぬ。又後者は搜神記や後漢書に見える高辛氏槃瓠說話と類型のものである。

此の書の文章は、前にも一言したやうに、寧ろ自由な翻譯で、原文に對照すると、取捨の手心が能く分る。作者の意匠は和歌の挿入に認められるが、此の點が頗る日本的である。又佛敎思想の加味せられた所もあつて、いかにも近古時代の風體である。語法上の觀察を以てしても、大體鎌倉時代文學たる見當が附くのである。思ふに、今昔物語をものして包容力の偉大を示した我々の祖先は、又支那說話だけを我が物顏に取扱つた此の書をも貽した。當然の事とは云へ、なか〳〵興味が有る。

* * * * * *

茲に序乍ら一言添へて置く。別に藤原孝範の唐鏡と云ふ書が存する。此は大鏡や水鏡の仕組に則とつた支那歷史談であつて、廣義には說話文學と目し得るが、此の研究には一切之を省くことにし

無住

た。(其の要領は、鎌倉時代文學新論に述べてある。)

(9) 沙石集

沙石集は無住法師(大圓國師)の著である。無住の傳記は僧師蠻の延寶傳燈錄卷第十及び其の本朝高僧傳卷第廿三に出てゐる。本朝高僧傳のを拔くと左の通である。

釋一圓。號ニ無住一。(考、又名道曉)相州鎌倉縣人。梶原氏。其先世仕ニ源將軍一。曉幼齡喪レ父。依ニ常州親族一。十九投ニ州之山寺一。薙髮稟具。此時教門名德太半在ニ東關一。曉習ニ倶舍頌疏於幸圓僧都一。(著者曰、圓幸の誤。)聽ニ法華玄義於法身大德一。二十七適ニ上之長樂寺一。依ニ藏叟譽公一。參禪之暇。聽ニ釋論及圓覺一。踰ニ二年一謁ニ園城實道法師一。質ニ止觀之旨一。又趨ニ南京一。持犯開遮盡得ニ其蘊一。居ニ菩提山一五載。遡ニ徊密水一。傍通ニ法相玄致一。凡當時講說之場。莫レ不ニ經歷一。後見ニ聖一國師於東福一。問ニ經論奧義一。服ニ其資深一。就ニ弟子列一。遂受ニ禪要一。文永初。尾州木賀崎剏ニ長母寺一。禪教兼弘。圓性篤誠。靈異尤夥。熱田明神屢入レ室問レ法。賜以ニ般若全函一。一時久旱。邑人請レ曉法雩。三日之後雷雨大沾。藤相國崇ニ其道行一。下ニ鈞帖一董ニ東福一。三請慇懃。曉固拒不レ受。正和元年十月十日終ニ於桑名蓮華寺一。辭世偈曰。一漚浮レ海。八十七年。風休波靜。依レ舊坦然。嘗著ニ沙石集十卷。聖財集三卷。雜談集十卷。小鑑(著者曰、妻鏡の誤。)一卷一。今皆行ニ于世一。(大日本佛教全書に據る。)

又尾州志にも傳記を載せて居るが、尾張八事山の僧諦忍が無住國師道跡考（明和七年版）といふ年譜を編してゐるのが、師承の關係等最も委しい。其の要點を鎌倉時代文學新論に轉載して置いた。此等の傳記に徴すると、東國出身であること、顯密禪教兼學の道人たること、撰述の少く無いこと、長壽を保つたことなどが分る。

無住が沙石集を著した因緣は、左の如き自序が有るので、明白である。

自序

夫狂言綺語、ミナ第一義ニ歸シ、治生産業、シカシナガラ實相ニソムカズ。然ハ狂言綺語ノアダナル戲ヲ緣トシテ、佛乘ノ妙ナル道ニ入レ、世間淺近ノ賤キ事ヲ譬トシテ、勝義ノ深キ理ヲ知シメント思フ。是故ニ、老ノ眠ヲサマシ、徒ナル手ズサミニ、見シ事、聞シ事、思出ルニ隨テ、難波江ノヨシアシヲモエラバズ、藻鹽草手ニマカセテ、カキアツメ侍リ。カヽル老法師ハ、無常ノ念々ニオカス事ヲ覺リ、冥途ノ歩々ニチカヅク事ヲ驚テ、黄泉ノ遠キ路ノ粮(カテ)ヲツヽミ、苦海ノ深キ流ノ船ヲヨソフベキニ、徒ナル興言ヲアツメ、虚キ世事ヲ注(シル)ス。時ニアタツテハ、光陰ヲオシマズ。後ニヲヒテハ賢哲ヲハヂズ。由ナキニ似レドモ、愚ナル人ノ、佛法ノ大ナル益ヲモサトラズ。和光ノ深キ心ヲモシラズ。賢愚ノシナコトナルヲモワキマヘズ。因果ノ理サダマレルヲモ信ゼヌタメニ、或ハ經論ノ明ナル文ヲ引(ヒキ)、或ハ先賢ノ殘セル誡ヲノス。夫道ニ入ル方便一ツニアラズ。悟ヲヒラク因緣コレ多シ。其大ナル意(コヽロ)知レバ、諸教義コトナラズ。修スレバ萬行ノ旨、ミナ同キ

者ヲヤ。是故ニ、雜談ノ次ニ、敎門ヲヒキ、戯論ノ中ニ、解行ヲ示ス。此ヲ見人、拙キ語ヲアザムカズシテ、法義ヲサトリ、ウカレタル事ヲタヾサズシテ、因果ヲワキマヘ、生死ノ郷ヲイヅル媒トシ、涅槃ノ都ニイタルシルベトせヨトナリ。是則愚老ガ志耳。彼金ヲ求者ハ、沙ヲアツメテコレヲトリ、玉ヲ翫ブ類ハ、石ヲヒロヒテ是ヲ瑩ク。仍沙石集ト名ク。卷ハ十ニミチ、事ハ百ニアマレリ。于レ時弘安第二之暦、三伏之夏之天集レ之。林下貧士無住

趣旨

卽ち之を觀ると、淺近の語を以て說法をし、世俗の談を以て方便としたもので、卷末の述懐にも、無益の雜談に代へて、此物語を見たならば、和光の意を知り、佛陀の惠を仰ぎ、僧寶の德を敬ひ、因果の理を信じて、終に臨終正念を失はないであらうと言つてゐる。随つて此の書の性質は明白である。題號の意も亦右の言で能く分る。事は百に餘つたといふのは、概數で、精密に計へると、左の如く百廿五條である。

條數

卷一	一〇	卷二	一〇	卷三	八	卷四	八	卷五	二二
卷六	一九	卷七	一六	卷八	一六	卷九	九	卷十	七

著作年紀

中には脫稿後增修の爲に、條數の殖えた卷もある。扨弘安二年と云ふのは、起草の年紀で、卷尾には、「弘安六年中秋草畢」とあり、「此物語書始事者。弘安二年。其後打置テ空經ニ年月一。今年續草レ之。云々」と斷つてあるから、弘安六年(西紀一二八三)が脫稿の時である。而して同年から十年後

の正應六年（永仁元年）並に永仁二年、同三年、乾元二年（嘉元元年）に書寫した旨の道慧の奥書が存し、乾元二年には、之を道證上人に交附したのである。然る處、脱稿後も裏書の加筆があつて、第二の卷には、「永仁三年十一月二十一日、此書文字有レ誤少々書入度事候マヽニ、滿七十ノ老眼ヲ拭テ、惡筆ナガラ少々裏書仕候畢。云々沙門無住」といふ奥書があり、又第四、第五の兩卷には、德治三年、無住八十三歳の署名がある。卷四には其の年の述懷歌が書加へられて居るし、卷五には第廿一條の人之感有歌及び第廿二條の連歌事の數葉が補足せられて居るのである。

此の書の古寫本で、予が直接閲覽したのは、内閣文庫本と帝國圖書館本とである。前者は殊に注目すべきもので、第三冊の餘白に、「天文十一年追月十四日書畢之」第四冊の餘白に、「天文十二年三月廿七日書畢」とあるから、天文年間の古寫と思はれる。筆者は分らない。判紙本十冊の片假名本で、第一冊乃至第五冊並に第九冊は、細字で十行若しくは十一行に書いてあり、其の他は大字で六行に書いてある。書式は宣命書きの混用である。此の本で最も注意すべきは、卷末に「裏書云」と、別文の有る分がある。然るに流布本には、此の裏書を本文中に混じた形迹がある事で、例へば流布本卷第一下、「依二和光之方便一止二妄念一事」の條に、「ユメ幻ノ世上ノ事、心アラン人ウタガフベカラズ。」の次に、「梁ノ武帝ノ時ムサウ有ケリ。云々唯識論文此心ナルベシ。」と十行に亙つた文句があつて、さて「樂天云」と續いてゐるが、此の寫本には、梁ノ武帝云々は全く無くして、其の分卽ち卷末

の裏書に合致するのである。

帝國圖書館本は、粘葉綴の平假名本で、寫手も書寫年代も不明であるが、字體の鮮明な物である。內容は刊本同樣である。

右の二種の外に、京都帝國大學附屬圖書館所藏古寫本が藤井乙男氏の校註沙石集（昭和三年六月刊）に紹介せられた。此は高野山の僧快秀が金剛峯寺五室菩提院で、長享三年七月中旬から同年八月十七日迄に寫したもので、明德二年十二月十日康賓が石住寺で寫した本が原本となつてゐると、前記內閣文庫の天文本より古い物で、一層結構である。惜しい事には卷七が一冊缺本となつてゐる。此の本は流布本と語句の異同が著しい。藤井氏が校註本に校勘せられたのは、喜ばしい事である。

刊本で古いのは、活字本で、「慶長十乙巳年仲春下浣八日　圓智校讐」とある物で、一面十行の片假名本である。此は嘗て東京帝國大學附屬圖書館に藏せられてゐた。又其の再版が元和二年に出來てゐるが、此は松井簡治氏が藏せられる。小山田與淸の八談類語の如きは、此の種の活字本を用ゐてゐる。流布の版本では、慶安五年版の平假名本、正保四年及び貞享三年の片假名本が有る。中でも貞享版が最も世に行はれてゐる。此の片假名本は古本の面影を傳へたもので、假名はマを二、オを才、セをせ、ヌを又とし、漢字にも古い體を用ゐてゐる。尙、明治以後の活版本は數種有る。

〔補〕　右の正保四年版の事は、昭和八年一月の書物春秋に、「古版物餘談」と題して記載して置いたから、其のまゝ左に示さう。

貞享三年版よりもずつと古い片假名本に、正保四年版がある。平假名本の慶安版よりも古いわけである。卽ち奥に、

正保四暦仲冬吉日

室町通鯉山町

小嶋彌左衛門開之

とある一本である。是も此の頃では見ることの少い版本である。（尤も此の本の事は、昭和三年版の藤井博士の校註沙石集の解題にも紹介してある。）此の正保版は、本文が十一行であるが、貞享版は十三行にしてゐる。但、毎行の字詰に變りは無い。又貞享版には、各條に一、二、三等の番號を附けてゐるが、其は正保版には無い事である。要するに、兩者本文は一致するが、版式は違つてゐると言はなければならぬ。

卷の次第　偖、進んで內容の吟味に移らう。此の書一部十卷、各卷を上下に分けてゐる。卷の次第は大體秩序が立つて居て、卷一は神明の事、卷二は佛菩薩の事、卷三は言說の事、卷四は女人の事等、卷五は學匠の事、和歌の事、卷六は說法の事、正直忠孝の事、卷七は愚痴、嫉妬、愛執、慳貪の話、卷

八は鳥獸の話等、卷九は遁世談、卷十は往生談といふやうに見ることが出來る。其の性質は見方によつては、佛教文學であり、又說話文學である。

内容の特徴　神佛混淆思想

内容上の特徴を述べると、第一に、神佛混淆思想の著しい事である。開卷第一、大神宮の御事に就いて、「内宮、外宮ハ兩部ノ大日トコソ習傳ヘテ侍レ。」と云つて、

内宮ハ胎藏ノ大日、四重曼荼羅ヲカタドリテ、玉カキ水カキアラカキナンド重々也。カツヲ木モ九アリ。胎藏ノ九尊ニカタドル。外宮ハ金剛界ノ大日、或ハ阿彌陀トモ習侍ル也。

と、眞言の意を以て釋き、又、

我朝ニハ、和光ノ神明マヅ迹ヲタレテ、人ノアラキ心ヲヤハラゲテ、佛法ヲ信ズル方便トシ給ヘリ。本地ノフカキ利益ヲ仰ギ、和光ノチカキ方便ヲ信ゼバ、現生ニハ息災安穩ノ望ヲトゲ、當生ニハ無爲常住ノ悟ヲ開クベシ。

と、本地垂迹、和光同塵の信仰の利益に言及してゐる。かう云ふ思想が殆ど常態であるのは、撰集抄にしても、宴曲にしても、當代文學共通の現象である。

佛教思想

第二に、佛教思想の廣い事が目につくのである。前にも述べたやうに、無住の人と爲りは、顯密を兼ね、禪を主としてゐる。さういふ立場であるから、當代の佛教文學に淨土教を旨とした物の多いのに較べて、此は一宗に偏せずして異彩を放つて居るのである。卷一の末章には、淨土門の批評

をして居り、卷二の彌勒行者事には、眞言の功德を述べて居る。又卷三の首章には諸宗の事を說いて居る。卽ち「法相宗ニハ、三性ノ法門ヲ立ツ。偏計、依他、圓成也云々。」「天台智者大師摩訶止觀ヲ說テ、圓頓行者ノ觀心ノ用意ヲ、シヘ給ニハ、初ヨリ實相ヲ緣シ、一念三千ノ觀ヲ凝メ、色香中道ノ理ヲ達スル故ニ、無緣ノ智ヲモテ、無相ノ境ヲ緣スト釋シ給ヘリ云々。」「禪門ニハ直指人心、見性成佛トイヒテ、釋尊言說ノ方便ヲモテ、一代ノ敎門ヲ說終テ、事ヲエテ最後ニ、我ニ正法眼藏涅槃妙心アリ、汝ニサヅクトテ、迦葉ニ付屬シ云々。」と、全然法門の講談である。就中無住の崇めたのは禪宗で、卷五には之を讃嘆した所がある。卷二の不動利益事の條に、

道德的敎訓

古德ノ口傳ニハ、不動ト地藏ノ力ラ、ハナレテハ、生死ヲ出事ナシトイヘリ。地藏ハ大日ノ慈悲ノ極リ、不動ハ大日ノ智慧ノ極リナリ。世間ノ萬物、陰陽ノ和合ニヨリテ生長スルガ如ク、出世ノ菩提、悲智ノ方便ニヨリテ成就スベシ。云々

とある。かう云ふ風に、どこまでも說法の態度である。談義の文學である。

談義の文學は期する所敎訓である。第三に、道德的敎訓の事項の尠く無い事を數へなければならぬ。由來佛家の戒律は、道德と離れないのである。「凡ソ物ノ理ヲ知ト、知ガ如ク行ズルハ道コトナリ。サレバ過ヲシリテ過ヲアラタメ、理ヲワキマヘテ理ヲミダラザル、實ノ賢人智者ナルベシ。」卷三」ト云つてゐるが如き、又孔子の物語と標して、儒教思想を敘べた如き、若しくは「仁義禮智信

ノ五常ヲマボリ、國ヲヤスクシ、民ヲアハレミ、人ノワヅラヒ、物ノツイヘヲシリ、欲スクナク、情アルベキニ、仁惠アル人ハ末代ニスクナクコソキコユレ。（卷九）」と歎息してゐるが如き、全く世道人心を裨補しようとしたのである。其の卷六に正直忠孝の談話を掲げて、積極的に之を勸め、卷七に貪瞋癡の物語を示して、消極的に之を懲らした如き、此の方面の用意の程は、十分酌取られるのである。

和歌と佛教との融合

第四に、和歌の德を述べてゐる事も注目せられる。無住は殊に佛說を以て融合してゐる。是亦彼の個人的思想と云ふよりも、寧ろ時代的である。「大日經ノ三十一品モヲノヅカラ三十一字ニアタレリ。」と云ふやうな勿論傅會の言も見えるが、

和歌ノ一道ヲ思トクニ、散亂麁動ノ心ヲヤメ、寂然閑靜ノ德アリ。又言スクナクメ心ヲ含メリ。惣持ノ義アルベシ。惣持トイフハ卽チ陀羅尼也。

と云つてゐる所に、彼の心境が能く浮出てゐる。

出典

說法談義の筆に、多くの經論を用ゐてゐる事は、こゝに絮說するまでも無いが、所收の說話もかなり古書と交涉を有してゐる。今昔物語に在るのと同一の說話が是に見えるのもあり、袋草紙に基づいたのもあり、明に發心集から採つたのもあり、又十訓抄、古今著聞集、私聚百因緣集と共通のもある。例へば卷三の小兒之忠言事の中の元啓の話は、今昔物語卷九第四十五話、私聚百因緣集卷

六第十話に在ることで、兩書のは原谷となつて居る。卷五の惠心僧都が和歌を好むやうになつた說話は、袋草紙卷三に在ることである。發心集との關係は、發心集の條下に述べた通である。それからやはり卷三の小兒之忠言の事の中の一門三賢の話は、今昔物語卷九第四話、發心集第六第四條、百因緣集卷九第九話に共通する所である。卷五の種々な歌物語には、十訓抄や古今著聞集に存するのと同樣なのがある。

實說

併し別に資料を仰がない當時の實說も頗る多い。卷二、鎌倉のかなやき佛の條に「マノアタリヲガミテ侍リシ。」といひ、卷六、袈裟ノ德事には、年號月日を明記し、卷七、依二愛執一成レ虵事には、「近キ事也。名ヲ示シカドモ、ハヾカリ有テシルサズ。」と云つてゐる類である。

關東に關するもの

それから我々の注意を惹くのは、無住が東國出身である爲に、おのづから關東方面の話が多い事である。「上總國高瀧ト云フ所ノ地頭、熊野へ年詣シケリ。」といひ、「常陸國中郡ト云フ所ニ堂有、藥師如來ヲ安置ス。」といひ、「甲斐國ニ嚴融房トイフ學匠有ケリ。」といふ風に、最早中古式話題とは甚だしい距離を生じて來てゐる。

興味有ること

所收の說話には、なか〳〵興味の有るのが存する。卷二第十條の南證房の撿挍寬海の轉生を語つた本生說話、卷四第六條の頸縊(クビククリ)上人の妄念の話、卷七第一條の眠正信房の興言等、人物も事件も、一寸他の書で覓い得ないやうな味がある。卷二の觀音や地藏の靈驗談にしても、又卷七の諸說話に

しても、頗る民衆的で、今昔物語や宇治拾遺物語よりも一段とポピュラアである。

滑稽

其の興味、其のポピュラリティーが、更にユーモアを帶びたものに至つては、正に沙石集獨得で、後の徒然草を起す素地ともなつてゐる感じがするのである。滑稽味は宇治拾遺にも、著聞集にもあるけれども、例へば此の書の巻二の地藏菩薩種々利益事の中の勸解由小路の地藏の一條の如き、事件の錯誤が滑稽の要素となつたもので、面白みたつぷりである。又巻六の能說房說法事の條の酒を沽(ウ)る尼の話の如きも、豫想に反する事を滑稽の料にし、旁〻落語めいた筋で、眞に面白いのである。又巻四の信州鹽田の上人が三人の子にをかしい名前を附けた話にしても、巻五の圓幸教王房が世事に迂濶であつた話にしても、皆をかしみの多いもので、殊に圓幸のは、坊主と小僧といふ形式の、スモールスケールの笑話であるが、巻七の慳貪者事の中の或山寺の房主が粘桶(アメヲケ)を秘して毒だと云つたのを、小兒(コチゴ)が竊に其の物を食ふ話も、其の形式で、此はやがて能狂言の附子(ブス)の粉本となつただけに興味津々である。

メールヘン

それから巻五の學匠之蟻螭(タニ)之問答ノ事の條には、二三の印度式ティーヤメールヘンが存する。蛇、龜、蛙の話(大智度論から)猿の生肝の話(佛本行經から)の如きである。又鼠の嫁入の話が巻八に在るが、此は定まつた果報の譬喩譚である。

用語文體

此の書の用語は、國語史料として尊重すべきものがある。例へば「學ス」「行(ギヤウ)ズ」「葬ス」のやうな字音の動詞の多いこと、「タテ〳〵シ」「カタハシク」(不具)のやうな珍しい形容詞の有ること、「勇猛(ユミヤウ)

ニ」「強盛ニ」のやうな副詞の使はれてゐること、助詞「を」の所を、「の」としたもの（「眞如ノ離言ノ觀ジ」の類）のあること等である。文體は俗談平語を主としてゐる。此は「田舍ノ山里ニ生長テ、文章ニモクラク、歌道ニモウトク、」と自記してゐる所であるが、それが却つて時代に卽した本當の文章を産出した結果となつて、文學史的に面白いのである。其の代表的文體は、鎌倉時代文學新論に示して置いた。それから無住は滑稽的表現に一種の手腕を持つてゐたが、其と同時に諷刺の筆意をも得てゐた。サタイアに富んだ文例も、既に右新論に示してある。

(10) 雜談集

刊本

雜談集十卷も無住法師の著である。延寶七年版が行はれてゐる。此は片假名本で、文章には宣命書きの所が多く、漢字には呵を哥、養を羪としたものなどがあつて、古本の面目を存してゐる。

著作年紀

卷一の終に、「嘉元二年甲辰六月廿四日於二尾州山田庄長母寺一草了沙門無住七十九歲」とあり、又卷七の終に、「嘉元二年十一月十日於二勢妙蓮花寺草庵一七十九歲」とあり、而して卷十の末に、左の跋がある。

先年沙石集、病中ニヲカシケニ書散シ、不レ及二再治一シテ、世間ニ披露、讃敗相半歟。本意只愚俗ノ佛法ノ結緣ヲ存スルハカリ也。本來智者ヲ敎導セント思フ心ナシ。又智者ハ万物ノ性ニ達ノ、邪正一如ノ理モ、善惡不二ノ道モ、其心ヲ得ル事ナレハ、自己ノ智惠ヲモテ、ヨク〳〵通ノ、感シ思

ハム人モナトカナカラムト思心ニテ、病中ニ草スレ之ヲ。後哲察シニ愚意ヲ一。不レ可ニ棄置ク一。助成シ添削メ、流ニ通世間ニ一アラハ、黄壤ノ下ニテモ、一笑遠爲ニ法友ヲ一、常ニ同ニ行化ヲ一者歟。于時嘉元三年乙巳七月十八日於ニ尾州山田郡長母寺西庵金剛幢院ニ草了。

東寺末流金剛佛子道曉（俗年八十歲 僧臘六十二）（房號一圓 道號無住）

嘉元三年乙巳壬十二月二日於ニ万德寺ニ書寫畢　執筆慈眼書之

趣意 卽ち弘安六年に沙石集を草し了へてから、廿二年目の嘉元二年に起稿し、翌年竣功したもので、述作の趣意は凡俗の結緣の爲であること、沙石集と變りは無く、其の續篇のやうなものである。但、量は其よりも寡い。

內容 此の書の內容は、無住自ら「此物語雖ニ雜談ニ。多是述懷也。」と云ひ、「雜談ト云ナカラ、法門多ク記レ之ヲ。」と云つてゐる如く、或は述懷し、或は談義したものである。殊に卷三の愚老述懷は、全く自家の體驗談で、Autobiography を成してゐる。(諦忍は之を道跡考の資料とした。)**法談** 法談は頗る多方面で、自力他力事、假實事、凡聖不二事、養性事、中道之事、梵字功德事等さま〴〵であつて、佛家の說に偏せず、道家、雜家の言(卽ち支那哲學的思想)に近いものも尠く無いのは、沙石集と變らぬ。同集と同一の題目には袈裟事、地藏事等も有る。

說話 此の書も沙石集同樣、說話文學の性質を帶びたもので、中には洵に罪の無い滑稽談や童話も含ま

れてゐる。猿の報恩談（卷二）の如きである。又「マメ祖」「物クサ祖」兩爺の説話（同卷）は物眞似失敗のメールヘンで、宇治拾遺の瘤取と同一タイプである。或僧が小僧を欺いて、白干（シラボシ）を剃刀であると祕した話（同卷）は、小さかしい小僧に見透されて失敗に終るスモールスケールな笑話である。卷三の永超僧都の事は、古事談に據ると自記してゐるが、卷九の空也上人と松尾明神との事は、發心集から得たこと必定であると想はれる。又卷四の泣尼の話が古今著聞集のと類似であるのは面白い。而して支那説話、印度説話も攝取せられてゐる。唐の法華傳から得た法宗上人の發心談の如き、又出典を擧げてないが、阿育王が佛を供養した話の如きである。

此の書は沙石集同樣、國語史料としても價値が有るが、其の點は鎌倉時代文學新論の方に讓つて置かう。

(11) 眞言傳

刊本

眞言傳七卷は、旣に正保三年版、寬文三年版があるが、今は大日本佛教全書本（大正六年十二月刊）が行はれてゐる。此の書には、左の跋が附いてゐる。

跋

此シルシ集侍ル事トモハ、ナヘテ皆人ノシレル事ナレハ、其詮ナク侍レトモ、本ヨリ廣學碩量ノ人ノ爲ニセス。淺學寡聞ノ輩ハ、自ラ聞キ殘ス事モヤ侍ソントテ、是ヲ書出侍リ。三國ノ先哲德ヲカクシ

智ヲシツメム人ハ、其靈異外ニ不レハ顯、內證計リ堅ク侍ルヘシ。多ハ德行ノ物ニ令ムルヲレ蒙見テ、祕宗ノ信ヲ取ル習ナリ。一念隨喜、皆佛因ヲキサストイヘレハ、ナトカ其益モ侍ラサラントテ、碑文行狀傳日記物語等ノ中ニ要ヲヒロヒテシルシ載侍リ。本朝ノ事ハ鳥羽院ノ比ヲヒマテヤ、佛法王法モ侍リケン。保元ノ亂ヨリ後、諸道皆衰テ、佛法ノ威驗又ナキカ如シ。是ニヨリテ大ムネ近衞院ノ在位、久安仁平以前ノ事ヲ撿セリ。其後モ自門他門ノ輩ノ中ニ、サスカ效驗ヲ施セル人モ侍ラメト、世クタリテノ事ヲハ、是ヲ略シ書ノセス侍リ。但慶圓上人、高辨上人ハ、近世ノ人ナレトモ、其行學靈異、古ヘニ不レ耻ルニヨリテ、彼上人計リハ書加ヘ侍リ。又管見ノ身、ヒロク尋普ク勘ニ及ハサレハ、入ルヘキ人ヲモ入レス。可レ載ス德ヲモ不レ載事多ク侍ルヘシ。異朝ノ事ハ其本傳等ヲ尋、吾朝ノ事ハ其門人ノ說ヲ受、其法流ノ人ニ問テ、スヘカラク是ヲ書加ヘ侍ルヘキ也。見人ノ覺リ安カラン事ヲ思故ニ、是ヲ和語ニヤハラケテ、詞ノツタナキヲカヘリミス。偏ニ幼稚短才ノ人ノ爲ニ、正中二年六月三十日、是ヲ抄シオハリヌルニナン。

小野末資榮海生年三十八

此の跋に據つて、三國の先哲を傳したこと、碑文行狀傳記類を資料としたこと、我が國の事は主として久安、仁平以前を採つたこと、和文を以て記したこと、正中二年（西紀一三二五）卽ち鎌倉最末期の著述であること、著者は僧榮海であること等が、遺憾無く分るのである。

僧榮海は東寺長者補任（群書類從補任部所收）の元德二年の條に、「權僧正榮海八月廿一日加任長者」とあり、翌年の條に、「權僧正榮海月日辭長者」とあり、越えて康永四年の條に、「長者前僧正榮海正月四日寺務并法務宣下」とある人で、師蠻の本朝高僧傳卷十七に、左の如く略傳を立てゝゐる。

釋榮海。大舍人藤俊業子。母大江氏。有七兄弟。大半出家。歸顯密宗。爲紺苑英。海幼聰敏。就父讀書。既及爲人。志崇佛乘。入醍醐山。從慈尊院聖濟僧正。稟灌頂法。達諸密部。初住慈尊。傾隨心院。移高雄神護寺。敕任僧正。貞和元年春正月。補東寺長者。當時名賓多遊其門。東寺杲寶爲承稟之首矣。

賛曰。海公著眞言傳七卷。上自傳來八家。至諸師士庶。而授之密也。身行之練也。有靈感者。雖不載叙也。余多採之。獨憾公之德蹟不存而已。

併しこれだけでは榮海の生歿年も分らず、事蹟も不十分である。尙、杲寶との關係は、右の書の東寺觀智院沙門杲寶傳の中に、

稚投東寺。稟賓巖院賴寶法印。後住小野。面拜榮海。傳灌頂法。尋受諸尊印契儀軌。

とあるのを見較べて分る。

以上は一通り鎌倉時代文學新論に述べた所であるが、更に榮海が編む所の儀避羅鈔を披閲して、得る所があつたから、こゝに補訂を要する。該抄は權大僧都尊潤の奧書に見える如く、儀軌本經諸流

の口傳等を類集したもので、十九卷から成つてゐる。かう云ふ大編纂をした事蹟が、本朝高僧傳の如きに漏れてゐるのは惜しい。而して此の鈔に依つて、更に正中二年後の行狀の知れるのが喜ばしい。該鈔卷十五の奥に、「嘉曆元年十一月十三日。鈔ニ出之ニ了。云々」とかなりな長文を以てし、「小野末資法印權大僧都榮海生年四十九」と署し、それに續けて、「建武二年二月九日於ニ高雄坊ニ再治レ之或依ニ師傳ニ載ニ口決ニ或廻ニ案立ニ多載ニ祕義ニ不レ可ニ披露ニ」として署名して居る。又卷十九の末には、「建武四年三月廿八日於ニ神護寺慈尊院ニ抄ニ書之ニ了最祕　以心灌頂傳持沙門榮海生年六十」といふ識語も書附けてゐるのである。尙、卷七や卷八の終には、建武五年二月云々の識語も有り、卷九には同年七月云々のも有り、卷十には、「建武五年六月一日拭ニ朱汗ニ染ニ紫毫ニ于レ時頹齡六十一可レ哀〻榮海」とさへも有る。是に由つて正中二年の翌年嘉曆元年から建武五年迄前後十三年該鈔に鞅掌した事歷が分るのである。就いては、嘉曆元年が四十九歲、建武五年が六十一歲である以上、眞言傳を書いた正中二年は四十八歲に當るから、三十八歲といふのは誤として、訂さなければなるまい。それから榮海の法流を示した血脈が該抄中に三件、卷末の添書に一件出てゐるが、聖濟から承けてゐることは共通してゐる。聖濟の外に、尙、賢俊から承けてゐるのもある。又前に引いた東寺長者補任の康永四年は六十八歲に當る。其の年三月廿日の東寺拜堂日記次第（續群書類從釋家部所收）も傳つてゐる。其の後の經歷は、探るに由も無いが、尙一つ附記して置くのは、彼が淸水靈驗記と云ふ小册を書いてゐ

る事である。其の奥に、「此記者勸修寺慈尊院僧正榮海草也。先師雙圓上人對僧正被錄中件子細。僧正卽被役之了。　正平七年壬辰二月十日記之。」（署名は無い。）と有る。其の正平七年が確に榮海の擱筆の時とは限らぬが、若し其の年迄存命したならば、七十五歲である。

組織

以下此の書の內容の事に移るに、先づ其の組織は頗る整つてゐる。卽ち卷一は眞言の七祖記、卷二は主として陀羅尼及び仁王經の事を經とし、天竺、震旦、本朝の事蹟を緯として組立て、卷三は傳教、弘法、慈覺、智證、常曉等所謂將來八家の列傳、卷四乃至卷七は役優婆塞を首とし、泰澄、行教、聖寶、相應、日藏、明達、淨藏、慈惠、證空、仁海、皇慶、增譽、永觀、慶圓、高辨等多數の僧侶を列載し、中に淸和天皇、小野大后宮（歡子）の如く、天皇、皇太后をも收め奉り、又敦光朝臣、越前國司男の如く、往々士庶をも交へてゐる。之を實質上、傳記集と見るは勿論であるが、尙

說話文學としての價値

又今昔物語や私聚百因緣集に準じて、こゝに說話文學の範疇に入れて考へることは、敢て不當ではないと信ずる。此の意味を以てすると、卷二の隨求陀羅尼、尊勝陀羅尼及び千手陀羅尼の功德を語つた諸說話の如き、又仁王經の威力を語つた諸說話の如き、頗る注目に値する。而して卷三の常曉の事の如きは、入唐五家傳（續群書類從傳部所收、又大日本佛敎全書の遊方傳叢書第一所收、元來餘程古い成立ちの書で今存するものは、東寺所藏延文二年賢寶書寫の物）に出てゐるが、こゝに見る所はかなり委しい。卷四の役行者の事は日本靈異記以下諸書に傳へられ、泰澄や日藏の事も本朝神

仙傳以下に見えてゐるが、此の書のは諸說綜合の趣がある。卷五の慈忍僧正の事は天狗說話で、今昔物語卷二十の震旦天狗智羅永壽渡ニ此朝ニ語を承け、後の謠曲善界に交涉を有する。又卷七の高辨上人の事は古今著聞集を見較べなければならぬが、謠曲春日龍神を考究する資料となる。

編纂態度

此の書は幾多の參考書を用ゐて編んだ物である事は、既に跋文を引いて述べた通で、殊に其の眞摯な態度は、異說を附記したこと、若しくは考證を附加したことで知られる。慈覺大師の條の終に、「或傳云」と記し、泰澄の事の如きは、「或說云」と再び說いてゐる位である。又大峰の條に、「私云」と、神仙傳や類聚國史を引いて道照和尚の事を論じ、又鑒眞和尚入峰の事を東征傳に據つて匡してゐると云ふ風である。而して敍事の繁簡の度合を檢するに、弘法大師の事は、何と云つても一番詳細である。「扶桑ニ生ヲ受ケ、眞言ニ志ヲ運ハン人、門執ヲワスレテ相承ヲオモクセハ、誰カ弘法大師ノ法流ヲカロシメンヤ。」と、己が志をさへ附言してゐる。大僧正行尊の傳も委しい。さうして元來榮海其の人が小野流であるから、仁海、成尊、範俊、勝覺、嚴覺、寬信等法流相承の人々を漏らすまいとした用意の程が窺はれる。さういふ點は亦究竟の佛敎史料たる所以である。

書式文章

此の書の書式は、大體古本今昔物語に見る如き宣命書きである。又漢字の用ゐ方も今昔物語風で、彌(チフサ)、頓(イツキ)、鎭(トコシナヘ)ニ、念比(ネンゴロ)ニ、莊(カザ)リタル馬の類であつて、私聚百因緣集や後の三國傳記と相通じてゐる。國文に返り字を交へた所も少く無いが、それよりも矣の字をそのまゝに用ゐて、原文が漢文である

といふ痕跡を留めてゐるのは、目に着く。それから語彙は中古語と趣を異にし、著しく時代語が入つてゐる。「奇峯雲ニソホヒテ」のソボフ、「車ハシ楊ニカクナ」のバシの類である。文體は概して今昔物語式であるが、表現上、著しく敬語を以てしてゐる。文章は素樸ではあるが、優麗な對句も交つてゐるから、形式美の認められる點がある。此の方面の文學史的觀察は、總て鎌倉時代文學新論に委ねて置く。

(12) 三國傳記

卷數

三國傳記十二卷は古版本が有るが、今大日本佛教全書所收の物（大正元年八月刊）が行はれてゐる。

著者

此の書には、著者の自序が附いてゐるから、撰述の次第や著者名が明であり、著作年代も大體分るのである。著者は沙彌玄棟と署してある。此の玄棟の傳記は、各種僧傳に探り得ぬ。尙、推測し能ふ點は、次に述べよう。

趣向

自序に、此の書の趣向が言明せられてゐるのは、最も注意すべきことである、先づ執政准三后（足利義滿を指す。）が文武を兼ね仁政を施してゐることを謳歌し、異國との交通の道に行はれて、月氏、震旦の眞俗の來朝する事に及んでゐる。さうして寓言を設けて云ふやう、爰に來朝した者に、天竺の梵語坊僧南蠻傳と大明の漢守郞俗魯國渡と云ふ兩人があつて、洛東清水寺に參詣した。其の比、江洲の和阿彌と云ふ遁世者が宿願の事があつて、同じく通夜し、期せ

ずして兩人と同席した。丁度八月十七日の宵であつた。和阿彌が口を切つて、月待つ程の慰に、巡物語を申さうと云ふと、漢守字郎（こゝには漢守字郎とある。）は之に贊して、古事を法樂に申さうと云ひ、梵語坊も亦「阿耨菩提法。皆無言說上言說加。則正遍知方便。薩般若善巧也。」と之に同じ、乃ち梵語坊から語り始めたと云ふのである。寺院に於ける會衆の雜談に託したことは、大鏡や寶物集の亞流と謂はなければならぬ。こゝに江洲の和阿彌と假構してゐるのが、著者玄棟をほのめかしてゐると解せられる。して見ると、玄棟は近江國の人であらうが、俗名の如きは分らぬ。此の書中に近江に關する事項が殊に多いのも、或はさうした因緣を示すのであらう。尙、試に臆測すると、卷十二の第廿一話は、一沙門の身の上を述べたものであるが、或は玄棟其の人の自叙傳かも知れないのである。

著作年代

次に著作年代に就いて考へるに、序文の初に、「應永初」とある。併し此は義滿の事に繫るから、直接著作年紀とは受取られぬ。處が淸水寺に參籠したと云ふ八月十七日は、辛亥年とあるから、是こそ手がゝりとなる。應永の初から辛亥に當る年は、正に永享三年（六代將軍義教の時代）である。それで其の比を以て撰述年代に擬せなければならぬと信ずる。

說話數

此の書は每卷各條、冒頭に「梵曰」「漢曰」「和曰」（曰を云若しくは言と書いてゐる所もある。）として、それ〴〵三國卽ち天竺、漢土、本朝の說話を交互に列載したもので、各卷の說話數は、左表の通である。

卷次	說話數	備考
一	三〇	
二	三〇	
三	三〇	
四	三〇	
五	三〇	
六	三〇	
七	二八	天竺、漢土の說話各一條を缺く。
八	二九	天竺の說話一條を缺く。
九	三〇	
一〇	三〇	
一一	三〇	
一二	三〇	

右の如く、各卷天竺、漢土、本朝各十話宛計三十話を收めるのを常例としてゐるが、どういふものか、卷七に二條、卷八に一條を缺いてゐる。それで說話總數は三百五十七である。數量から云ふと、

說話概觀

今昔物語には一籌を輸するが、頗る豐富な内容を持つた一說話集である。其の說話の概觀を述べる

天竺部

に、先づ天竺の部分は、釋迦如來出世之事に始り、之に次ぐに、釋尊昔爲二大王一時求レ法事、微妙尼因位事、妙莊嚴王因緣事、地藏菩薩過去事、忍辱仙人事、商闍梨仙人事、鹿野薗鹿王事の如き本生說話や、須達長者事の如き信を起して佛の大檀那となつた傳說や、珠離比丘尼事の如き布施の功德談や、造二藥師尊像一延二五十年壽一事、阿育王破二獄舍一造二文殊像一事、憍薩羅國免二疫難一事、南印度小國造二不空羂索像一事の如き造像の功德談や其の他佛德の廣大な事、戒律を持すべき事、三寶歸依の事等勸化の資たる佛敎說話を集めて居る。

漢土部

次に漢土の部分は、孔子出生事、三皇五帝事といふやうな話題から始つて、秦始皇帝求二不死藥一事、和氏連城璧事、衞懿公事、莊周事、弘農楊震事といふやうな史談、故事が尠からず收められ、閔子騫事のやうな孝子傳說や後漢揚寶黃雀ヲ飼助事のやうな禽獸報恩傳說も有りはするが、やはり僧俗に亙つた佛敎傳說が頗る夥しいのである。卽ち晉法顯三藏渡二天竺一事、胡國山中四人僧修行不同事、得二貧女富貴一事、幷州增延法師事、天台大師事、玄奘三藏渡二天竺一事、廬山遠法師事、神母被二牛牽一到二佛寺一事、鎭盡依二法花懺法一延レ壽事、唐鄧侍郞蘇生事、法鏡禪師事、羅什三藏事、太山府君舊譯仁王經ヲ譽事、善無畏三藏圖二胎藏界曼陀羅一事、曇鸞法師事の類であり、民間の信仰談、蘇生談、往生談、造像談もかれこれ有つて、佛菩薩の靈驗、經文の威德に聯關して居るのである。

本朝部

更に本朝部は聖德太子事、神代昔事から始つてゐるが、名僧

に關するものが頗る多い。相應和尚事、空也上人事幷千觀內供發心事、弘法大師事、東大寺法藏僧都事、淨藏貴所事、驗眞和尚事、天台座主延昌僧正事、三井寺智興內供事、園城寺明尊僧正事、惠心院源信僧都事、笠置解脫上人事等である。又社寺の緣起を說き、若しくは其の靈驗を讃嘆したものも餘程多い。貧女有レ信得レ夫事卽ち淸水寺觀音靈驗事、熊野權現本緣事、粉河觀音本緣事、大和國長谷寺事、江州宇賀大明神影向事、丹後國九世戶文殊事、箱根權現和光利物事、山蔭中納言惣持寺建立事（觀音利生之事）丹後國成相寺事、春日大明神利生方便奇瑞事、和州片岡貧者往生事（當麻曼荼羅事）等である。此の如く佛教傳說が主たるものであるが、中には不知也(イサヤ)河狩人事の條のやうな忠犬傳說もあり、小野小町盛衰事のやうな文學傳說もあつて、異彩を放つてゐる。尙、特に本朝に關する談柄には、時代の比較的新しいものの存する事が看遁されぬ。卷二第六話、直冬東寺落書事、卷十第九話先代興廢事に北條氏滅亡を敍し、「先代ノ一族ナリケル夢中ト云フ禪師」が、行脚の次に相州禪門の館の址を訪うた事の如きである。而して卷四第九話、夢窓國師事も新しい部類として注目してよい。

出典

此等の說話の出典關係を考へるに、一體に今昔物語との交涉は緊密であると思ふ。天竺の部分で、滿財長者、須達長者嫁ヲ成ス事は、今昔物語卷一第十三話の文面に似てゐる。佛入二伽毘羅城一外道ノ邪破給事も亦同書卷一第十四話から得たであらう。併し勿論直接に諸種の佛典から得て來たものも多い

に相違無い。例へば須達長者事は、經律異相を檢すると、其の卷卅五（得道長者部第廿五）に、須達七貧後得レ食併奉二佛僧一倉庫自滿と題して、雜譬喩經下が引證してあるのを見るが、怖らくは此の雜譬喩經の文意を敷衍したのであらう。又忍辱仙人事は、諸經要集を調べると、其の卷十下（六度部第十八之三）に、新婆沙論を所依としてあるのを見るが、大抵此ういふ原典を參考したのであらう。

それから漢土の部分でも、やはり今昔物語に交涉を有するものが尠く無い。例へば神母被二牛牽一到二佛寺一事は、今昔物語卷七第三話の文と相通ずるものである。此の部も諸書から直接に得たものは、固より多いであらう。後漢揚寶黃雀飼助事は、搜神記卷二十に載つてゐて有名な話であるが、此の書の文面では、續齊諧記を參考してゐるやうである。次に本朝部では、貧女有レ信得レ夫事、癡女石山寺詣物言事等は、明に今昔物語に基づいて居る。江州增之翁事、老尼死後橘虫成事、武州入間川官首道心事等の如きは、發心集から採つてゐると想はれる。それから大江景宗讀二戀歌一事、僧行圓白山頭光拜事（長谷白山權現影向事）中納言長谷雄卿事の如きは、長谷寺靈驗記から得たものに相違有るまい。又春日大明神利生方便奇瑞事の珍圓僧都の話は、春日權現驗記第十六卷の璋圓の事から採つたのは毫も疑を容れない。尙、夢窓國師事（卷四第九話）は、文面の酷似から、「文和三年甲午十一月　比丘妙葩立レ之」と誌してある所の沙門永璵撰、天龍開山特賜夢窓正覺心宗國師塔銘（續群書類從傳部所收）を參酌したものと認める。かう云ふ新しい資料の用ゐられてゐる事は看過されぬ。

尚此の出典研究の上から一考を要することがある。其は太平記との交渉の問題である。此の書には太平記のエピソードと共通の談柄が種々存する。其の主なものは左表の如くである。

太平記	三國傳記
卷四、呉越軍事	卷六第十一話、呉越戰事
卷一、玄慧文談事	卷八第十六話、韓昌黎事
卷十三、干將莫耶事	卷十一第十七話、眉間尺事

兩者の文章を較べると、全く符節を合するやうである。其の何れかゞ其の一を借用したので無ければ、さういふ結果になるまい。それに就いて、予は此の系統を、太平記が先で、此の書が後であると認める。それは埋蠹抄に太平記の作製次第を傳へてゐる言が逐一眞實だとまでは考へないにしても、三國傳記が永享三年頃出來た時には、太平記は其以前最早編せられてゐたと信じてよいからである。之を要するに、此の出典研究からすると、此の書は一勞作であり、著者玄棟の博學の程も只管感ぜられる。

書式文章

尚、此の書の書式及び文章に就いて略述して置かう。其の書式は、漢文の格を交へた宣命書きである。其の點は私聚百因縁集に似てゐる。又其の用字に、折境(ノリソシ)、議心(アラマシ)、蔫(太平記にも用ゐられてゐる。)子、數、漢、勞(イタマシ)など珍しいものの存することも、百因縁集と相若くのである。文章は原書からの引

抄が多いけれども、著者自身の趣致ある筆力の認められるものが存する。左に一二の例を示さう。

靈神影向地形ニ望ハ疊嶂迴ニ遶リテ法性ノ空自ラ晴レ、碧潤旁ニ流テ禪定ノ水鎭ニ澄タリ。夕ノ嵐拂テレ松調下瞎ニ緊那羅カ琴上、曉ノ浪衝レテ峯ニ自韻二憍尸迦鼓一矣。……

西近江ナル青木ト云フ山里ニ入テ見レハ、前ニハ湖海漫々トシテ、後ニハ嵩山峨々タリ。心有ン者ノ尤モ住ムヘキ處ナレハ、爰ニ又山居シテ閇二柴ノ樞ヲ一、只聽二峽猿ノ聲ヲ一。坐シテ二繩床一空ク望二遠帆船一眺望有レ興ケレハ、……

價値

和漢梵三國に亙つた說話集として今昔物語に似た點に於て、又室町時代に入つてからの書である爲に、平安朝以降鎌倉時代を通（トホ）して、各種の說話文學を大成してゐる點に於て、而も說話文學界掉尾の大作たる廉を以て、此の書の價値の優れてゐる事は、誰も之を認めるであらう。

乙類　組織的のもの

(1)　蒙　求　和　歌

作者及び著作年代

蒙求和歌十四卷は、源光行が元久甲子之歲（元年）（西紀一二〇四）に著したもので、其は自序に明白である。光行は源氏物語の校本及び註釋を作つた名家で、鎌倉に居た折の模樣は東鑑に見えてゐ

る。其の子親行の事蹟と併せて、鎌倉時代文學新論に詳述して置いた。

蒙求和歌は續群書類從卷四〇五、和歌部四〇に收められてゐる。其の經濟雜誌社版は、小山田與淸本を底本とし、舊本で對照した上に、宮内省圖書寮本で字句を補つてゐる。此の小山田本と稱する寫本は、今は鳥有に歸したが、東京帝國大學附屬圖書館所藏美濃判二冊物であり、題簽に與叔、一枚目に小山田の印があり、最終に「治部卿定家」の名があつた。予は嘗て之を影寫して、今尙座右に備へてゐる。定家が治部卿であつたのは、建保五、六年の交で、元久元年から約十年後であるが、定家所持の本が次第に寫し傳へられて、此の本となつたのであらう。此の本の片假名は、キが丶、ホが子といふ風に古體であり、漢字も異體を交へ、書式に宣命書きの所もあり、漢字に旁訓の存すること、又漢字の隅に四聲の點を施してある事等、著しく古本の面目を留めてゐる。次に舊本とは、初、塙檢校が披見して續類從に編入したもので、原本は島原侯の秘本であると云ふ。此は小山田本と和歌に著しい違があり、且卷十四は内容が其よりも少い。予は此の舊本と系統を同じうし、而も小異の認められる一本を所有する。題簽に「蒙求之和謌」とある三冊の平假名本である。書式は註釋めいた所を、本文よりも下げてゐる。此の本には異本の對校がしてあるから、小山田本や舊本との比較研究に都合が好い。此の本の卷八、卷九、卷十四の條數の少いことは、注目せられる。内閣文庫にも、平假名三冊本があるが、予の所藏一本とは異同が存する。

根來本平家物語との交渉

此の蒙求和歌が根來本平家物語と交渉を有する事實は、文學史上閑却出來ない。卽ち同書第二册（第一末）第卅二段蘇武の條に、

同シ江ニムレキル鳧ノ哀ニモ返ル波路ヲ飛ヲクレヌル

と引いてゐる歌は、此の書第七旅部十首中の李陵初詩の歌に合ふのである。又其の續に、

ヘタテコシ昔ノ秋ニアハマシヤコシチノ鴈ノシルヘナラスハ

ト源ノ光行カ詠セシモ理トツ覺ル

と、作者迄も明記してゐるのは、此の書第三秋部廿首中の蘇武持節雁と題する歌に一致するのである。

蒙求

抑〻蒙求の書たる、唐の李瀚の撰で、古人の言行を列し、之を聲律に叅し、以て幼童に授けんとしたもので、毎行兩句の人名を注し、別事の記す可きは附叙し、東韻に起つて、毎韻四字、凡五百九十六句から成つてゐる。我が國で最も普通に行はれてゐるのは、宋の徐子光の補注本であるが、寧ろ古本に據らなければならぬ。其の意味で龜田鵬齋の舊注蒙求を善本と推さなければならぬ。蒙求が我が國に行はれた古い證は、三代實錄や扶桑集に存する。

光行の漢文學翻譯

一體光行は漢文學の日本化に努めた人で、此の蒙求和歌の自跋に記してゐるやうに、百詠十二卷（李嶠の）樂府五卷（白樂天の）を撰してゐるが、朗詠百首も彼の作だと予は認める。而して彼が單な

る翻譯を志さずして、とかく和歌に結びつけてゐる動機は、大江千里の句題和歌から感得したのに存するであらう。

蒙求和歌の編制

扨蒙求和歌十四卷の編制は、一卷に一部を立て、春部廿首、夏部十五首、秋部廿首、冬部十五首、戀部廿首、祝部十首、旅部十首、閑居部十首、懷舊部十首、述懷部廿首、哀傷部廿首、管絃部十首、酒部廿首、雜部五十首で、歌數總計二百五十首である。此の部立は歌集に則とると共に、朗詠集雜部の標題を加味してゐると思はれる。而して四季部の如きは、漢祖龍顏を立春、張敞畫眉を柳、張翰適意を立秋、原憲桑樞を時雨といふやうに、和歌の題を結びつけてゐるのは、變つた思ひ附きである。

價値

今、本研究の立場から此の書に對すると、歌書としての價値は寧ろ論外で、日本化せられた支那說話集としての問題である。原書たる蒙求がフェボリット サブゼクトを網羅した說話集として興味有るもので、それと同じ意味で、我々は其をトランスリテレートした此の書を迎へるのである。支那の說柄は早く邦人の詩文（懷風藻以來）に入り、又和歌（萬葉集このかた）に結びつき、更に傳說文學たる今昔物語にも攝取せられた。併し支那說話專門の文學は、此の書の外には唐物語位のものであるから、さういふ方面の物として尊重に値するのである。況や文章が單なる直譯で無く、筆意に雅致が有るといふ理由を以てしても、當代の一佳什たるを失はないのである。

(2) 古事談

此の書の事は、本朝書籍目錄雜抄の部に、「古事談六卷顯兼卿抄」と見えてゐる。編者として傳へられる顯兼は、村上源氏の人で、其の血統は尊卑分脈で能く分る。彼を中心として其の前後を示すと、左の通である。

宗雅（刑部卿從三　母雅信女　元久元三七卒）
　├顯兼（刑部卿從三　母八幡別當光清女）
　│　├具兼
　│　└行兼
　└顯清

又彼の經歷を公卿補任に徵するに、仁安三年十二月十三日叙位、承安元年正月十八日任加賀權守、元曆元年三月廿七日任左兵衞佐、建仁元年九月五日任齋宮寮頭、同三年五月四日以寮頭讓男行兼、十月廿七日任刑部卿、承元二年正月二日叙從三位、十二月九日辭卿とある。而して建曆元年三月三日出家し、建保三年二月、五十六歲で薨じたのである。彼の文學方面の事蹟は、新勅撰集に、

おのれなく心がらにや空蟬のはにおく露に身をくだくらん

と云ふ一首が收められてゐる外に、未だ委しい事が分らぬ。因みに、系圖に顯兼の母が光清の女とあるのは注目せられる。此の古事談中に、八幡故撿挍僧都成清（幸清の第十三子）の事が委しく見え

編纂年代

てゐるのは、母方の伯父であるから、さもあるべき事と思はれる。其の古事談編纂年代は、正確な傳が無いけれども、今分るだけの事を考へて見ると、次の續古事談の項に述べるやうに、同書は建保七年に完成してゐる。其の範となつた此の書がそれより古い作である事は勿論で、古事談所見の最新事實たる大納言法印良宴の雲居寺に於て入滅の一件の年紀たる建曆二年九月と、顯兼の歿年たる建保三年との前後四年間に書かれたので、顯兼の筆作として動かないものとすると、其の晩年期のものである。併し後人追加の不純分子が含まれてゐないとは限らぬ。

諸本

此の書は丹鶴叢書所收の物の外に、後の物では史籍集覽本と國史大系本とが著しい。集覽本は林大學頭藏本、北村湖元藏本等で校合がしてある。此の林本は條數の少い本で、例へば卷頭の稱德天皇に關する四個條、寛平法皇川原院渡御の條、花山院御卽位之日云々の條等、事實の極めて猥雜なものは、大抵存しないのである。此は少々疑はしいことで、原本が初からさうであつたのか、後、故意に之を略したのか、若し故意に略したものとすると、テッキストの價値が減少する次第である。とにかく一異本としなければならぬ。大系本は集覽本に準據してゐる。それから古寫本では、帝國圖書館所藏のを二種見たが、其の一の里見本と稱する方は、零本ながら、古本の影寫で、珍しい物である。尚、岡本保孝の況齋叢書第五十一冊に、古事談攷證があることを言ひ添へて置く。

編制

此の書が六卷となつてゐるのは、江談抄に準じたに違無い。其の編制は、

第一　王道、后宮　　第二　臣節　　第三　僧行
第四　勇士　　第五　神社、佛寺　　第六　亭宅、諸道

性質

で、其の順序の如き、いかにも國民的である。而して書籍の性質としては、本朝書籍目錄に雜抄としたのは洵に妥當で、諸書諸記錄から抄撮したに過ぎぬ。爲に純文學的價値が乏しい。文章も漢文の記錄體そのまゝの所もあり、假名交り文の條もあつて、一樣で無いことは勿論である。但、其の各條の並べ方には、多少心が注がれてゐるのを見受ける。其は王道の卷の如き、御歷代順にしてある。僧行の卷にしても概ね年代を逐うてゐるのである。それから各條の長短は極めて不揃で、長いのは十行、二十行に亙つてゐるが、短いのは僅々一二行で、事の頗る單純なのがある。

出典

此の書は雜抄であるから、引書を明記した條が相應にある。其の擧げてゐる所を拾ふと、續日本紀、浦島子傳、李部王重明記、敦光朝臣抄物、一條攝政記、九條殿遺誡、往生傳、純友追討記、爲憲記、經信卿記、師時卿記等正史家乘何くれと範圍が廣い。出典を明示しないものでは、江談抄から採つたものが尠く無い。其は淸和天皇先身爲レ僧事、融大臣靈抱二寬平法皇御腰一事、菅公託宣の詩の事の類である。此の書が原典から抄錄した態度なり程度なりは、既に鎌倉時代文學新論に一例として、顯基中納言の條が續本朝往生傳及び袋草紙を參酌した模樣を示して置いたが、尙、淨藏の八坂房に强盜の亂入した條を、原文と思はれる拾遺往生傳と比較しよう。

拾遺往生傳

天暦年中。大法師住ニ八坂寺一。強盗數十。忽以入來。大法師以レ音叱レ之。強盗徒然而立。木強不レ動。夜更已明。縛除解脫。強盗等作禮而去。

古事談

天暦比。淨藏之八坂房ニ強盗數輩亂入。而間燃レ炬拔レ劍瞋レ目。各徒立更無ニ其所作一。忽無ニ言語一。先後不レ覺。稍經ニ數刻一。更漏漸闌。殆以垂レ曙。爰淨藏啓ニ白本尊一。早可ニ免遣一者。于レ時賊徒適復ニ尋常一。致レ禮出去了云々。

之を以て見ても、原文の丸抜きといふわけでなく、私意を加へて敷衍してゐるものがある。

文學的に著名な條

文學的に著名な條々は、水江浦島子の事、川原院に融の靈の住んだこと、永長元年大田樂の事、小野小町の髑髏の事、實方中將貶謫の事、清少納言零落の事、あこやの松の事、染殿后が天狗に惱まされること、淨藏貴所鉢法の事、空也上人と松尾明神とのこと、書寫上人と神崎遊女之長者（生身普賢）との事、園城寺の鐘の由來、關寺の牛（伽葉佛化身）の事、西行の白峯詣等である。此等の話題は當代の說話文學にも大に交涉が存する。而して多くの條々の中、特に佛敎的色彩の濃厚なのは、仁海僧正の父が死んで牛になつたといふ輪廻談、參川入道は前生に唐娥眉山の寂照であつたといふ本生談、若しくは花山院が頭風を病まれた因緣談の類である。而して世俗談としては、東國修行の僧が雙六に負け、其の身を賭にした爲、取られて馬に替へられる話の如きがある。それから滑

稽談もいろ〳〵あるが、語戯に基づく所謂洒落で、其の點は宇治拾遺、古今著聞集等此の書の前後の作と一脈相通ずるものがある。卽ち隆國が宇治殿に參る時、本當の小馬に乘つて出入し、此は馬ではございません。足駄でございますから御免を蒙りますと言つたといふ單純な物もある。禪林寺僧正が宇治殿に、寶藏が破壞したから、修理を加へて給はるやうにと申入れた。宇治殿は正直に其に對する手筈をすると、僧正は、何といふ不覺な事であらう、そんな事で君の御後見も呆れたものだと云つたので、はてなと當惑すると、或老女が覺つて、其は腹中の損じたのを法の藏と云つたのでせうとの事に、なるほどと、御馳走を遣された。すると僧正は、材木を給つて寶藏の破壞を繕ひましたと申したといふ興味の有る話も出てゐる。要するに、此の一部は說話の數量も相應に有り、前後の說話集と重大な關係も保持してゐて、說話文學史上、逸すべからざる料である。

(3) 續古事談

此の書の事は、本朝書籍目錄假名の部に、「續古事談六卷」と出てゐる。編者は古來確說が無い。

著作年代

但、著作年代は其の跋で分る。卽ち、

フルキ人ノサマ〴〵ノ物語ヲ、ヲノヅカラ廢忘ニソナヘンガタメニカキアツメテ侍シ、忘レテ年ヲヘテ、ハコノソコニクチ殘レリ。イホリヲハラフ塵ノ中ヨリモトメデヽ、クラシカ子タル雨ノ

中ニコレヲシルス。ミヅクキノフルキアトヲアラタメテ、ヤマトアシ原ノコトグサヲカキナガス。コレ猶要ナキシワザナリ。ハヤクケブリトナスベシ。建保ナヽトセノ卯月ノ下ノ三日コレヲシルス。

とあるから、一旦脫稿したが、年を經て建保七年卽ち承久元年（西紀一二一九）に再治した趣である。

本文

此の書は古來廣く行はれてゐないから、注目すべき本々は少い。群書類從（卷四八七、雜部四二）に收められてゐるのは、屋代弘賢本、北愼言本で校合がしてある。

編制

此の書の卷數や組織は、概ね古事談に準じたもので、六卷である事は勿論、第一を王道、后宮、第二を臣節、（第三は缺本で惜しいが、僧行、勇士の部であらう。）第四を神社、佛寺、第五を諸道、第六を漢朝として居るのである。此の漢朝部を立てゝゐる點は、此の書の存在を意義有らしめる一の理由である。

性質

書籍の性質は、本朝書籍目錄に、假名の部に載せて、古事談とは別の取扱をしたのは剴切で、文體が違ふのである。

古事談其の他との交渉

此の書は材料を古事談に仰いでゐるものがある。今其の關係の一例を左に示し、併せて双方の文體比較の用としよう。

古事談	續古事談
知足院殿仰云。帝王以二慈悲心一可レ治レ國也。上東門院ノ被レ仰ケルトテ。故殿大殿令レ語給シ	帝王ハ、人ヲアハレミ、民ヲハグヽム心オハシマスベキ也。シカレバ一條院ハ、極寒ノ夜ハ、

ハ。先一條院ハ寒夜ニハワザト御直衣ヲ推脱テ御坐シケレバ。女院ナドカクテハト令レ申給ケレバ。國土ノ人民サムカランニ、吾カクアタヽカニテ寢タル。不覺ナレバトゾ被レ仰ケル。此事或說。延喜仰云々如何

御衣ヲヲシノケテオハシマシケレバ、上東門院、ナドカクハセサセ給ゾト問タテマツリ給ケレバ、日本國ノ人民サムカラムニ、ワレアタヽカニ子タル事、無慙ノ事也トゾ仰ラレケル。延喜御門モ、サムクサユル夜ハ、御衣ヲヌギテ、夜御殿ヨリナゲイダシ給ケルトイヒツタヘタリ。

又宇治殿頼通が、其の子堀川右大臣頼宗に紅梅を折つて歌を送つたことが見えてゐるのは、今鏡第四藤なみの上（梅のにほひ）に據つたのであらう。それから賴長の日記（台記）を引いてゐる如きもあるが、勿論引書に據らない當時の人の直談も交つてゐる。「八幡ノ別當戒信語リケルナリ。」とか、「社司（山王の）成信語リケルハ、」とか見えてゐるのが、それである。

支那說話

概して古事談よりも、文學的關係が少いが、著者が漢文學の素養を有することは、此の書に特色を備へしめてゐる。第二臣節の內には、論語や史記を引き、說苑の白龍魚服の故事なども存するが、此の好尙がエンラージせられて、漢朝の一卷が出來てゐるのである。こゝに著名な支那說話が収められてゐる。卽ち淳于髡が齊威王を諫める事、玄宗皇帝と姚崇、宋璟二人の諫臣との事、漢高祖天下を得る事、楊貴妃が尸解仙である事（長恨哥傳を引いてゐる。）董賢の事（男色のこと）張喩が貴妃

を愛念すること、粛宗皇帝の事、娥皇女英の事、白氏遺文任子行の事（妖狐のこと）漢文帝の事、丙吉、周勃の事、隱者の事（南史隱逸傳を引いてゐる。）徐孝克の事、陸法化の事等で、なか〳〵多方面に亙つてゐる。而して漢文帝の條に、保胤の言を引いてゐるが、此は池亭記（本朝文粹卷十二所載）の文句を採つたのは明である。又丙吉、周勃の條に、宰相入道俊憲の擬表の語を引いてゐる。著者の博覽の程が想ひやられる。

(4) 十訓抄

撰述の趣旨並に編制

十訓抄は著者の自序を有するから、撰述の趣旨並に編制も能く分り、著作年代も極めて明瞭である。序文に曰く、

夫世中にある人ことわざしげきふるまひにつきて、高き賤き品をわかず、賢なるは得多く、愚なるは失多し。しかるに今何となく聞見る事の、昔今の物語をたねとして、よろづの言の葉の中より、聊其二の跡を取て、よき方をば是をすゝめ、あしきすぢをば是を誡めつゝ、いまだ此道を學びしらざらん少年のたぐひをして、心をつくる便となさしめむため、試に十段の篇を分ちて、十訓抄と名づく。則三卷の文として、三餘の窓に置となり。（下略）

と。是に據つて、和漢古今の說話を資として、童蒙の爲に勸善懲惡の教を垂れようとしたもので、

十篇三卷としたと云ふ事が分明である。卽ち此の書の性質は敎訓を目的とした說話集であるわけである。說話集といふ意味は、自跋にも「抑なにはのことの葉のよしあしにつけつゝ、昔今の物語を集め見るに云々」と言つてあるのを併せ考へても、尙更了解せられるのである。それから著作年代

著作年代

は、自序の結尾に、

（上略）依レ之建長四とせの冬神無月の半の比、をのづから暇のあき、心閑なる折節にあたりつゝ、草の庵を東山の麓にしめて、蓮の臺を西土の雲に望む翁、念佛のひまに是をしるし終としかりとなむいへり。

著者の問題

とあるので、極めて明白である。此の建長四年（西紀一二五二）といふのは、內容の硏究其の他の上からも反證が無いから、確實としてよからう。次に少々困難なのは、著者は如何なる素性の人かと云ふ問題である。著者の自序で、東山の麓の草庵に於て念佛三昧に暮してゐる老翁とだけは分るが、其は果して何人であらう。本朝書籍目錄の如きも書名と卷數とを揭げたゞけで、著者を傳へてゐない。此の件に就いては、故鈴木弘恭氏の校正十訓抄（卷頭の添言）及び藤岡繼平氏の十訓抄考（今十

成季說

訓抄詳解に附載してゐる。）に三說を擧げて批判が加へてある。今之を參へ考へるに、一は橘成季說であるが、此は此の書と共通の事項の多い古今著聞集（後に詳述する。）の著者を以て、此の書の作

爲長說

者に擬したもので、確證の無い推測說であるのは勿論である。一は菅原爲長說で、正徹の淸巖茶話

(續群書類從和歌部所收)に、「拾訓抄は爲長卿の作かと覺る也。歌仙有職能書にて有し也。官の廳にて侍しかば、文をもて先とせしなり。おもしろき事共を書たる物也。我も持侍しを、新熊野にて燒侍しなり。」とあり、鈴木氏に從ふと、狩谷本の首にも、菅原爲長卿としてあると云ふ。併し爲長の歿年は、公卿補任や菅原氏系圖(群書類從系譜部所收)に、寛元四年三月廿八日とあつて、十訓抄の出來上つた建長四年より七年前に當ることや、又故佐藤誠實氏が此の書第十篇中の爲長の子長貞に關する書きぶりは、其の親の筆とは受取れないと說かれた事を考へると、爲長說も信憑せられない次第である。

二﨟左衞門說

尙一は六波羅二﨟左衞門入道說である。此は妙覺寺本(此の本の所在今不明)の奥書に、(狩谷本にも妙覺寺本云々と註してあると云ふ。)「或人云。六波羅二﨟左衞門入道作云々(長時時茂等奉公)」とある古傳に據るものである。此の長時は寶治元年から康元元年迄六波羅北方となり、時茂は康元元年から文永七年迄やはり北方に在つた事が、將軍執權次第(群書類從補任部所收)で知られる。建長四年は長時が在京の砌であつた。併し故井上頼圀氏が此の長時を作者であらうかと說かれたと云ふのは、首肯せられぬ事で、左衞門入道は長時や時茂等に奉仕した人であらう。身分が卑いかち、はつきり身許が分らないのである。とにかく右の三說中、此が最も意義があるけれども、其以上は今の所、何とも言へないのである。

諸本

此の書の寫本に就いて、鈴木氏の擧げられたのには、屋代弘賢校本、狩谷棭齋校本、片假名古鈔本、

井上賴圀藏本等であり、藤岡氏の擧げられたのは、東京帝國大學國語研究室本、望雲子十訓抄、和學講談所本、前田侯爵家本等である。版本では元祿以前の古版、元祿版（三種あると云ふ。）共に、今は希に見る所となつた。享保六年版繪入本が最も流布してゐる。校正十訓抄、國史大系本等多くは此の流布版本を底本としてゐる。又故石橋尙寶氏の詳解本は、數種の古寫本を用ゐて本文吟味をしてゐるから、見るべき點が多い。それから研究的の物で稍古いのは、岡本保孝の十訓抄典故攷（況齋叢書第十六册）であることを言ひ添へて置かう。予が右の古寫本中當て取調べたのは、國語研究室本であるが、梂齋本も同性質らしく、又是迄學者の注意しなかつた內閣文庫本も同系統の物である。尙、松井簡治氏や橋本進吉氏の藏本中にも、此の種の物が存する。今、研究室本の要點を一つ書きにして見ると、左の通である。

古寫本の特質

一、編制は五册。第一册は序と第一。第二册は第二、第三、第四。第三册は第五、第六。第四册は第七、第八。第五册は第九、第十。

一、十訓の名目が流布本と違つてゐるのがある。例へば第一可定心操振舞、第六可存忠信廉直旨事の類。

一、第五卷の末は和泉式部の稻荷詣に終つて、小野篁以下の事が無い。

一、語句の異同が尠く無い。例へば第八の隆家大納言の事の條に、「此によりて忍び得ざる事、女

にしもかぎらず、是等委は日記にみゆ。」とあるが、流布本は「委世繼にみゆ。」と結んでゐる。一、概して流布本は後人の手を經てゐるらしいから、校勘上此の種の古寫善本を顧みなければならぬ。

十訓の要綱

轉じて內容の事に移り、先づ著者が說述してゐる十訓の要綱を各篇の端書に據つて示さう。(以下主に流布本を標準として述べる。)

第一、可レ施ニ人惠一事(古寫本には可レ定ニ心操振舞一とある。)は、主として君臣の道を說いたもので、人君たるものは、寬仁で、刑賞を愼まなければならぬを云ひ、一般の人も、情を先とし、心ばせふるまひの優なるべきを勸めてゐる。(但、一般の云々は端書に無いが、說話部の文意を酌量した。)帝範、孝經の類を引いてゐるのは、著者の儒敎的立場が想はれる。

第二、可レ離ニ憍慢一事は、偏執にして頑固に、才能につけて他を侮り、愛着に絆されて我が主、我が妻子をよいと思ふなどは、皆憍慢であるから、之を戒めて穩便であるべきを勸めてゐる。

第三、不レ侮ニ人倫一事は、貧賤を慢り、不覺を慢りなどして、いふまじき言をいひ、すまじき業をふるまひ、却つて他の辱を受け、人に輕んぜられる事を誡め、且神祇をあなづり、佛法を輕んずるの非を說いて、敬神崇佛の意を道破してゐる。(但、神祇云々は端書に無いが、篇末の一節から採つた。)

第四、可レ誡ニ人上ノ事（古寫本には可レ誡ニ人上多言等ノ事とある。）は、「人の短をそしり、したることを難じ、かくすことを顯はし、耻がましきことをたゞす。これらすべて有まじきわざなり。」と、多言を誡めてゐる。

第五、可レ撰ニ朋友ノ事は、「善友にあはむ事をこひねがふべき也。」と云つて、荀子や顏氏家訓を引いて說いてゐる。而して朋友を廣義に解いて、妹脊のなからひに及び、妻を求める心得を諭し、牝鷄の晨するを誡めてゐる。（但、朋友云々は說話部から採つた。）

第六、可レ存ニ忠直ノ事（古寫本には可レ存ニ忠信廉直旨ノ事とある。）は、主として諫諍の道を示したもので、忠孝の本義を說いてゐる。

第七、可レ專ニ思慮ノ事は、「人は貴賤をいはず、物の心つかば、若くより、主に仕へて私をかへり見、家をおこし、身を立る道をよく案じて、何事に付ても身を安くせず、箕裘の業を宗として、其方の營を相はげむべし。」と、處世の道の忽にせられないことを言ひ、親が愛に溺れて子の行末を誤ることのあるのを誡め、「先有べからん振舞を用意して、そのうへ果報を待は、流に棹さゝんがごとし。」と說いてゐる。子弟の薰陶法を述べたものである。

第八、可レ堪ニ忍于諸事ノ事は、愁を忍び、苦を忍び、飢寒を忍んで、立身を圖るべきことを說いてゐる。中に、源信僧都四十一ヶ條起請（因みに、此は惠心僧都四十一箇條御詞と題して、大日本佛敎

全書の内、妙行心要集等と一冊になつてゐる。）第一段の「設雖ㇾ有ニ不ㇾ叶ㇾ心事ㇾ思忍全不ㇾ可ㇾ起ニ瞋恚ㇾ」を引いたり、六度の忍辱波羅蜜などの事に及んでゐて、佛教思想が餘程濃厚である。

第九、可ㇾ停ニ懇望ニ事、此の項目に就いては、豫め斷つて置かなければならぬ。其は既に鎌倉時代文學新論に述べたのであるが、世の學者で尚、心附かない人があるやうである。と云ふのは、此の懇望の懇の字は、古寫本では怨で、卽ち怨望である。怨望といふ熟字は、史記淮陰侯列傳の如きに用例が有る。此の項の端書にしても、說話にしても、皆怨望の意で、懇望に當ることは無い。それ故に是非とも可ㇾ停ニ怨望ニ事と直さなければならぬ。端書の本文に曰く、

或人云。人は心にあはぬ事あればとて、打たのむにもあれ、あひしたしきにもあれ、物恨のさき立まじき也。たとひ理運の事の相違もいでき、約束の旨の變改あるにても、さる樣こそあるらめと、心ながく忍び過したらんは、くねり腹立よりも、中〳〵はづかしく、いとをしくも覺えぬべきを、かなはぬ物ゆへ、いちはやくふるまへば、かへりてしらけもし、又はかなきふしによりて、大に悔しき事も出くる也。老子ののたまへる事あり、命をしれるものは天を恨みず、をのれを知者は人を不ㇾ恨と、誠哉此事。

と。之を熟讀して了解しなくてはならぬ。又說話中に、八苦の中の怨憎會苦の事をも言つてゐるのである。

第十、可㆑庶㆓幾才能㆒事（古寫本には才能の下に藝業の二字が加つてゐる。）は、「本より其道々の家に生れぬれば、さる事也。さなき類も、程〳〵に付ては、能はかならず有べき也。中にも氏をうけたる者、藝をろかにして、氏をつがぬ類あり。道にあらざる類、能によりて道にいたる德もあれば、氏をつがんが爲、道にいたらんがために、彼も是もともにはげむべし。」と云つて、能藝の修養を勸めてゐる。

以上十訓、更に之を摘むと、對他的に又自己的に敎を說いたものである。

對他的道德——仁（第一訓）　憍慢でないこと（第二訓）　輕侮せぬこと（第三訓）　多言せぬこと（第四訓）　子弟の敎育を誤らぬこと（第七訓）

自己的修養——心操の優なること（第一訓）　友を選ぶこと（第五訓）　忠信廉直（第六訓）　思慮の有るべき事（第七訓）　忍耐（第八訓）　怨まぬこと（第九訓）　修業（第十訓）

而して其の說き方は、積極的に勸奬するのと、消極的に禁戒するのと兩面が有る。皆是國民道德の要領に當て嵌つてゐるが、歸する所は、諸善奉行、諸惡莫作とも見られる。其の儒佛思想の浸潤してゐることの甚大なのは、今更言ふまでも無いのである。

此の十訓の立て方に就いて、藤岡繼平氏は十善業道經の影響を蒙るものとせられた。一體佛敎では、十波羅蜜（其の一に羼提波羅蜜卽ち忍辱の如きがある。）といひ、十種修三昧法（其の一に摧折

我慢の如きがある。)と云ひ、菩薩十戒、沙彌十戒乃至十善(其の内に不妄語戒の如きがある。)と云つて、規矩準繩を示すのに、十の數に調へたのがある。それで此う云ふ所から考へついたのであらう。

說話數

次に此の書に列載せられた說話の數は、流布本に毎條番號の符があるから能く分るが、其の數へ方には異論もあつて、石橋氏の詳解本はそれとは增減がある。

篇次	流布本	詳解本
第一	五六	五七
第二	四	五
第三	一九	一六
第四	一六	一九
第五	一五	一八
第六	三四	三七
第七	三二	三二
第八	七	一〇
第九	一〇	八
第十	五七	七九

槪して詳解本の段分けが精密である。其に依ると、總數二百八十一で、說話集としては頗る豐富な內容を有することが明である。此等多數の說話は、大抵諸書から得て來たもので、中には出典を明示してゐるのもある。第五篇の淺香山の歌物語は、大和物語に據る由が言明してある。又第一篇の伊勢物語の「みずもあらずみもせぬ人の戀しくばあやなくけふや詠くらさん」返し「知しらず何かあやなく分ていはむ思のみこそしるべなりけれ」に就いて、「此返哥宿はいづくぞといひたらんにこそかくはよむべけれ、さし過たるさまにやと俊賴朝臣いへり。委は彼口傳にみゆ。」と出典を明にしてゐる。卽ち俊賴口傳集に對比するに、其の事は合致してゐる。それから第一篇の山蔭中納言が龜を放生する話は、今昔物語がクェルレであらうし、第十篇中の都良香の事、淸原滋藤の事は、江談抄から出てゐることが突止められる。袋草紙に基づいたことの確に知られるのには、第七篇の俊賴の風の祝（ハフリ）の歌の如きがある。而して特に注目せられるのは、鎌倉時代に入つてからの作品を資料としてゐる物の尠く無いといふ一件である。第六篇の繪佛師良秀が不動明王を描く話は、明に宇治拾遺物語から採つたと認めてよい。(固より語句を多少改刪してゐる。)又第一篇の薩摩守忠度の事の如きは、今物語から得てゐること、兩々對照して疑を容れない所である。若し夫れ古事談との關係に至つては、頗る親密である。例へば、

古事談

一條院御時。臨時祭試樂。實方中將依ニ遲參一。不レ賜ニ挿頭花一。遂加レ舞之間。進ニ寄竹臺許一。折ニ吳竹枝一挿レ之。優美之由。滿座感歎。依レ之試樂挿永用ニ吳竹之枝一云々。(第一)

十訓抄

一條院御時、實方中將臨時祭の試樂に遲く參て、かざしの花を給はらで、藏人に加ふとて、竹の臺にすゝみよりて、吳竹の枝を折てさしたりける。めでたきよし人々ほめあひけり。是より後、試樂に竹の枝さすとかや。(第一篇)

右の如きを始め、妙音院入道土佐より歸洛云々(第一篇)の一條も、古事談第六の一節と符合し、顯基中納言出家の事(第六篇)も、同書第一の二個條を採つて繫いだものと見える。隨身公助に關する孝子談(第六篇)も、直接同書第六に據つたので、今昔物語の方から系統を引いたのではない。かやうに各種の資料を用ゐたのは、當時の說話文學に通有した事ではあるが、著者の博識も之を認めなければならぬ。

事實の不正確

然るに記載事實には、不正確の嫌の有るものが存する。例へば第四篇に、「春霞かすみていにし雁がねの今ぞ鳴なる秋霧の上に」の歌を、寬平歌合に、初雁を紀友則の詠んだものとしてゐるが、此は古今集には、題知らず、讀人不知であり、友則の初雁の歌としては、別に「秋風に初かりがねぞ聞ゆなる云々」がある。さうして顯昭の古今集註には、件の春霞の歌を躬恆の子の少童の作として

ゐるのである。それで友則の作とするのは洵に如何はしい。それから第六篇に「故郷の花の物いふ世なりせばいかにむかしのことをとはまし」を菅公の梅の歌としてゐるが、後拾遺集を見ると、世尊寺の桃の花を詠んだ出羽辨の作であるから、最も杜撰である。尚、第九篇に西行法師の歌として、「柴の庵に身をば心のさそひきて心はみにもそはぬ也けり」を出しゐるが、山家集を検すると、「吉野山梢の花を見し日より心は身にも添はずなりにき」や「歸れども人の情にしたはれて心は身にも添はずなりぬる」はあるが、さういふ上句の歌は見當らず、其の他の諸書にも旁證が無い。

教訓と說話との釣合

更に教訓と說話との釣合を見ても、悉く調和を得てゐるとは許し難い。單に趣味を主とした說話集とのみ見える點がある。第七訓の大伴黑主の條の如き、第十訓の五節舞姬の起原の如き、何等教誡の例話とは目せられぬ。例話が教訓の本旨に適つて無難なのは、先づは第二篇の如きであらう。

後人の追補

此の書は、古寫本に信憑すべき善本の有る事を既に述べたが、流布本には後の追補した不純分子が有らうと云ふことは、寔々も考慮に入れて置かなければならぬ。第一、第十兩篇の如きは、第二、第八、第九の三篇に比して、內容が多過ぎる觀がある。古寫本には第十篇の分量の少い物がある位であるから、流布本が其のプロートタイプから進展して、そこまでになつたであらうが、其の中間過程を示すやうな本は、今何處にも見當らぬ。

文章

最後に此の書の文章に就いて一言して置かう。第一に認むべきは、語彙が多樣で且豐富な點で、

雅致の有る國文調に多くの漢語と佛語とを調和せさせてゐるのである。正に當時の新文體完成期の一代表作と謂つてよい。而して句を進め、文を行るに當つて、漢土、佛教の故事を引用して、對照する所、全く平家物語の如きと同一筆意である。依つて以て文章の光彩を添へ、文氣に力を帶びしめてゐる。宇治拾遺物語とは趣致が違つてゐる。著者の博學と才筆とは、特に各篇の端書だけ見ても想察せられるであらう。

(5) 古今著聞集

古今著聞集は著者の自序（漢文）並に自跋（國文）が有るから、撰述の趣旨及び編制、著者の人柄、著作の年紀等總て此の上も無く明白である。先づ序に、「夫著聞集者。宇縣亞相巧語之遺類。江家都督清談之餘波也。」と云つてゐるやうに、宇治大納言物語（今昔物語）や江談抄の亞流を以て自任してゐるのである。其の題名の著聞と云ふ語は、類聚名物考にも示してゐる如く、漢書の鼂錯傳に、「此大夫之所ニ著聞ー也。」とあるのが先例であらう。而して著者自ら跋に言ふ所は、左の如く更に委しい。

此集のおこりは、予そのかみ詩哥管絃の道〳〵に、時にとりてすぐれたる物がたりをあつめて、繪にかきとゞめんがためにと、石上ふるきむかしのあとより、あさぢがすゑのなさけにいたるまで、いろく勘へあまねくしるすあまり、他の物語にもをよびて、かれこれきゝすてず書あつむる

程に、夏野の草としげく、森の落葉かずそひ侍りにけり。これそこはかとなきこゝろことなれども、いにしへよりよき事もあしき事もしるしをき侍らずば、たれかふるきをしたふなさけをのこし侍るべき。これによりて或は家々の記錄をうかゞひ、或はところ〲の勝絕を尋ね、しかのみならず、たまぼこのみちゆきぶりのかたらひ、あまざかるひなのてぶりのならひにつけて、たゞにきゝづてに聞く事をもしるせば、さだめてうける事も、又たしかなる事もまじり侍らんかし。終に部をわかち、卷を定めて、三十篇二十卷とす。篇のはし〲にいさゝかその事の起りをのべて、つぎ〲にその物がたりをあらはせり。

撰述の次第

卽ち物語を書集めたのは、作畫の資に供しようとする爲であると云つてゐるのは面白い。さうして資料は家々の記錄を窺つたり、世間話を書留めたりしたと云ふので、此は序文の方にも、「頗雖ㇾ爲二狂簡一。聊又兼二實錄一。不三敢窺二漢家經史之中一。有二世風人俗之製一矣。只今知三日域古今之際有二街談巷說之諺一焉。」と言つてあるのである。其の三十篇二十卷と云ふのは、左の通である。

卷一　神祇第一
卷二　釋敎第二
卷三　政道忠臣第三　公事第四
卷四　文學第五

卷五　和歌第六
卷六　管絃歌舞第七
卷七　能書第八　術道第九
卷八　孝行恩愛第十　好色第十一
卷九　武勇第十二　弓矢第十三
卷十　馬藝第十四　相撲强力第十五
卷十一　畫圖第十六　蹴鞠第十七
卷十二　博奕第十八　偸盜第十九
卷十三　祝言第二十　哀傷第廿一
卷十四　遊覽第廿二
卷十五　宿執第廿三　鬪諍第廿四
卷十六　興言利口第廿五
卷十七　怪異第廿六　變化第廿七
卷十八　飲食第廿八
卷十九　草木第廿九

卷二十　魚蟲禽獸第三十

それから篇の端々に其の事の起を叙べたといふのは、右の三十篇の初に、それ〴〵小序の附いてゐ

著者

るのを意味する。次に著者は橘成季である。序に自署する所は散木士橘南袁であるが、此の南袁はナリスヱのナに南（ナン）、ヱに袁（ヱン）を當て、橘南袁（キツナンヱン）と音讀したものらしい。散木士の散木は莊子の語で、無用の材の意であつて、散木士とは散官の義である。又卷尾の識語（此の文は後に示す。）には朝清大夫橘成季と署してあるが、（此の署名は國史大系本にある。流布版本には缺く。）清は請の誤らしい。朝請大夫ならば從五位上の唐名であることが、拾芥抄官位唐名部で知られる。從五位上相當の散官といふだけで、身許がはつきりせず、系譜は橘氏系圖を探つても分らぬ。又固より扶桑拾葉集系圖にも、明示してゐない。併し琵琶を習つたり、繪を好んだりした多能の才人であつたことは、自記で判明する。其は序に、「余稟二芳橘之種胤一。顧二璅材之樗質一。而琵琶者賢師之所レ傳也。儻辨二六律六

著作年代

呂之調一。圖畫者愚性之所レ好也。自養二一日一時之心一。」とある通である。次に著作者年代は、序の終に、「于レ時建長六年應鐘中旬」とあり、跋にも亦「建長六年十月十六日、をはりの宴になずらへて、詩哥管絃の興をもよほす云々」と、竟宴を開いた事迄こま〴〵と記して居り、更に奥に「建長六年十月十七日宴後朝右筆記レ之。當時凍雲片々。青嵐漠々。滿レ籬之殘菊。黃紫交レ色。引レ砌之小泉。鴛鴦雙レ翅。閑庭之物。足レ動二我情一者也。」といふ洵に風雅至極な識語さへ認めて居るから、最も能く分

るのである。それで十訓抄の出來た建長四年十月中旬から滿二年後に、此の書が成就した次第である。

諸本

此の書の流布版本は、元祿三年刊繪入廿冊本である。それから史籍集覽本は流布本に對校するに、帝國圖書館所藏古寫本を以てし、日本文學全書本は故小中村清矩氏校本を對校用とし、國史大系本は集覽本及び故佐藤球氏所藏古寫本を參酌してゐる。帝國圖書館本は、流布本の脫字、脫文を補ふに足るものであり、小中村本は、元祿版に朱と藍とで書入をした物で、「殿の御本と木村正辭の本とを見くらべて本文をたゞし」た由の奧書がある。殿の御本とは、紀州藩徳川家の祕本である。佐藤本は、嘗て同氏に聽いたのに據ると、三緣山の舊藏本で、流布本と大差の無いものだと云ふ。特に紀州本が異彩を放つてゐる事は、間接乍ら承知せられる。例へば興言利口第廿五の泣尼の一條の如きは、流布本に無くて、此の本に存するのである。尙、帝國圖書館所藏古今著聞集類標は檢索用として究竟の物である。

組織

偖、進んで內容の事に移るに、其の組織の整然たることは注目せられる。卽ち其の篇目は今昔物語や古事談よりも遙に緻密で、順序も神佛政教を初とし、世俗雜事に及んだのは、洵に行屆いて居る。其の名目は、神祇、釋敎、哀傷のやうに、旣に歌集に用ゐられたのを採り、又宿執、鬪諍、變化のやうに、佛語として慣用せられたのに據つてゐるが、此の篇目を一目見ても、說話の種類が八

生のダークサイドにも亙つてゐることが分るのである。而して說話を列載するに先だつて、各篇に小序を附けてゐるのは、著者の學殖、識見を想はせるものがある。例へば管絃歌舞第七の小序は、左の通である。

管絃のをこり其つたはれる事久し。清明天にかたどり、廣大地にかたどる。始終四時にかたどり囬綻雨にかたどる。宮商角徵羽の五音あり。或は五行に配し、或は五常に配す。或は五事に配し、或は五色に配す。凡物として通ぜずといふことなし。又變商變徵の二聲あり。合て七聲とす。又調子品その數おほしといへども、清濁のくらゐみな五音をいでず。讃佛敬神の庭、禮義宴饗の筵も、この聲なければ其儀を調へず。故に興福寺の常樂會、百花匂をくり、石淸水の放生會、黃葉衣におつ。しかのみならず淸涼殿の御遊には、ことごとく治世の聲を奏し、姑射山の御賀には、しきりに萬歲のしらべをあはす。心を當時にやしなひ、名を後代に留る事、管絃にすぐれたるはなし。

又遊覽第廿二の小序のやうに、漢文を以てしたのもある。即ち

周覽之遊。其興太多。春有二万樹之花一。夏有二百尺之泉一。秋有二千里之月一。冬有二數重之雪一。各就二勝地一。彌添二氣色一者也。

の類である。其の才學、十訓抄の筆者と伯仲の間に在ると認められる。

其の羅列せられた說話に就いて觀るに、其の數に於て、宇治拾遺、十訓抄の類を凌駕してゐる。而して其の量の多大な事も、概略ながら他と比較して、左の結果を得るのである。卽ち國史大系本の頁數を示すと、

十訓抄　二二三頁　　宇治拾遺物語　三二五頁　　古今著聞集　四六五頁

である。其の說話の品種を察するに、神祇篇には、八幡宮の御夢想として、義時が八幡の後身であること、泰時がたゞ人でないことを稱してゐる。北條氏を謳歌したもので、時代の推移が卜知せられる。盲目の者が熊野權現に祈つて、到頭眼があいたとか、淳方といふ人が賀茂大明神のお告で前途を遂げたとかいふやうな、神祇靈驗談もある。又新羅明神を娑竭羅龍王の子と云ひ、住吉明神に高貴德王大菩薩を附會した話も見える。此は神佛混淆說の盛行を示してゐる。釋敎篇には、行基菩薩や傳敎大師に關する古い話も有るが、降つては、良忍上人や西行法師の事もあり、更に源空（法然）上人の事さへもあるのは、最も注目せられる。往生談は源空の事ばかりで無く、其の他にもあるが、又往生は人のみに止らず、魚蟲禽獸篇には、動物成佛說話も有る。佛敎思想が民衆を支配した程度も分るのである。それから宿執篇には、人の執心のいつまでも其の身を離れぬ話として、全舜法橋が臨終に、孝道朝臣に萬歲樂の序を所望した事や、又執心が死後迄も殘り留る話として、うへすぎの僧都が法慳貪の罪で、手の無い鬼となつた事や、或は千手院の廣淸は法華續誦の功で、極

樂往生を遂げたと、人の夢に示したが、其の墓では讀經の聲が斷えず、改葬の時も尙其の聲が聞えたといふ話もある。罪の深いといふ事を怖れた世相が偲ばれる。一體迷信の强烈なことは、既に今昔物語に反映せられてゐるが、變化篇には天狗や狐狸の種々な妖怪談が有る。それから別な方面で、好色篇には、當時の人情の察知せられるものが多い。刑部卿敦兼の北の方の話は、婦女の弱點を描いたものである。又御室の寵童千手、參川の事は兒物語として頗る時代的である。若し夫れ興言利口篇に至つては、宇治拾遺以上に滑稽味が多い。中には男女の情事に亙る猥雜な說話（度會の神主盛廣の事の如き）も含まれてゐて、却つて興を醒すのもある。武勇、弓箭、馬藝、相撲の諸篇に至つては、流石に日本的であるが、鬪諍に至つては感心しない。併し此の篇は深刻な話も無く、話數も尠い。說話集として、公事、文學、和歌、管絃、能書等の談柄の豐なのは、當然の事で、此の書ばかりでは無いが、公事は元來皇室中心の事であるから、最も日本的であり、詩歌管絃書畫に關する所謂藝能傳說は、中古以來著しく發展したもので、亦國民的である。併し其等が此の書の主要部分を占めてゐるのは、やはり著作動機に基づいてゐるものと信ずる。試に和歌篇を見ても、中古の歌談ばかりで無く、當代の說話が相應に加つて來てゐるのは、此の書を有意義ならしめてゐると見てよい。土御門院が御百首を定家にお見せになつた話は、後の增鏡にも採られてゐるが、それがこゝに存するのは面白い。又松殿僧正行意が大病の時、夢に志貴の毗沙門に詣でると、鬼神が一首の歌

を詠じかけた。其の聲が心肝に銘じたと思ふと、夢が覺めて、病氣も本復した。其の一首は家隆の作である。「彼卿の哥は諸天も納受し給ふにこそ。」と嘆稱してある。管絃歌舞篇にしても、やはり保延、久安等比較的降つた年代の話題が捉へられてゐる。「法驗ならねども、道達せる人の藝には、靈病も恐をなす。」といふ侍從大納言成通の話などは、注目せられるのである。

他書との交渉

偖、此等の說話が、從前の書と如何なる交渉を有するかと云ふに、著者自ら引用書を言つてゐるのには、日本靈異記、延喜御記、宇治左府御記、清少納言が枕草子等がある。尚、說話の出典の推定せられるものを擧げると、文學篇の後江相公（朝綱）の「前途程遠」の句を渤海人が稱した故事は、江談抄に基づき、和歌篇の元永元年六月、修理大夫顯季卿亭の人丸供の記事は、藤原敦光の柿本影供記を採り、承安二年三月、寶莊嚴院での和歌尙齒會の事は、藤原清輔の暮春白河尙齒會和歌並序に據つたのである。書圖篇の花山法皇が書寫の性空上人の形貌を寫さしめられた時、地震がしたといふ話は、法華驗記から採つたのである。又蹴鞠篇の泰通、宗長、雅經が後鳥羽院に此の道の長者と號し奉るべき由上表したといふのは、承元御鞠記（群書類從蹴鞠部所收）を資料とした事は、毫も疑を容れないし、哀傷篇の西行法師が歿した時、定家が三位中將と歌の贈答をした事は、定家の拾遺愚草下から得たらしい。而して相撲强力篇の近江高島の大井子の水口石の話は、恐らくは日本靈異記の道場法師の話から脫化したやうである。

特に十訓抄との關係

こゝに格別問題となるのは、十訓抄との間柄である。兩書著作の年紀は前に述べたやうに、僅に中一年を隔てゝゐる。後に出來た此の書が、前に出來た十訓抄を利用したとすると、十訓抄が世上に流布したことが、餘に速なやうに考へられる。併し兩々文面の對照を以てすると、文學篇の顯恭中納言の事、和歌篇の能因入道の事、孝行恩愛篇の養老孝子の事、隨身公助の事等、何れも皆十訓抄と文章が酷似してゐる。公助の條の如きはかなりな長文であるが、殆どぴつたりと合致してゐる。此等は或資料（A）から十訓抄（B）と著聞集（C）とが別々に抄錄したのでは無くて、どうしても十訓抄の跡を著聞集が踏襲したものとしか想はれぬ。即ち

A
↙ ↘
C　B

では無く、

A → B → C

の關係である。著聞集の公助の條には、結尾に「委しくしるすに及ばず。」といふ文句が附いてゐる。いかにも或成文を拔書したといふ口ぶりである。して見ると、次の二つの問題が起る。

一、成季は十訓抄の著者と交際があつて、割合に早く十訓抄を披閲し、さうして之を自家の著に編み交ぜたかも知れぬ事

二、著聞集は建長六年に一わたり脱稿を告げたが、其の後に至つて、成季か或は別人が、十訓抄を利用して増修したかも知れぬ事

である。第一が到底有りさうにないとすると、第二の方に傾かなければならぬ。今の著聞集は最初の稿本よりも、確に増修せられてゐることは、予の確信する所である。其の理由は外でも無い。魚蟲禽獸篇の末の方に、北叟の馬、孫叔敖の諫言、衛懿公の鶴、莊子の語等を收めてゐるのは、疑も無く十訓抄を採つたものであるが、此は著者が初、日域古今の談話を集めると云つた趣旨に外れてゐて、後人の所業であらうと思ふからである。其の掩ひ難い不手際を、「もろこしの事なれども、いさゝかこれをしるせり。」と辯解して、却つて自ら暴露してゐるのである。加之岸本由豆流が研究したやうに、鳴門中將物語（一名なよ竹物語）が好色篇に混入してゐるのは、後人の追補たるや勿論であると思ふ。

街談世說

此の書は亦出典を有しない所謂街談巷說の打聞が、なか／＼多いやうに見受ける。例へば次の如きである。

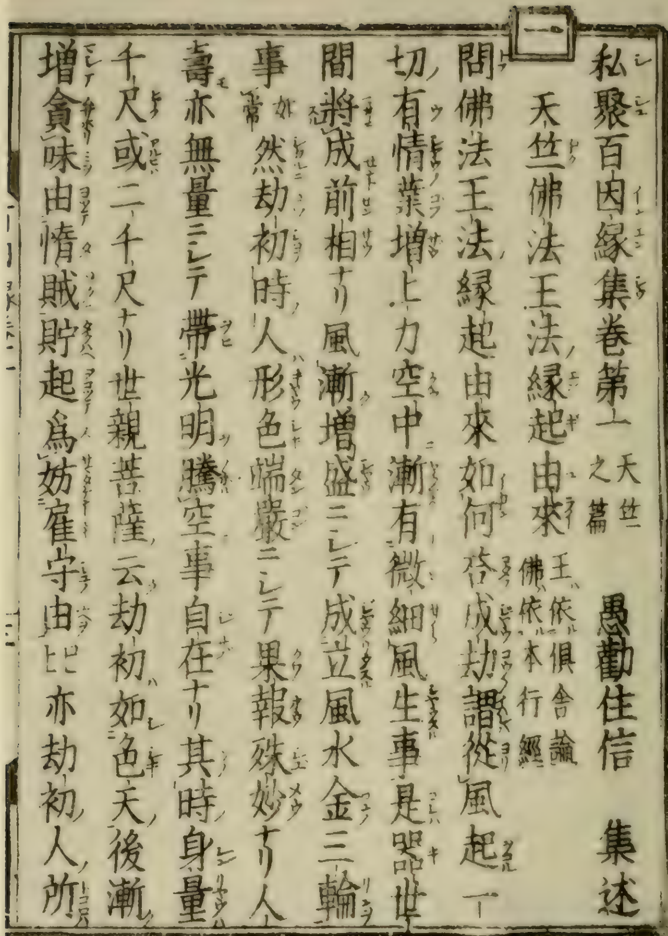
後鳥羽院御幸供奉人ども誠にえらばせ給て、御あらましに此定に御幸あらばやとて、信實朝臣に仰られて、三卷の絹繪にかゝせられけり。八條左大臣、光明峯寺殿、左右の大臣にて供奉し給へり。目出たき重寶にてぞ侍し。今は修明門院に侍とかや。此御幸御あらましばかりにて、實には

なかりけり。（畫圖篇）

女院小傳に據ると、修明門院は文永元年に八十三歳で崩ぜられたから、建長六年には七十三歳で御存命であつたのである。又繪師法眼賢慶の弟子の某法師の事を、「件の法師、攝津國宇出庄にいまだあり。」と云つてゐるのも、近い事を書留めたものである。好色篇中には、「建長五年の比」といふのもあり、博奕篇中には、「建長五年十二月廿五日」と明細に書いたのもある。如何に最近の出來事を採つて居るかゞ能く分るのである。

文章　最後に一言したいのは、文章の事である。語彙は漢語が比較的少い。文體は概して雅馴で、宇治拾遺ほど俗調に近づいてゐない。先づは十訓抄と相似たものであることは、既に擧げた文例でも分るであらう。例話を示した筆意に、「女はなをおそろしきもの也。」「すべてあらがひおこの事也。」「かやうの荒言はよく〳〵ひかふべき事也。」といふ風に、勸懲主義に捉へられてゐる傾があるのは、やはり時代思想を裏書するものである。

價値　之を要するに、此の書の眞價は、說話集として大作であること、時代の新しい說話の多いこと、而も其の說話が他書に類例の無いこと、又後世の何々著聞集と題する書の頻出を促した事等に存する。


私聚百因縁集巻第一　天竺一之篇　愚勧住信　集述

天竺佛法王法縁起由來　王ハ依ル倶舎論　佛ハ依ル本行經

問佛法王法縁起由來如何答成劫謂從風起一切有情業増上力空中漸有微細風生事是器世間將成前相ナリ風漸増盛ニシテ成立風水金三輪事如然劫初時人形色端嚴ニシテ果報殊妙ナリ人ノ壽亦無量ニシテ帶光明騰空事自在ナリ其時身量千尺或二千尺ナリ世親菩薩云劫初如色天後漸増貪味由惰賊貯起爲妨雇守由ヒ亦劫初人所

私聚百因集（刊本）

(6) 私聚百因緣集

私聚百因緣集九卷は、僧住信の集述に成つたものである。其の古版は承應二年の開版であるが、今大日本佛教全書本(大正元年八月刊)が多く行はれてゐる。此の書の題號は、佛典に則とつたもので、佛說因緣僧護經、付法藏因緣傳、撰集百緣經等が其の先蹤を爲してゐる。

〔補〕承應二年版の事を追錄して置く。それは書物春秋の昭和八年一月號に「古版物餘談」と題して、予の記した物の中から採つたのである。

此の書の古版には、承應二年の上村次郎右衛門版があつて、一見した事がある。佛教全書本だけでは滿足しかねて、始終氣にしてゐたのであつた。此の頃得た一本は、承應原版の覆刻には相違無いが、後刷と見えて、

承應貳年癸巳卯月吉辰　　　　開板

とあつて、「開板」の上の書肆名が無い。それは勿論版木を削つたらしい。併し此の種の物でも今日は坊間に乏しいのである。此の書の題簽は一寸面白い。卽ち第一卷から第四卷迄は

天竺百因緣集

とあり、又第五卷、第六卷は、

大唐百因緣集

とあり、而して第七卷乃至第九卷は、

日本百因緣集

とあつて、此く外題で內容を明にしてゐるのである。念の爲に版式を云ふと、一面九行の片假名本で、美濃版である。

序跋

此の書、附するに著者の序跋を以てしてゐる。故に著作の由來も年紀も極めて明白である。序に曰く、

抑衆生ノ機根ニ有ニ上中下一。如來ノ說法ニ設ニ法譬緣一ヲ。龍樹菩薩ハ眞如ノ妙理ニ立ニ凝然常住ト緣起常住一ヲ。當ニレ知萬法ノ由來。諸法ノ因緣。得法ノ門。開悟ノ道也。就レ中末法ノ遺弟。濁世ノ沙門。愚勸住信廻ニシ管見一。聚ニテ經論ノ衆文一ヲ。題シニ百法要文一ト。剩ヘ欲下記ニシテ梵漢和ノ希代一ヲ名中ント百因緣集上ト。是レ更ニ非レ慕ルニ廣才賢智之用一ヲ。爲下メ與レ我レ齊シキ小聞小見ノ之輩上ノ也。學者若シ見ハレ之ヲ。刻(ケツテ)レ非ヲ作セレ是ニ。愚者モ亦開レカハ之ヲ。捨レテ僻(アヤマリ)ヲ入レ直(ナヲキ)ニ。所ノレ經ル大旨在レリ云(コヽ)ニ。

と。又跋の偈に曰く、

凡百因緣集　東爲上中下　類聚諸因緣　一百四十七　愚勸住信等　四十八之歲

順彌陀願員　必成淨土業　非秘非不秘　但爲人演說　令悟因緣故　說人及聞者
四恩並法界　同生安樂國　共證大菩提　時暦正嘉元　丁巳七月中　於常陸集記

著者及び著作年代

と。是に由つて著者住信が正嘉元年(西紀一二五七)四十八歳の折、常陸國で此の書を集記したことや、百法要文の撰述のあることが了解せられる。其の他には彼の傳記資料が乏しい。此の書卷一第三話に、釋迦の往因を演べた終に、

于レ爰彌陀如來法藏比丘トシテハ爲ニ鈍根愚癡ノ衆生ノ發シ六八超世ノ他力眞實ノ本願ヲ給ヘリ。其本願ノ正行ハ南無阿彌陀佛也。其ノ念佛ハ不レ簡ニハ行住坐臥ヲ。不レ論ニゼ時處諸緣ヲ。不レ分ニタ有智無智持戒破戒ヲ。只上盡シ一形ヲ。下至ルニ十念一念ニ迄。其功不レ空カラ。託ニ生メ蓮華ノ臺ニ。開ニ悟ス無生忍ヲ。誰カ不ランニ依行ハ。能々思ニ量セヨ之ヲ。

と結んでゐるのを始め、一部を貫いて、念佛三昧、往生極樂の說話の多いのを見ると、佛教大辭彙に、彼を淨土門下博識の談義僧であらうとしたのは、洵に妥當である。其の愚勸と自ら冠稱を附けてゐる勸は、勸化の意に違無からう。

編制

此の書の組立は、卷一乃至卷四が天竺、卷五、六が唐土、卷七乃至卷九が和朝と類別してある。此く三國に亙つて組織的に說話を集めたのは、全く今昔物語に倣つたのであらう。卷數は「東爲ニ上中下ニ」とあつて、三卷であるが、細別して九で、其の九は、九品蓮臺に象どつたこと、

說話の品種

猶撰集抄の儔であらう。而して各卷の條數は、

卷一　二〇　卷二　八　卷三　二六　卷四　一九
卷五　一七　卷六　一九　卷七　七　卷八　六
卷九　二五

で、總數百四十七である。說話の性質は、佛教傳說が主體で、それだけ今昔物語のやうに多種多樣ではないが、却つて單一な所に特色が有る。其の天竺篇は、佛法、王法の緣起、釋尊の發心から始め、稱名念佛、極樂往生、孝順功德の說話を列載してゐる。中でも卷三が條數最も多く、話題は、長者、貧女、醜女、童子、猿、金翅鳥等各方面に亙つて居つて、皆起信歸佛の話で無いといふのは無い。殊に卷四の初の十條に、十大王の本地垂迹を列敍してゐるのは、注目に値する。著者は「十大王ハ者則チ十波羅蜜ノ因ナリ。十賢聖者十度之果也。思テ而可レ知。爲メニレ令ンガレ停ニ止十惡ヲ一現ニシ十官ノ形ヲ一。爲メニレ令メンレ修ニ習十善ヲ一顯ニス十佛陀ヲ一。是レ則チ誠ニメテ十獄ノ重罪ヲ一。彰ニス十利ノ感樂ヲ一。」と云ふ小序を添へて、之を收めたのである。佛教大辭彙の記者が、是に由つて我が國に傳へて居る十王經の古いことが分ると說いてゐる。次に唐土篇は、唐土の佛法、王法の緣起を首とし、惠遠、曇鸞、道綽、善導等の高僧傳を敍し、造佛、念佛、孝養の功德談を列ねてゐる。天竺篇よりは條數が少い。更に和朝篇は、やはり我が佛法、王法の由來に始り、聖德太子、行基、傳敎、慈覺、降つて

は恵心、永觀、法然の傳を列ね、最後の一卷に於て、特に多くの結緣往生談を集めてゐる。今此等に對して、說話學的觀察を加へるに、卷一第廿話、寶明童子事は、室町時代の草子法妙童子の所依であらうと、佛教大辭彙に注意してゐるのは、興味がある。其の他卷二第八話、堅陀羅國貧女事は、所謂大蛇式傳說で、長者の一女が、池の主たる大蛇の犧牲とならうとした處に、身を賣つた一童子が身代りになる。すると佛力によつて童子は難を免れ、遂に長者の女と婚して、末榮えたといふ筋で、卽ち宗教化したヘルデンザアゲである。卷三第廿一話、愚提女事及び同第廿二話、石子松子事は、毘沙門天の利生談であつて、御伽草子毘沙門の本地の如き物の前驅であるのは亦面白い。卷四第十四話、好惡長者事は、長者が財寶を投じて橋を架けた說話で、長者傳說の一である。卷七第四話、當麻曼陀羅事は、當麻曼陀羅緣起と共に、中將姬傳說のドクメントとせられるものである。それから卷四第四話に、書寫性空上人が神前長者(普賢菩薩の化身と稱する。)を見る說話が附載してあるが、古事談、撰集抄、十訓抄の類のと異同がある。さう云ふ次第で、佛教傳說の特異な物が含まれてゐるから、貴重な一文獻である。

今昔物語の影響

此の書を繙いて第一に感じるのは、陰に陽に著しく今昔物語の影響を被つてゐる事實である。其の相互類似の說話を示すと、左表のやうである。

私聚百因緣集	今昔物語
卷一第十三話、小兒佛ニ供ニ養メ土ノ麨コヲ一得ルレ報ヲ事	卷二第十四話
同　第十四話、兪山陀羅樹ノ事　(付卒都婆事親子事)	同　第四話
同　第十九話、恆意比丘ノ事	卷四第十話
卷二第一話、因果長者ノ事	卷一第廿六話
同　第三話、閻王ノ事	卷三第廿七話
同　第四話、釋尊出家發心ノ事	卷一第四話
同　第五話、目連弟俗捨ルニ慳貪ヲ一事	卷三第廿四話
同　第六話、滿財長者歸レ佛事	卷一第十三話
卷三第二話、大王醉象ノ事	卷四第十八話
同　第三話、須達賣ルレ升ヲ事　(付施僧並造寺事)	卷一第卅一話
同　第五話、探ニ角入一貧女事	卷三第十六話
同　第六話、慳貪女ノ事	同　第廿三話
同　第九話、千ノ猿供スルニ帝釋ヲ一事	卷五第廿三話
同　第十話、金翅鳥訴ニ子難ヲ一事	卷三第十話

同　第十四話、金剛醜女ノ事	同　第十四話
同　第十五話、羅云泣二ク王饍一ニ事	卷四第二話
卷四第十六話、佛在世五百盜人ノ事	卷一第卅八話
卷五第八話、惠鏡造二ッテ釋迦彌陀ノ像一ヲ見二ル淨土一ヲ事	卷六第十五話
同　第十話、僧道喩之事	同　第十七話
同　第十七話、并州元壽ノ事	同　第十八話
卷六第十話、原谷ノ事	卷九第四十五話
同　第十一話、節女ノ事	卷十第廿一話
同　第十二話、三州義士ノ事	卷九第四十六話
卷七第二話、聖德太子ノ事	卷十一第一話
同　第三話、行基菩薩ノ事	同第二話
同　第五話、智光賴光ノ事	卷十五第一話
同　第六話、傳教大師ノ事	卷十一第十話
同　第七話、慈覺大師ノ事	同　第十一話
卷八第一話、役ノ行者ノ事	同　第三話

同　第三話、僧(マヽ)賀上人ノ事	巻十二第卅三話
巻九第二話、佐世ノ妻女往生事	巻十五第四十九話
同　第九話、一門三賢ノ事	巻九第四話
同　第十話、无空律師ノ事	巻十四第一話
同　第十一話、延暦寺ノ明請カ事	巻十五第十話
同　第十三話、鑒眞和尙ノ事	巻十一第八話
同　第十五話、平燈供奉捨ニ名利ニ往生スル事	巻十五第十五話
同　第十六話、千觀內供ノ遁世ノ事	同　第十六話
同　第二十話、讃岐ノ源太夫ノ事	巻十九第十四話

右の如く多數である。其は素より必ずしも皆今昔物語の文章を踏襲したとは限らないが、今昔物語が此の書を產み出す母胎となつてゐることの注意を促したいと思ふ。勿論著者がもつと根本資料を用ゐてゐることは、聖德太子の事の如き、日本往生極樂記に據る旨を斷つてゐるのでも分る。

發心集との關係

更に進んで吟味しなければならぬのは、發心集との關係である。相互類似の說話は、大略左表のやうである。

私聚百因緣集	發心集
卷九第五話、花園ノ左大臣ノ事	第五第十話
同　第六話、后宮ノ半物(ハシタモノ)悲ニ僧正ノ入滅ヲ事	第六第二話
同　第七話、藏人ノ所衆爲ニ主上ニ入レ海ニ事	同　第三話
同　第八話、成通幼少ノ時止ニ驗者ヲ改請事	同　第六話
同　第九話、一門三賢ノ事	同　第四話
同　第十二話、大安寺榮好事	第五第十四話
同　第廿二話、山王ニ詣スル僧擔ニ死人ヲ許ス事	第四第十話

此の百因緣集の出來た正嘉年間には、長明の發心集と云ふ物は、最早流布してゐたと想はれる。此の書の卷九が特に右の如く發心集と交渉を有し、而も多くは文章が全く符節を合するやうである。それでどうしても發心集から採つたと肯定しなければならぬ。

出典の明示

此の書は概して出典を明記したものが多い。類纂の書としては、いかにも忠實である。例へば卷一第四話に、「四分律行事鈔ノ生緣奉仕ノ處ニ引ケル雜寶藏經ヲ云ク」と云ひ、同第七話に、「觀佛三昧經ニ云」と云ひ、卷三第七話に、「智度論ニ云ク」と云ひ、卷六第五話に、「西國孝養記ニ云」と云ひ、同第八話に、「纂靈記ニ云ク」と云ひ、若しくは同第十三話に、「止觀ニ云ク」と云つてゐるやうである。

著者の博覽が想見せられるのである。

書式文章

終に此の書の書式文章に就いて略述して置かう。書式は凡そ三樣で、全然漢文のもの、和語に漢文を交へたこと古事談の如きもの（「立トコロニ捨ニ餘行ニ云レ歸ニスト念佛ニ。」の類）宣命書きのもの（「若シ桓舜ト申ス法師ノ望ミ申ス事ャ侍ヘルト問給ヘリ。」の類）である。それから用字法を附言するに、當字といひ、訓讀の狀と云ひ、頗る奇古で、中には古本今昔物語と共通してゐるのもある。生煮（イケニヘ）、肉村（シヽムラ）、粫（コメ）、長（ソダツ）、羽含（ハクヽム）、貨（アキナフ）、將具（イサトテイシ）、生黠（ナマコサカシ）などである。而して文章は先づ今昔物語式であるが、今昔物語の方は、漢文の資料でも努めて日本化しようとしてゐるのに反し、此は原文其の儘引抄してゐるものがある。併し中には、往々著者創意の雅麗な詞章もある。其等の件は、鎌倉時代文學新論の方に讓つて置く。

(7) 東齋隨筆

著者

東齋隨筆一卷は群書類從（卷四八八雜部四三）、に收められてゐる。一條兼良の著である。兼良（應永九生——文明一三歿）は成恩寺經嗣（二條良基の子で、一條房經の後を嗣ぐ。）の子で、關白に昇り、後薙髮して覺惠と云つた。依つて禪閤の稱がある。後成恩寺と號した。學識博洽、二酉の富を有した。其の述作の多いことは驚く程で、類聚名物考書籍部六に其の書目を載せてゐる。日本書紀纂疏、梁塵愚

案鈔、伊勢物語愚見抄、古今集童蒙抄、花鳥餘情、歌林良材集の如き國文學關係の物を始め、公事根源、文明一統記、樵談治要等は其の尤なる物である。併し此の隨筆の著作年紀は明白で無い。此はタイトルを隨筆としてゐるけれども、實は說話集であるから、徒然草などの儔で無いことを注意しなければならぬ。內容は次の十一類に分けてある。

分類

音樂類　草木類　鳥獸類　人事類　詩歌類　政道類　佛法類　神道類　禮義類　好色類

興遊類

古書の抄錄

此の分類の下に、主として中古の說話を集めてゐるが、其の數量は少く、隨つて規模は大きく無いのである。其の說話採集法は如何かと云ふに、殆ど古書に出典を仰いだものが多いのである。例へば南殿の櫻の事は、古事談第六から其の儘採つた跡が著しく、都良香の竹生島詣の詩の事は、古今著聞集文學第五にも出てゐるが、遡つて江談抄第五の方から得來つたらしく見える。それから佐理の大貳の三島明神の額を書いた事は、大鏡(實賴傳の內)に據つて、書留めたに相違無いと想はれる。總じて此の書は說話文學として價値は乏しいが、室町時代も下降するにつれて、說話文學が漸く陵遲した其の消息を傳へる物と認めると、やはり一の文學史料であることは忘れられぬ。

丙類　單一な事柄のみのもの

(1)　長谷寺靈驗記

諸本　長谷寺靈驗記は承應四年の刊本があるが、今續群書類從卷七九九、釋家部八四（大正十五年六月刊）に收められてゐる。別に大日本佛教全書の寺誌叢書第二（大正二年十一月刊）に收められてゐるものもある。此等の書は畢竟するに同一系統の物で、卷尾に「永享七年季夏下旬終二書功一者也。　桑門行譽」とある。佛教全書本も類從本も、本文の明確で無い所があつて、校合が施してある。

著作年代　此の書の著者は、はつきり傳へられて居ない。併し該寺關係の一沙門の筆作であらう。而も編制上から見て、略（ホヾ）一人一時の撰であることも殆ど疑を容れないのである。書寫者行譽は、文安三年に壒嚢抄を撰した觀勝寺の行譽其の人であらう。永享の頃は未だ若年らしい。而して著作年代の問題は困難であるが、予の眼の屆く限を言つて見ると、第一に大體の事から述べるに、永享七年に寫したと云ふのだから、同年以前に編まれてゐる事は確である。又此の書に列載せられてゐる事件中、最終の年紀は、信譽聖忍房の命終たる建久三年三月晦日である。（下卷第卅三話）それで著作年代は、是より遡り得ない事も勿論である。即ち建久三年（西紀一一九二）から永享七年（西紀一四三五）迄の

二百四十四年間に出來たと見なければならぬ。それでは範圍が餘に廣過ぎる。そこで第二にかう考へる。閑居友の項で述べたやうに、同書の長谷觀音利生談は、此の靈驗記のをグルンドとして居ると信ずる以上、閑居友の承久四年作といふ事を肯定すると、此の書は承久四年（西紀一二二二）迄には既に出來上つて居たといふ推定になる。前に云つた建久三年と承久四年とは前後卅一年間で、隨つて其の間の撰述であらうと見られるのである。さうすると、佛書刊行會月報に、文體から推して、室町時代當初の物であらうとしてゐるのは、單に氣休めの一推測に過ぎない事になる。一體、文體から直觀的に作品の時代を考へることは、さう無造作には行(イ)かぬ。鎌倉以後室町期にかけての當時の文體（即ち擬古文で無いもの）は略(ホヾ)一樣な色合で、細に年代を辨別し難いものがあるからである。

こゝに序を以て併せ考へたいのは、用字、用語の點である。此の書に往々珍しい用字の交つてゐる事は注意を要する。例へば羸鰭(クタビレ)、親リ(マノアタリ)、巾(ノゴフ)、踉蹡(タメラフ)の如きで、「親リ」以下の三つは、古本今昔物語に前例がある。又「字ム」といふのもあつて、「ハゴクム」と訓んでゐるやうである。（私聚百因緣集には「字」をさう訓んでゐる。）かう云ふ點は、我々をして此の書の原本の成立を鎌倉時代と考へさせる。次に用語の方面から氣の附くのを擧げると、「懈ヲ申ス」といふ謝罪の意の語がある。かういふ意味の「おこたり」は宇治拾遺物語卷十一の第四話に、「おこたりぶみをそへていだす。」があり、增鏡新島守に、「さまざまおこたりかしこまり申させ給ふ。」がある。又「ミメ事ガラ最(イト)アシカラヌ娘」の「み

め事がら」は、宇治拾遺物語卷九の第一話に、「みめことがらすがたありさま」といふ例がある。又「ナビヤカ」といふ婀娜の意の語がある。日本大辭林に據ると、駿牛繪詞から證を出してゐる。凡そかう云ふ用語は中古末葉乃至鎌倉時代式である。其の點も亦延いて著作年代の考究に資する次第である。

著作の趣旨　編制

此の書は、首に序文を添へ、本文を上下兩卷に分けて編し、總て行るに國文を以てしてゐる。序文に言ふ所は、和州長谷寺の靈地たること、觀音の靈瑞の奇特な事から、撰述の次第に及んでゐる。是に交へてゐる思想は、神佛混淆、本地垂跡の説である。而して當寺に參籠して願を滿て、本尊に歸依して利益に預つた者の無數な事を云ひ、「暫觀音ノ本誓ニ寄テ數ヲ定ム。是ヲ抄スルハ後見ノ煩ヲ止ガ爲ナリ。爰以上卷ニハ十九説法ニ象テ、當寺ノ舊記ヲ拾ヒ、下卷ニハ三十三身ヲ表シテ諸家ノ記錄ヲ撰ス。凡二卷ニ定ム事ハ、親疎ヲ分ガ爲メ、時代ヲ連事ハ、文選ノ跡ヲ追。」と述べてゐるのである。洵に其の通、説話數は上卷十九條、下卷卅三條で、各條は大體時代順に列ねてある。略一人一時の撰述であることは、序と本文との一致に依つて首肯せられる。

内容

内容を通檢するに、其の著名な説話は、吉備大臣於二大唐一讀二野馬臺一歸朝事、貞範祈二當寺一生二長谷雄卿一與二家門一事、新羅國照明王后遁二王難一送二寶物一事、貧乏法師辨宗返二負物一知二其貧因緣一事、山蔭中納言得二上人告一造二惣持寺佛一事、近江國廳官付二連歌一則遁二國司難一事の如きである。

新羅の后の事は、大略今昔物語卷十六に出て居り、宇治拾遺物語卷十四にもある。辨宗の事も今昔物語卷十六に出てゐる。山蔭中納言の事は、同書卷十九に出てゐるが、尚源平盛衰記卷廿六や寶物集卷五等にもある。近江の廳官の事は、今昔物語卷十六に出てゐるが、長谷寺の事とせずして、石山寺の事としてゐる。其の他にも注目すべき說話が尠く無い。此等の說話に見える觀音の奇瑞利益

利益談

は、眞に種々であつて、大抵は參籠して夢想を蒙ると云ふモーティーフから成つてゐる。或は家を興すべき子息を祈請して、之を得たもの、或は病惱平癒を願つて、望の叶つたもの、或は容貌の不具なのを愁へて、端嚴無双となつたもの、或は寶珠を得て、大福自在の身となつたものと云ふやうにいろ〳〵である。中にはかういふ因緣談もある。安勝と名のる沙門は、身の色が漆のやうに黑い

本生說話

ので、參籠して、宿業を知らしめ給へと祈ると、先身は黑牛であつたが、僧の讀經を聽聞した功力で人身を受けた。尚餘業があるので色が黑い。けれども法華修行の功德を積めば、都率の內院に生れるであらうとの夢想を得た。後果してさうなつたと云ふ話で、本生說話の形式を備へてゐる。一體此の書には、坂上田村麿は毘沙門の化身であるとか、北野明神は十一面の化現であるとかいふ風の事が、頻々と見えてゐる。當時の信仰界の趨勢は、察するに難くない。總數五十二條中、特に話

特に文學的なもの

の筋が文學的であるのは、卷上の第十四話、木津里貧男成二富貴一施二入當寺鐘一事や卷下の第七話、雄友大納言孫姬籠二當寺一成二富貴一事などで、此等は偶然のアクシデントが幸運を齎したといふメー

ルヘン風なモーメントから成つてゐるが、而も其が觀音の靈驗であると結び着けられてゐるのが面白いのである。凡そ此の一部は、此の如く拔苦與樂、定業亦能轉の說話を網羅したものである。中には母に不孝の男が、參詣したものゝ、堂内が暗くなつて方角を失ひ、本尊を拜する事が出來なかつたと云ふやうな治罰に預つた話も出してゐるが、原著者は「コノ雙紙ハ利生ヲ宗ト集ル上、事長ク成リハベレバ、皆ナ略スルナリ。」と云つて、此の方面の事を傳へるのを本旨としない由を斷つてゐるのである。

資料

次に此の書のドクメントに一顧を與へよう。其は前にも擧げたやうに、當寺の舊記を拾ひ、若しくは諸家の記錄を撰したと云ふのであるから、種々な資料を用ゐて出來たのは無論である。先づ長谷寺緣起といふ漢文で書かれた古い作がある。此は文化十二年に唯阿が世に布いたもの（大日本佛敎全書所收）があるが、隆慶の豐山傳通記（享保四年印行、又大日本佛敎全書の寺誌叢書第二所收）の首にも勘文を添へて入れてある。是に就いて隆慶は「天神宮在レ朝之日。奉レ勅勘出。今以二聖廟神筆緣起一繕寫。」と言つてゐる。其の樣に道眞の撰とせられてゐるが、伴信友の如きは、長谷寺緣起剃僞（伴信友全集第二所收）を著して、其の僞書たる所以を論證してゐる。其の論の是非は姑く措くとしても、天平五年の本願德道上人の上表（觀音靈現緣起狀）の如きを參考した餘程古い物で、此の靈驗記は明に之を採用して居るのである。卽ち序文中に、「菅丞相勘出セシメ給ル緣起ノ心ヲ得テ、

多クハ中々人ノ障ナル故ニ、愚ナル者ノ爲ニ、假名ニ和ゲテ、一筆註シ侍ル也。」とある。其の房前と本願上人との問答の邊は、此の緣起に據つてゐる事、毫も疑を容れぬ。それから「當寺ノ流記」と云ふ事が處々に見える。此は隆慶の緣起勸文に、「流記奥書云。德道上人付弟。最初別當賢憬僧都記二卷、第九代別當智照大法師記一卷。合三卷也。」と說明してゐる。又卷下第十三話の終に、「彼ノ惣持寺ノ新緣起ノ作者ハ知ラズ、本緣起ハ四條大納言公任卿ノ作ト云々。新本聊異說アリ。コレハ本緣起ヲ以テ此ノ記ニ書入ル也。」とあるのも注目せられ、同卷第廿話の終に、「此連歌ノ事或日記ニハ石山ノ觀音ト云々。東大寺珍海已講所レ進東日本感通傳ニハ長谷ノ觀音ト云々。彼ノ珍海ハ文殊ノ應化ナリ。努々謬アルベカラズ。其上昭月上人ノ觀音驗記ニモ長谷寺ノ利生云々。愚推ヲ廻ラスニ、此驗記ニ石山ノ御事一端アリ。件ノ日記ハ是ヲ見誤ルカ、聞謬ルカ、不審也。」とあるのも亦殊に目立つてゐる。其の或日記といふのは、大まかな云ひ方であるが、古人の用語例では、物語と日記とを混淆してゐるから、多分今昔物語を指したのであらう。同書卷十六の第十八話がそれに相當してゐるのである。而して東日本感通傳と觀音驗記の二書に言及してゐるのは面白いが、今兩書とも見當らぬのは惜しい事である。

尙最後に文章に就いて一言して置かう。其は絢爛目を奪ふといふやうなものは無いが、多少の風情の捨て難いものがある。左に示さう。

當寺ハ開闢以來ノ勝地、神明發願ノ精舍、濫觴世ニ超エ、利益殊ニ勝レ給ヘリ。五節トテ人々見物ナンド云ヘバ、打ムレテ出ニケリ。清涼紫宸ノ珍ラシキ有樣、月卿雲客ノ氣高キ振舞、何トナク見廻シケル程ニ、……

(2) 劔卷

劔卷單獨の書

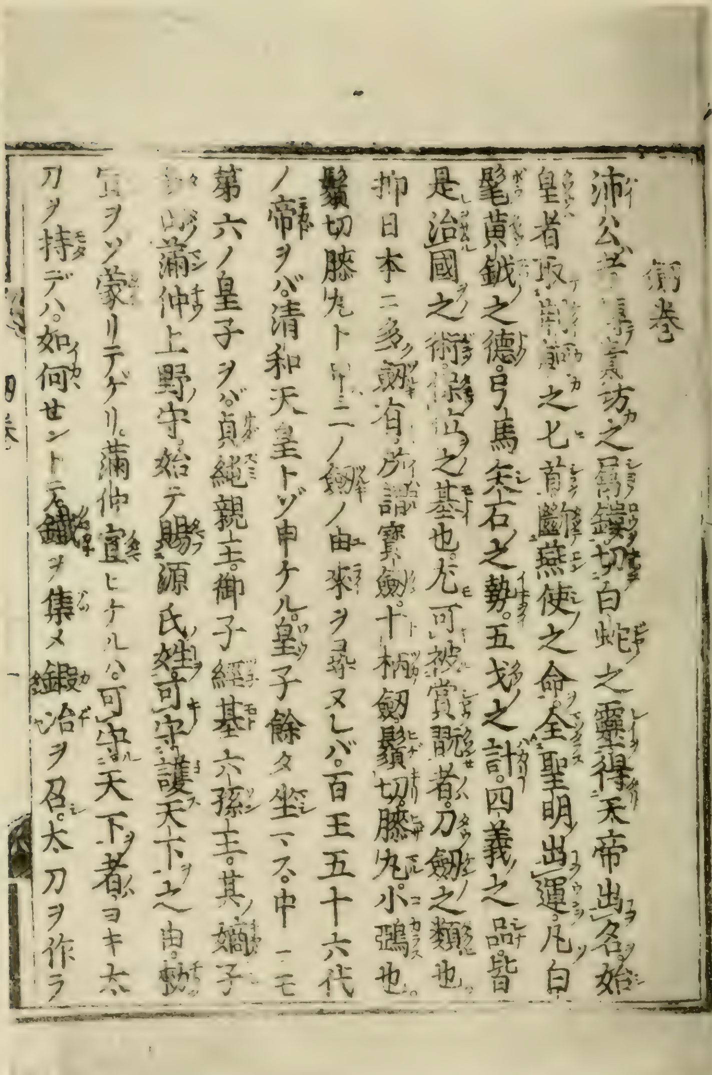
劔卷は單獨の書と見てよいが、古來太平記の總目錄の次に收められてゐる。太平記の寬永八年版、寶永三年版等皆さうである。處が水府の學者は異見を樹て、太平記から分離せしめて、源平盛衰記の首に移したのである。平家物語關係の書と考へた結果である。參考源平盛衰記凡例の一に云ふやう。

劔卷舊誤附二于太平記一矣。有下稱二古本劔卷一者上。南都一乘院候人二條寺主所藏也。題曰二平家物語劔卷一。參下考之所レ行二于世一劔卷上。改附二于本書總目下一。

と。併し古本に、平家物語劔卷と題してゐても、實はさほど信憑するに足りまい。予は此は元來平家物語とも又太平記とも、別物の一卷であつたに相違無いと思つて居るのである。

流布本と古本

此の書の流布本は、寬永版太平記所收の物の如きであり、又參考源平盛衰記本の本文の如きであるが、兩者は書式の點に差異が存する。卽ち前者は漢文を交へてゐるが、後者は書下しを主として


劔巻
沛公[illegible]坊之霜鋒切白蛇之靈得天帝名始
皇者取[illegible]之七首斷燕使之命全聖明出運凡白
髦黄鉞之德弓馬矢石之勢五戈之計四義之品皆
是治國之術護身之基也尤可被賞翫者刀劔之類也
抑日本ニ多ク劔有ト云ヘドモ所謂寶劔ト十柄劔鬚切膝丸小烏也
鬚切膝丸ト申二ノ劔ノ由来ヲ尋ヌレバ百王五十六代
ノ帝ヲバ清和天皇トゾ申ケル皇子餘タ坐マス中ニモ
第六ノ皇子ヲバ貞純親王御子經基六孫王其ノ嫡子
多田ノ滿仲上野守始テ賜源氏姓可守護天下之由勅
宣ヲソ蒙リテゲリ滿仲宣ヒケルハ可守天下者ヨキ太
刀ヲ持デハ如何セントテ鐵ヲ集メ鍛冶ヲ召テ太刀ヲ作ラ

劔巻（寛永八年刊本）

ゐる。それから古本と稱せられる方は、參考本本文に割註としてあるので、其の異同を辨へ知り得るが、別に筋の違といふ程の事は認められず、唯語句の差異に止つてゐる。さうして大抵は委しい方に傾いてゐる。例へば、鐵輪の女の條の「長ナル髮ヲバ五ツニ分ケ」(寛永版太平記に據る。以下引用する所同樣。)の次に、古本には「糠ヲヌリ卷上テ」と云ふ句が餘計にある。又、綱が宿所の條の「親共思ハレヌ我身ノ、子ト戀シキコソ墓ナケレ。綱ハ道理ニ責ラレテ、門ヲ開テ入レニケリ。」の所が、古本には「宿借テ留レナトイワル、事コソ悲ケレ。是程ニ子ニモ親ニモ思ハレサリケル我身ナレハ、我モ子トモ思フヘカラス。今日ヨリ後ハ佛神ニ申切テ、不孝セウスルナリトカキ口說申ケレハ、綱ハ誠ニ道理ト思ケレハ、我身如何成トテモ、爭カ是ヲ聞ナカラ入奉ラテハ有ヘシト、思ナオシテ申樣、斜ナラヌ大事ニテ、固ク物忌ニテ候ヘトモ、誠ニ仰ラル、事御道理ニテ候ヘハ、是ヘ入セ給ヘトテ、門ヲ開云々」となつてゐて、頗る詳細である。處で、此の古本の性質は、果して流布本より古いかどうかと云ふに、叙述が概して緻密であるといふ以外に、古いと云ふ特徵は無いやうに見える。それで唯、一古本と云ふだけで、流布本との新舊關係は容易に證明出來ないと考へる。

　こゝに逢着するのは、此の書(流布本)の著作年代の事である。內容や語氣文體からの推究は、自然後にも及すが、差當り古來之を太平記に併合して傳へてゐるといふ事が、一の有力な手がゝりである。それは源平盛衰記や平家物語一類の書よりも、後れて出來上り、略太平記の出來た頃、即ち

大まかに云ふと、室町時代に入つて成立つたものである事を暗示すると思ふ。著者も年代も確實な所傳の無い事であるから、此以上の考究は一寸困難である。

組織内容

此の書は寶劍説話を系統的に書留めたもので、若し之に章段を切つて、一々何々の事といふ題を施すと、説話集たる面目が更に明になるであらう。固より軍記物でも、小説でも無いから、予はここに之を説話文學の一種として取扱ふのである。卷頭に總序と見るべき左の一節がある。

沛公者傳ニ黄坊之厲鏷一。切ニ白蛇之靈一。得ニ天帝出レ名。始皇者取ニ荊軻匕首一。斷ニ燕使之命一。全ニ聖明出レ運。凡白髦黄鉞之徳。弓馬矢石之勢。五戈之計。四義之品。皆是治レ國之術。保レ位之基也。尤可レ被ニ賞翫一者。刀劍之類也。

前段

それから前後の二大段に分れてゐる。前段は「抑日本ニ多ク劍有リ。所謂寶劍、十柄劍、鬚切、膝丸、小鴉也。鬚切、膝丸ト中ス二ノ劍ノ由來ヲ尋ヌレバ。」と書き起して、該兩劍の説話に入つてゐる。此は源家嫡流の事蹟に結びついてゐるのである。即ち此の二劍が滿仲から次第に子孫に傳へられ、其の間に種々な事件のあつた關係は左の表の通である。

源家嫡流	刀劍關係事項	説話要項
滿仲	二劍を得る	
賴光	鬚切、鬼丸と改名、膝	鐵輪説話（公卿の娘、貴船社に祈つて鬼神となる。）戻橋説話（綱、鬚切を以て鬼女の手を斬る。）綱、籠居の

頼基	丸、蜘蛛切と改名	事(鬼女、養母に化け、斬られた手を取返しに來る。)土蜘蛛說話(法師に化けて來た怪物を、頼光、膝丸で斬る。四天王、怪物を追跡して、大蜘蛛を搦め取る。)
頼義		貞任を討ち、宗任を生捕る事
義家		後三年戰の事
爲義	鬼丸を獅子の子、蜘蛛切を吼(ホエ)丸と改名。吼丸を教眞に對して聟引出物にする。教眞之を熊野權現に納める。爲義新に一劔小鳥を作る。獅子の子を友切と改名	年少功名の事、教眞別當の事
義朝	友切を原名鬚切に改む。忠致、小鳥を平家に送る。	保元の戰の事、平治の戰の事

頼朝	髻切を傳へ、後、熱田社に納め、復(マタ)申出して帶びる。敎眞奉納の吼丸を、湛增申請けて義經に渡す。薄緑と改名	助命流罪の事、旗揚の事、舍那王(牛若)の事、木曾討伐の事、平家追討の事、平家滅亡の事、義經功名の事

後段

內容は大體右の次第で、寶劒の奇瑞と威德とを叙べてゐる。其の特に說話學的に興趣及び價値の有るのは、頼光を中心とし、繞らすに綱等の四天王を以てした傳說圈(Sagenkreis)である。此は武勇傳說として見るべきもので、頗るローマンティックである。次に後段は「抑帝王ノ御寶ニ、神璽、寶劒、內侍所トテ三アリ。」と書き起して、三種の神器の事を長々と述べてゐるが、此は前段に比べて筆致如何にも拙劣で、古史の知識に暗い事甚だしく、實に荒誕無稽であり、剩へ佛說の傅會もあつて、殆ど信用に値しないのである。全く室町時代の學風を反射したものに外ならぬ。其は思ふに、前段の終に「義經、南海、西海ヲ討偃(フセ)、平家ノ虜(イケド)リ共相具ノ、三種神器諸共ニ、都ヘ歸シ入奉リケリ。但(シ)三種ノ神器ノ內、寶劒ハ失ニケリ。內侍所ト神璽ト計リ上セ給フ。」とあるので、前段の筆者とは別個の人が、神器の叙述に、殆ど無用な筆を染め、劒卷の本筋をも顧みず、此く木に竹を接(ツ)いだやうな結果になつたのであらう。而して後段も終の方の「サテ九郎大夫判官義經ハ平家ノ虜リ

共相具ノ、關東へ下向有ケルガ」から、本筋に歸復して、義經が薄綠の劍を箱根權現に納めた事、曾我兄弟が此の劍を得て敵討をした事を語り、而して鬚切、膝丸一具にて鎌倉殿に納つた事で結んである。此の部分は、元來前段に續いてゐたかも知れない。

筆致

要するに此の一書は、語氣筆致、源平盛衰記の亞流で、太平記に似通つてゐる。併し兩書のやうな絢爛の美は無い。此の點でも前に云ふ如く、著作年代を室町期と認めなければならぬ。

他書との交渉

此の書所載の事實は、他書と尠からぬ交渉があるから、此の點は文獻學上考慮を要するのである。卽ち源平盛衰記卷四十四に三種の寶劍の事が載つてゐる。劍卷後段の文は、其の影響を受けてゐることが著しい。太平記卷廿五にも神劍の事が有るが、記敍の調子は、此の書と同じやうである。又太平記卷卅二に鬼丸の事が出てゐるが、此は劍卷の戾橋說話と異同が見える。それは別に論ずるであらう。それから謠曲の鐵輪や土蜘蛛は、劍卷をグルンドとして出來たものと思ふ。

* * * * *

附記

以上列擧して論述した廿一種の外に、此の範疇に屬するものが多少存するのである。續群書類從卷九四九、雜部九九所收の金言類聚抄は、僅々二卷だけの零本に過ぎないが、內外典に亙つて、故事を蒐集したもので、全部は組織的で且大規模の物らしい。今存する所の卷廿二禽類部、卷廿三獸類部を見ても、頗る秩序立つたもので、且每項出典を明示し、行るに國文を以てしてゐる。此の內容、此の形

式、全く說話文學を以て扱つてよい。國子司業潭朗撰とあり、「弘安元年十二月五日寫之畢」の識語もある。鎌倉期の作と認められる。併し現存の部分が餘に少いから、略する事にした。次に春日權現驗記(詞書は群書類從神祇部所收)は、繪卷物の巨擘として著名な物で、延慶二年の作である。其の二十卷錄する所の詞書五十七條は、主として春日明神の奇瑞靈驗談で、其の點から說話文學と見てもよく、三國傳記の如きも之を資料としてゐる。けれども繪卷たる本質上、こゝには姑く省略に從つた。尙、神道集といふ物も、說話文學と目せられる。此は假名遣及假名字體沿革史料に故大槻文彥氏藏本が紹介せられてゐるので、夙に聞えてゐたが、近年筑土鈴寬氏が精細な研究を發表せられた(國語と國文學昭和四年一月號)から、今は其に讓つて置かう。

三　發展の因由

前節に論述したやうに、當代の說話文學は三類廿一種の多きに上つてゐる。此の種の文學が此の如く頻出したに就いては、其の因つて來る所を探つて見なければならぬ。それに先だつて尙附け加へて述べて置きたい事がある。一體ざつと考へると、民衆の說話愛好の風潮が、幾多の說話文學を產出せしめたのであるが、其の趨勢は他の品種の文學卽ち軍記物や隨筆に迄も及んでゐて、各種の說話の攝取に努めてゐるといふ現象を呈せしめたのである。卽ち保元物語、平治物語、平家物語（流布本、長門本、根來本等）源平盛衰記若しくは太平記の如き軍記物を見ると、本筋の物語の中に、聯關した種々な說話を插話（Episode）としてゐるのに逢着する。保元物語には、卷一に、鵜の丸（劍の名）の事があり、卷三に、無鹽君の事がある。平治物語には、卷一に、許由が事がある。平家物語系統の物の代表として源平盛衰記に就いて見ると、それが極めて夥しい。試に其の重なものを抽出すと、日本說話では左の如きものがある。

說話を攝取した文學の多いこと

卷一、五節始の事
卷二、淸水寺緣起
卷四、山王垂迹の事

卷七、實方中將の事(日本國廣く狹き事及び次條の內)
卷八、讃岐院の事(蓮如及び西行の事を含む。)
卷十、守屋、啄木鳥と成る事
卷十四、淨見原天皇の事(闕の明神の事を含む。)
卷十五、蟬折の笛の事
卷十七、二萬(ニマ)郷の事(待宵の待從の事の內)栖輕(スガル)、雷を取る事、藏人、鷺を取る事
卷廿一、聖德太子椋木附天武天皇榎木の事
卷廿二、俵藤太將門中違の事
卷廿三、貞盛、將門合戰附勸賞の事
卷廿四、興福寺の事(南都合戰同燒失の內)
卷廿五、鰚(ハラカ)の奏、吉野の國栖の事、春日垂迹の事
卷廿六、如無法師烏帽子、同母、龜を放つ事
卷廿八、役行者の事、仙童琵琶の事
卷廿九、白山權現の事(三箇の馬場願書の事の內)
卷卅二、惟喬、惟仁位論の事、北野天神飛梅の事

卷四十、高野山の事、弘法入唐の事、唐皮（鎧の名）小烏、拔丸（共に劍の名）の事
卷四十三、住吉明神等の事
卷四十四、三種の寶劔の事
卷四十七、長谷の觀音並稽文佛師の事

支那說話では左の如きものがある。

卷一、樊噲の事（五節の夜の闇打の內）周の成王臣下の事、王莽の事
卷二、則天皇后の事、會稽山の事
卷五、一行阿闍梨流罪の事
卷六、幽王、褒姒烽火の事
卷八、蘇武が事
卷十四、周朝八匹の馬の事
卷十五、季札が劍の事
卷十六、養由の事（三位入道藝等の事の內）
卷十七、隋堤の柳の事、始皇、燕丹並咸陽宮の事、勾踐、夫差の事
卷十九、東歸節女の事、曹公、父の骸を尋ぬる事

卷二十、紀信、高祖の名を假る事
卷廿六　毛寶、龜を放つ事
卷三十、朱買臣の錦袴並新豐縣の翁の事
卷卅一、蔡順の事（貞能、小松殿の墓に參る事の內）
卷卅四、光武、王莽を誅する事

更に印度說話では次の如きものがある。

卷八、善友、惡友兩太子の事
卷十五、萬歲樂の曲の事
卷十八、龍神三種の心を守る事
卷廿一、韋提希夫人の事
卷卅二、阿育王卽位の事（卷廿二にもあるが、其よりは委しい。）
卷卅四、象王太子の事
卷四十四、戒賢論師の事

本邦の傳說では、さすがに刀劔說話や朝廷の公事の由來を說明した說話の如きが捕捉せられてゐるが、特に古社寺の緣起を說いたもの、就中寺院傳說が頻々と記載せられてゐる事は、何人の注意に

も上るであらう。而して本地垂迹の思想と佛菩薩の靈驗信仰とが縱横無碍に披瀝せられてゐるゐは、頗る時代的である。次に支那の傳説が事に觸れつゝ引合に出されてゐる事の多いのは、寧ろ意外な程で、民衆の興味がさういふ方面にも繫がれてゐるのは、中古以來傳統的であるにしても、最も注目に値する。之を大にしては、王者の興亡、小にしては功臣、孝子、節婦の談柄が、最早日本説話界に馴染のものとなつたのである。印度の傳説は割合に多く採られてゐないが、それでも阿育王や戒賢論師などの存するのは看過されぬ。

太平記にも亦やはり日本、支那、印度各方面に互つた傳説が、エピソードとして取込まれてゐる。日本傳説では、卷十二に、聖廟の御事、解脱上人の事、卷十五に、三井寺撞鐘の事(俵藤太傳説)卷十六に、二萬郷の由來(高駿河守引レ例事の内)日本朝敵の事、卷十八に、比叡山開闢の事、卷廿五に、三種神器の事(自ニ伊勢一進ニ寶劍一事の内)卷卅二に、鬼丸、鬼切(共に劍の名)の事、卷卅五に、青砥左衛門が事、卷卅七に志賀寺上人の事などがあり、支那傳説では、卷二に、紀信が事、卷四に、吳越軍の事、卷十二に、驪姬が事、卷十三に、干將、莫耶が事、卷十八に、程嬰、杵臼が事、卷十九に、嚢沙背水の事(韓信の話)卷二十に、諸葛孔明が事、卷廿五に、黃粱夢の事、卷廿六に、廉頗、藺相如が事、卷三十に、殷紂王の事、卷卅二に、帝舜の事(天竺、震旦物語の事の内)卷卅四に、曹娥、精衞の事、卷卅七に楊國忠が事などがあり、又印度傳説では、卷廿四に、宗論の事(公卿僉議

の事の內）卷卅二に、獅子國の事（天竺、震旦物語の事の內）卷卅五に、波斯匿王の事（北野通夜物語の內）卷卅七に、身子聲聞の事、一角仙人の事等がある。之を文學史的に觀ると、叡山の事、吳越、漢楚の事等既に源平盛衰記に載つてゐるのが尠く無い。其の點に於ても、太平記が盛衰記系の書であることが察知せられる。倂、此等の傳說中、聖廟の事は傳說化せられた菅公傳で、大鏡をオリジンとし、宴曲の聖廟靈瑞誉、同靈瑞超過（別紙追加曲の內）や源平盛衰記などを經て、こゝまで發展してゐるのが注目に値する。三井の梵鐘や名劒鬼切の傳說は、ヘルデンザアゲで、殊に鬼切に關する說話は、劒卷に見える所と傳承の異同が存するのは、注意すべき事である。支那說話の干將、莫耶も刀劒傳說の一で、祖庭事苑に載つてゐる事である。印度說話の一角仙人は元來大智度論に見えるもので、夙に今昔物語に取込まれてゐる。而して支那說話が著者の注意に上つてゐる事の多いのは、顯著な事實であるが、倘それにも增して佛說は大に喜ばれてゐるのである。日本神話に對する記述に、此の傾向の日立つてゐる如き、日本朝敵の事や叡山の事の條に著しい。加之荒唐無稽の說を混淆して平氣で居ることは、三種神器の事にも徵せられるが、此の點は劒卷の後半と同樣である。

倘、かう云ふエピソードは、曾我物語（流布本）の如きにも頗る多く見受ける。盛衰記に在る惟喬、惟仁位爭は、此の書卷一に出て居る。太平記に見える杵臼、程嬰が事も、此の書同卷に存し、

前者に在る干將、莫耶が事も、此の卷四に眉間尺が事と題して存する。尙其の他、卷一に、費長房が事、卷二に、王昭君が事、玄宗皇帝の事、橋の由來の事、牽牛、織女の事、酒の事、奈良の勤操僧正の事、卷五に、帝釋と阿修羅の戰の事、吳越の戰の事（是も太平記に出てゐるが、頗る委しい。）卷六に、ふん女が事、比叡山始の事（是亦太平記に出てゐる。）ぶつしやう國の雨の事、嵯峨の釋迦作り奉りし事、卷七に、しやうめつ婆羅門の事、班足王の事（出典を仁王經と示す。）卷八に、燕の國の旱魃の事、船の始の事、卷九に、波斯匿（ハシノク）王の事、卷十一に、鬼の子供捕らるゝ事（鬼子母（キシモ）の說話）貧女が一燈の事等がある。此の書の比較的單純な叙事のムーブメントが、大に此等の說話で助けられてゐるのは、最も著しい現象である。而して漢土の傳說を採ることが尠く無く、特にさう云ふ點で、本書の成立上太平記との緊密な交渉をも想はせるのは、逸し難い事柄である。

それから徒然草は隨筆と稱せられるが、單に一口に隨筆と云つて無造作に片附けられる作品ではい。仔細に吟味すると、修辭學上の文種たる記事文も叙事文も說明文も議論文も皆こゝに包含せられてゐて、頗る多面的である。而して說話文學的要素の認められる點が、殊に興味がある。其の說話たるや多くは世俗的であるが、主として其の人物は佛家、場所は寺院、而して筋は滑稽的で而もどこかに諷刺、談義の趣の存するのは、怖らくは無住の沙石集や雜談集の系統を引いたものに相違無からう。今、季吟の文段抄に據つて見て行くと、第四十五段の良覺僧正、第五十三段の仁和寺の

法師（鼎かづきの話）第六十段の盛親僧都等、凡そ此等の說話は、いづれも此のカテゴリの物である。仁和寺の法師の話の如きは、瀧澤馬琴の玄同放言卷二に、野干が汲罐（ツルベ）に頭を突込んだ摩訶僧祇律の說話を引いて、其の翻案であらうと云つてゐるのは、當否はともかく、ティーヤメールヘン的根柢の暗示として興味が深い。僧祇律の野干に似た話で、狗が器に頭を突込んで出なかつたといふのが、達摩蜜多尊者の前生談として存するのも逸せられぬ。（佛典說話全集第九卷に附法藏因緣傳第五に據つて載せてある。）徒然草には、さう云ふ佛教說話の外に、第百八十四段の松下禪尼、第二百十五段の平宣時朝臣のやうな地味な說話も載つてゐるが、是も勤儉質素を尊んだ時代相のレフレクトせられたもので、太平記に靑砥左衞門の話の出てゐるのと、其の揆、一である。

素地前代の說話文學

扨右のやうな現象を馴致したに就いて、其の因由は、第一に、說話文學の素地が既に十分出來てゐたと云ふ事を擧げなければならぬ。其は日本靈異記、三寶繪詞、法華驗記といふやうな佛教的說話文學と、大和物語の如き歌物語とが、更に今昔物語を生んで、說話文學の勢力をして偉大ならしめ、其の一方、江談抄や袋草紙の如き抄物の一類、大鏡や今鏡の如き、歌物語の系統をも引いた一類の作品が、又說話文學の大本に力を添へたといふ其だけの事實でさへ、近古時代の說話文學の素地としては、根强いものと謂はなければならぬ。

緣起類

加之古社寺の緣起類が奈良朝以降次第に出來て、近古時代までにはかなり堆積して行つた。是も陰に陽に說話文學を發展せしめたのである。法隆寺

東院縁起は天平年間の物であり、前に述べたやうに、德道の長谷觀音靈現縁起狀も頗る古い。清水寺建立記は弘仁二年作、尾張國熱田太神宮縁起は寛平二年作、園寺縁起は菅原行長作で萬壽二年のもの、清水寺縁起にも明衡作といふ別物でかなり古いのがある。それから鎌倉期に入つては、當麻曼陀羅縁起、北野縁起、荏柄天神縁起、春日權現驗記、石山寺縁起といふ風に、繪卷物がだん／＼と出來たのである。(繪卷物の調としては、黑川春村、同眞賴の考古畫譜もあるが、松岡映丘氏の繪卷物小釋が能く纏つた便利な書である。)

處が單にそればかりに止らぬ。各種の往生傳類が續々撰述せられた爲に、一層立派なグルンドが出來たのである。さうして其を利用した古事談、發心集以下の說話文學が勃興した次第で、此の現象は特筆すべきものである。此の往生傳類の權輿は、早くも今昔物語に取込まれた日本往生極樂記で、それから左表の如くいろ／＼出來たのである。

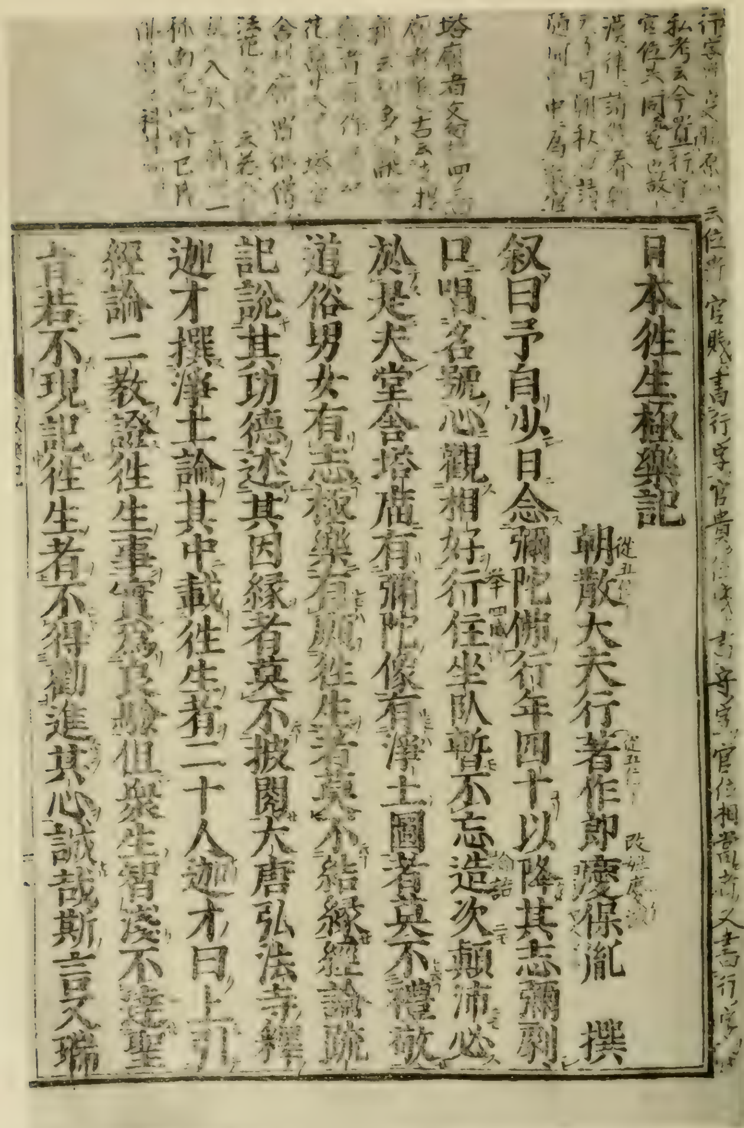
日本往生極樂記	一卷	慶滋保胤撰	寛和年中の作
續本朝往生傳	一卷	大江匡房撰	康和頃の作
拾遺往生傳	三卷	三善爲康撰	同前
後拾遺往生傳	三卷	三善爲康撰	大體同前
三外往生記	一卷	沙彌蓮禪撰	承久二年以前の作

本朝新修往生傳　一卷　藤原宗友撰　仁平元年の作

此等六部の書は、何れも漢文で、正續群書類從傳部に收められ、又大日本佛敎全書の一冊として取纒められてゐる。日本往生極樂記は、日本往生傳とも云はれてゐる。（寬文九年版の題簽にさうある。）撰者保胤序して云ふ。

敍曰。予自レ少日念二彌陀佛一。行年四十以降。其志彌劇。口唱二名號一。心觀二相好一。行住坐臥暫不レ忘。造次顚沛必於レ是。夫堂舍塔廟有二彌陀像一。有二淨土圖一者。莫レ不二敬禮一。道俗男女。有レ志二極樂一。有レ願二往生一者。莫レ不二結緣一。經論疏記。說二其功德一。述二其因緣一者。莫レ不二披閱一。大唐弘法寺釋迦才撰二淨土論一。其中載二往生者廿人一。迦才曰。上引二經論二敎一。證二往生事一。實爲二良驗一。但衆生智淺。不レ達二聖旨一。若不レ記二現往生者一。不レ得レ勸二進其心一。誠哉斯言。又瑞應傳所レ載。三十（一本作四）餘人。此中有下屠レ牛販レ雞者。逢二善知識一。十念往生上。予每レ見二此輩一。彌固二其志一。今檢下國史及諸人別傳等有二異相往生一者上。兼亦訪二於古老一。都慮得二四十餘人一。予感歎伏膺。聊記二操行一。號曰二日本往生極樂記一矣。後之見二此記一者。莫レ生二疑惑一。願我與二一切衆生一。往二生安樂國一矣。

卽ち往生安樂國の本願に基づき、迦才の淨土論や又、瑞應傳から感得して撰述したので、聖德太子、行基菩薩以下緇素男女に亙る四十二件を記したのである。匡房の續傳は全く保胤の著を繼いだもので、自序中に、「寬和年中、著作郞慶保胤。作二往生記一傳於二世一。其後百餘年亦往々而在。予近有レ所


日本往生極樂記

朝散大夫行著作郎慶保胤 撰

叙曰予自少日念彌陀佛行年四十以降其志彌劇
口唱名號心觀相好行住坐臥暫不忘造次顛沛必
於是矣夫堂舍塔廟有彌陀像有淨土圖者莫不禮敬
道俗男女有志極樂有願往生者莫不結緣經論疏
記說其功德述其因縁者莫不披閲大唐弘法寺釋
迦才撰淨土論其中載往生者二十人迦才曰上引
經論二教證往生事實爲良驗但衆生智淺不達聖
旨若不現記往生者不得勸進其心誠哉斯言又瑞

日本往生極樂記（寛文九年刊本）

レ感。故詢二芻蕘一。訪二朝野一。或採二前記之遺漏一。或接二後事一。而竟二康和一。云々」と言つてゐる。其の四十二件を列ねてゐる數までも保胤のに似てゐる。さうして保胤其の人も宿志を遂げて、此の傳中の一人となつてゐるのは面白い。爲康の兩傳は、分量の增した事が特に眼に留る。拾遺傳には其の卷上に長文の自序が附いてゐる。「予所レ慕者極樂也。所レ歸者觀音也。」と云ひ、「今接二江家續往生之傳一。豫記二其古今遺漏之輩一。不下更爲二名聞一爲二利養一而記上。只爲二結緣一爲二勸進一而記矣。」と云つてゐる。卷中、卷下にも小序が附いてゐるが、其を覽ると、卷々を次第に纏めて行つた樣子が能く分る。本傳に更に「別傳云」と、異說を加へてゐる所がある。後拾遺傳の自序には、「（前略）是以一爲二結緣一。一爲二勸進一。接二慶江兩家之記一。拾二古今數代之遺一。都盧九十五人。勒二載一部三卷一。名曰二拾遺往生傳一。世以知レ之。欲レ罷不レ能。今亦記レ之。故以二後拾遺往生傳一。續爲二其名一矣。（下略）」と云つてゐる。是亦七十餘の傳を列ねてゐる。蓮禪（筑前入道）の三外往生記と云ふのは、慶江善三家の傳以外の遺漏を集めた意で、內容は四十九件である。著作年代は分らぬが、承久二年に慶政が寫してゐるから、勿論其以前の作である。宗友の新修傳の方は、自序にはつきりと仁平元年臘月一日とあるから、著作年紀に問題は無い。或は三外記より古いであらう。四十一人、傳してある。其の中に爲康も入つてゐる。此等の書が說話文學の著作家の頭腦に深く沁み込んだ事は、想像に餘があると思ふ。故に多くの說話文學を釀す酵母となつた此等の書は、文學史的に甚大な意義を有する事を

牢記しなくてはならぬのである。

著者の心理と態度

說話文學盛行の第二の因由は、著作家の心理と態度とにある。之を文學史的に考察するに、小說狹衣あたりを最後として、次第に創作熱の陵夷を見たことは、著作家の意圖を轉向せしめたが、所謂世繼の物語も、水鏡の如きで、先づ行き詰りとなつたのであるから、辿る道は所謂宇縣亞相や江家都督の跡であつた。そこで筆者の心の動きは、說話文學を擒にするにあつたであらう。さうして其には前に云つたやうに、素地が十分であると云ふ好都合な因由があつた。加之左の二つの利便もあつたと思ふ。

一、簡易性　自己の備忘に、又文筆上の慰に、既に纒まつてゐる古書や古記錄から拔萃する。此は最も簡易で、樂(ラク)な仕事である。古事談の如きが其の代表である。其からさういふドクメントは用ゐるが、自己の筆で味を附け、才覺をする。そこ迄進むと頗る文學的になるが、それにしてもまだ〳〵シムプルである。又一つの說話は幾ら長文でも、數枚に亙るのは尠い。スケールの小さい事も、仕事の上には造作が無い。此う云ふ事情は確に認められよう。

二、模倣性　今も述べたやうに、往生傳にしても、保胤が一つ先手を打つと、續々模倣的述作が出る。作品から云ふと、模倣せられ易い物、作者から云ふと、模倣し易いもの、これが國文學には古往今來甚だ多いのである。說話文學も是に漏れぬ。今昔物語が出る。宇治拾遺が眞似る。又世繼

物語が倣ふといふ風であり、發心集が出る。閑居友が其を參考する。沙石集も其を利用するといふやうである。試に十訓抄と古今著聞集とから一文を拔いて、どれがどの著の文かと問うたなら、何人も誰か鴉の雌雄を知らんやの結果にならう。同趣同文では當然である。

次に著作家が談義說法の料に三國古今の說話を用ゐた。此の態度が亦說話文學を勃興させた。說話が談理の文よりも多くなると、却つて其の書が立派に說話文學となつてしまふことは、十訓抄や沙石集が好い標本である。無住の妻鏡の如きも、法談であるが、やはり說話がかなり取込まれてゐる。さうして又佛教の盛行した當時としては、談義僧等の爲に、さういふ所謂「話の種」の書物が必要であり、それが歡迎せられもしたであらう。此の事情も說話文學發展の因由として併せ考へてよからう。

四　說話の種々相

我が說話文學は、近古時代まで發展して來ると、流石に豐富になつた。間口も廣く、奧行も深くなつた感じがする。勿論中には、同一說話の繰返しもある。此の同一說話の繰返されると云ふ事は、必ずしも無意味では無い。それが國民心理上然るべき理由が有つての事に違無からう。卽ち怪奇でローマンティックな爲に、或は渴仰讃嘆すべき事の爲に、或は人情味の横溢してゐる爲に、或は風流雅致の喜ぶべきものがある爲に、それだ〳〵國民の嗜好に投じ、又其の感興を唆つたと考察しなければなるまい。此の說話界の好題目を觀るに、例へば聖德太子の佛敎關係の御事蹟の如き、傳說的分子を多分に含んで、日本靈異記以來頻々と繰返されてゐるのである。三寶繪詞にもあり、日本往生極樂記にもあり、今昔物語にもあり、古今著聞集にもあり、私聚百因緣集にもあり、三國傳記にもある。行基菩薩の事でも、役優婆塞の事でも、大體さう云つた調子である。多武峯の增賀聖の事にしても、法華驗記を首として、今昔物語、發心集、撰集抄、私聚百因緣集、三國傳記と云ふ風に、綿々として續いてゐる。山陰中納言（其の子如無僧都）に關する龜の報恩談の如きも、今昔物語、源平盛衰記、長谷寺靈驗記、寶物集、十訓抄、三國傳記といふやうに、永く忘れられない話題となつて居り、夫の徒然草に、罪無くて配所の月を見たいと言つたと出てゐる顯基中納言の事は、今昔

說話圖天竺、震旦、本朝

物語の今本は闕文であるが、袋草紙の如きを基として、特に近古文學のフェボリット サブゼクトとなつて、古事談、發心集、十訓抄、古今著聞集、東齋隨筆と云ふやうに、作者間に感銘の深かつた談柄である。此の如き現象は、唯(ヒトリ)日本說話ばかりでは無い。印度說話でも支那說話でも、永く國民の思想界を支配してゐるものは、枚擧に遑が無いのである。例へば天竺の阿闍世王の說話は、今昔物語に見ゆるが、寶物集や私聚百因緣集や三國傳記が踵を接してゐる。支那の眉間尺の說話の如きも、亦今昔物語から發源して、寶物集や太平記や三國傳記や曾我物語に流れ込んでゐるのである。

それでさう云ふ說話文學全體を見渡して、其の系統的研究、遺傳調査と云ふやうな事をする日になると、實に容易で無いのである。其の樣に極めて範圍は廣いが、結局第一に、方處の上から觀ると、說話圈は今昔物語の分類のやうに、天竺、震旦、本朝の三大部になる。時には朝鮮種の話もあるが、其は先づ震旦部に準じたやうなものである。此の今昔物語が永く說話文學のモデルとなつたから、宇治拾遺、私聚百因緣集、三國傳記等、內容が三國に亙つたものが多いのである。一體內外典に亙つた故事の類聚は、當代頻々行はれたことで、前に一言した通、金言類聚抄の如きがあり、又、注好選集(此は漢文、上中下三卷中、末卷缺、續群書類從雜部所收)と云ふ書もあつて、其の趣勢が分るのである。別に唐物語の如く、支那說話のみ集めたものもあり、又今物語、世繼物語、古今著聞集の如く、日本說話を基調としたものもある。

第二に、時代の上から觀ると、說話圈は頗る古い方面の物と稍新しい側の物とになる。印度及び支那の事は、姑く之を除いて、日本說話だけで云ふと、古史神話や古傳說の如き上古の物、佛敎傳說、藝能傳說等で中古の物、又中古の物の繼續と見るべき近古の物といふやうに、三方面が存する。近古時代に入つても、中古式話題が追慕せられてゐるのは、兼好の言の如く、「何事もふるき世のみぞ慕はしき。今樣は無下にいやしくこそなりゆくめれ。」の心理が働いてゐる爲と思はれる。併し流石に古今著聞集、沙石集と世が降つて來ると、新しい談柄が取込まれてゐるのである。所謂時勢には勝てないと云ふ感がある。それが又一面價値の有る所以で、各種の說話文學が樣に依つて葫蘆を畫くといふやうに、餘にテイピカルでは、詮の無い次第である。

上古、中古、近古

第三に、說話圈を品種の上から觀ると、かなり差別がつくので、其は改めて後節に說話學的考察を施すが、極、大まかに云ふと、佛敎談と世俗談の二種と考へてよい位な物である。是も姑く日本說話だけで言ふのである。當時の說話界は、殊に佛敎的色彩が强烈で、神祇說話にしても神佛混淆である。武勇傳說にしても宗敎に交涉を有するものがある。藝能傳說にしても、繪佛師の如きが說話の主人公として、捕捉せられてゐる。童話にしても寺院生活に結合してゐるといふ程度である。それで佛敎的說話文學の頻出は、當然の結果と謂はなければならぬ。又世俗談は宇治拾遺に多いが、遂に古今著聞集に至つて發展の頂點に達してゐる。此の意味から著聞集は有力な作品となつてゐる。

佛敎談、世俗談

五　說話傳承の異同

説話の浮遊性

一般に說話は、時を異にし、或は人を異にして、物語られたり、書留められたりしてゐるうちに、種々な別傳異說を生じ易い。此は說話が一面、固定性を有しながら、又他面に浮遊性を持つてゐるからである。我が古史神話に別傳の多い事は第一章で述べた。近古時代の說話文學界にもやはり此の傳承異同の現象が認められる。

傳承異同の數例

先づ簡單な例を十訓抄から出さう。其の第一の第十一話に、

俊頼朝臣語云、白川院淀に御方違の行幸ありけるに、五月ばかりの事にや有けむ、女房、殿上人の舟あまた有けるに、曉に成ほどに、向かたに郭公一聲ほのかに鳴てすぐ。俊頼一首詠ぜまほしくおぼえしに、女房の舟中に忍びたる聲にて、「淀の渡のまだよふかきに」とながめられたりし、時に臨みてめでたかりき。人々感歎していまにわすれず。あたらしくよみたらんにはまされりとなんいはれけり。

とある。此は話の筋の一致から見て、袋草紙卷三の一節に基づいたに相違無いが、其の方は、白河院の御方違の行幸では無くて、「前齋宮伊勢ヨリ歸京之時」とあつて、僅一局部に異同を生じて來てゐる。原本を參考したなら、かういふ間違は起らない筈であるし、故意に變更したのなら、つまら

ない潤色だと思ふ。或はさういふ別傳の資料が存在したのか、口碑を其の儘に受入れたのか、一寸斷定しかねる。

それから劍卷に在る戾橋說話（綱、籠居の事をも含めて）は、ヘルデンザアゲとして著名なものであるが、其と同じ趣の太平記卷卅二の鬼丸の由來を述べた一條との間に、說話の要素に夥しい相違が有る。左表に示さう。

說話の要素	劍卷	太平記
鬼女の出た所	一條戾橋	大和宇多郡の大森
鬼の去つた所	愛宕山	虛空
綱が空から落ちた所	北野神社の廻廊の屋上	不明
トつた人	晴明	たゞ占夢の博士とあるだけ
物忌	仁王經讀誦	宿直蟇目
鬼の再來	渡邊なる養母に化ける。	高安なる賴光の母に化ける。
鬼の正體	おそろしげな鬼となる。	長二丈許の牛鬼となる。
刀劍の折れること	此の事に就いて格段の記載が無い。	鬼切の鋒（キツサキ）五寸折れる。横川僧都覺蓮に祈請せしめ、倶利伽羅の靈驗で、鋒が元のやうに直る。

此の如き著しい差異の生じた所以は、何であらうか。此は綱の鬼女退治といふ稍大ざつぱな話(A)が行はれ、其の骨子に肉を附けられた精密な話が二派(B、C)となつて行はれるやうになり、其の各〻が劍卷及び太平記の記載となつたのであらう。即ち

A→B
A→C

の關係であらう。それでBとCとの間には、親子關係は無いと思ふ。即ち、

A→B→C

でも、

A→C→B

でも無い。次に、資料に準據し乍ら、作者が幾らか創作氣分を以て、面白をかしく敷衍潤色した一例に及ばう。

　宇治拾遺物語卷一の第三話、鬼にこぶとらるゝ事は、物眞似失敗の童話として著名であるが、予は此の先蹤を爲すものを探り得た。其は五常內義抄(續群書類從雜部所收)の一節である。一體此の書は「少納言入道作又云小松殿作也」と云ふ傳があるもので、通憲や重盛が作者に擬せられてゐるのは、つまり博識の逸名氏の作であることを意味すると思ふが、其の內容及び文體を仔細に吟味する

と、著作年代は宇治拾遺物語よりも遡つた物と認識せられる。其の「智ハ賢也。不妄語戒」の第十四に、

人ノ云事ニ聞耽テ、タヾチニ振舞事ナカレ。後ニクユル事アル也。其故ハ額ニコブツキタル法師ノ道ニ行ケルニ、山中ナル古堂ノアリケルニ留テケル程ニ、夜打深テ天狗モ（トモ歟）多ク集テ田樂ヲゾシケル。此法師思ヤウハ、只今ニグトモニガサジ。ヤワラ居タリトモ見付ラレナン。同ジ事ニ思テ、ワラ坐ノアリケルヲ腰ニ引當テ、天狗ニ交テ面白クヲドリタリケレバ、天狗共面白シ興アリト云テ、倶ニ夜モスガラヲドリ遊ビケル程ニ、曉方ニ成テ、今ハ常ニ寄合可遊由契テ、天狗共ノ云ク、若後コヌ事モコソアレトテ、質ニ取ントテ、此法師ノ額ニアリケルコブヲ引チギリトリ、又夜明サ私宅ニ歸タレバ、額ニアツテ見苦シカリツルコブナカリケレバ、弟子小法師原マデモ喜ビアヘリケリ。其ノ隣ノ里ニ同ヤウニ額ニコブノアル入道ノ有ケルガ、是ヲ聞テ、我モ彼堂ニ行テ、此コブ失ント云テ、無左右カシコニ行テケレバ、（案）安ノ如ク天狗共集テ、面白ク遊ケルニ、交テヲドリケレバ、天狗ノ云ク、神妙ニ約束タガヘズ來リタリ。今ハ質ノ物返サントテ、今片額ニコブヲゾ付タリケル。左右ノ額ニ角ノ如ク二ノコブ付テ、家ニ歸リタリケレバ、妻子共是ヲ見テ、ニクム事無レ限。様ナキ人マ子シテ、生レヌ片輪付ヌト人ノ咲ケレバ、無ニ爲方一テ自害セントハゲミケレバ、ヲコガマシクモ覺ヘケル。サレバ事ノ風情カハルトモ、聞フケリハ皆同ジカルベシ。不レ見所ヲモテ不レ信ト云文ア

り。

とある。此の文の天狗が集つて田樂をしたと云ふ事は、話の筋の上に一種の特色を帶びてゐる。宇治拾遺の方は、プロットに大差は無いが、要素に異同が生じてゐる。即ち瘤を持つた人は、法師で無くて、單に翁である。瘤の附いてゐる場所は、額でなくて、頰である。山中に泊つた理由は、五常内義抄のは何とも云つてないが、風雨に會つた爲といふやうに合理的である。又泊つた場所は、古堂で無くて、木の空洞(ウツボ)である。出て來た妖怪は、天狗で無くて、鬼である。瘤を取る理由は、五常内義抄の方には書いてないが、瘤は福の物で、惜しがるであらうから、取つてやれと云ふ風になつてゐる。後段の人も入道で無くて、やはり翁である。質の瘤を返す理由も、舞が拙いからといふ風に合理的になつてゐる。さうして一體に文飾が加つて、長文となつてゐるので、確に右の資料を比較的自由に自家藥籠中の物として、改作したと考へる。傳承の異同も、內實からいふ事情から起つたものも有るのである。

尙、一言加へて置く。其は傳承異同の問題とは自ら別であるが、同一の話題でも、作品の性質上、筆意に繁簡精疎の差が生じてゐる物の存することである。

六　說話の風體

客觀的描寫

說話の風體（Style）卽ち書きぶりは、原則として客觀的でなくてはならぬ。資料に據つても、又口碑を承けても、事實の確實性を主眼としなければならぬ。併し繪畫の方で、幾ら寫生と云つても、對象が畫家の頭腦を通して表現せられる以上、最早寫眞と相違を來すやうに、文學も一のクンストであるからには、古傳說の敍述に狂を生じ易いと云ふ點がある。幾分の想像も加らうし、筆者の個性がどこかに滲（ニジ）み出るといふこともあらう。丁度昨日或アクシデントがあつた。今朝の各新聞記事はと云ふと、どれも〳〵符節を合せたやうにはなつてゐないのと同樣である。けれども基準はやはり客觀描寫で無くてはならぬ。

主觀の添加と說話の方便化

處が說話其の物は客觀的に取扱つても、作者が何か意中に持する所が有ると、往々批評の言を挿み易い。又最初から或目的觀念に驅られると、說話を方便に使用する傾向となることも有りがちである。此等の點は、第二節書史の所で、個々の作品に就いて吟味を加へた通である。今之を綜合的に言ふと、古今著聞集の如きが、大體無目的で、たゞ說話を說話としてのみ客觀的に取扱つて並べ上げる方針であつたやうに受取れるが、それでも幾分の主觀が手傳つてゐる。例へば、

師能弁漢書の文帝紀おきうしないて歎き思ひけるに、先親春宮大夫師賴夢の中にかの書のあり所を

告られたりけり。次日其所より求め出して侍りけり。あはれなる事也。（孝行恩愛第十）で見ると、敍事としては「……侍りけり。」迄でよいので、終の一句「あはれなる事也。」は評語の附加せられたものである。かう云ふ評語が、故意に敎訓的となつてゐるのは、淵源が既に日本靈異記に存する所で、それが今昔物語、宇治拾遺物語といふ風に傳つて來てゐる。十訓抄は敎訓の目的を有し、沙石集や雜談集は法談を事としたものであるから、說話が道德や宗教の方便となつてゐるのは、當然である。撰集抄の如きも、說話直敍に止らずして、著しく筆者の私意が附加せられてゐる。其が多くは長文である。例へば卷二に、啞の眞似をしてゐた靜圓供奉の樣子を一通敍べた後に、唐の惠叡及び我が眞範の事を引いて、無常迅速の理を說き、以て靜圓を讃歎してゐる如きである。之に比すると、發心集の如きは、文面上其の點が濃厚で無い。以上の點は、說話の文獻硏究上、考慮を要すべき所である。

個々の說話文學書の含有する所の、特色の認められる說話に就いては、既に概略之を論究したが、こゝには之を綜合的に考察する。考察の方法としては、分類に據らなければならぬが、說話の分類はさう無造作には行かぬ。と云ふのは、說話は單純なものばかりでは無くて、複雜なものもあるからである。複雜な說話に至つては、二重性、三重性となつてゐるのも尠く無い。例へば養老孝子の話は孝子傳說であるが、又靈泉傳說を作なつてゐる。それから俵藤太の話は武勇傳說であるが、動物鬪爭說話や梵鐘說話を兼ねてゐるといふ風である。又此の分類と云ふ事も大まかにするか、細かくするかの手心で、いろ〳〵に動き易いのである。それは諸家の希臘神話の分類に逕庭があるのを見ても分る。そこで予は略次の如き項目の下に、主として日本說話の色合(Colour)を識別して行かうと思ふ。印度及び支那の說話は、謂はゞ飜譯的であるから、此の論述には姑く除外してよからう。

七　主要說話の色合

單純性と複雜性

古史神話並に神祇說話

一、古史神話並に神祇說話　古史神話の叙述は、劔卷や三國傳記卷一などに見えてゐるが、記紀の正說から遠ざかつて、隨分荒唐無稽の言を用ゐてゐる。例へば三國傳記に、天神七代の間が百七十萬四千七十六年、地神五代の間が三百八萬二千九百五十二年であるといふやうな事を言つてゐる。此は既に拾芥抄に天照大神以下御五代の年數をそれ〴〵擧げて居る例があり、親房の神皇正統

記にさへもさういふ年暦の事を書いてゐる位であるから、全く時代思想に外ならぬのである。實物集（三巻本乙及び七巻本）に大蛇神話を記して、諾冊二尊の女が大蛇に恐れてお泣きになつたのを、杵築の宮が、酒七槽（フネ）を飲ませ、醉はせてお殺しになつた。其の蛇をお燒きになつた烟が八色に立騰つたので、八雲立と歌に詠み始めた云々。それが日本紀に在るといふやうな沙汰の限の言を列ねてゐる。却つて本當に日本紀を見なかつた古學衰亡時代の明證となるのである。さうして古史神話に佛說が傳彩せられて來て、一層古傳の正說は得られなくなつた。それは太平記卷十八、比叡山開闢の事に我が國土の起原を說いた言に徵せられる。之を以て當時の說話文學には、眞正な我が古史神話の傳承は存在しないと見てもよい。

本緣談

併し後節にも述べるやうに、國民的思想としては、飽く迄皇室中心、國家本位であつたから、神祇崇敬の念は貴賤上下に存した。隨つて神祇說話は多く見受けられる。撰集抄には、嚴島、宇佐、春日、鹿島の神々の事を談じ、沙石集には、大神宮の事を劈頭に置いてゐる。此の趨勢は源平盛衰記を見ても分る。けれども當時の思想としては本地垂跡說一點張であつた。神祇說話の主なものは、本緣談である。例へば古今著聞集神祇第一に、「三井寺の鎭守新羅明神は、娑竭羅龍王の子也。智證大師渡唐の時、大師の佛法をまもらんとちかひ給て、かたちをあらはし、かの寺にあとをたれ給へる也。」と云つた調子である。尚、三國傳記卷一から熊野權現本緣事を一例として掲げよう。

熊野三所ノ大權現ト申ハ、和光ノ燈ヲ月氏ニ褰ケテ、同塵ノ光日域ヲ照セリ。昔ハ天竺摩訶陀國ノ主慈悲大顯王ト曰シ大王也。然ニ彼國ノ一ノ神劍ヲ東ニ投ケ、神德感應ノ地ニ留ルヘシト誓玉。遙ニ飛去テ紀伊ノ國室ノ郡ニ留ル。今ノ神倉是也。天照太神五代孫子人皇第一神武皇帝御宇七十六年聖化動ニ天仁德豐地ヲ。第卅一年辛卯ニ巡ニ幸シ於吾國ヲ定ニ天下ヲ。四十八年戊申遂ニ到ニ紀州熊野村ニ。大熊屢現シ炊然トシテ卽隱レヌ。又一ノ昇ニ進嶢ヲ得ニ天照太神ノ告ヲ。夢覺テ開ニ石巖ヲ。神劍光燗朗タリ。卽號ニ神倉ト。本地愛染明王。靈驗揭焉ニシテ利益無邊也。神劍振レ威能ク禦ニ魔界之敵ヲ。寶了ニ飛シメテレ箭ヲ播ニス勝軍化ヲ。彼ハ是權現應作ノ形。和光垂跡ノ姿也。（下路）

靈驗談

次に顯著なのは靈驗談である。卽ち神祇が威德を示される。又人の祈請を納受せられる。奉納和歌に感應せられるといふやうな筋である。上總守時重が法華經千部轉讀の願を立てたが、貧しくて意に任せぬ。日吉に詣でゝ祈請した處、納受せられて、上總守に任ぜられた。そこで任國の得分を以て、千部の經を始めた。すると一乘の守護十禪師が夢枕に立たれて、感涙を流されたといふ說話が、古今著聞集に在る。二條宰相雅經は賀茂大明神の利生で成上つた人で、初「世中に數ならぬ身の友千鳥鳴こそわたれかもの川原に」と詠じたのを、明神が不便がつて、其の事を社司の夢にお示しになつたと云ふ說話も同書に在る。此う云ふタイプの說話は、沙石集にも見えてゐる。

古傳說

二、古傳說　こゝに古傳說と呼ぶのは、上代史的說話である。此は第一章で述べたやうに、多方

面に亙つてゐるが、本筋としては皇室中心で、歷史に結びついてゐるものが多い。爲に頗る日本的のカラアを帶びてゐる。例へば五節の舞の起原を語つた袖振山の傳說（十訓抄第十）の如き、事は天武天皇に關してゐる。美濃の孝子の說話たる養老の瀧の事（同書第六）の如き、續日本紀（元正紀）の記事が本源で、潤色せられてゐるが、是亦天皇行幸、改元等國家の大事に聯關してゐる。から云ふ說話が、尙、近古の文學にも攝取せられてゐる事は注目に値すると思ふ。

三、武勇傳說　此は大分世も降つて來て發展したもので、中世的カラアが著しい。抑々ヘルデンザアゲの曙光は、既に今昔物語の卷廿五あたりから認められる。卽ち、平維茂や源賴光、同賴義などの功名談が存し、又多くは弓の名人としての勇者といふタイプである。其の繼續として當代の文學にも尠からず顯れてゐるのである。古事談には勇士の部さへ存し、源義家の武名赫々たるを示した話の如きがある。其は義家所持の弓が、白川院の夢に魘（オソ）はれさせられたのを鎭めたと云ふのである。又同書の粟津冠者の說話は、園城寺の鐘の由來を說明したもので、寺院傳說の一種でもあるが、モーティーフから云ふと、ヘルデンザアゲである。さうして太平記の俵藤太の說話のファースト ステップを示してゐるのである。古今著聞集武勇第十二の鬼同丸の說話は、最も特色の存するもので、場所は鞍馬道の市原野、人物は賴光を中心とした綱、公時、定通、季武の四天王、頗る劇的である。それが劍卷になると、大に展開してゐる。支那說話の漢楚合戰に於ける樊噲の事が、太平記の如き

に喜ばれてゐるのは、日本武士に一脈相通ずる所がある爲で、正に時代精神を裏書するものである。

佛教傳說

緣起談

四、佛教傳說　度々述べるやうに、佛教傳說は當代のフェボリット　サブゼクトである。寺院の緣起談、佛菩薩の奇瑞談若しくは靈驗談、高僧傳、其の一部分を云ふと名僧の法驗談、それから信仰談、發心談、遁世談、往生談といふ風にいろ／＼有る。緣起談や靈驗談は神祇說話にもあるが、共は寧ろ佛教傳說のインフリューエンスで、相似形に出來上つた觀がある。寺院の緣起は既に夥しく今昔物語卷十一に見えるが、三國傳記の如きにも存する。卷二第三話、粉河觀音事、同第十五話、長谷寺事などである。粉河寺の緣起は、天喜二年に仁範の書いた漢文の物が古いから、三國傳記もさういふ文を參考したのであらうが、文面は著しく違つてゐる。故に其を左に摘採しよう。

紀州粉河寺ト申スハ、生身ノ千手千眼ノ淨刹、日本國ノ補陀落山、大伴孔古開基ナリ。昔河内ノ國ニ佐大夫ト云フ長者アリ。夫婦ノ間ニ一人姬ヲ儲タリ。雖ニ面貌端正ナリト一其ノ顏ニ惡瘡アリ。父佐大夫命斯ノ人ヲ〆有ニルヿヲ斯ノ疾ニ恐ツヽ、種々醫療ヲ播セドモ、耆婆カ術扁鵲カ藥モ無レ驗。(中略)爰ニ往來ノ沙門來テ彼ノ長者ノ許トニ宿ル。大夫吾カ子ノ悲シキ病ニ苦シム由ヲ語ル。時ニ沙門我レ藥ヲ與フヘシトテ、擣篩和ニ合〆一千粒ノ藥ヿ。須臾ノ間ニ丸メ毎日一圓ヲ可レ服レ之。三年ノ中ニ必ス平愈アルヘシト云。父ノ長者恭敬合掌〆喜テ請取ケリ。姬カ病平愈アラハ何物ヲカ惜ミ申スヘキトテ、爲ニ報謝ー種々珍寶取出與ヘケレトモ、若此藥驗アラハ後御尋有ルヘキニヤトテ、遂是ヲ不ニ請取ー出ケル。長者袖引テ、

サテモ何レノ國何里ト尋奉ルヘキト云ケレハ、我ハ紀伊國風ノ市森粉河ノ邊ニ栖侍者也。ソレナルサケサヤヲ賜ヘシ。是ヲ持後ノシルシトセントテ歸リ去リ給ヌ。長者別レヲ慕ヒツ、泪流メ佇立セリ。姫彼藥ヲ服スルニ疾悉瘥ケリ。（中略）其ノ後父母彼沙門ノ爲レ報ニ恩德一、姫ヲモ具メ尋テ到ルニ紀州ニ一或ハ峨々タル上ニ翠氣一、或ハ欝々タル下ニ洞底一。其ノ言ノ葉ヲ便トメ風市ノ森粉河ハ何クソト尋ルニ更ニ知タル人ナシ。遙ニ入ニル森々タル山林一。人跡絶テ雲衢ニ迷ヘリ。山河流レ出テ松風冷々タル所ニ、老翁ノ手ニ普門品ヲ持セルニ忽然トメ行合ヒヌ。長者近付テ風市ノ森ヲ問フニ、答テ云、此ノ松原コソ可世爲智ノ森ト申セトテ、行方不レ知去ケリ。長者餘ニ尋子カネテ天仰云、

ハヤタツノ此河浪モ記シ有レヤ松ハコタフル風市ノ森

ト詠メ立タリケルニ、彼河水俄ニ色變セリ。非ニ白浪ニ麞牙ノ米ノ粉流レ出メリ。サテハ此ノ河上ニ人栖ミケリト思ヒツ、、水上遙ニ尋行ニ大悲千手觀世音、奇巖ノ上ニ妙相巍々トノ靈光赫々タリ。彼ノシルシノサケ鞘ヲ御手ニ懸玉フ上ハ、敢テ無レ疑ヒ、驚駭嗟歎メ尊重シ恭敬ス。姫カ惡瘡御面像ノ傍ニ少殘レリ。誠ニ大悲大受苦誓ニ無レト謬リ、信心ヲ致シ、隨喜ノ泪ダ袖ニ餘リケリ。日已暮レヌ。人里遠ケレハ檜柳ノ火ヲ用トスルニモ便リ無シ。爰ニ大士ノ眉間ノ珠ヨリ火ヲ出シ玉フ。其レヲ松柏ニ燃ノ採灯ヲ焚キ、夜ヲ明メ我國ヨリ巧匠ヲ呼ヒ、則チ御堂ヲ造テ安置シ奉ル。彼ノ眉間ノ火ヲ至ニ于今一無ニ退轉一灯シ傳ヘタリ。內陣ノ十五灯是也。自レ其以來尊卑合掌メ道俗踵ヲ繼ク。（下略）

奇瑞談
靈驗談

此は寺院建立の說話に、長者傳說（一人娘（ヒトリムスメ）を有する如き）や佛菩薩の奇瑞談が結びついて、稍複雜になつたものである。尙、寺院傳說には、曼荼羅の緣起や梵鐘の由來談などもある。佛菩薩の奇瑞、靈驗では、先づ觀世音に關するものが夥しい。長谷寺靈驗記の如き單獨な書が有る位である。淸水觀音の事は宇治拾遺物語にも繰返されてゐるが、淸水靈驗記といふ小册の存するのも注目すべきである。沙石集卷二には、藥師、阿彌陀、地藏、不動の利益談が頻出してゐる。一つ二つ例を云ふと、鎌倉に地藏を信じた二人の武士があつて、一人は貧しかつたから古地藏を崇めて居り、他の一人は富んでゐたから立派な像を結構な厨子に祀つてゐたが、富者が先に死ぬ時、貧者に其の本尊を讓つた。貧者は立派な方を崇めて、從前のを捨てた。さうすると古地藏の御夢想があつて、捨てられたのを恨まれたので、其を拾ひ上げて、一緖に祀つたといふ。此は奇瑞談であるが、貧者と富者といふメールヘン式のタイプも備つて面白い。又鎌倉の有德人が念佛好きの女童（メノワラハ）を使つてゐた。正月元日といふのに、相變らず念佛をするので、主は緣起でもないと怒つて、童の頰に錢の烙印をした。不思議にも疵が痛まなかつた。處が主の持佛堂の本尊阿彌陀如來の頰に、錢形が附いてゐた。金箔を幾ら押しても、疵が隱れなかつたと云ふのである。如來が童の身代りになられたので、丁度粉河寺緣起と同じモーティーフである。やはり靈驗談でもあり、奇瑞談でもある。

高僧傳

高僧傳もフェボリット　サブゼクトで、各種の書に多く收められてゐる。加之眞言傳の如きものさへもある。私聚

百因縁集の如きも、卷七、八の邊は此の種のもので持切りである。其の智光、賴光の事などは、度々諸書に繰返された材料である。又名僧善知識の法驗談は宇治拾遺物語以下いろ／＼見ゆる所であるし、名僧に往生談が結合してゐるのは、同書の仁戒上人の事を始め、沙石集の末卷には、臨終めでたき僧の事として、雄仁寺本願僧正や長樂寺榮朝上人等が擧げられてゐる。一般民衆の信仰談も

信仰談

頗る多く、宇治拾遺物語卷一の尼、地藏見たてまつる事は、生身の地藏を拜まうといふ尼が、人に誑され、地藏と名のる子供を見て、本當の菩薩であると思ひ込む話で、一面滑稽談であるが、律義者の信心を現した說話である。發心、遁世、往生は連絡したことで、發心談はやがて往生談となつてゐるものが多い。發心集が最も能く此の方面の說話を集めてゐる。發心の動機はさま／＼で、門田を五十町も持ちながら、一朝にして無常を感じたもの、子に先だゝれて悲歎にかきくれたもの、先世の罪業を悔いたもの、現世の不遇を愁へたものといふ風であるが、阿彌陀に縋つて安養淨土に往かうといふ他力の信仰は共通である。而して往生の極端なのは、多くは自殺であつた事は、一の時弊と認めなくてはならぬ。發心集第三の第六話は、天王寺に詣でた女房が、其の前の海に漕ぎ出て、覺悟の投身をした話で、當時は之をめでたき往生と考へ、其の時沖の方に紫雲が立つたとある。別に又爲盛發心集の如きを見ても、法然上人と押問答してなか／＼頑愚であつた爲盛が、一念發起するや、卽座に腹を切つて往生した。すると、光明は爲盛の首を照し、紫雲がたなびき、音樂が頻

發心談、往生談

に聞えたとある。それはまだしもで、往生に未練の有つた死に損ひの僧侶の說話などもある。又ダーク　サイドに屬する說話もいろ〳〵で、魔道に墮した女の話は發心集に見え、愚痴、慳貪、邪淫の破戒僧の話は古今著聞集や沙石集にある。

藝能傳說　五、藝能傳說　此は最も中古式のカラアに富むもので、詩文、和歌、音樂、書、畫、方技等藝能に關する功名談が多い。中古傳說の繰返しは、十訓抄及び古今著聞集の如きに存するが、固より中には當代の新しい話題もある。著聞集和歌第六は殊に分量も多い。歌人傳說は亦最も日本的である。

歌談　一例を左に擧げる。

順德院御位の時、當座の哥合有けり。作者の名をかくして、衆議判にて侍けるに、古寺月といふことを、知家朝臣つかうまつりける。

むかし思ふたかのゝ山の深き夜にあかつきとをくすめる月かげ

此哥叡慮に叶ひて頻に御感有けり。厚紙を懸物につまれたりけるに、事はてゝ人々罷出けるに、藏人左兵衞權少尉橘親季を御使にて、知家朝臣出けるにおひつかせて、古寺の月の哥殊叡感あり。勅祿を給也とて、重ねて紙を給はせけり。知家朝臣申けるは、忝く勅祿に給はる紙いかでか私用仕るべき、明日やがて住吉の御幣に奉るべきよし、披露すべきよし申て罷り出にけり。

歌道が皇室に結びついてゐること、又歌人が敬神思想を持つてゐたことが、此の一小話にも窺はれ

連歌談

る。無數の歌談と共に、連歌談も尠く無い。其は既に今鏡あたりから見えるが、古今著聞集にもある。右大將賴朝が、ある山で狩の時、「ある山のいちごさかしくなりにけり」と北條四郎時政が云つたので、大將が取敢へず「むばらがいかにうれしかるらん」と附けたといふ話が出てゐる。連歌談は尙、沙石集にもいろ〳〵存する。

音樂談

樂人傳說も種々で、古今著聞集管絃歌舞篇には、侍從大納言成通の今樣の妙聲に、物のけが退散したのは、法驗にも勝(マサ)るといふやうな功名談がある。新羅三郎義光對豐原時秋の物語も、同書に在つて、後世迄名高いが、藝道に執心の深かつた話は、重病の孝博が念佛よりも琵琶を好んだことが、同書宿執篇に存する。

畫談

畫家傳說として著名な一つは、宇治拾遺物語卷三第六話、繪佛師良秀家のやくるを見て悅事である。自分の家の類燒をも顧みず、却つて興に入つた良秀其の人は、實際の火炎に感得して、不動明王の名畫を成就したと云ふので、藝道に熱心であつた功名談である。巨勢金岡の描いた馬が、脫け出た話は、民間傳說として人口に膾炙してゐたらしく、古今著聞集に載つてゐる。其の他諸般の藝能傳說は大抵類推せられよう。

民間傳說

六、民間傳說　細別すると種々になるが、こゝには男女間の人情談、長者傳說、盜賊傳說、動物傳說、植物傳說、妖怪變化(ヘンゲ)傳說の類を一括して、姑く民間傳說と命名して置かう。

人情談

人情談はかなり今物語に見えてゐるが、古今著聞集には好色篇がある。宮内卿は男に噂が立つたが、男がかれ〴〵になつた時、「都にもありけるものをさらしなやはるかにきゝし姨捨のやま」といふ話も出、又或人

が大原邊に侘住居してゐる尼と親しくなつたが、再び行つて見ると、主の尼は居なくて、「世をいとふつゐのすみかと思ひしになをうき事はおほはらのさと」と、一首遺（ノコ）してあつたといふ話も出てゐる。男女の情事に和歌が結びつく事は、伊勢、大和などの歌物語の遺風で、十訓抄の語で云ふと、心操振舞の優美と云ふのに當るのである。又戀愛談は兒（チゴ）物語にも及んでゐる。

長者談

長者傳說は印度說話に多いが、宇治拾遺物語卷一の利仁が薯蕷粥を振舞ふ話（尤も既に今昔物語に出てゐるが）は、長者傳說式で、誇張は存するが、痛快至極である。長者の發心談、佛神の利生で長者になつた話もあつて、此等は佛敎的カラアを帶びてゐる。

盜賊談

盜賊說話はとかく何れの國の傳說、童話にもある。グリムのメールヘンにも Räuber が出て來る、それが侏儒說話と相伴なつたりしてゐる。今昔物語卷廿五には盜賊談がかれこれ有る。宇治拾遺の誇張の話の如きも、今昔から導かれたものである。古今著聞集には偸盜の一篇を見る位である。其の中の大殿、小殿と呼ばれた强盜の棟梁の話は、頗る長文で、時代の匂の强いものである。又中には單純な盜難談で、其に歌談の附隨してゐるのもあるが、是亦いかにも日本的である。例へば、

鞍馬まうでの者の、夕暮に市原野を過けるに、盜人に行あひて、着たる物はぎとられて、剩さずを負て侍と、人のかたるをきゝて、慶算がよみ侍りける。

夕暮に市原野にておふきずはくらまぎれとやいふべかるらん

の如き、又

澄憲僧都いまだ童にて侍ける時、かいしやくしける僧、かみけづらんとて手箱をこひけるに、其手箱うせにけり。いかに求むれども見えず。はやぬす人のとりてけるなり。其の時このちごとりもあへずよみ侍ける。

しらなみのたちくるまゝに玉くしげふたみの浦のみえずなりぬる

動物談

の如きである。動物談では、やはり著聞集に、母猿子猿の恩愛談がある。此はとかく有り勝ちのタイプである。母子の恩愛と同様、夫婦間のも、鴛鴦の話として、民間に弘まつてゐるのである。沙石集巻八に、下野阿曾沼に殺生好きの男があつた。鷹狩の歸途、鴛の雄を捕へた。すると其の夜の夢に、「裝束尋常なる女房」が顯れて、夫の召捕られたのを恨み、「日暮るれば誘ひしものを阿曾沼のまこもの隱れの獨寢ぞうき」と詠じて立去る、其の女房は卽ち雌の鴛である。翌朝起きて見ると、雌は雄と嘴をくひ合せて死んでゐた。そこで件の男は前非を悔いて遁世し、法華の持者となつて、一期めでたく終へたと、法華傳を引いてゐる。是も亦結末が佛敎的になつてゐる。動物の報恩談も同書に見える。更に佛敎的色彩の濃密な輪廻轉生談は、著聞集の智顯上人の馬の話を適例とし得る。卽ち馬といふのは、上人の乳母(メノト)がいつ迄も上人を忘れ難くて轉生したのであると云ふ。

植物談

植物談では菅公の飛梅說話が古今著聞集や太平記に見える。動植物に關する事が擬人して語られるといふ心

妖怪變化談　理は、變化談の成立を解釋する鍵であらう。迷信はいつの世迄も根絶せられぬ。況や當代では尙更盛でこそあれ、衰へはしなかつた。民衆に取つては、鬼魅、天狗も確な實在であつた。此の苦難を免れるのは、陰陽師の勘文に隨つて、經典の功德、名僧の加持を待つしかなかつたのである。古今著聞集には古狸の怪談や怖しい唐猫の話が出てゐる。

童話　七、童話　宇治拾遺物語卷一の瘤取說話は、鬼が出て來るので、頗るローマンティックの趣致に富んでゐるが、畢竟するに物眞似失敗の童話である。グリムのメールヘンの第廿四番 Frau Holle とモーティーフは同樣である。又やはり宇治拾遺の卷三に在る雀の報恩談もモーティーフに於て物眞似失敗である。中に無量の米を出す瓢（ヒサゴ）の話が含まれてゐるのは、ローマンティックで、此は法華驗記の第四十八話のをクェルレとしてゐるが、打出の小槌の思想と類似である。尙、禽獸說話（ティーヤメールヘン）が沙石集に存する事は前に述べた。又小規模の笑話で、單に座興となつてゐる坊主と小僧式の物が沙石集や雜談集に在る事も既に述べた通である。一體童話は、時と所と人とを明にしない、卽ち歷史的になつてゐないと云ふのが特性であるから、同じ動物報恩談としても、場合によつてはザアゲであり、色調によつてはメールヘンである。

八　表現の技巧

宇治拾遺の穀斷聖

宇治拾遺物語卷十二第九話の穀斷聖（コクダチノヒジリ）不實露顯事は、洵に尾籠な話であるが、かうである。

むかしひさしくをこなふ上人ありけり。五こくをたちて年來になりぬ。御門きこしめして、神泉にあがめすへて、ことに貴み給。木の葉をのみ食ける。物わらひする若公達あつまりて、この聖の心みんとて、行むかひて見るに、いとたうとげにみゆれば、穀斷いく年計になり給と、とはれければ、若よりたち侍れば、五十餘年にまかりなりぬといふを聞て、一人の殿上人のいはく、穀斷の屎（クソ）はいかやうにかあるらん、例の人にはかはりたるらん、いで行てみんといへば、二三人つれて行てみれば、穀屎をおほく痢（ヒリ）をきたり。あやしと思て、上人の出たるひまに、ゐたるしたをみんといひて、たゝみの下を引あけてみれば、土をすこしほりて、布袋に米を入てをきたり。公達見て、手をたゝきて穀糞聖〳〵とよばゝりて、のゝしりわらひければ、にげさりにけり。そのゝちはゆきがたもしらず、ながくうせにけりとなん。

此は今昔物語卷廿八第廿四話、穀斷聖人持レ米被レ咲語に基づいたに相違無い。たゞ今昔の方は「文德天皇ノ御代ニ波太岐ノ山ト云フ所ニ聖人有ケリ」と、時代や場所を明示してゐるのを、是には何とも言つてゐないと云ふ大なる差異が有り、部分々々の叙述も今昔のを略してゐる傾がある。今昔の方

に時代を明にしたのは、文德實錄の齊衡元年七月の條の記事を採つたからである。それには備前の一伊蒲塞とある。伊蒲塞は優婆塞と同じである。而して「有レ人竊レ之」とある位なのを、若い殿上人云々と大袈裟に書き立てたのは、全く今昔作者の文飾である。一體此の賣僧(マイス)坊主の話は我が國の一史實とは云ふが、カラアは印度式である。故芳賀氏の攷證本には、其の點が調べてないが、今昔作者は印度傳說を承知してゐたであらう。宇治拾遺の作者も、單に今昔のを書直したといふだけで無く、もつと深く心得てゐたかも知れぬ。大智度論卷十六に、次の說話が含まれてゐる。

如二釋迦文尼菩薩一。宿世爲二大國王太子一。父王有二梵志師一。詐以不レ食二五穀一。衆人敬信。以爲二奇特一。太子思惟。人有二四體一。必資二五穀一。而此人不レ食。必是曲取二人心一。非二眞法一也。父母告レ子。此人精進不レ食。是世希有。汝何愚甚。而不レ敬レ之。太子答言。願小留レ意。此人不レ久。證驗自出。是時太子求二其住處一。至二林樹間一。問二林中牧牛人一。此人何所二食噉一。牧牛者答言。此人夜中少多服レ酥。以自全レ命。太子知已還レ宮。欲レ出二其證驗一。卽以二種々諸下藥艸熏靑蓮華一。淸旦梵志入レ宮坐二王邊一。太子手執二此華一。來供二養之一。拜已授與。梵志歡喜自念。王及夫人。內外大小。皆服事レ我。唯太子不レ見二敬信一。今日以二好華一供養。甚善無レ量。得二此好華一。敬所來處。擧以向レ鼻嗅レ之。華中藥氣入レ腹。須臾腹內藥作。欲二求下處一。太子言。梵志不レ食。何緣向レ廁。急捉レ之。須臾便吐二王邊一。吐中純酥。證驗現已。王與二夫人一。乃知二其詐一。太子言。此人眞賊。求レ名故以誑二一國一。云

々

翻案と經典の表現法

此は天竺の裁斷聖である。此の樣な外國種の說話が翻案せられ、日本化せられて、我が說話界を膨脹させる。而して說話文學の作者が、經典に顯れた敍事、問答、譬喩の如き表現法の感化を受けてゐる事は、蓋し推測に難くないであらう。

說話文と流動

當代の文學に、創作熱は下降したけれども、敍事文の表現法の如きは、決して拙劣とは評せられぬ。宇治拾遺物語には或事件を活き〳〵と描寫した、文章價値の高い篇が幾つも有る。卷八の博打聟入の事の如きは、妙味津々たるものである。沙石集も亦其の點が認められる。卷六、芳心有(アル)人事の中の武州の地頭の一件の如きは、人物、應對、巧に寫し出されて、些の間然する所を見ないのである。尙、抽象的に云ふと、說話文の妙味は、修辭學の說く如く、流動(Movement)に存する。事件の進行に就いて、弛みの無い、拔目の無い敍述である。東洋流で序破急と說くやうに、發端、中心、結末が巧に連絡せられて、讀者に提供せられなければならぬ。此の意味に於て、無住の筆致を一適例として擧げて置かう。雜談集卷五の一節である。

昔シサルベキ人ノスエナカラ、マツシキ姫君ヲハシケリ。乳母(メノト)俱ノ、鞍馬ニ常ニ參籠シテ祈念シケリ。十四五ハカリナルカ、ミメカタチ勝(スクレ)テ、ウツクシカリケルヲ、房主ノ老僧心ヲカケテ、如何シテ近附ント案ノ事々シキ裝束シ、紫ノ帽子キ、金ノ杖ツキテ、戶帳ノ內ヨリイテヽ、乳母モ姫君モ子イリ

タリケルヲ、ヤ、トヲドロカシテ、イカナルアマサカサマノ事ナリトモ、房ノイハム事タガヘズハ、姫君メテタクサカヘ給ヘシト云テ、戸帳ノ内ヘ入リケリ。(以上を發端部と見る。以下が中心部)乳母悅テ、ヤカテ房ヘカエルニ、老僧ハサキニ歸リテ待ケリ。乳母房主ニ夢タニモ、メテタキコトニテ侍ルニ、マノアタリカ、ル示現カフムリタルヨシ、語リケレハ、メテタキ御事ニコソト、エミアケマミエケリ。サテ申ケルハ、カ、ル心イマハアルヘクモ侍ラヌ身ニ、天王ノ御計(ハカラヒ)ニテ、姫君ノ御果報日出(メテタク)アルヘキ御事ニヤト思ハレ侍ルマ、ニ、心ニ存スル樣申候。姫君ヲ時々カヨハシマイラせサせ給ヒ候ヘカシ。近付マイラせタキ心候トイエハ、乳母ヲモイカケヌ事トヲモイナカラ、姫君ニ此由云ニ、アラ心ウヤトテ、思ヨラヌ心地ナルヲ、年久ク參籠シ、マノアタリ天王ノ御ツケアル事ナレハ、樣コソ候ラメ、御身ヲステサせ給トヲホシメシテ、一夜ニテモ、カノ心ヲソムカせ給フヘカラストナク〳〵クトキケレハ、ナニトモマ、ガハカラヒトイエハ、悅テ日トリナトシテ、迎ニヤルヘキ約束シケリ。房主悅テ、輿車ハ穩便ナラスト思ヒ、大ナル唐櫃ヲタツネテ、京ニ佛ノヲハシマス、ムカヘマイラスルヨシニテ、隣房ノ法師原ヤトヒテ、飯酒(イヒ)ヨク〳〵モテナシテ、京ヘヤリケリ。コシクルマナラムダニモ、ヨシナクヲホユルニ、入物サヘ心ウクヲホエテ、ナキ臥給タリケルヲ、乳母トカクスカシコシラエテ、イタシタテ、、唐櫃ニ入テ封ツケテ、カ、せテ、ユキケルカ、夏ノ事ニテ、世間アツカリケルマ、ニ、唐櫃ヲハ、大道ニ打置テ、賀茂河ニテ、氷ア

反覆

ミケルホトニ、時ノ攝政殿ノ御子、二位中將殿トカヤ申ケル。濟々トメ賀茂ヘ參メ、下向シ給ケルカ、此唐櫃開(ヒライテ)ミヨト被(ラレテ)レ仰、開キミレハ、實(マコト)ニウツクシキ姫君ナリ。アラウレシ、コレハ賀茂ノ御利生ニコソトテ、車ニウチノセテ、下向シ給ケリ。サテナニ、テモ入ヨト、被レ仰ケレハ、中間雜色トモハシリマハリテミルニ、二歳ハカリナル犢(コウシ)ノミエケルヲトラエテ、ヘシ入テ封付(フウツケ)テケリ。（以上が中心部で、事件の發展が、次から次へと細叙せられてゐる。迎に唐櫃を以てした無理、意外な二位中將の邂逅、犢の黜出、伏線もあり、抑揚もあり、照應もある。以下が結末）

法師原コレヲシラス、モチアケテミレハ、コトノホカニヲモカリケレトモ、カヽル事トハ思不レ寄、チカラガナクナリテ、ヲモキニヤト云ケル。サテ鞍馬ヘ歸テ、御佛イラセ給ヘリト云ケレハ、房主悅テ、法師原又ヨク〳〵モテナシテ、弟子トモヲモ、御房タチ隣房ヘユキテアソヘ、佛ノ御前ニテ心靜ニ行スヘキコトナリトテ、スカシヤリテ、カキカ子カケマハシテ、唐櫃ヲ開(ヒライ)テミレハ、犢走出テ、屎ヒリチラシ、障子皆フミヤフリテ、散々ノ事ナリケリ。乳母姫君ハ信心フカクシテ、目出クサイハイテ、一期トミサカヘケル。云々（姫君の煩悶も、意外な機緣で目出度納る。之に反して老僧の惡計は大失敗に終つた。表現に誇張の筆意もあり、滑稽味もある。）

說話叙述のムーブメントには、反覆（Repetition）と云ふ事が自然有り勝ちである。宇治拾遺物語卷五第二話に、伏見修理大夫（俊綱）の許へ、殿上人廿人ばかりが推參して、饗應に預り、馬を貰つ

て歸るが、それが又翌日も有るといふやうに、同じ事が二度繰返されてゐる。發心集第三第六話、或女房參ニ天王寺ニ入レ海事に、

（前略）カクテ日毎ニ堂ニマイリテ、ヲガミメグル程ニ又コト思セズ、一心ニ念佛ヲ申タリケル。手箱、キヌ二トハ御舍利ニ奉リヌ。七日ニミチテハ京ヘ歸ルベキカト思程ニ、兼テ思シヨリイミジク心モスミテ、タノモシク侍リ。此次ニ今七日トテ又衣一ツトラセテ二七日ニナリヌ。共後聞ハ、三七日ニナシ侍ラントテ、猶キヌヲトラセケレバ、ナニカハカクタビゴトニ御用意ナクトモ、サキニ給ハセタリシニテモ、シバシハ侍ヌベシト云ヘド、サリトテ此料ニ具シタリシ物ヲ持テ歸ルベキニ非ズトテ、シキテ猶トラセツ。三七ガ間ダ念佛スル事二心ナシ。云々

とある。此は三回の反覆である。此の Dreifache Wiederholung が神話や童話に頻々たる事は、第一章第二節でも叙べた所である。

此の反覆の筆意が、低い處から高い處へ、若しくは輕い事から重い事へと、段々進んで行くと、層進（Climax）と稱する修辭になる。此の適例は宇治拾遺物語卷七第五話、長谷寺參籠男預ニ利生ニ事であるが、此は既に今昔物語に存するものである。共の他雜談集卷二の猿の報恩談も共の例となる。今、古今著聞集神祇第一から一例を擧げよう。

層進

熊野に盲目の者、齋燈をたきて眼の明らかならん事を祈る有けり。此つとめ三年に成にけれ共、

しるしなかりければ、權現を恨まいらせて打ふしたる夢に、汝が恨所そのいはれなきにあらね共、先世のむくひを知べき也。汝は日高河の魚にて有し也。かの河の橋を道者渡るとて、南無大慈三所權現と上下諸人唱へ奉る聲を聞て、其緣によりて魚鱗の身をあらためて、たまたまうけがたき人身を得たり。此齋灯の光にあたる緣を以て、又來世に明眼をえて、次第に昇進すべき也。此事をわきまへずして、みだりに我を恨る愚なりと、はぢしめ給ふと見て、さめにけり。其後ざんげして、一期をかぎりて此役をつとめける程に、眼もあきにけり。

此は輪廻思想から成る本生談であるが、文面は魚から盲目の人身、それから開眼といふ順に層々クライマックスを以て表現せられてゐる。

反層進

此の層進が、高い方から低い方へ、重い方から輕い方へと、一歩々々逆轉して行く筆意になると、反層進(Anticlimax)と呼ばれる。宇治拾遺物語卷十一第九話、空入水(ソラ)したる僧の事は、其の適例としてよいと考へる。

これもいまはむかし、かつら川に身なげんずる聖とて、まづ祇陀林寺にして百日懺法おこなひければ、ちかき遠きものども、道もさりあへず、おがみにゆきちがふ女房車などひまなし。みれば卅あまりばかりなる僧の、ほそやかなる目をも人に見あはせず、ねぶりめにて、時々あみた佛を申そのはざまは、くちびるばかりはたらくは、念佛なめりとみゆ。またときどきそこにいきを

はなつやうにして、つどひたるものどものかほを見わたせば、その日に見あはせんとつどひたるものども、こちをし、あちをし、ひしめきあひたり。さてすでにその日のつとめては、堂へ入て、さきにさし入たる僧ども、おほくあゆみつゞきたり。しりに雜役車に、この僧は紙の衣袈裟などきてのりたり。なにといふにか、くちびるはたらく。人にめも見あはせずして、時〳〵大いきをぞはなつ。ゆく道にたちなみたる見物のものども、うちまきをあられのふるやうになか道す（まきちらす）。聖いかにかく目はなにいるたへがたし。心ざしあるはかみふくろなどにいれて、我ゐたる所へをくれと、時〳〵いふ。これを無下のものは、手をすりておがむ。すこし物の心あるものは、などかうはこの聖はいふぞ。たゞいま水に入なんずるに、ぎんだりへやれ、目はなにいりたへかたしなどいふこそあやしけれなど、さゞめくものもあり。さてやりもてゆきて、七條の末にやりいだしたれば、京よりはまさりて、入水の聖おがまんとて、河原の石よりもおほく人つどひたり。河ばたへ車やりよせてたてれば、聖たゞいまはなん時ぞといふ。ともなる僧ども、申のくだりになり候にたりといふ。往生の刻限にはまだしかんなるは、いますこしくらせといふ。待かねて、とをくよりきたるものは、歸などして、河原人すくなになりぬ。これをみはてんと思たるものは、なをたてり。それが中に僧のあるが、往生には刻限やはさだむべき、心えぬことかなといふ。とかくいふほどに、この聖たうさきにて、西にむかひて、河にざぶりと入ほどに、舟ばたなるなはに

あしをかけて、ずぶりともいらでひしめくほどに、弟子の聖はづしたれば、さかさまにいりて、ごぶ〳〵とするを、男の川へおりくだりて、よくみむとてたてるが、この聖の手をとりて、引あげたれば、左右の手してかほはらひて、くゝみたる水をはきすてゝ、この引上たる男にむかひて、手をすりて、廣大の御恩蒙さぶらひぬ。この御恩は極樂にて申さぶらはんといひて、くがへ走のぼるを、そこらあつまりたるものども、童部、河原の石をとりて、まきかくるやうにうつ。はだかなる法師の川原くだりに走を、つどひたるものどもうけとり〳〵打ければ、頭うちわられにけり。（下略）

此の說話は事件のムーブメントが次第に拍子拔けとなり、結局所謂龍頭蛇尾に終つたもので、いかにも面白い。つまり反層進の筆意は滑稽を感じさせるのである。

以上論述する如く、予は說話叙述の表現技巧に、看過し難い價値の有る事を主張するものである。

道德思想

九　說話に反映してゐる民衆の思想及び生活

當時の道德思想は、概ね儒教の綱常と佛教の戒律とが抱合したものであると考へられる。試に源平盛衰記卷六、小松殿敎㆓訓父㆒事卽ち重盛諫言の條を披見するに、內には破戒無慙の罪を招き、外には仁義禮智信の法にも背く云々の語がある。佛教の五戒と儒教の五常とを並べて考へるのが常例であつた。又心地觀經を引いて四恩を談じ、聖德太子十七箇條憲法を引いて、「人皆有ㇾ心。心各有ㇾ執。彼是則我非。我是則彼非。云々」を擧げてゐると云ふ風に、儒佛兩教の思想で支配せられてゐた。そこで聯想せられるのは、五常內義抄である。此の書に時代思想が顯現せられてゐるのは頗る面白い。卽ち五常と五戒とを結び附けて說いた教訓書で、「仁慈也。不殺生戒。」「義和也。不偸盜戒。」「禮順也。不邪婬戒。」「智賢也。不妄語戒。」「信眞也。不飮酒戒。」と、五題を設け、それ〴〵數條に分つて細叙してゐる。さうして內外典の本文を引證することが頗る豐である。聖德太子憲法も多く引かれてゐる。それから九條殿遺誡（群書類從雜部所收）と云ふ師輔の訓言も、後世迄仰がれてゐることは、十訓抄や徒然草で分る。又惠心僧都四十一箇條御詞は宇治拾遺や十訓抄の如きに引用せられてゐる位であるから、道俗の言行の準繩となつてゐた事は、疑ふべくもない。其の主な條項を拔いて見ると、左の如くである。

一、設雖レ有二不レ叶レ心事一。思忍全不レ可レ起二瞋恚一。

一、不レ可三好云二他人好惡一。

一、可三全忍禁二妄語一。

一、不レ論二親疎一。不レ可レ恨レ人。

一、與二惡友一不レ可二好交一。

一、爲レ人常可レ有二芳心一。

一、全可レ斷二多言戲咲一。

一、行住坐臥。可レ成二滅罪之思一。

一、晝夜常憶二所作善惡事一。於レ善者彌增長。於レ惡者堅固可レ悔レ之。

一、念誦讀經間。不レ可レ闕二威儀一。

やはり佛教の戒律思想が基調となつてゐる。尙又、漢土の書では、貞觀政要が最も能く行はれた。前に述べた五常內義抄にも頻々引用せられてゐるし、平家物語、源平物盛衰記が其の影響を受けて居ることも著しいし、又十訓抄にも引用してある。此は唐の吳兢の撰で、太宗と群臣との問答を錄したもので、主に君道を說いたのである。十卷から成り、君道、政體、任賢、納諫、仁義、忠義等四十論を含んでゐる。賴朝の室政子が、菅原爲長をして和譯させた事は、宗五大艸紙に見えるが、

其の本は今に存する。又建暦元年將軍家で此の書の談義の行はれた事が、東鑑に錄せられてゐる。以て世に行はれた模樣が分らう。其の他論語、孝經、荀子、顏子家訓、帝範の類で、彝倫の觀念が醞釀せられてゐた事は、勿論で、其を素地として、諸說話が取扱はれたのである。だから逆に說話を通して又右の次第が會得せられるわけである。

國民道德の特色とする皇室中心思想、敬神思想の如きも、假令武家政治の時代であるにしても、決して滅じもせず、衰へもしない。それは平家物語に徵せられるが、古今著聞集の編制を一見しても立派に證據立てられる。さうして同書には、左の如き文言が存する。

およそわがてうは神國として、大小の神祇部類けんぞく權化の道、感應あまねく通ずるものなり。いはゆる神功皇后の三韓をたいらげ給ふにも、天神地祇こと〴〵くあらはれ給ひけるとぞ。これによりてかたじけなくも廿二社のそんしんをさだめて、もつぱら百王百代の鎭護にそなへ奉る。天子よりはじめてしよじんにいたるまで、そのめいとくをあふがずといふ事なし。(神祇第一)

我が朝は神國也の言は、平家物語にもあり、春日權現驗記にもある。親房の神皇正統記に大聲叱呼した言が、已にかういふやうに先蹤の有るのは、いかにも心强い。當時幕府の當局も、此の建國以來の大精神は疎略にせずして、御成敗式目の劈頭に、「神者依二人之敬一增威。人者依二神之德一添レ運。然則恆例之祭祀。不レ致二陵夷一。如在之禮奠。莫レ令二怠慢一。」と云つたのである。撰集抄や沙石集が、

表面佛教文學でありながら、神明の御事を記し奉つてゐるといふ點は、流石日本的であると言はなければならぬ。但、其の見方、考方が神佛混淆であるのは、時代一般の傾向であるから、深く咎めることを要しない。又、

治世之政。萬法靡然。是則君以レ仁使レ臣。臣以レ忠奉レ君。君者憂レ國。臣者忘レ家。君臣合體。上下和睦也。（政道忠信第三）

も洵に堂々たる立言で、人意を强うする。かう云ふ立場で、いろ／＼な說話が取纏められてゐると云ふのは、他邦に匹儔を見ないのである。武士道の精神も平家物語の實盛の詞の如きに、時代思想が反映せられてゐるが、武勇を好むのは勿論一般の人情で、隨つて武士崇拜の說話も、賴光や義家に關するものが喜ばれたのは、言ふまでも無い。

佛教思想

次に深く人心に喰込んで、インナア　ライフを支配したのは、何と云つても佛教で、厭離穢土、欣求淨土の信仰は最も强烈であつた。此の觀念を培養したのは、源信僧都の往生要集が第一である。此の書は永觀二年に出來た。總て十門、分つて三卷とせられてゐる。十門は、一、厭離穢土、二、欣求淨土、三、極樂證據、四、正修念佛、五、助念方法、六、別時念佛、七、念佛利益、八、念佛證據、九、往生諸業、十、問答料簡で、皆經論の要文を集めたものである。其の内容は、例へば厭離穢土には六道を明し、欣求淨土には十樂を明してゐる。此の書が文學に影響したのは、源俊賴の

散木集釋教部に、「往生要集十樂よめる十首」といふのが出てゐるのでも分る。慈圓の拾玉集卷六には、左の如き厭離歌百首が載つてゐるが、是亦さういふ思想である。

わが庵よいく重の山のおくならんきゝもならはぬ鳥のこゑ哉

うれしくも春の櫻の色をすてゝ夏のはちすにそむ心哉

何となきくちすさびまで契ける佛の御名は南無阿彌陀佛

たのむぞよ靈山海會尺迦大師誰故とてか世に出給ふ

此の如き往生淨土の信仰が民衆の腦裡に根を張つた結果は、說話文學の方面にも反應して、發心、遁世、往生の談柄が多くなり、六道輪廻とか、地獄巡りとか云ふやうな話題が殖えて行つたのである。又佛菩薩の靈驗說話も中古以來多いが、信仰の熱烈は佛神の靈驗を感ぜしめたらうし、奇瑞の物語は益〻三寶歸依の念を高める料となつたに違無い。寶物を計へ上げて、結局佛法を最上とした寶物集の構想は、或は獨創で無く、波羅捺國の長者の話に、第一の財寶は信であるとしてゐるもの（佛典說話全集に雜寶藏經第二を出典としてゐる。）から考へついたか知らないが、種々な說話も、畢竟人をして信を起さしめる善巧方便であるといふ立場から出てゐるので、寶物集ばかりで無く、沙石集も私聚百因緣集も三國傳記も皆凡愚の爲の法談である。法然の淨土宗、眞鸞の眞宗の外に、日蓮の法華宗の如きも擡頭し、榮西、道元等の禪宗も新に弘まつたけれども、說話文學上では淨土敎の

カラアが最も濃密である。

迷信

それから陰陽道の方から來た迷信、是も中古以來のことで、決して下火とはなつてゐない。拾芥抄を見ると、釜鳴恠、野干鳴吉凶、物忌、諸頌などの部が有るので、世相が分る。古今著聞集術道第九には、陰陽師に關する說話が出てゐる。叉同書には、宿執や變化の部がある位である。鬼の信ぜられた事も甚だしく、劔卷には鬼女退治が話題となつてゐる。宇治拾遺の瘤取話には、鬼の行裝が細叙してある。

僧侶

時代の人として、說話の上に最も能く浮出てゐるのは、何と云つても僧侶である。それに就いて思ひ出されるのは、僧侶たる無住法師が一般の出家を評した言である。以爲らく、

上人ニ有ニ多種一。鹿角上人、ヲチゲモナク落ルナリ。牛ノフクリ上人、ヲチゲニテ落ズ。牛角上人、ヲチゲニモナクテヲチズ。蜘蛛上人、蜘ノ家ヲ作リテ有レハ、虫カヽレハ取テ食トスル如ク、庵ヲ結テ栖ハ、自然ニ食物來ルヲ用也。井弋上人、コレモ井弋ノ自然ニ萬物流カヽレハ、ソレニマカセテアル如ク、カヽルニシタカヒテ世ヲ渡ル也。唐上人、唐ノ僧ノ在ニ唐國一ニ云也。唐此ノ土上人、唐僧ノ日本ヘ越也。如ニ隆老等一ノ。此唐上人、日本ノ僧ノ度唐セル也。此々上人、日本僧也。近代唐僧多ク渡テ、唐樣世ニ盛也。國コトニシテ、人ノ風情スコシカハレリ。可ニ存知一ス事也。或人ハ一向唐樣ト云テ仰テ信シ、戒律教門ニ達スル、順スル、シラサル人コレ有リ、愚也。或ハ異國樣トテ、

誹ﾘ信せル(信ゼザル歟)輩コレアリ、皆偏執也。云々(雜談集卷五)

と。皮肉も云つてあるが、先づはいろ〳〵な僧侶の態を公平に觀たものとしなければなるまい。さういふ次第であるから、說話に捉へられてゐる佛家の人物言動は多種多樣で、學德無双の名僧善知識の法驗談の如きもあるが、一面には墮落した僧尼の唾棄すべき破戒無慚の所業も多いので、此の事は第七節でも言つた通である。古今著聞集の興言利口篇を一覽しても、直に分るのである。

下民

一般の民衆、特に下層民の生活狀態が、今昔物語あたりから見え始めたのは、文學史上最も興味の有ることで、それが宇治拾遺物語、十訓抄、古今著聞集、沙石集、雜談集となつて、漸次其の方面が加つて來て、中古の宮廷文學とは、生れ變つた面(オモ)ざしとなつてしまつた。元來上流搢紳とは違つて、學問もせず、歌も詠じない階級では、佛詣して法談を聽聞する位が關の山で、愚直であるから信心もする、布施もする、往生人が有ると結緣もする。併し又俗人の情無さで、迷信に捉へられたり、若しくは貪瞋痴の邪念は免れなかつた。婦女子は殊にさうであつた。其等の人物、其の言行は、宇治拾遺以下の諸書に、當時の巷說として出てゐるものに徵せられるのである。而も國民性の一特徵として、滑稽洒落を喜ぶ無邪氣の風もあつて、武家跳梁の時代であるのに、壓迫され切つてゐないと云ふ自由な氣分も漂つてゐる。佛敎は盛であつたが、民衆の生活はひどく陰欝でもなかつたやうに想はれる。

一〇　餘　言

近古時代の說話文學が、其自體に價値を有し、文學史上に光彩を放つてゐる事は、以上種々縷述した通であるが、尙、謠曲の文獻學的研究の如きに於ては、說話文學が至大な交渉を有つのである。例へば道成寺に就いて、其の資料を研究するに、法華驗記及び今昔物語に存するクェルレを度外視しては、全く効を奏しないのである。此の說話學的考究に近古時代說話文學を要する事は、意外に多い。其の具體例數件を示すと、江口と云ふ曲は、大體撰集抄から出たものである。卽ち江口の君の幽靈が西行法師と歌を詠み交す脚色は、同書から發源し、末段の普賢菩薩と現れる所は、性空上人の事として、同抄及び古事談にあるのを加味したのである。又春日龍神と題する曲は、明惠上人が入唐渡天の志を有してゐたのに、春日明神の託宣によつて取止めたと云ふのであるが、此は古今著聞集に見えてゐる話である。（尙、春日權現驗記にもある。）其の他、鐵輪や土蜘蛛の如きも、劍卷に據らずしては、理解が出來ないのである。右の次第であるから、何人も當代說話文學の勢力の甚大なことを勘考しなければならぬ。又さう云ふ影響上の事實は、古今著聞集や沙石集の滑稽談が一方別に能狂言に趣向を與へた點に於ても、同樣に首肯せられるのである。

近古時代說話文學論 終

〔附錄〕 主要參考書に就いて

一般神話學及び希臘神話に關しては、

E. Kroker.——Katechismus der Mythologie. 1891.

A. Fairbanks.——The Mythology of Greece and Rome. 1908.

の如きを始め、近年出版若しくは重版せられた

H. A. Guerber.——The myths of Greece and Rome. 1927.

W. S. Fox.——Greek and Roman mythology. 1928.

H. J. Rose.——A handbook of Greek mythology. 1928.

の類を參考した。傳說及び童話の方面では、

E. S. Hartland.——The science of fairy tales. 1891.

S. Baring-Gould.——Curious myths of the middle ages. 1906.

の如きから益を受けた。其の他ホルクローアに關して、Baring-GouldのA book of folk-lore. や Frazer の The worship of nature. 第一册等も參考した。邦人の神話研究では、故高木敏雄氏の比較神話學及び遺著日本神話傳說の研究は、勿論最も忘れられないものであるが、姉崎正治氏の新著 Japanese

mythology. は近來會心の書として擧げなければならぬ。

特に今昔物語の硏究上、故芳賀矢一氏の攷證本三冊を至寶と仰いだことは言ふ迄も無い。それと聯關して、闍多迦など印度說話の考究には、Macdonell や Keith の梵文學史を參考した。Keith のは 1928 新版の大著である。Hitopadesa は Johnson の譯を Barnett が補修した本を見た。バ氏のイントロダクションからは得る所が少く無かつた。

印度の佛教傳說は、絕えず大智度論、經律異相、諸經要集、法苑珠林の類を參照したが、佛典說話全集は檢索上頗る役に立つた。

近古時代說話文學に關する硏究資料は洵に乏しい。其の書史的方面に於て、僅に故藤岡作太郎氏の遺稿たる鎌倉室町時代文學史一部だけである。

索引

（數字は頁數）

ス

セ

ソ ゾ

タ ダ

チ ヂ

昭和十年九月二十五日印刷
昭和十年九月三十日發行

近古時代説話文學論

定價金貳圓五拾錢

著者　野村八良

發行者　東京市神田區錦町一丁目十六番地
株式會社明治書院
取締役社長　三樹退三

印刷所　東京市神田區三崎町二丁目一番地
株式會社明章印刷所
印刷者　細谷祐三

發行所　東京市神田區錦町一丁目
（振替東京四九九一番）
株式會社明治書院
電話神田(25)代表二一四七番(3)